大正三年八月二十日印刷
大正三年八月廿三日發行

有朋堂文庫
謡曲集 下
（非賣品）

編輯兼發行者 東京市神田區錦町一丁目十九番地 三浦理
印刷者 東京市本所區番場町四番地 平井登
印刷所 東京市本所區番場町四番地 凸版印刷株式會社分工場
發行所 東京市神田區錦町一丁目十九番地 有朋堂書店

（岡山製本）

索引終

ヰ

ヱ

ヲ

ル

レ

ロ

ワ

ユ

ム

メ

モ

へ

ホ

フ

ヒ

ハ

ニ

ヌ

ネ

ノ

ナ

ト

テ

チ

ツ

ソ

タ

セ

ス

シ

サ

コ

ケ

ク

キ

カ

オ

エ

ウ

イ

○詩歌語句

引用せられたる詩歌の主要なるもの、及び人名・地名 其他の肝要語句を採り歴史的假名遣に從つて五十音順に排列す

ア

フ

富士太鼓……上四六三
内裏の舞樂に、富士といふ樂人、淺間といふ樂人に嫉まれて討たれしあとに、富士の妻及び女たづね行き形見の裝束を取りて悲歎にかきくるゝ事を作る。梅枝參照

二人靜……上二九二
靜御前の亡魂、菜摘の女に憑きて昔語をなし、後又亡魂も形を現し、二人の靜共に合舞をなす。

藤……下四四六
多祜の浦は昔より藤の名所なり。その所の藤花の精現れて、僧の弔ひを得て成佛の緣を結び、花の精は舞ひかなづ。

藤戸……上二六四
佐々木盛綱、備前兒島の藤戸の渡にて敵を攻めし時、淺瀨を敎へし漁夫を殺し、我一人の功名とせし爲、漁夫の老母の亡靈現れ恨を訴へ法事の功德によりて得脫成佛す。

船辨慶……上五二七
義經、大物の浦より船を出さんとし、靜と別を惜しみ、靜、舞をかなづ。これ前段なり。このしめやかなる景情一轉して後段は解纜の後、大風起り波頭に知盛の幽靈、怨を晴らさんと義經に迫り、遂に辨慶祈りて調伏す。

船橋……上四三
萬葉集に「かみつけぬ佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかなくに」と有るを基とし忍び妻に通ひし男の溺死せる事を作れり。

ホ

佛原……上六一五
祇王祇女とて姉妹の白拍子あり、淸盛祇王を寵す。時に加賀より佛といふ白拍子來り、其寵を奪へり。祇王姉妹は世をはかなみ、尼となり嵯峨野に隱れしが、之を聞きたる佛も亦遁世して同じ所に籠り、往生の素懷を遂げたる事、平家物語にあり。これによりて佛の幽靈を出し、僧の弔ひを受けしむる事を作る。

マ

卷絹……下七〇
勅使諸國より集めし卷絹を熊野權現に納めんとす、こゝに都の男卷絹持參の儀遲なりたれば、縛しめらる。然るに此男、熊野に着きて音無の天神へ詣で歌一首を詠めり、それを天神納受し給ひ、神子にのりうつりて縛を解かしめ給ふ、歌の德を敍べし曲なり。

枕慈童……下三九七
周の穆王の寵せし慈童といふ者、王の枕を越えし科にて酈縣に移さる。慈童王より給ひし妙文を菊の葉に寫して流す、その水靈藥となる。此曲は魏の文帝の臣下、水上を尋ねて慈童に會ふ。

松風……上三一七
在原行平須磨にありしをり、松風村雨姉妹の少女を寵せし事あり。此曲は姉妹の幽靈あらはれて昔物語をなし、旅僧の回向を受くる事を作る。

松蟲……下四二三
蟲を愛せし人の亡靈あらはれ、舊遊を物語る。

松山鏡……下二七六
越後の松の山家に、亡母を慕ひし少女形見の鏡を取出しては己が姿の映るを、母よと

がて女子を連れ歸洛す。

猩々……上五九八
唐土のかうふうと云ふ酒賣る男の孝行なるにめでて、猩々來りて、無盡の酒泉を湛へ、めでたく舞ひ收むる曲なり。

正尊……下六三
土佐坊正尊、頼朝の內命を受けて、義經を討ちに上京せしを、義經に見拔かれ、その館に呼ばれて起誓をなす。されど遂に攻込みければ、辨慶正尊と組討ちて之を捕ふ。

石橋……下二四九
寂照法師入宋して、清涼山下の石橋に到りしに、樵童あらはれて橋の由來を物語り、後、獅子舞の奇特に逢ふ。

舍利……下二三七
旅僧、泉涌寺に詣でて舍利殿を拜む。嘗て足疾鬼、この舍利を奪ひしを韋駄天取り返せしといふ事を、まのあたりに現ぜらるゝ奇特に逢ふ。

俊寛……上三二一
俊寛成經康賴の三人、平家を覆さんとして、事顯れ鬼界が島に流され、後成經、康賴は赦免せられ、俊寛一人のみ取殘されて愁歎す。

俊成忠度……下三〇一
岡部六彌太、忠度を討取りたるに、「行きくれて」の歌を見出でしかば、俊成の許に屆けたるに、折から忠度の幽靈も現れ出でて、修羅道の苦患を叙ぶ。忠度參照

春榮……下二一七
增尾春榮丸、囚人となりて伊豆三島なる高橋權頭の許に在り。その兄種直、弟に代りて誅せられんとし、尋ねしに、兄には非ず家人なりといひ、兄弟互に相庇ふ。時に鎌倉より早打來り、春榮赦免せらる。權頭春榮を養子となし、祝言あり。共に打つれ鎌倉に上る。

鍾馗……下八一
鍾馗の靈現れ出でて、國土を守護せんとの誓を叙ぶ。皇帝參照。

白髭……上六〇一
白髭明神は近江志賀郡に在り、猿田彥命を祀る。勅使參向あり、明神示現あり緣起を述ぶ。

代主……下一四
葛城の明神は賀茂明神と同一體なればとて、賀茂の神職葛城へ參詣し、明神の示現にあづかる。代主とは事代主の事にして葛城の神をいふ。

ス

須磨源氏……下四一一
日向宮崎の社官藤原興範、伊勢參宮の途上、須磨にて光源氏の幽靈に會し、源氏物語の故事を聽く。

隅田川……上四二一
梅若丸誘拐せられ、奥州へ下る途中、隅田川の堤にて病死す。母を慕ひて物狂となり、尋ね來り、一周忌に事の由を聞き、歎きて、跡を弔ひしに梅若丸の亡靈現れ出づ。

住吉詣……下一四八
光源氏、住吉神社へ參詣あり。折から又明石の上、こゝに詣で、思はざるに再び對面あり。頗る美しき能なり。

セ

誓願寺……上三三〇
一遍上人、熊野の御示現により、誓願寺にて御札を結緣せる時、和泉式部の亡靈現れ

キ

ク

て、浮みやらざりしが、旅僧に一宿を許し、その功德によつて成佛する事を作る。富士太鼓參照

雲林院……………………上四三一
津の國芦屋の里の公光といふ者、伊勢物語を愛讀し、靈夢を受け雲林院に詣でしに、業平の靈現れて物語の故實を語る。

エ

江口……………………上一四
攝津國江口の里の遊女の靈と西行法師と歌よみ交し昔語をなす。

江島……………………下六
欽明天皇の代、江島涌出す。依て勅使參向せらる。辨財天女竝に龍神の示現あり。寶珠を捧げ、舞樂を奏す。

箙……………………下四六
攝津國生田の森に、箙の梅とて名木あり。是は元暦元年生田の森の合戰に、梶原景季、その一枝を折りて箙にさし、功名を得し名殘なり。旅僧其跡を訪れ、夢の内に景季の幽靈に逢ひて、軍物語を聽く。

烏帽子折……………………下一八八
金賣吉次、奥州へ下らんとする時、牛若丸鞍馬寺より下りて、同行を求め、江州鏡の宿にて、牛若左折の烏帽子を折らしめ、その禮に刀を與ふ。烏帽子折の妻は鎌田正淸の妹とて、思ひも寄らぬ對面あり。やがて美濃の赤坂の宿に著く。時に熊坂長範の一黨夜討に來りしを、牛若散々に斬り廻りて、遂に長範をも討取る。熊坂參照。

オ

老松……………………上六七
菅原道眞の遺跡なる太宰府の安樂寺にて、老松の靈現じ、飛梅と老松のめでたさ謂を物語る。

姨捨……………………上一八三
若者老女を山に捨てしが、後悲歎に堪へず、山上の月を見て、「わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」と詠じ、又行きて老女を迎へ來れりとの話を脚色し老女に昔語をなさしめたるものなり。

大江山……………………下二六五
賴光保昌の一行、勅を受けて、大江山の酒天童子を退治せんとて、山伏姿にて出で向ひ、めでたく討取りて來る。

大原御幸……………………上三一五
平家の一門、壽永の秋、西海の藻屑となる。建禮門院は再び都へ上り出家して、大原の寂光院にあり、かくて後白河法皇忍びの御幸ありて往昔を語り合ひ給ふ。景情雙絶、頗る閑寂の趣あり。

大社……………………下二〇八
宮人、都より出雲に向ひ十月大社にて諸神集ひ給ふ事あるに詣て大神及び天女龍神の奇特に逢ふ。

カ

杜若……………………上二八六
業平東下りのをり、三河の八橋にて杜若をながめ、かきつばたの五文字を折句にして歌を詠じ、都を懷ふ情を寄せたる故事あり。之によりて杜若の精を出し、旅僧の回向を受けしむ。

景淸……………………上二七七
惡七兵衞景淸は平家滅亡の後、復讐をはかりて成らず、盲目の乞食となりて、日向に在り。一女人丸、關東より上向して、父を

謡曲集上下巻索引

○曲名及略解題

（歴史的假名遣に從つて曲名を五十音順に排列し、各其略解題を施す）

ア

市　泰山府君　藤榮　竹雪　湛海　檀風　手引　調伏曾我　鶏龍田　初雪　花車　常陸帶　富士山　伏見　松山天狗　松尾　水無瀬　御裳濯　求塚　雪　芳野

○觀世流と他流との曲名の異同

觀世	寶生	喜多	金剛	金春
安達原	黒塚	黒塚	黒塚	黒塚
善知鳥	善知鳥	烏頭	烏頭	烏頭
菊慈童	枕慈童	枕慈童	枕慈童	枕慈童
俊寛	俊寛	鬼界島	俊寛	無し
善界	善界	是界	是我意	是界
鶴亀	鶴亀	月宮殿	鶴亀	鶴亀
光仲	滿仲	滿仲	滿仲	無し
雷電	來殿	雷電	雷電	無し
藤戸	藤戸	藤渡	藤戸	藤戸

翁―神歌の一名

讌曲―上中下の三巻に分れ、〔〕内に小活字を以て示せる如く、幾多の小曲より成る

○番外

高野物狂　木曾　菊慈童　楠露　神歌（翁）　仲光　橋辨慶笛之卷

三曲（初瀬六代、東國下、西國下）　三讀物（木曾願書、起請文、勸進帳）

讌曲（上〔玉取、近江八景、和國、四季、鼓の瀧、香椎、定家一字題、眞方、高野物狂〕中〔內府、經山寺、島廻、阿古屋松、上宮太子、反魂香、松浦物狂、笠取、蛙〕下〔舞車、賀茂物狂、隱岐院、飛鳥川、由良物狂、博多物狂、横山、更料、五輪碎、倶利加羅落〕）

○觀世流のみにある曲

梅　江島　合浦　木曾　楠露　現在七面

戀重荷　逆矛　代主　大瓶猩々　第六天　水無月祓

身延　吉野天人

○觀世流になき曲

飛鳥川　愛宕空也　綾鼓　鵜祭　空蟬　浦島　鱗形　落葉　大蛇　葛城天狗　加茂物狂

籠祇王　祇王　切兼曾我　源太夫　元服曾我　護法　佐保山　三山　墨染櫻　關原與

附説

謡曲には所謂五流あり、觀世・寶生・喜多・金剛・今春これ也。而して本書の觀世流改訂本に準據し、其内外別二百番を收錄したる事、曩に上卷緒言に於いて逃べたるが如し。今讀者參看の便を圖り、左に所謂古名及び番外と共に、觀世流と他流との曲名の同異と表示す。

○古名

括弧内に小活字を以て示せるは現今の曲名

相生（高砂）
おもに（戀重荷）
九郎判官東下向（烏帽子折）
しゝ（石橋）
曾我五郎元服（元服曾我）
難波梅（難波）
松風村雨（松風）
遊屋（熊野）

打入曾我（夜討曾我）
梶原二度のかけ（箙）
佐野船橋（船橋）
鹽汲（松風）
中將姫（當麻）
はうか（放下僧）
通盛卿小宰相事（通盛）
頼風（女郎花）

おほえ（大江山）
かつほの玉（合浦）
しきみが原（車僧）
四位少將（通小町）
定家葛（定家）
重衡（千手）
山祖母（山姥）
小原野花見（小鹽）

見えて曇る日は、上の空なる物思ひ、影もほのかに三日月の、曇らぬ人の心こそ、誠を寫す鏡なれ。誠を寫す鏡なれ。

謠曲集終

淨玻璃―閻魔の廳に在る鏡

の、身の毛もよだつばかりなり。いかなる人にてましせば、鏡には映り給ふらん。

後シテ謠「是は胡國の夷の大將、呼韓邪單于が幽靈なり。ツレ謠「胡國の夷は人間なり、今見る姿は人ならず。目には見ねども音に聞く、冥途の鬼か恐しや。シテ謠「呼韓邪、詞單于も空しくなる。同じく昭君が父母に、對面の爲に來りたり。ツレ謠「よしなかりける對面かな、姿を見るも恐しや。シテ詞「そも恐るべき謂れはいかに。ツレ謠「心に知らぬわが姿鏡に寄りて見給へとよ。シテ謠「いで〳〵、詞鏡に影をうつさん、謠眞に氣疎き姿かと、詞鏡に立寄りよく〳〵見れば、謠恐れたまふもあら道理や。地謠「荊棘を戴く髮筋は、荊棘を戴く髮筋は、シテ謠「主を離れて空に立ち、地謠「元結さらに溜らねば、シテ謠「さねかづらにて結び下げ、地謠「耳には鎖を下げたれば、シテ謠「鬼神と見給ふ、地謠「姿も恥し、鏡に寄り添ひ立つても居ても、鬼とは見れども人とは見えず。その身かあらぬか我ならば、恐しかりける顏つきかな。面目なしとて立ちかへる。キリ地謠「只昭君の黛は、只昭君の黛は、柳の色に異ならず、罪を顯す淨玻璃は、それも隱れはよもあらじ。花かと

しんやう―未詳

とけつ―未詳

年を經て―古今集の歌下句散りかゝるをや曇るといふらん

は寵愛、甚しゝとは申せども、君子に私の、言葉なしとや思しけん、力なくし昭君を、胡國におくり遣さる。

シテ詞「昔桃葉といひし人、仙女と契淺からざりしに仙女空しくなりて後、桃の花を鏡に映せば、即ち仙女の姿見えけるとなり。この柳もさながら昭君の姿、いざさせ給へ鏡に映して影を見ん。ツレ謠「それは仙女の姿なり。いかで是には喩ふべき。シテ詞「いやそれのみならず鏡には、戀しき人の映るなり。ツレ謠「夢の姿を映しゝは、シテ詞「しんやうが持ちし增鏡、シテ謠「故郷を鏡にうつしゝは、シテ詞「とけつといひし旅人なり。ツレ謠「それは昔に年を經て、シテ謠「花の鏡となる水は、地謠「散りかゝる花や曇るらん。思ひはいとゞます鏡、もしも姿を見るやと、鏡に向つて泣き居たり。鏡に向つて泣き居たり。（中入）

後ツレ謠「是は胡國に遷されし、王昭君の幽靈なり。さても父母別を悲しみ、春の柳の木の本に、泣き悲しみ給ふ痛はしさよ。急ぎ鏡に影を映し、父母に姿を見え申さん。春の夜の、朧月夜は顯れて、地謠「曇りながらも影見えん。ツレ謠「恐しや鬼とやいはん面影

漢王―元帝

賢聖の障子―漢宣帝の時忠節の臣の像を麒麟閣に描かしめたるもの

片枝の枯れて候。ワキ詞「實に〳〵御歎き尤にて候。さて〳〵昭君は何しに胡國へは遷され給ひ候ぞ。

シテ、クリ謠「さても昭君胡國に遷されし、そのいにしへを尋ぬるに、地謠「天下を治め始めなり。シテ、サシ謠「然れば胡國の軍強うして、從ふ事期し難し。地謠「されば互に和睦して、その印一つなからんやとて、美人を一人遣すべき御約束の有りしに、クセそも漢王の宣旨には、三千人の寵愛、いづれを分くる方もなし。もろ〳〵の宮女の、好色高位の姿を、賢聖の障子に似せ繪に是を顯はし、中に劣れる樣あらば、卽ち彼を選みて、胡王のために遣し、天下の運を鎭めんと、綸言ならせ給へば、數々の宮女達、是を如何にと悲しみ繪かける人をかたらひ、皆賂を贈りつゝ、御約束の有りし故。シテ謠「されば寫せるその姿、地謠「何れを見るも妙にして、柳髮風にたをやかに、桃顏露を含んで、色猶深き姿なり。中にも昭君は、ならぶ方なき美人にて、帝の覺えたりしなり。それを頼める故やらん、たゞ打ち解けて有りしに、畫圖に寫せる面影の、あまり賤しく見えしかば、さこそ

ねて知らする夕嵐、ツレ謠「袖寒しとは思へども、シテ謠「子の爲なれば、ツレ謠「寒からず

シテ、ツレ次第謠「落葉の積る木蔭にや、嵐も塵となりぬらん。地謠「落葉の積る木蔭にや、落葉の積る木蔭にや、嵐も塵となりぬらん。上歌實に世の中に憂き事の、實に世の中の憂き事の、心に懸かる塵の身は、拂ひもあへぬ袖の露、涙の數や積るらん。風に散り、水には浮む落葉をも、暫し袖に宿さん。下歌涙の露の月の影、涙の露の月の影、それかと見ればさもあらで、小篠の上の玉霰、音もさだかに聞えず。シテ詞「餘りに苦しう候程に、休まばやと思ひ候。

ワキ詞「いかにこの家の内に白桃の渡り候か。シテ詞「誰にて御入り候ぞ。ワキ詞「いや某が參りて候。シテ詞「此方へ御出で候へ。ワキ詞「如何に申し候。さても昭君の御事御心中察し申して候。シテ詞「御とむらひ有難う候。ワキ詞「又申すべき事の候。この柳の木の本を立ち去らずして淸め給ふは、何と申したる御事にて候ぞ。シテ詞「昭君胡國へうつされし時、この柳を植ゑ置き、我胡國にて空しくならば、この柳も枯れうずると申しつるが、謠「御覽候へ早

漢宮萬里―朗詠集の句に漢宮萬里月前腸

者にて候なり。ツレ謠「かほどに賤しき身なれども、美名を顯す息女あり。シテ、ツレ謠「昭君と彼を名づけつゝ、容顔人に勝れたり。されば帝都に召されて後、明妃と其名を改めて、天子にまみえおはします。シテ謠「かほどいみじき身なれども、猶も前世の宿縁、離れやらざる故やらん。シテ、ツレ謠「諸人の中に撰れて、胡國の民に移され、漢宮萬里の外にして、見馴れぬ方の旅の空、思ひやるこそ悲けれ。シテ謠「されども供奉の官人ども、旅行の道の慰めに、絃管の數を奏しつゝ、シテ、ツレ謠「馬上に琵琶を彈く事も、この時よりと聞くものを、下歌畫圖にうつせる面影も、今こそ思ひ知られたれ。上歌かの昭君の黛は、かの昭君の黛は、緑の色に匂ひしも、春や繰るらん糸柳の、思ひ亂るゝ折毎に、風もろともに立寄りて、木蔭の塵を掃はん。木蔭の塵を掃はん。

シテ謠「いざ〳〵庭を清めんと、祖父は箒を携へたり。ツレ謠「實にや心も昔の春、老の姿もさゝがにの、いと苦しとは思へども、風結ふ涙の袖の玉襷、斯かる思ひも子故なり。

シテ謠「只世の常の賤の男と、人もや見るらん耻かしや。ツレ謠「日は山の端に入相の、シテ詞「か

昭君

梗概

漢の世、王昭君、心ならずも胡國に遣さる。その父母白桃王母、昭君胡國へ遷されし時、形見に植ゑし柳の、落葉を掃つて、その名殘を惜しむ。かくて胡國の王及び昭君の姿現れ出でて、父母の鏡にうつさるゝよしを作る。（五番目）

前シテ　白桃　　後シテ　單于幽靈　　前ツレ　王母
後ツレ　昭君幽靈　　ワキ　里人

ワキ詞「是は唐土かうほの里に住居する者にて候。さてもこの所に白桃王母と申す夫婦の候が、一人の息女を持つ、その名を昭君と名づく。帝に召されて御寵愛限無かりし處に、さる子細あつて胡國へ移されて候。夫婦の人の歎きたゞ世の常ならず。近所の事に候程に立ち越えとむらはゞやと思ひ候。シテ、ツレ一聲謠「散りかゝる、花の木陰に立寄れば、空に知られぬ雪ぞ降る。シテ、サシ謠「是は唐土かうほの里に住居する、白桃王母と申す、夫婦の

かうほの里―未

空に知られぬ雪―貫之の歌に「櫻散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞふりける」

シテ、謠「謹上、地謠「再拜。（神樂）シテ、け行く夜半の、月も霜も白和幣、振り上げて聲澄むや。シテ謠「嬉しやワカ謠「鷲の山、いかに澄みける月なれば、地謠「入りての後も世を照すらん。シテ謠「嬉しや妙經信受の功力、地謠「嬉しや妙經信受の功力、三身圓滿の妙體を受けて、和光同塵結緣の姿を顯し、垂跡示現してこの山の、鎭守となつて火難水難もろ〳〵の、難をのぞき、七福則生の願を滿てしめ、世々を重ねて衆生を廣く、濟度せんと、約諾固く申しつゝ行方も白雲に立ち紛れて、虛空に上らせ給ひけり。

三身圓滿—蛇體が人體に變成せること頭と身と手足とを三身といふ

於須臾云々—法華提婆品の文句

四種の花—四種曼陀羅華といふ

報恩に、ありし姿を現さんと、地謡「夕風も烈しく、立つや黒雲の、行方も早き雨の足、踏み轟かし鳴神の、稲光して冷ましき、音にまぎれて失せにけり。音にまぎれて失せにけり。（中入）

ワキ上歌謡「かゝる不思議に逢ふ事も、かゝる不思議に逢ふ事も、只これ法の力ぞと、心を澄ましひたふるに、讀誦をなして待ち居たり。讀誦をなして待ち居たり。

地謡「あら不思議やないままでは、あら不思議やな今までは、妙に優なる女人と見えつるが、さも冷ましき大蛇となつて、日月の如くなる眼を開き、上人の高座を幾重ともなくくる〳〵と引き纏ひ、慙愧懺悔の姿を現し、高座へ頭を差上げて、瞻仰してこそ居たりけれ。ワキ謡「その時上人御經を取り上げ、地謡「その時上人御經を取り上げ、於須臾頂便成正覺と、高らかに唱へ給へば、忽ち蛇身を變じつゝ、忽ち蛇身を變じつゝ、如我等無異の身となれば、空には紫雲たなびき、四種の花降り、虚空に音樂聞え來て、宜禰が鼓にたぐふなる。報謝の舞の袂も、異香薫じて吹き送る、松の風颯々の、鈴の音も更

荒れたる宿の―伊勢物語の歌初句葎生ひ末句すだくなりけり

唐糸―說くからにと掛けて續く

の、經の内にし陸奥の、安達が原の黑塚や、荒れたる宿のうれたきに、假にも鬼のすたくなると、詠しも女の事とかや、かゝる憂き身の浮まん事、いつの時をか松山や、袖に涙の波越えて、作り重ねし罪科を、悔の八千度身をかこち、佛の御法の言の葉さへ、恨めしとのみ歎きけり。ワキ謠「然るにこの法華經は、地謠「佛七十餘歳にて、始めて說かせ給ひしに、そよや一味の法の雨、ひとしく注ぐ濕ひに、敗種の二乘闡提も、皆々同じ悟を得、殊に文殊の敎にて、龍女は須臾に法を得て、この世ながらの身を捨てず、本の悟の故鄕に、立ち歸る有樣や、錦の袂なるらん。

ロンギ地謠「この妙典の理を、とく唐糸の一筋に、仰ぎて保ち給へや。シテ謠「有難の御事や。さては妾も隔てなき、御法の水を手に掬び、絕えず苦しき三熱の、焰を早く免れん。地謠「そも三熱の苦しみを、まぬかるべしと宣ふは、さては御身は靈神の、假に女となりたるや。シテ謠「今は何をか包むべき、我は七面の池に、住む月竝の數知らぬ、年經たる蛇身なり。地謠「さらば懺悔のそのために、本の姿を見せ給へ。シテ謠「恥かしながら

二乘―迷の去られぬ人

久遠劫―太古の時代
抑止在懷―心中に抑へ收めたること

優曇華の、花待ち得たる心地して、悦びの涙の露、謠斯かるをりしも緣を結び、後の世の闇を晴らさずは、又いつの世を松の戸の、明暮歩みを運びつゝ、上人に結緣をなすばかりなり。ワキ謠「實に奇特なる信心かな。この法華經を保ちぬれば、若有聞法者、無一不成佛と說き給ひて、二乘闡提惡人女人おしなめて、成佛する事疑ひなし。シテ謠「さては殊更有難や、上歌地謠「その名をだにもまだ聞かぬ、その名をだにもまだ聞かぬ、御法を既に保つまで、いかで契を結びけん、實に賴もしき折からや、猶も女の佛となる、謂れを示しおはしませ。ワキ詞「なか〳〵の事草木國土、悉皆成佛の法華經なれば、女人の助かりたる所をも語つて聞かせ候べし。

クリ地謠「そも〳〵法華經と云つぱ、釋尊久遠劫のその昔、初成道の時悟り得給ひし、妙法華經なり。ワキ、サシ謠「然るに華嚴の朝より、般若の夕に至るまで、地謠「抑止在懷し給ひて、種々の方便機に隨ひ、終に一乘を說きたまはねば、十界差別まち〳〵なり。クセさる程に女人は、外面は菩薩に似て、內心は夜叉の如しと嫌はれし、その言の葉はもろ〳〵

四明の洞―天台山のこと

ワキ詞「我法華修行の身なれば、讀誦禮讃を怠る事なき所に、何くともなく女性の絶えず詣で候。今日も又來りて候はゞ、名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第謠「法の教を身に受けて、法の教を身に受けて、まことの道に入らうよ。サシ有難の靈地やな。漢土にては四明の洞、和朝にては我が立つ杣と詠じけん、御山もいかでまさるべき。さてまた大白波木井の河風に、波の立居もおのづから、隨縁眞如を顯せり。下歌谷の戸出づる鶯も、法を唱ふる花の枝、上歌來ても見よ、身延の山の深雪だに、身延の山の深雪だに、春を迎へて消えぬれば、是も惠日の光かと、思へば我がつくりにし罪科も、かくこそ消えめ頼もしやと、信心はいやましに、實に有難き御山かな。實に有難き御山かな。

ワキ詞「あやしやなこの山は、花より外は知る人もなき庵なるに、そもや女性の御身ながら、御經讀誦の折々に、歩みを運び花水を佛に捧げ給ふ。さて御事はいかなる人にてましますぞ。シテ詞「是はこのあたりに住む者なるが、かく有難き御法に逢ふ事、盲龜の浮木

現在七面

梗概―法華經の功德によりて龍女の成佛せることを作る。前の身延と同じく、日蓮宗の威德を讃歎せる曲なり。（五番目）

シテ　龍女（前は里女）　ワキ　日蓮上人

ワキ、サシ謠「それ世尊の教法は、五時八教に配立し、權實二教に分てり。さる程に滅後の弘經も正像末に次第して、今後五百歳の時なれば、時機に叶ふこの妙經を弘めつゝ、國土安全の勸めをなせしその甲斐の、身延の山に引き籠り、寂寞無人の樞の內には、讀誦此經の聲絶えず、一心三觀の窻の前には、第一義天の月まとかなり。上歌地謠「尾上の風の音までも、尾上の風の音までも、皆法の聲ならずや。落瀧つ瀬の響も、只懸河流瀉の御聲にて、鷲の御山もよそならず。八卷の法の花の紐、時知る風に立ち渡る、身の浮雲も晴れぬれば、心の月ぞさやかなる。心の月ぞさやかなる。

五時―說法に華嚴經に三七日阿含經に十二年方等經に十六年般若經に十四年法華經に八年を費せり

八教―頓教漸教不定教祕密教三藏教通教別教圓教の八つ

正像末―この三法次第に崩れゆく

天の岩戸に閉ぢ籠りて、地謠「昔天の岩戸に閉ぢ籠りて、惡神を懲らしめ奉らんとて、日月二つの御影を隱し、常闇の世のさていつまでか、あらぶる神々是を歎きて、いかにも御心取るや榊葉の、靑和幣白和幣、いろ〳〵さま〴〵に、うたふ神樂の韓神催馬樂、千早振、（神樂）シテ謠「おもしろや、地謠「おもてしろやと、覺えず岩戸を少し開いて、感じ給へば、いつまで岩戸を手力雄の尊は、引き開け御衣の袂にすがり、引き連れ現れ出で給ふ有樣、又珍らしき神遊の、面白かりしを思召し忘れず、高天の原に神とゞまつて、天地二度開け治まり、國土も豐に月日の光の、長閑けき春こそ久しけれ。

おもてしろやー岩戸開けて世界明くなり神々互に顏面明白となれりと喜ばれしとて古語拾遺に委し

僧正遍昭は云々ー古今集序文に見えたる趣による
淺緑絲よりかけてー遍昭の歌詞
二道かけてー古歌に「蜘蛛のいに荒れたる駒はつなぐとも二道かくる人はたのまじ」

上の花に咲き添へて、棚引く白雲、また掛けて色をますなり。クセ僧正遍昭は、歌のさまは得たれども、まこと少なし、例へば繪にかける遊女の、姿にめでて徒に、心を動かすは淺緑、糸よりかけて繋ぐ駒は、二道掛けて中々、恨みしは戀路の空情、逢ふさへ夢の手枕、シテ謠「忍ぶ今宵の顯れて、地謠「言葉をかはすこの上は、何をか包むべき、我等は伊勢の二柱、夫婦と現じ立ち出づる。信ずべし、信ぜば疑ひ波の川竹の、夜も明け行かば內外にて、待ち得てまみえ申さんと、夜半にまぎれて失せにけり。夜半にまぎれて失せにけり。（中入）

地謠「雲は萬里に收まりて、月讀の明神の御影の、尊容を照し出で給ふ。

後シテ謠「我は日本秋津島の大棟梁、地神五代の孫、天照大神、地謠「和光利物は御裳濯川の、和光利物は御裳濯川の、水を蹴立つる波の如し。されども誓は、虛空に滿ち來る五色の雲も、輝き出づる日神の御姿、有難や。シテ謠「所は齋宮の名に古りし、地謠「所は齋宮の名に古りし、神垣しどろに木綿四手の、あらはに神體現れ給ふ。有難や。（舞）シテ謠「昔

力をも入れず—古今集序の文句

天ぎる雪のなべてふる—古今集の歌詞、天ぎるは空掻曇ること

賀茂の御あれ—葵祭の日競馬あり右近を見よ

ワキ謠「さて〳〵今夜は如何なる繪馬を掛け、明年の日を相し給ふ。ツレ謠「誓はいづれも等しけれども、詞まづ雨露の惠を受け、民の心も勇みある、よみぢの黑の繪馬を掛け、謠國土豐かになすべきなり。シテ詞「暫く候。耕作の道の直なるをこそ、神慮も悅び給ふべけれ。まづこの尉が繪馬を掛け、民を悅ばせばやと思ひ候。ツレ謠「さやうに謂れを宣はゞ、此方も更に劣るまじ、詞力をも入れずして、天地を動かし目に見ぬ鬼神の、猛き心を和ぐる、謠歌は八雲を先として、天ぎる雪のなべて降る、是等はいかで嫌ふべき。シテ詞「かくしも互に爭はゞ、隙行く駒の道行かじ。謠いざや二つの繪馬を掛けて、萬民樂しむ世となさん。ツレ謠「實にいはれたりこの程は、一つ掛けたる繪馬なれども、シテ謠「今年始めて二つ掛けて、雨をも降らし、ツレ謠「日をも待ちて、シテ謠「人民快樂の、ツレ謠「御惠を、地謠「掛まくも忝なや。これをぞ賴む神垣に、繪馬は掛けたりや、國土ゆたかになさうよ。賀茂の御あれのひをりの日、賀茂の御あれのひをりの日、是を物見に御隨身、色めく紙の四手つけて、掛けならべたる駒くらべ、かけてやさしく聞えしは、松風の上の藤波、尾

去年とやいはん—古今集に「年の内に春は來にけり一年を去年とや云はん今年とや云はん」
馬を云々牛を云—泰平の象をいふ周武王の故事書經に出づ
濱の眞砂を—古今集に「わたつみの濱の眞砂を數へつゝ君が千年の有り數にせん」

所に逗留し、繪馬を掛くる者を見ばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲謠「新玉の、春に心を若草の、神も久しき惠かな。ツレ謠「霞も雲も立つ春を、シテ、ツレ謠「去年とやいはん年の暮。シテ、サシ謠「それ馬を華山の野に放ち、牛を桃林に繋ぐ事、シテ、ツレ謠「皆聖人の諺かな。それは賢き世の習ひ、時に引かれて四方の海の、濱の眞砂を數へても、君が千年のある數を、喩へても猶有難や。下歌「千早振る、神代を聞けば久方の、天津日嗣の代々古りて、天津日嗣の代々古りて、人皇末代の子孫まで、ありし惠を受け繼ぎて、治まる御代の我等まで、及ばぬ君を仰ぎつゝ、夜晝仕へ奉る。夜晝仕へ奉る。

ワキ詞「如何に是なる人々に尋ぬべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「今夜は此所に繪馬を掛くると申し候は眞にて候か。シテ詞「さん候即ち我等が繪馬を掛け候よ。ワキ詞「それは何の謂れによつて掛けられ候ぞ。シテ詞「これは只一切衆上の愚痴無智なるをかたどり、馬の毛により明年の日を相し、又雨しげき年をも心得べきためにて候。

別六

繪馬

梗概—伊勢齋宮にて、節分の夜、繪馬を掛くる神事あり。こは是によりて明年の晴雨豐凶を相する由本文中に見ゆ。(脇能)

シテ　天照大神(前は老翁)　ツレ　女　ワキ　臣下

ワキ三人 次第謠「治めしまゝに世を守る、治めしまゝに世を守る、伊勢の宮居に參らん。ワキ詞「そもそも是は大炊の帝に仕へ奉る臣下なり。さても我が君伊勢大神宮を信じ給ひ、數の御寶を捧げ給ふ。その勅を蒙り、只今伊勢參宮仕り候。ワキ三人 道行謠「風は上なる松本や、風は上なる松本や、雲雀落ちくる粟津野の、草の茂みを分け越えて、瀬田の長橋うち渡り、野路篠原の草枕、夢も一夜の旅寢かな。夢も一夜の旅寢かな。ワキ詞「急ぎ候程に、是は早勢州齋宮に著きて候。今夜は節分にてこの所に繪馬を掛くると申し候間、今宵はこの

大炊の帝—淳仁天皇

松本—近江

齋宮—多氣郡なり

是までなりや是までとて、黒雲(くろくも)に打乗(うちの)つて、虚空(こくう)にあがらせ給ひけり。

梨壺—昭陽舎
梅壺—梅華舎
晝の間—清涼殿内
夜の御殿—同上
雷鳴の壺—襲芳舎
荒海の障子—清涼殿にあり
祕密の法味—眞言の法を味ふ事

正雷に向ひて申すやう、卒土四海の内は王土に非ずと云ふ事なし。況んや菅丞相昨日までは、君恩を蒙る臣下ぞかし、内恩外忠の威儀未練なり靜まり給へ。あらけしからずや候。シテ詞「あら愚や僧正よ、我を見放し給ふ上は、僧正なりとも恐るまじ、我に憂かりし雲客に、地謡「思ひ知らせん人々よ。おもひ知らせん人々よとて、小龍を引きつれて、黒雲に打ち乘りて、内裏の四方を鳴りまはれば、いな光電の、電光しきりにひらめき渡り、玉體危く見えさせ給ふが、不思議や僧正の、おはする所を雷恐れて、鳴らざりけるこそ奇特なれ。紫宸殿に僧正あれば、弘徽殿に神鳴する、弘徽殿に移り給へば、清涼殿に雷鳴る。清涼殿に移り給へば、梨壺梅壺、晝の間夜の御殿を、行き違ひ廻りあひて、我劣らじと祈るは僧正、鳴るは雷、もみあひ〳〵追つかけ〳〵、互の勢譬へんかたなく、恐ろしかりける有樣かな。千手陀羅尼を滿て給へば、雷鳴の壺にもこらへず、荒海の障子を隔て、是までなれやゆるし給へ。聞法祕密の法味に預り、帝は天滿大自在、天神と贈官を、菅丞相に下されければ、うれしや生きての恨死しての悅、

使たびく重なるとも、かまへて參り給ふなよ。ワキ詞「王土に住めるこの身なれば、勅使三度に及ぶならば、いかでか參内申さざらん。シテ謠「その時丞相姿俄に變り鬼の如し。ワキ謠「をりふし本尊の御前に、柘榴を手向け置きたるを、地謠「おつとつて噛み碎き、おつとつて噛み碎き、妻戸にくわつと吐きかけたまへば、柘榴たちまち火焰となつて、扉にばつとぞ燃えあがる、僧正御覽じて、さわぐ氣色もましまさず、洒水の印を結んで、鑁字の明を唱へ給へば、火焰は消ゆる煙の內に、立ちかくれ丞相は、行方も知らず失せ給ふ。行方も知らず失せ給ふ。

洒水云々―眞言の法

ワキ謠「さても僧正は紫宸殿に坐し、珠數さらくと押しもんで、普門品を唱へければ、地謠「さしも黑雲吹き塞がり、闇の夜の如くなる內裏、俄に晴れて明々とあり。ワキ詞「されぱこそ何程の事のあるべきぞと、油斷しける所に、地謠「不思議や虛空に黑雲覆ひ、不思議や虛空に黑雲覆ひ、電四方にひらめき渡つて、內裏は紅蓮の闇の如く、山もくづれ、內裏は虛空に遡るかと、震動ひまなく鳴神の、雷の姿は現れたり。ワキ詞「その時僧

風月—詩文のこと

一字千金—一字の師恩千金に當る、もと呂不韋が呂氏春秋を著しゝ故事に出づ

なきに散り易く、愁を弔ふ涙は問はざるに先落つ、されば貴きは師弟の約、ワキ謠「切なるは主從、シテ謠「睦しきは親子の契なり。シテ、ワキ謠「是を三悌と云ふとかや。シテ謠「中にも眞實の志の深き事は、師弟三世に若くはなし。地謠「忝しや師の御影をば、如何で踏むべき。

クセ謠「幼かりしその時は、父もなく母もなく、行方も知らぬ身なりしを、菅公の養ひに、親子の契いつのまに、有明月のおぼろけに、憐み育て給ふ事、眞の親の如くなり。さて勸學の室に入り、僧正を賴み奉り、風月の窓に月を招き、螢を集め夏蟲の、心の内も明らかに、シテ謠「筆の林も枝茂り、地謠「言葉の泉盡きもせず、文筆の堪能上人も、悅び思召し、荒き風にもあてじと、御志の今までも、一字千金なり、いかでか忘れ申すべき。

シテ詞「我この世にての望は適ひて候。死しての後梵天帝釋の御憐みを蒙り、鳴る雷となり內裏に飛び入り、我に憂かりし雲客を蹴殺すべし。その時僧正を召され候べし、かまへて御參り候な。ワキ詞「縱ひ宣旨は有りと云ふとも、一二度までは參るまじ。シテ詞「いや勅

我が立つ杣に―傳教大師開山の時の歌

丞相―大臣の唐名

ず、我が立つ杣に冥加あらせてと、望みを叶へ給へとて、滿山護法一列し、中門の扉を敲きけり。

ワキ詞「深更に軒白し、月はさせども柴の戸を、敲くべき人も覺えぬに、如何なる松の風やらん、謠あら不思議の事やな。シテ詞「聞けば内にも我が聲を、怪しめ人の咎むるぞと、謠重ねて扉を敲きけり。ワキ謠「餘りの事の不思議さに、物のひまよりよく〳〵見れば、是は不思議や丞相にてましますぞや、心さわぎて覺束な。シテ詞「頃しも今は明けやすき、月に引かれてこの庵の、謠樞を敲けば内よりも、ワキ謠「不思議やさては丞相か、はや此方へと、シテ謠「夕月の、地謠「影珍しや客人の、影珍しや客人の、まれに逢ふ時は、なかなか夢の心地して、いひやる言の葉もなし。上人も丞相も、心解けて物語、世にうれしげに見え給ふ。あはれ同じ世の、逢瀬と是を思はめや。逢瀬と是を思はめや。

ワキ詞「さて御身は筑紫にて果て給ひたる由承り候程に、種々に弔ひ申して候が屆き候やらん。シテ詞「なか〳〵の事御弔ひ悉く屆きて有難う候。サシ謠秋におくるゝ老葉は、風

雷電

概梗

前段には菅公、叡山の法性坊の前に現れ、後段には雷神となりて内裏に現はれ、法性坊に祈り伏せらるといふ俗傳に據りて作る。この曲一名菅丞相。（五番目）

シテ　雷神（前は菅公）　ワキ　法性坊

ワキ、サシ謠「比叡山延暦寺の座主、法性坊の律師僧正にて候。詞さても我天下の御祈禱のため、百座の護摩を焚き候が、今日滿參にて候程に、やがて仁王會を取り行はゞやと存じ候。サシ謠げにや惠もあらたなる、影も日吉の年古りて、誓ぞ深き湖の、さゞ浪よする汀の月、上歌名にしおふ比叡の御嶽の秋なれや、比叡の御嶽の秋なれや、月は隈なき名所の、都の富士と三上山、法の燈火おのづから、影明らけき惠こそ、人を洩らさぬ誓なれ。人を洩らさぬ誓なれ。

シテ、サシ謠「有難やこの山は、往古より佛法最初の御寺なり。げにや假初の値遇も空しから

仁王會―仁王經を讀誦する佛事

都の富士―京都にて比叡山をいふ

にまき少女さびすも」と謠へりと

木守の御前—水分神社

藏王—忿怒の相を顯し右手に三鈷を持ち右足を揚ぐ

すは、シテ謠「金剛寶石の上に立つて、地謠「一足を提げ、東西南北十方世界の、虛空に飛行して、普天の下率土の内に、王威をいかでか輕んぜんと、大勢力の力を出し、國土を改め治むる御代の、天武の聖代畏き惠、あらたなりけるためしかな。

五節は—十一月舞姫を天覽あるなりその起原は天武天皇吉野にいましし時天女天降りて羽衣の袖をかへして「少女共少女さびすも唐玉を袂

クリ地謠「それ君は舟臣は水、水よく舟を浮むとは、この忠勤のたとへなり。ワキ、サシ謠「有難やさしも姿は山賤の、地謠「心は高き謀、實に貴賤には依らざりけり。ワキ謠「積善の餘慶かぎりなく、地謠「流れ絶えせぬ御裳濯川濁れる世には住みがたし。子謠「されば君としてこそ、民をはごくむ習なるに、かへつて助くる志、地謠「身は宿善のかひぞなき。身は宿善のかひぞなき。一葉の舟の行末、蟠龍の雲居終になど、至らざらめや都路に、立ち歸りつゝ秋津洲の、よしや世の中治まらば、命の恩を報ぜんと、綸言肝に銘じつゝ夫婦の老人は、忝なさに泣き居たり。クセさるほどに、更けしづまりて物凄し、いかにとしてかこの程の、御心慰め申すべき。しかも所は月雪の、三吉野なれや花鳥の、色音によりて音樂の、呂律の調琴の音に、嶺の松風通ひ來る、天つ少女の返す袖、五節のはじめこれなれや。（樂）少女子が、少女子が、その唐玉の琴の糸、引かれかなづる音樂に、神々も來臨し、勝手八所この山に、木守の御前藏王とは、後シテ謠「王を藏すや吉野山、地謠「卽ち姿を現して、卽ち姿を現し給ひて、天を指す手は、シテ謠「胎藏、地謠「地を又指

清み祓―清見原を空とぼけして云へるなり清見原は大和飛鳥の地

來う。ツレ詞「心得申し候。
狂言シカ〳〵。シテ詞「なに清見祓、清見祓ならばこの川下へ行け。狂言シカ〳〵。シテ詞「さては清見原とは人の名よな。あら聞き馴れずの人の名や。その上この山は、都卒の內院にもたとへ、又五台山清涼山とて、唐土までも遠く續ける吉野山、隱家多き所なるを、何くまで尋ね給ふべき、速かに歸り給へ。狂言シカ〳〵。シテ詞「何と舟が怪しいとや、是は乾す舟ぞとよ。狂言シカ〳〵。シテ詞「何と舟を搜さうとや、獵師の身にては舟を搜されたるも家を搜されたるも同じ事ぞかし。身こそ賤しく思ふとも、この所にては翁もにつくき者ぞかし。孫も有り曾孫もあり。山々谷々の者ども出で合ひて、あの狼藉人を打ち留め候へ。打ち留め候へ。狂言シカ〳〵。
ツレ謠「なう聞召せ追手の武士は歸りたり。シテ謠「今はかうよと祖父姥は、ツレ謠「うれしや力を、シテ謠「えいや、シテ、ツレ謠「えいと、地謠「舟引き起し尊體の、舟引き起し尊體の、御恙なく川舟の、かひある御命、たすかり給ふぞ有難き、

り秋風の吹くや故郷の蓴菜鱸魚の膾を想出し仕官を辭して歸れりとの故事

間近く參れ老人よ。間近く參れ老人よ。

ワキ詞「いかに尉、供御の御殘りを尉に賜はれとの御事にて候。シテ詞「あら有難や候。さらば打返して賜はらうずるにて候。ワキ詞「そも打返して賜はらうずるとは、何と申したる事にて有るぞ。シテ詞「打返して賜はらうずると申すこそ、國栖魚のしるしにて候へ。いかに姥、供御の殘りを尉に賜はれとの御事にて候が、この魚はいまだ生々と見えて候。ツレ詞「實にこの魚は未だ生々と見えて候。シテ詞「いざこの吉野川に放いて見う。ツレ詞「條なき事な宣ひそ、放いたればとて生きかへるべきかは。シテ詞「いや〳〵昔もさる例あり、神功皇后新羅を從へ給ひし占方に、玉島川の鮎を釣らせ給ふ。その如くこの君も、二度都に還幸ならば、謠この魚もなどか生きざらんと、地謠「岩切る水に放せば、岩切る水に放せば、さしも早瀬の瀧川に、あれ三吉野や吉瑞を、現す魚のおのづから、生きかへるこの占方、賴もしく思召されよ。

ワキ詞「いかに尉、追手がかゝりて候。シテ詞「此方へ御任せ候へ。いかに姥、あの舟昇いて

シテ詞「是はそも何と申したる御事にて候ぞ。ワキ詞「是はよしある御方にて御座候が、間近き人に襲はれ給ひ、是まで御忍びにて候。何事も尉を頼み思召さるゝとの御事にて候。シテ詞「さてはよしある御方にて御座候か、幸ひ是はこの尉が庵にて候程に、御心安く御休みあらうずるにて候。ワキ詞「いかに尉、面目もなき申しごとにて候へども、この君二三日が程供御を近づけ給はず候。何にても供御にそなへ候へ。シテ詞「その由姥に申さうずるにて候。如何に姥聞いて有るか、この二三日が程供御を近づけ給はず候との御事なり。何にても供御に奉り給へ。ツレ詞「折節是に摘みたる根芹の候。シテ詞「それこそ日本一の事、我等もこれに國栖魚の候。是を供御に備へ申さうずるにて候。ツレ謠「姥は餘りの忝なさに、胸うちさわぎ摘み置ける、根芹洗ひて老が身も、心若菜をそろへつゝ、供御にそなへ奉る。それよりしてぞ三吉野の、菜摘の川と申すなり。シテ詞「祖父も色濃き紅葉を林間に焚き、國栖川にて釣りたる鮎を焼き、謠同じく供御にそなへけり。地謠「吉野の國栖といふことも、この時よりの事とかや。蓴菜の羹鱸魚とても、是にはいかで勝るべき、

供御―召上り物

國栖魚―國栖にて捕るゝ鮎

菜摘の川―夏箕とも書く吉野川の上流

蓴菜云々―晉の張翰が遠國にあ

狩場よそに見て、上歌男鹿伏すなる春日山、男鹿伏すなる春日山、水かさぞまさる春雨の、音は何くぞ吉野川、よしや暫しこそ、花曇りなれ春の夜の、月は雲居に歸るべし。頼みをかけよ玉の輿、頼みをかけよ玉の輿、ワキ詞「御急ぎ候程に、何處とも知らぬ山中に御著きにて候。先この所に御座をなされうずるにて候。

シテ詞「姥や見給へ。ツレ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「あの祖父が伏屋の上に、紫雲の棚引いたるを拜まい給うたか。ツレ詞「實に〳〵あたりに紫雲棚引き、たゞならぬ空の氣色やな。

シテ詞「おう只ならぬ氣色候よ。謡昔より天子の御座所にこそ、紫雲は立つと申せ、詞もしも不思議に尉が住家に、ツレ謡「左樣の貴人やおはすらんと、シテ謡「舟さし寄せて我が家に歸り、ツレ詞「見れば不思議やさればこそ、シテ詞「玉の冠直衣の袖、ツレ詞「露霜にしをれ給へども、シテ謡「さすがまぎれぬ御粧ひ、地謡「さもやごとなき御方とは、疑ひもなく白糸の、釣竿をさし置きて、そもや如何なる御事ぞ、かほど賤しき柴の戸の、暫しが程の御座にもなりける事よいかにせん、あら忝なの御事や。あら忝なの御事や。

國栖

梗概

天武天皇、大海人皇子と申せる頃、大友皇子に襲はれ給ひ、吉野へ遁れましまし〳〵けるなり、翁嫗のために救はれ給ふ。翁嫗は後に藏王權現、天女と現じ奇特を見す。之に國栖魚と五節の舞との故事を交へて作れり。(五番目)

シテ　藏王權現(前は老翁)　ツレ　天女(前は嫗)
子方　天武天皇　ワキ　供奉の臣

ワキ立衆一聲謠「思はずも、雲居を出づる春の夜の、月の都の名殘かな。ワキ謠「道道たらば位山、登らざらめやたゞたのめ。ワキ、サシ謠「神風や五十鈴の古き末を受くる、御裳濯川の御ながれ、やごとなき御方にておはします。この君と申すに御讓として、天津日嗣を受くべきところに、御伯父何某の連に襲はれたまひ、都の境も遠田舍の、馴れぬ山野の草木の露、分け行く道の果までも、行幸と思へば賴もしや。下歌身を秋山や世の中の、宇陀の御

御伯父何某―右大臣大中臣金連をいふか
宇陀―大和

靫—矢を入るゝ具

まことざふか—眞にて候か

る程に、夜もほの〴〵と明け行けば、夜もほの〴〵と明け行けば、暇申してさらばとて、はやこの宿を立ち出つる。子謠「如何に誰かある馬に鞍置き、弓靫参らせよ。君の御供申さうずるに。シテ詞「そも御供とは何事ぞ。子詞「君の御供申してこそ、親の敵にも逢ふべけれ。シテ詞「それは弓矢の御供なり、是は修行の山伏道に、何の敵のあるべきぞ。子謠「さあらば思ひ出したり、小さき頭巾篠懸を、とく拵へて給び給へ、山伏道の御供せん。ワキ詞「辨慶涙を押さへつゝ、如何に申さん鶴若殿、まこと御供有りたくは、今日は道具を拵へ給へ、明日は迎ひに参るべし。子謠「まことざふか。ワキ謠「なか〳〵に。ツレ謠「我も迎ひに参るべし。ワキ謠「我も迎ひに参らんと、地謠「面々聲々にすかされて、いとけなき身の悲さは、誠ぞと心得て、少し言葉の弱りたる、折を得て客僧は、泣く〳〵宿を出でければ、シテ謠「老尼は鶴若を抱き入れ、地謠「行くは慰む方もあり、留まるや涙なるらん。とまるや涙なるらん。

八旬―八十

老尼に語り給ふやう、八島にて繼信、今はかうよと見えし時、思ふ事あらば、委しく言ひ置けと、くれ〴〵尋ね問ひしに、繼信その時に、息の下より申すやう、弓矢取る身の、御身代に立つ事、二世の願や三世の御恩をすこし報謝する、命の輕き身は、露塵何か惜しからん。さりながら故鄉に、八旬に及ぶ母と、十に餘る童、是等が事の不便さぞ、少し心にかゝる雲の、月に覆ひて、光も闇くなる如く、そのまゝくれ〳〵と、終に空しくなりにけり。判官謠「かやうに郎等を討たせつゝ。地謠「自から手を碎き、忠勤まこと曇らずは、終に治まる世に出でて、繼信忠信が、子孫を尋ね出して、命の恩を報ぜんと、思ひし事も空しく、我さへかゝる姿にて、其名をだにも名乘り得ぬ、憂き身の果ぞ悲しき。

シテ謠「母は思に堪へ兼ねて、更くるも知らず有明の、月の盃取りいだし、御酌にこそ參りけれ。判官謠「實にや心を汲みて知る、人の情の盃を、涙と共に受けて持つ。子謠「鶴若酌に立ちかはり、別れし父の御前にて、給仕すると思ひなして、地謠「十二人の山伏の、終夜の酌を取り廻り、座敷にも直らで、進み勇める有樣を、父に見せばやとぞ思ふ。さ

やがて我が君御馬を寄せ、繼信を陣の後に舁かせ、如何に繼信、如何に〳〵と宣へども、たんだ弱りに弱つて終に空しくなる。なんぼう面目もなき物語にて候。シ詞「さてその時に弟の忠信は候はざりけるか。ワキ詞「あら愚や忠信は、日の下に於て隱れましまさず、能登殿の童菊王丸、繼信が首を目懸け渚の方に走り渡るを、忠信引いて放つ矢に、菊王が眞中射通されかつぱと轉べば、教經舟より飛んで下り、菊王がわだかみ摑んで、遙の船に投げ入れ給へば、程なく舟にて空しくなる。眼前兄の敵をば、弟の忠信こそ取つて候へ。シテ謠「さては敵も大將に、仕へ申しゝ御童、ワキ詞「繼信は又我が君の、祕藏におほせし御内の人、シテ詞「彼は平家の舟の內。ワキ謠「此方は源氏の陸の陣、シテ謠「彼も主從、ワキ謠「是も主從、シテ謠「思は同じ思なれば、ワキ謠「よその歎きを思ひ合はせて、御慰みも候へとよ。シテ謠「それは仰までもさむらはず、御身代に立ち參らする上は、今世後世の面目なり。さりながら一人なりとも御供申し、御笈をも肩にかけ、この御座敷にあるならば、地謠「十二人の山伏の、十三人も連りて、只今見ると思はゞ、いかゞ嬉かるべき。クセ其時義經、

門脇殿—敎盛のこと

矢坪—矢のねらひ所

上卷—鎧の脊につきたる緒

大事の手—重傷

し上げ候。繼信が八島にての最期のありさま剛なりとも申し、又不覺なりとも申す、何れか眞にて候やらん承りたく候。判官詞「如何に辨慶、ワキ詞「御前に候。判官詞「繼信が八島にての最期の樣を、委しく語つて老尼に聞かせ候へ。ワキ詞「畏つて候。御諚と申し所望と云ひ、懇に語つて聞かせ申し候べし。御前近う御參り候へ。物語さても八島の合戰、今はかうよと見えしに、門脇殿の二男能登の守敎經と名乘つて、小船に取り乘り磯間近く漕ぎ寄せ、如何に源氏の大將源九郎義經に、矢一筋參らせん受けて見給へと罵る。かう申す各を始めとして、皆御矢面に立たんとせしが、何とやらん心おくれたりし所に、繼信は心まさりし剛の人にて、御馬の前にかけ塞がつて、義經これに在りやとてにつこと笑ひて控へたり。さてその時に敎經は、彎き設けたる弓なれば、矢坪を指してひやうと放つ、過たず繼信が著たりける、鎧の胸板押しつけ上卷、かけずたまらずつゝと射通し、後に控へ給ふ我が君の、御著背長の草摺にはつたと射留む。さてその時に繼信は、馬の上にて乘り直らんとせしかども、大事の手なれば堪へずして馬より下にどうと落つ。

岩木を結ばぬ―人元より感情なき身ならずとなり

士も、物の哀は知るものを、などされば餘りに、御心強くましますぞ、明かさせ給へ人人と、よそ目も知らず泣き居たり。人目も知らず泣き居たり

子詞「かく心もなき人々に、さのみ言葉を盡し給はんより、今は早御内へ御入り候へ。判官詞「暫く候。誠繼信の御子ならば、判官殿とおぼしきを指し給ひ候へ。子謠「承りて候とて、十二人の山伏の、皆御顔を見渡して、是こそそにておはしませ。判官詞「さてそにてあるべきとは何故に仰せ候ぞ。子詞「いや如何に包ませ給ふとも、人にかはれる御粧ひ、謠疑ひもなき我が君よ。上歌地謠「父給べなうとて走り寄れば、岩木を結ばぬ義經なれば、泣く〳〵膝に懷き取る。實にや栴檀は、二葉よりこそ匂ふなれ、誠に繼信が子なりけりと、よその見る目まで、皆涙をぞ流しける。

ワキ詞「今は何をか隱し申すべき、我が君にて御座候　この上は御座を直され候へ、老尼も近う御參り有つて御目にかゝり申され候へ。シテ詞「あら有難や候。我が君を拜み參らするにつけて、子供の事こそ思ひ出でられて候へ。ワキ詞「實に〳〵尤にて候。シテ詞「如何に申

鷲の尾の十郎ー名は經春

てはーの老體にて御入り候な。いでこの御供の内の年よりたる人は誰そ。や、今思ひ出したり、判官殿の御傅、増尾の十郎權の頭、兼房山伏にてましますな。又あれなる山伏はどこ山伏にて御渡り候ぞ。鷲尾詞「是は出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候。シテ詞「いや是は播磨の人の聲にて候。それを如何にと申すに、この姥はもと播磨の者、十三の年繼母を怨み都に上り、謠故庄司殿と契り、繼信忠信を儲け、今かく憂き目を見候へば、ただ怨めしうこそ候へ。詞されば我が國の人の聲なれば、などかは知らで候べき、いでこの御供の内に播磨の人は誰そ、是も思ひ出して候。判官殿鵯越とやらんを通り給ひし時、狩人の姿にて參りあひ、そのまゝ名字賜はり、今までも御供と聞えし、鷲の尾の十郎山伏にて御渡り候な。ワキ詞「さてかう申す山伏をば、どこ山伏と知ろし召されて候ぞ。シテ詞「この御聲こそ大事にて候へ。都の人の聲かと思へば、又近江の人の聲にも似たり。物仰せられ候も何とやらん物々しく見え給ひて候。あつぱれ是は西塔山伏ござめれ。それならば本は近江の人、三塔一の勇僧、今は又我君の、謠一人當千の武士よなう。地謠「武

にて候。いづれが我が君ぞ、何れかそにてましますぞ、夜も更けたり、人の知るべき事にもあらず。この姥が耳にそと御教へ候はゞ、この攝待の利生にて、地謠「空しくなりし兄弟を、再び見るとおもふべし　再び見るとおもふべし。上歌親子よりも主從は、親子よりも主從は、深き契の中なれば、さこそ我が君も哀れと思召すらめ、殊更御爲に、命を捨てし郎黨のひとりは母ひとりは子なり、などや弔ひの、御言葉をも出だされぬ。かほど數ならぬ、身には思ひの無かれかし、あら恨めしの浮世や。あら恨めしの浮世や。

ワキ詞「是は思ひもよらぬ事を承り候物かな。我等如きの山伏の、五人三人行き連れ〱通り候が、今夜此攝待に十二人著きたればとて、判官殿とはかゝる卒忽なる事を承り候物かな、さりながら、繼信忠信の母にてましまさば、判官殿の御内の人の名字をば御存じ候べし、そなたより名を指して承り候べし。シテ詞「仰せの如く我が子は御内に在りし者なれば、大方は推量申すとも、さのみはよも違ひ候はじ。衆房詞「かやうに物申す山伏をば、どこ山伏と御覧じて候ぞ。シテ詞「まづ只今物仰せられつる客僧は、この御供の内に

鶴の子―繼信忠信兄弟を喩ふ

庄司―名は元治

れながら御座を替へられ、皆々の中にうちまじり御座候へかしと存じ候。判官「實にこれは尤にて候。

シテ詞「如何に鶴若。子詞「何事にて候ぞ。シテ詞「山伏達は幾人御著き有るぞ。子謠「十二人御著き候。シテ詞「かしまし〱、一聲謠舊里を出でし鶴の子の、松に歸らぬ寂しさよ。サシ謠「實にや憚りある身として、御前に參りてさむらへば、かつうは亡き人の名をも朽たし、又は子供のいにしへの、恥をも顯すにてはさむらへども、餘りに御なつかしき心ばかりにて、御前に參りて候なり。是は故佐藤庄司が後家、繼信忠信が母にて候。實にや親子恩愛の別の餘りには、包むべき人目をも知らず、又は憂き身の恥をも、顯すにては候へども去りながら、この攝待と申すに、現世の祈のためにも非ず、後生善所とも思はず、嫡子繼信は八島にて討たれ、弟忠信は都にて失せけるとばかりにて、委しき事をも知らずして、ひとり悲しむ身を知る雨の、晴れぬ心や慰むと、この攝待を始めて候。札を立てゝよりこの方、一日に五人三人乃至一人二人、絕ゆる事はましまさねども、十二人は是が初め

佐藤の館―繼信の邸

札の立ちて候　御覧候へ。ワキ詞「なに〳〵佐藤の館に於て、山伏攝待と候。やがて御著き候へ。兼房詞「佐藤の館に於て、山伏攝待の事は我等が望む所なれども、佐藤の館が憚りにて候程に、御通りあれかしと存じ候。ワキ詞「是は仰せにて候へども、只知らぬやうにて御著きあらうずるにて候。

祖母―繼信の母　亘理十郎清綱の女

子詞「如何に誰かある、従者詞「御前に候。子詞「山伏達は幾人御著きあるぞ。従者詞「十二人御著きにて候。子詞「まづ〳〵出でて對面申し候べし。

ワキ詞「是なる幼き人は誰が御子息にて渡り候ぞ。子詞「是は佐藤繼信が子にて候。ワキ詞「さて繼信殿は御内に御座候か。子詞「判官殿の御供申し、八島の合戰に討たれて候。ワキ詞「さてこの攝待は如何なる人の御企にて候ぞ。子詞「判官殿十二人の山伏となり、奥へ御下りの由うけたまはり候ほどに、祖母にて候ものこの程攝待を始めて候、見申せば方々こそ十二人御入り候へ、もし判官殿にては御座なく候か。ワキ詞「暫く候。かゝる卒忽なることを承り候ものかな、まづ〳〵御内へ御入り候へ。さればこそ御大事にて候。おそ

攝待

梗概

義經の一行、十二人山伏となりて、奥へ下向し、佐藤繼信忠信の館に立寄り、攝待を受く。折から繼信の母、繼信の子鶴若など出で來りてもてなし、さて一行を義經及びその郎黨なりと見顯し、繼信が八島にての最期の話を所望す。辨慶その物語をなす。かくて皆々鶴若をすかしてそと出立つ事を作る。（四番目）

シテ　繼信の母　　子方　繼信の子鶴若　　トモ　從者
ツレ　義經外同行山伏　　ワキ　辨慶

ワキ、山伏一同次第謠「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。上歌「子に臥し寅に起き馴れて、子に臥し寅に起き馴れて、雲居の月を峯の雪、その松島に參らんと、東路さして急ぎけり。東路さして急ぎけり。

ワキ詞「如何に申し候。まづこの所に御休みあらうずるにて候。兼房詞「承り候。や、是に高

り。ワキ詞「今は何をか包むべき、是こそ父の少將よ。シテ謠「更に誠としら雪の、故郷の名は、ワキ謠「深草の、地謠「葉末の露の消えもせで、命のあれば又父に、逢ふこそ嬉しかりけれ。逢ふ事の、もし夢ならばいかにせん、現に成り行かば、またもや父に別れなん。キリ地謠「ともに命のながらへて、復廻り逢ふ小車の、別れし時の憂き思ひ、今逢ふ事の嬉しさを、何にたとへん方も渚の波、夜晝戀ひし我が父に、逢ふこそ嬉しかりけれ。逢ふこそ嬉しかりけれ。

流轉無空—空なる世界が迷の眼には色々に見ゆるなり。

彼の國—極樂淨土

クリ地謠「それ生死輪廻の根元を尋ぬるに、有相執著の妄念より起れり。シテ、サシ謠「己と心に迷うて流轉無空にして、地謠「車の庭に廻るが如し。正沈不定にしては、鳥の林に遊ぶに異ならず。シテ謠「悲しきかなや我等今、人界に生を受くとは云ひながら、地謠「見佛聞法の結緣をもなさゞれば、未來の樂しみも、いかがと思ひ知られたり。クセ凡そ彌陀の悲願には、破戒闡提をも洩らさず、一念十念の間に、彼の國に迎へ取るべしと、五劫思惟の本願なり。シテ謠「さればにやその心、地謠「極重惡人無他方便、唯稱彌陀得生極樂と、說かせたまへる、この理にまかせつゝ、我等をたすけおはしませ。我等をたすけおはしませ。

シテ詞「思ひ切りたる事なれば、二人は手に手を取りかはし、川の邊に立ち出づる、ワキ詞「思ひ切りたる事なれども、又引きかへす心地して、門前さして追うて行く。シテ詞「すははや川も近づきぬと、二人は西にうち向ひ、既に憂き身を投げんとす。ワキ詞「あゝ暫しとて引き留むる。シテ詞「有りて憂ければ捨つる身を留め給ふは中々に、我等がためには憂き人な

ワキ詞「不思議の事の候。是なる物狂を如何なる者ぞと思ひて候へば、故郷に留め置きたる一子にて候。又此方なるは傅の小次郎にて候。あら不便と衰へて候や。やがて名のつて悦ばせばやと思ひ候。や、あら何ともなや、一度思ひ切りたる道に、又輪廻の心の出で來て候は如何に。今逢ひ見たらば終の別、今逢ひ見ずは終の悦、謠誠に三界の絆を、

地謠「こゝにて切ると思ひなし、南無阿彌陀佛と稱へて、さらぬやうにて行き過ぐる。さらぬやうにて行き過ぐる。

シテ詞「いかに申し候。是まで父御をば尋ね參らせて候へども、父御に似たる人さへ御座なく候。さて何と仕り候べき。子詞「今は命も惜からず、前なる川に身を投げ空しくならばやと思ひ候。シテ詞「實に〳〵けなげにも仰せ候ものかな、さらば御供申し身を投げ候べし。さりとも善光寺にては尋ね逢ひ參らせうずると存じ候へども、今は早某も退屈仕りて候。今宵は如來の御前にて、御心靜かに念佛を御申し候へ、明けなば川へ御供申し候べし。

藤原の朝臣—紀友雄をさす

その身も勢ありし上、四つの鬼を使ひしかば、攻むべき様もなかりしに、藤原の朝臣一首の歌を書き、鬼の城に遣はすその歌に、謠「土も木も我大君の國なれば、何處か鬼の宿と定めん。下歌地謠「この歌の理に、この歌の理に、鬼もめでて去りぬれば、千方も亡び候ひて、一天四海波を、打ち治め給へば、國も動かぬあらかねの、土の車の我等まで、道せばからぬ大君の、御影の國なるをば、獨せかせ給ふか。シテ謠「殊更當國信濃路や、地謠「木曾の棧かけて實に、頼みも危からぬ法の聲立てゝ猶、諸人の憐み他の力、洩らさじものを彌陀佛の、御影も普く、憐ませ給へ人々、憐みの中にも、この御佛ぞ上なき。佛は衆生を、一子と思召さるれば、殊更我等が影頼み頼む中にも、彌陀は母にてましませば、父にも逢はせてたばせ給へ、なまみだ、シテ謠「阿彌陀佛、地謠「阿彌陀佛、歌舞の菩薩聲々に、花の振鼓、篳篥笙の笛和琴、聲をあげて叫べども、父とも答へず、哀とだにも知らざれば、よしそれまでぞ、さゝらも八撥をも、打捨てゝ狂はじ。皆打ち捨てゝ狂はじ。

にまとはされ、春秋を送り迎へし御身の、かくあさましくなりぬれば僅なる露の命を殘さんと。下歌念佛申し鼓を打ち、地謠「袖をひろげ物を乞ふ、上歌心を人の憐まば、心を人の憐まば、尋ぬる父の行き方を、敎へてたばせ給へと、問ふははかなき憂き身ぞと、思ひながらも憂き旅を、信濃國に聞えたる、善光寺にも著きにけり。善光寺にも著きにけり。

狂言詞「如何に是なる狂人、面白う狂ひ候へ。シテ詞「いや今は狂ひたうもなく候。狂言詞「御身はすねたる事を申すものかな、物狂なれば狂へと申す、只狂うて見せ候へ。シテ詞「いやいや狂ひ候まじ。狂言詞「さては狂ふまじきか、近頃憎き事を申すものかな。狂ふまじきならば、この如來堂には適ふまじきぞ、急いで出で候へ。いやいや御堂ばかりは曲もなく候、この國には適ふまじ。この國ばかりは猶も狹く候、總じて天が下に適ふまじきとよ。シテ詞「何と天が下に適ふまじきと候や。恐れながらおことの身として、天が下に適ふまじとは思ひもよらぬ仰かな。往昔天智天皇の御宇かとよ、千方と云ひし逆臣ありしが

屬車—後車（そへぐるま）

土の車—土を運ぶ車

思ひの家—火宅の意

さ思し召されんに付きては、猶御情は有明の、つれなくも御通り候ものかな。詞是に御入り候は主君にて御座候が、父を失ひ彼方此方を御尋ね候、是を憐みてたび給へ。あら笑止や又むつかり候よ。いや〳〵さやうに心弱くむつかり候はゞ、今日よりして、御供申すまじく候。子詞「如何にめのと、今日よりしては泣くまじいぞとよ。シテ詞「あらいとほしや。さあらば何處までも御供申し、父御に逢はせ參らせ候べし。謠痛はしやいにしへは、鸞輿屬車に召されし御身の、名も高かりし日月も、地に遠近の土の車、引きかへしたる有樣かな。諸佛念衆生、衆生不念佛、シテ、子次第謠「住まで世に經る土車、住まで世に經る土車、めぐるや雨の浮雲、地謠「住まで世に經る土車、住まで世に經る土車、めぐるや雨の浮雲、子、サシ謠「是は都のほとり深草の者にて候が、思ひの外に父を失ひ、諸國をめぐり候なり。シテ謠「悲しきかなや生死無常の世の習ひ。一人に限りたることはなけれども、シテ、子謠「悲しみの母は空しくなり、殘る父さへ幾程なく、思ひの家を出で給へば、その行き方をもしら雪の、跡を尋ねて迷ふなり。シテ謠「あはれや實にいにしへは、花鳥酒宴

土車

概　梗

遁世せし深草少將を慕ひて、傅の小次郎若君と共に流浪し、小次郎は物狂となりて善光寺附近にあり。かくて二人遂に入水して死せんとまで思ひしが、たま〳〵少將と廻り會ふよしを作る。（四番目）

シテ　小次郎　　子方　若君
ワキ　深草少將　　狂言　里人

ワキ次第謠「夢の世なれば驚きて、夢の世なれば驚きて、捨つるや現なるらん。詞かやうに候者は、深草の少將がなれる果にて候。われ妻におくれ、浮世あぢきなくなり行き候程に、一子を捨てかやうの姿となりて候。我世に在りし時より、善光寺への望にて、この程は信濃國に候が、今日もまた御堂へ參らばやと思ひ候。

シテ一聲謠「如何にあれなる道行き人、善光寺への道敎へてたべ。詞なに物狂とや、謠よし

風霜—星霜に同じ

王菩薩と號し、今は又玉垣の内の國に跡を垂れ、和歌を守りて住の江や、松林の下に住んで、久しく風霜を送る。こゝに和歌の人稀なる處に、西行法師歩を運び給ひ、心を述ぶる和歌の友とて、神明納受垂れ給ふ。是によつて神慮の程を、知らしめんと、宜禰が頭にのりうつる。謹上、地謠「再拜、地謠「有難の影向や、ありがたの影向や、返す心も住吉の、岸うつ波も松風も、颯々の鈴の聲、ていとうの鼓の音、和歌の詠吟舞の袂も、同じく心言葉にあらはるゝ、その風ひとしかりけり。是までなりや今は早、疑はで神託を仰ぐべしと木綿四手の、神は上らせ給ひければ、本の宮人となりて、本宅に歸りけりや。もとの方に歸りけり。

時雨せぬ夜も—後拾遺集に「木葉散る宿は聞き分く事ぞなき時雨する夜も時雨せぬ夜も」

西の海云々—高砂を見よ

寝の夢も如何ならん。よしとても旅枕、さらでも夢はよもあらじ、いざ〳〵砧打たうよ。浮世の業を賤の女は、風寒しとて衣打つ、身のためはさもあらで、秋の恨の小夜衣、月見がてらに打たうよ。シテ謡「時雨せぬ夜も時雨する、地謡「木の葉の雨の音信に、老の涙もいと深き、心を染めて色々の、木の葉衣の袖の上、露をも宿す月影に、重ねて落つるもみぢ葉の、色にも交る塵泥の、積る木の葉をかき集め、雨の名残と思はん。

シテ詞「はや夜も更けたり旅人も御休み候へ、謡こゝはもとより所から、年も津守の小尉なれば我も、地謡「老衰の眠ふかき、夢に歸るいにしへを、松が根枕して、共にいざやまどろまん。（中入）

後シテ謡「あら面白の詠吟やな。陰陽二つの道を守る、その句を分つて五體とす、木火土金水なり。上下はすなはち天地人の三才は、是詠吟なるべし。我をば誰とかおもふ、忝くも西の海、青木が原の波間より、地謡「あらはれ出でし、住吉の、シテ謡「神託正に、疑はざれ。祝詞そも〳〵この神の、因位を尋ね奉るに、昔は都卒の内院にして、高貴徳

三五夜中云々ー白樂天の詩句前に度々引けり
瀟湘ー洞庭八景の一に瀟湘の夜雨あり

しこは月影、シテ謠「こゝは村雨、ツレ謠「定めなき身のすまひまでも、シテ謠「賤が軒端を葺きぞわづらふ、賤が軒端を葺きぞわづらふ、詞面白やすなはち歌の下の句なり。この上の句を繼がせ給はゞ、お宿は惜み申すまじ。ワキ謠「もとより我も和歌の心、その理を思ひ出づる、月は洩れ雨は溜れとにかくに、シテ謠「賤が軒端を葺きぞわづらふ。シテ、ワキ謠「月は漏れ雨は溜れとにかくに、賤が軒端を葺きぞわづらふ。シテ謠「おもしろの言の葉や。

地謠「實に理も深き夜の、月をも思ひ雨をさへ、厭はぬ人ならば、こなたへ入らせ給へや。上歌折しも秋なかば、折しも秋なかば、三五夜中の新月の、二千里の外までも、心知らるゝ秋の空、雨は又瀟湘の、夜の哀れぞ思はるゝ。

ツレ謠「なう村雨の聞え候。シテ詞「實に村雨の聞ゆるぞや、遠里小野の嵐やらん。ツレ謠「よくよく聞けば時雨ならで、更け行くまゝに秋風の、シテ謠「軒端の松に、ツレ謠「吹き來るぞや。

地謠「雨にてはなかりけり。小夜の嵐の吹き落ちて、なか〳〵空は住吉の、所からなる月をも見、雨をも聞けと吹く、閨の軒端の松の風、こゝは住吉の、岸打つ波も程近し、假

風吹₂枯木₁晴天雨、月照₂平沙₁夏夜霜—白樂天の詩句

や住の江に著きにけり。はや住の江に著きにけり。詞急ぎ候程に、是は早住吉に著きて候。我此所に來りこゝかしこをさすらひ歩き候程に、早日の暮れて候。又あれを見れば釣殿の邊と思しくて、火の光の見えて候程に、立ち寄り宿を借らばやと思ひ候。シテ謠「風枯木を吹けば晴天の雨、月平沙を照せば夏の夜の霜、それさへあるに秋の空、餘りに堪へぬ半の月、あらおもしろのをりからやな。ワキ詞「如何にこの家の内へ案内申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「行き暮れたる修行者にて候。一夜の宿を御借し候へ。シテ詞「餘りに見苦しき柴の庵にて候程に、御宿は適ひ候まじ。今少しさきへ御通り候へ。ツレ謠「なう〳〵是は世を捨人、痛はしければ入らせ給へ。シテ、ツレ謠「さりながら秋にもなれば夫婦の者、月をも思ひ雨をも待つ、心々に葺き葺かで、住める軒端の草の庵、何處によりてとゞまり給ふべき。ワキ詞「さては雨月の二つを爭ふ心なるべし。月は何れぞ雨は如何に。ツレ謠「姥はもとより月に愛でて、板間も惜しと軒を葺かず。シテ謠「祖父は秋の村時雨、木の葉を誘ふ嵐までも、音づれよとて軒端葺く。ツレ謠「か

別五

雨月

概梗

西行法師住吉に詣で、或る翁媼の許に宿を借る。姥は月に愛で、翁は時雨を好む。こゝに於て西行一首をつらぬ。それより翁は住吉明神として示現あり、歌の德を敍べ給ふ。

（四番目）

シテ　住吉明神（前は翁）　ツレ　嫗　ワキ　西行法師

ワキ次第謠「心を誘ふ雲水の、心を誘ふ雲水の、ゆくへや何處なるらん。詞是は嵯峨の奥にすまひする西行法師にて候。われ宿願の子細あるにより、只今住吉の明神に參詣仕り候。道行住み馴れし、嵯峨野の奥を立ち出でて、嵯峨野の奥を立ちいでて、西より西の秋の空、月をゆくへのしるべにて、難波の御津の浦づたひ、入りぬる磯を過ぎ行けば、は

五月雨も降るやとばかり、面には白汗を流して袂には、露の繁玉、時ならぬ霰玉散る。足踏はとう〳〵と、手の舞匆拍子、打つ音は窻の雨の、ふるひわなゝき立ちつ居つ、肝膽をくだき神のおこたり申し上ぐると見えつるが、神は上らせ給ひぬとて、茫々と狂ひさめて、いざや我が子よ打ちつれて、思ふ伊勢路の故鄕に、またも歸りなば二見の浦、又も歸らば二見の、浦千鳥友よびて、伊勢國へぞ歸りける。伊勢國へぞ歸りける。

神は上らせ―神が度會某の身を離るゝなり

あら悲しや—神ののりうつれるなり

樹をよどれば、百節零落す。足に刀山踏む時は、劍樹共に解すとかや。石割地獄の苦しみは、兩崖の大石、もろ〳〵の罪人を碎く。次の火頻地獄は、頭に火燄を戴けば、百節の骨頭より、燄々たる火を出だす。或時は焦熱大焦熱の、焰にむせび、或時は紅蓮大紅蓮の、氷に閉ぢられ、鐵杖頭を碎き、火燥足裏を燒く。シテ謠「飢ゑては鐵丸を呑み、地謠「渴しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり、餓鬼の苦しみも無邊なり。畜生修羅の悲しみも、我等にいかで優るべき。身より出だせる科なれば。心の鬼の身を責めて、かやうに苦をば受くるなり。月の夕の浮雲は、後の世の迷ひなるべし。

シテ謠「後の世の闇をばなにと照すらん。地謠「胸の鏡よ心濁すな。胸の鏡よ心濁すな。

シテ詞「あら悲しや只今參りて候に、是程はなどや御責め有るぞ。謠 あら悲しやあら悲しや。ツレ謠「不思議やな又彼の人の神氣とて、面色變りさも現なきその有樣、シテ謠「五體ながら苦しめて、ツレ謠「白髮は亂れ逆髮の、シテ謠「雪を散らせる如くにて、ツレ謠「天に叫び、シテ謠「地に倒れて、地謠「神風の一揉もんで、神風の一揉もんで、時しも卯の花くだしの

三界云々—法華經譬喩品の文句

斬碎地獄—之より種々の地獄の苦患を物語る

シテ、サシ謠「一生は只夢の如し、誰か百年の齡を期せん。　地謠「萬事は皆空し、いづれか常住の思をなさん。　シテ謠「命は水上の泡、　地謠「風に隨つて江めぐるが如し。　シテ謠「魂は籠中の鳥の、　地謠「開くを待ちて去るに同じ。消ゆる物は二度見えず、去るものは重ねて來らず。

クセ　須臾に消滅し、刹那に離散す。うらめしきかなや、釋迦大師の慇懃の教を忘れ、悲しきかなや、閻魔法王の呵責の言葉を聞く。名利身を扶くれども、いまだ北邙の煙を免かれず、恩愛心を惱ませども、誰か黃泉の責めに隨はざる。是がために馳走す。所得いくばくの利ぞや。是によつて追求す、所作多罪なり。暫く目を塞いで往事を思へば、舊友皆亡ず。指を折つて故人をかぞふれば、親疎多くかくれぬ。時移り事去つて、今なんぞ渺茫たらんや。人留り我往く、誰か又常ならん。　シテ謠「三界無安猶如火宅、　地謠「天仙尙し死苦の身なり。いはんや、下劣貧賤の報に於てをや。などかその罪かろからん。死に苦しみを受け重ね、業に悲しみ猶添ふる、斬碎地獄の苦しみは、舂擣にて身を斬る事、截斷して血狼藉たり。一日のその內に、萬死萬生たり。劍樹地獄の苦しみは、手に劍の

君が住む越の白山知らねども—古今集の歌詞

神氣が添ふ—神が憑くこと

忘れ、子謠「されども見れば我が父の、シテ謠「子は子なりけり。子謠「時鳥の、地謠「程經て今ぞ廻り逢ふ、占も合ひたり親と子の、二見のうらかたの、正しき親子なりけるぞ。實にや君が住む、越の白山知らねども、ふりにし人のゆくへとて、四鳥の別親と子に、二度逢ふぞ不思議なる、二度逢ふぞ不思議なる。

ツレ詞「かゝる不思議なる事こそ候はね。さては御子息にて候か。シテ詞「さん候疑ひもなき我が子にて候。是も神の御引き合はせと存じ候程に、やがて伴ひ歸國せうずるにて候。

ツレ詞「近頃めでたき御事にて候ものかな。又人の申され候は、地獄の有樣を曲舞に作りて御謠ひある山承り及びて候。とても事に謠うて御聞かせ候へ。シテ謠「やすき御事にて候へども、この一曲を狂言すれば、神氣が添うて現なくなり候へども、よし〳〵歸國の事なれば、面々名殘の一曲に、謠 現なき有樣見せ申さん。次第地謠「月のゆふべの浮雲は、月のゆふべの浮雲は、後の世のまよひなるべし。クリ、シテ謠「きのふもいたづらに過ぎ、今日も空しく暮れなんとす。地謠「無常の虎の聲肝に銘じ、雪山の鳥啼いておもひを痛ましむ。

鶯の云々―此事萬葉集にあり

鶯に逢ふ言葉の緣―鶯の音に逢ふを掛く

や、さては苦しかるまじく候か。シテ詞「中々の事御心易く思召され候へ。ツレ詞「近頃祝著申して候。又是なる幼き人も占の所望にて候。シテ詞「さてはおことも占の所望にて候か。以前の如く一番に手に當りたる短冊の歌を御讀み候へ。子詞「鶯のかひこの中の時鳥、しやが父に似てしやが父に似ず。シテ詞「是も父の事を御尋ね候な。子謠「さん候父を失ひて尋ね申し候。シテ詞「是は早合ひたる占にて候ものを。子詞「いや逢はねばこそ尋ね申し候へ。シテ詞「さりとては占に僞よもあらじ。鶯に逢ふ言葉の緣あり、又卵の中の時鳥とも云へり。時も卯月程時も合ひに合ひたり。や、今啼くは時鳥にて候か。子詞「さん候時鳥にて候。シテ詞「おもしろし〱。當面黄舌の囀り、鶯のこは子なりけり子なりけり。不思議や御身は何處の人ぞ。子詞「伊勢國のもの。シテ詞「在所は。子詞「二見の浦。シテ詞「父の名字は。子詞「二見の大夫渡會の何某。シテ詞「さてその父は。子詞「別れて今年八箇年。シテ詞「さておことの幼名は。子謠「幸菊丸と申すなり。シテ詞「こはそも神の引き合はせか。是こそ父の何某よ。子謠「不思議や父にてましますかと、言はんとすれば白髪の　シテ謠「身は白雪の面

水金二輪—大千世界のもとは風輪にて其上に金輪水輪ありといふ

四州—東弗婆提南閻浮提西瞿耶尼北鬱單越

命期六交—命は六十を限とす

ば、何々北は黄に、南は青く東白、西くれなゐのそめいろの山。かやうに見えて候。シテ詞「須彌山をよみたる歌にて候。是は父の事を御尋ね候な。ツレ詞「さん候親にて候者この程所勞仕り候間、生死の境を尋ね申し候。シテ詞「心得申し候。委しう判じて聞かせ申さう。それ今度の所勞を尋ぬるに、邊涯一片の風より起つて、水金二輪の重結に顯る、それ須彌は金輪より長じて、其丈十六萬由旬のいきほひ、四州常樂の波に浮み、金銀碧瑠璃玻球貨寶の影、五重色空の雲に映る。されば須彌の影うつるによつて、南贍部州の草木みどりなりと云へり。さてこそ南は青しとはよみたれ。こゝに又父の恩の高き事、高山千丈の雲も及びがたし。されば父は山、そめいろとは風病の身色、しかも生老病死の次第を取れば、西くれなゐと見えたるは、命期六交の滅色なれば、あうこれは既に難義の所勞なれども、こゝに又染色とは、聲を借りたる色どりにて、文字には蘇命路なり。よみがへる命の路と書きたれば、誠に命期の路なれども、又そめ色に却來して、謠二度こゝに蘇生の壽命の、種となるべき歌占の詞、頼もしく思召され候へ。ツレ詞「あら嬉し

陰陽の二神—謠冊二首

おこたりを申す—謝罪すること

じめより、陰陽の二神天の街に行合の、小夜の手枕結び定めし、世を學び國を治めて、今も道ある妙文たり。下歌占問はせ給へや。歌占問はせたまへや。上歌神風や。伊勢の濱荻名をかへて、伊勢の濱荻名をかへて、よしといふもあしと云ふも、同じ草なりと聞くものを、所は伊勢の神子なりと、難波の事も問ひ給へ。人心、引けばひかるゝ梓弓、伊勢や日向の事も問ひ給へ。日向の事も問ひ給へ。

ツレ詞「如何に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ツレ詞「さて御身は何國の人にて渡り候ぞ、見申せば若き人にて候が、何とて白髪とはなり給ひて候ぞ。シテ詞「實に〳〵背く人の御不審にて候。是は伊勢國二見の浦の神職なるが、われ一見のために國々を廻る。或時俄に頓死す。又三日と申すによみがへる。それよりかやうに白髪となりて候。是も神の御咎と存じ候ほどに、當年中に歸國すべきとおこたりを申して候。ツレ詞「さてはその謂れにて候な。さらば歌占を引き申し候べし。シテ詞「易き間の事。一番に手に當りたる短册の歌を遊ばされ候へ。考へて參らせ候べし。ツレ詞「承り候。敎にまかせ短册を取り上げ見れ

歌占—歌にて吉凶を占ふ法

歌占

梗概

伊勢の國二見の神職度會某、我が子の幸菊丸を失ひ廻國して加賀に在り、歌占の業より、我が子に廻りあひ、相共にめでたく歸國す。中に地獄の呵責を謠へる曲舞を挿めり。（四番目）

シテ　度會某　ツレ　里人　子方　幸菊丸

ツレ次第謠「雪三越路の白山は、雪三越路の白山は、夏陰いづくなるらん。詞かやうに候者は、加賀國白山の麓にすまひする者にて候。さてもこの程何處の者とも知らぬ男神子の來り候が、小弓に短册を付け歌占を引き候が、けしからず正しき由を申し候程に、今日まかり出で占を引かばやと存じ候。如何に渡り候か、歌占の御所望にて候はゞ御供申さうずるにて候。

シテ一聲謠「神心、種とこそなれ歌占の、引くも白木の手束弓。サシそれ歌は天地開けしは

よるべの水―歩みよるとかけて社頭の水のこと

髪の、賀茂の社へすごすごと、歩みよるべの水の綾、呉織くれぐれと、倒れ伏してぞ泣き居たる。

ロンギ地謠「不思議やさては別れにし、其妻琴のひきかへて、衰ふる身ぞ痛はしき。シテ謠「聲はその、人と思へどわれながら、現なき身の心ゆゑ、たゞ夢としも思ひかね、胸うち騒ぐばかりなり。地謠「實にや思へば影頼む、惠普き室の戸に、シテ謠「立つ神垣も隔てなき、地謠「御名も替はらぬ、シテ謠「賀茂の宮居。地謠「實にまこと有難や、誓は同じ名にしおふ、室君の操を知るも、たゞこれ糺の御神の御惠なりと同じく、ふたゝび伏し拜みて、妹背うちつれ歸りけり。妹背うちつれ歸りけり。

臨時の祭―十一月下の酉の日に行はる

輪を越えて參り給へや。シテ謠「神山の、二葉の葵年舊りて、地謠「雲こそかゝれ木綿鬘の、神代今の代おしなめて、今日は夏越の、祓ひなごめ靜めて、心ぞ淸き御祓河の、波の白和幣、麻の葉の靑和幣、何れも流し捨て衣の、身を淸め心すぐに、本性になりすまして、いざや神に參らん。この賀茂の神に參らん。

ワキ詞「如何に申し候。この烏帽子を召されて、面白う舞うて御見せあれと人々の御所望にて候。(物著) シテ詞「實にや臨時の祭には、かざしの花を賜はるとかや。妾も烏帽子を打著つゝ、神の御前に狂はまし。謠賀茂河の、後瀨しづかに後も逢はん、詞妹には我よ今ならずともと聞く時は、謠祈る願も賴もしや。ワキ謠「實に濁無きこの神の、御心なれや賀茂の河、シテ謠「今此水に影をうつす、舞の袖こそいろ〳〵の、ワキ謠「心を種の手向草。シテ謠「さるにても、よそにはなにと御祓河、(中ノ舞) ワカ御祓河、水も綠の山陰の、地謠「賀茂の宮居の御手洗川に、うつる面影、映る面影。シテ謠「あさましや、もとより狂氣の我が身なれば、地謠「見しにもあらずおのづから、うつる姿は恥かしや、齒根も眉も亂

事代主―大國主神の御子

五月蠅なす―拾遺集の歌末句祓なりけり

水無月の云々―今日も尙神社にて神官などの詠ずる古歌

千早振神の忌垣も云々―萬葉の歌詞

シテ詞「忝くも天照大神皇孫を、蘆原の中つ國の御主と定め給はんと有りしに、荒ぶる神は飛び滿ちて、螢火の如くなりしを、事代主の神なごめ祓ひ給ひしこそ、今日の夏越の始めなれ。されば古き歌に、謠五月蠅なす荒ぶる神もおしなめて、今日は夏越の祓なるらん。詞さてさばへなすとは夏の蠅の飛び騷ぐが如くに、障りをなす神を云へり。謠かかる畏き祓とも、思ひ給はで世の人の、ワキ謠「祓をもせず輪をも越えず。シテ謠「越ゆればやがて輪廻を免る。ワキ謠「すはや五障の雲霧も、シテ謠「今みなつきぬ。ワキ謠「時を得て、地謠「水無月の、水無月の、夏越の祓へする人は、千年の命延ぶとこそ聞け。輪は越えたり、御祓のこの輪をば越えたり、眞如の月の輪の謂れを、知らで人な笑ひそよ。もし惡しき友あらば、禊ひのけて交へじ、身に祓ひのけて交へじ。輪越えさせ給へや。この輪越えさせ給へや。名を得てこゝぞ賀茂の宮、名を得てこゝぞ賀茂の宮に、參らせ給はゞ、御祓河の波よりも、この輪をまづ越えて、身を清めおはしませ。千早振、神の忌垣も越えつべし、もと來し方の道を尋ねて、迷ふ事はなくとも、異方な通ひ給ひそ。今日は夏越の、

戀せじと—伊勢物語にある業平の歌の詞
大麻の—同書女の歌の詞
夏と秋—古今集の歌末句風や吹くらん

神ならば、地謠「などか逢瀨のなかるべき。シテ、サシ謠「實にや數ならぬ、身にも喩へは在原の、跡は昔に業平の、この河波に戀せじと、掛けし御禊も大麻の、引く手あまたの人心、頼むかひなきかねことかな、とは思へども我は又、浮寢に明かす水鳥の、下歌地謠「賀茂の河原に御禊して、逢瀨をいざや祈らん。上歌夏と秋、行きかふ空の通路は、行きかふ空の通路は、かたへ涼き風ぞ吹く。御手洗川は濁るとも、澄みてます賀茂の宮、誓ひ糺の神ならば、頼みをかけて憂き人に、めぐり逢ふべき小車の、賀茂の河原に著きにけり。賀茂の河原に著きにけり。

狂言詞「只今申す女物狂はこれにて候。言葉をかけ輪の謂れを申させて聞召され候へ。

ワキ詞「承り候。さらば言葉をかけて謂れを聞かばやと思ひ候。如何にこれなる狂女、見れば茅にて作りたる輪を持ちて、人々に越えよと承り候、夏越の祓の謂れこそ聞きたう候へ。シテ詞「妾は狂人なれども、祓の謂れを申して聞かせ參らせ候べし。ワキ詞「さらば懇に語られ候へ。

行く水に—古今集の歌末句思ふなりけり

都の人にてありげに候が、不知案内なるやうに仰せ候よ。ワキ詞「仰せの如く都の者にて候へども、久く田舎に候ひてまかり上り候故かやうに申し候。狂言詞「實に／＼さやうの事も候べし。さらば御供申し候はん。ワキ謡「此頃都には如何やうなる珍しき事か候。狂言詞「御存じの如く都は廣き事にて候程に、いろ／＼珍しき事も多く候、先づ此御手洗に參りて面白き事の候。ワキ詞「如何やうなる事の候ぞ。狂言詞「若き女物狂の候が、巫のやうなる有様にて、水無月祓の輪を持ち、人々に茅の輪の謂れを申してくゞらせ候が、是非もなく面白う舞ひ遊び候。是を見せ申し候べし。ワキ詞「さらばその物狂を見うずるにて候。狂言詞「何かと物語申して參り候程に、はや糺へ參りて候。—御覽候へ殊の外群集にて候。彼の物狂を待ちて見せ申し候べし。

シテ一聲謡「行く水に數書くよりもはかなきは、思はぬ人を思ひ妻の、跡を慕ひて上り瀬の、淸き流や中賀茂の、御手洗川につどふ君、今日の夏越の祓して、この輪越えさせ給へとよ。恥しや人はなにとも白波の、地謡「木綿四手掛くる御祓川、シテ謡「戀路をたゞす

水無月祓

梗概

夫に別れて、後を慕へる狂女の、水無月祓の折から、賀茂明神の御手洗川にて、祓の謂れを語りて人に茅の輪を潜らしめ居る時に、その夫詣でて廻り會ふ。(四番目)

シテ　狂女　　ワキ　夫

名越の祓—六月晦日に罪穢を祓ふ神事水無月(六月)祓ともいふ名越は夏越の意

彼の逢瀬—別れし女に逢ふこと

糺—下賀茂

ワキ詞「是は下京邊に住まひする者にて候。我さる子細あつて播磨國に下り、久く室の津に逗留の間、相馴れし女の候に都に上りなば、必ず迎へ妻となすべきよし堅く契約申して候。さればこの程室の津へ迎へを遣し候處に、彼の女居候はぬよし申し候間、今は尋ぬべきやうもなく候。又今日は夏越の祓にて候程に、賀茂の明神に參詣申し、彼の逢瀬をも願はばやと存じ候。

狂言詞「是はこのあたりにすまひ仕る者にて候。今日は水無月祓にて候程に、糺へ參らばやと存じ候。ワキ詞「なう是なる人は糺へ御參り候か。某も御供申し候べし。狂言詞「見申せば

折る柳落つる梅—折柳曲落梅曲
藤生野—山城藤の縁に出す
英遠の濱風—英遠の浦の風萬葉集家持の歌に見ゆ

やうに移ろふ四つの時、地謠「理なれや夏かけて、さかり久しき藤波の、花に立ち添ふ朝霞、暮れゆく春のかたみぞと、惜しむ心も紫の、深く頼みを松が枝に、かゝる契ぞ頼もしき。

シテ謠「おもしろや、(舞)おもしろや、ゆたに吹くなる春風に、地謠「誘はれつゝも千代を唱ふる、千代を唱ふる、千代を唱ふる。シテ謠「松にかゝりて咲く藤の、地謠「薄紫の雲の羽袖を、かへす舞姫、シテ謠「歌へや歌へ折る柳落つる梅、地謠「あるひは花の、シテ謠「藤生野も、地謠「隔てぬ色も、匂ひも深海松の、英遠の濱風多祜の浦わに、吹きよすも音さゆる、波も文どる舞の袂、月に飜す、影もうつるや紫の、影もうつるや紫の、曙に薫りて、たなびく霞に入りにけり。

狂言綺語云々—山姥にも出づ

紫藤花底殘花色—朗詠集の句

奈古の浦—越中

しも言葉をかはす事、何の故にてあるやらん。シテ謠「異性化身自在不滅の、縁に引かれて夜もすがら、歌舞をなさんと參りたり。ワキ謠「實にや元より狂言綺語も、シテ謠「讃佛乘の因縁、ワキ謠「隔てはあらじ。シテ謠「紫の、地謠「ゆかりの色も縁ならめ、ゆかりの色も縁ならめと、敎の外なる法までも、今こそ悟の、開くる心の花なれや。されば非情の草も木も、成佛こゝに荒磯海、深きは法の道ぞかし、深きは法の道ぞかし。

クリ地謠「實にや春を送るに、舟車を動かす事を用ひず、只殘鶯と落花とに別る。シテ、サシ謠「紫藤の露の下に殘る花の色、地謠「實におもしろや水の面に、月のかすめる春もはや、紫にほふ花かづら、かるゝ致景は又世にも、シテ謠「奈古の浦わも程近く、地謠「詠めにつゞく景色かな。クセなつかしき、色のゆかりとおもふにも、心にかゝる藤波の、夜晝わかでいたづらに、送り迎ふる年月の、春の花散りて青葉に、夏橘のにほふにぞ、見ぬ世の人も忍ばるれ。桐の葉落ちて秋來ぬと、しるくも月の影すむや、浦吹く風に小夜ふけて、曉と白波、立ちさわぐ村千鳥、友よぶ聲や霜雪に、冬のけしきの知らるらん。シテ謠「か

ロンギ地謠「不思議やさてもかくばかり、その白露の古事を、語りたまふは誰やらん。シテ謠「我を誰とか夕日影、紫にほふ花鬘、心にかけてたび給へ。地謠「心にかけて思へとは、梢にかゝる藤波の、シテ謠「多祜の浦わに、地謠「名にしおふ花の精なりと、夕雲の足はやみ、多祜の浦風うち靡き、花の波立つもとに、寄るかと見えて失せにけり。寄るかと見えて失せにけり。（中入）

ワキ上歌謠「霞む夜の、月は出でてもむば玉の、月は出でてもむば玉の、よるべ定めぬ浮れ鳥、鳴く音も法の聲添へて、花の跡訪ふ春の風、聲物凄き波枕、假寐の夢やさますらん。假寐の夢やさますらん。

後シテ一聲謠「如何なればむなしき空に散る花の、あだなる色に迷ひそめけん。ワキ謠「不思議やな夜も更け過ぐる月影に、現れ出づる姿を見れば、有りつる女人の顔なり。いかさま疑ふ所もなく、花の精にてましますか。シテ謠「恥しながら花の精、妙なる御法の一味の雨に、開くる花の笑みの眉、是まで現れ出でたるなり。ワキ謠「あら有難やさりながら、斯

一味の雨―法華經の語

おのが浪に云々—新古今集慈圓の歌末句恨めしの身や、藤の花を藤波といふよりの歌なり

多祜の浦や云々—續後拾遺集前關白左大臣の歌下句は移ろふ波ぞ色に出でける

縄麻呂—朗詠集に此くあれど萬葉には人麿古今には人麿とす

色をも香をも—古今集の歌上句君ならで誰にか見せん梅の花

に、誠にあれなる藤の今を盛と見えて候。立ち寄り見候べし。實におもしろく咲きて候。謠おのが波に同じ末葉のしをれけり、藤咲く多祜の恨めしの身ぞ。詞古事の思ひ出でられて候。

シテ詞「なう〳〵あれなる旅人に申すべき事の候。ワキ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。シテ詞「是は多祜の浦とて藤の名所なり。古き歌に、謠多祜の浦や汀の藤の咲きしより、波の花さへ色に出でつゝ。詞かやうの歌をも詠じ給はで、おのが波に同じ末葉のしをれけりなど口ずさみ給ふは、謠あら心なの旅人やな。ワキ謠「思ひよらずや人ありとも、知らで吟ぜし古歌ながら、シテ謠「花のためには如何ならん。ワキ謠「同じ末葉のしをれぬる、シテ謠「怨みならずや怨めしや。彼の縄麻呂の歌に、上歌地謠「多祜の浦、底さへにほふ藤波を、底さへにほふ藤波を、かざして行かん、見ぬ人のためと詠みたりし、この花を心なく詠じ給ふは怨めしや。實にや思へば咲く花の、色をも香をも知る人ぞ知るとよみしも理や、知るとよみしもことわりや。

藤

概梗

多祜の浦は昔より藤の名所なり。その所の藤花の精現れて、僧の弔ひを得て成佛の縁を結び、花の精は舞ひかなづ。（三番目）

シテ　藤の精（前は里女）　ワキ　旅僧

ワキ次第謡「山又山を遥々と、山又山を遥々と、越路の旅に出でうよ。詞是は都方より出でたる僧にて候。我この程は加賀國に候ひて、こゝかしこの名所を一見仕りて候。また是より善光寺へ參らばやと思ひ候。道行謡雪消ゆる、白山風も長閑にて、白山風も長閑にて、日影長江の里も過ぎ、さゝぬ刀奈美の關越えて、青葉に見ゆる紅葉川、そなたとばかり白雲の、氷見の江行けば名に聞きし、多祜の浦にも著きにけり。多祜の浦にも著きにけり。

ワキ詞「是ははや越中國多祜の浦とかやに著きて候。この所は藤の名所と承りおよびたる

長江—加賀
刀奈美—越中
氷見の江—同
多祜の浦—同

てあらましのかひもなく、結句主を追つ下げて、下人に使ふべき謂ればしあるか。何とて物をば言はぬぞ。シテ謠「めのとの科もさむらはず、只久々に捨ておきたる、花若が父の科ぞとよ。あやまつて仙家に入りて、半日の客たりといへども、故郷に歸つてわづかに、七世の孫にあへるとこそ、承りて候へとよ。況んや十餘年の月日あり〳〵て、今日しもかゝる憂き業を、見みえ申すは不肖なり。地謠「たゞ願はくはこの程の、恨を我等申すまじ、左近尉が身の科を、親子に免しおはしませ。ワキ謠「この上は、否とはいかが稲筵の、地謠「小田守も秋過ぎぬ、はや〳〵ゆるす左近尉。キリ さて其後に彼人は、さて其後に彼人は、家を花若つぎざくら、若木の里に隠れなき、五常たゞしき弓取の、末こそ久しかりけれ。末こそ久しかりけれ。

めのと―傅の役

外なる者かな。ワキ詞「あの舟よせよとこそ。ツレ詞「是はなか〳〵不審なりとて、漕ぎ浮めたる鳥追舟、さし近づけてよく〳〵見れば、是は日暮殿にて御座候か。ワキ詞「あら珍しや左近尉。あれなるは汝が子にて有るか。子詞「いや是は日暮殿の子にて候。ワキ詞「さてあれなるは汝が母か。子謠「さん候母御にて御入り候。ワキ詞「それは何とて賤しき業をばいたすぞ。子謠「父は在京とて、また音信も候はず、頼みたる左近尉、この秋の田の群鳥を追へ、さなくば親子もろともに、我が家のすまひかなふまじと、いふ言の葉の恐しさに、身をすて舟に羯鼓を打ち、ならはぬ業を汐干の浪、あさましき身となりて候。ワキ詞「言語道斷の事。それ弓取の子は胎内にてねぎことを聞き、七歳にて親の敵を討つとこそ見えたれ。況んや汝十歳にあまり、さこそ無念に有りつらんな。只是と申すも某が永々在京の故なれば、一しほ面目なうこそ候へ。只今左近尉を討つて捨てうずるにてあるぞ。此方へ來り候へ。如何に左近尉おのれは、不得心なる者かな。汝をめのとに付け置く上は、さこそ煩ひも有りつらん。如何さま國に下るならば、如何やうなる恩賞をもなどと、都に

いとせめて云々—小野小町の歌を引く

離家三四月—菅公の詩句を引く

追へや〳〵水鳥。いとせめて、戀しき時はむば玉の、夜の衣をうちかへし、夢にも見るやとて、まどろめばよしなや、夜寒の砧打つとかや。シテ謠「恨は日々にまされども。地謠「恨は日々にまされども、哀とだにもいふ人の、涙の數そへて、思ひ亂れて我が心、しどろもどろに鳴る鼓の、筋なき拍子とも、人や聞くらん恥かしや。シテ謠「家を離れて三五の月の、地謠「隅なき影とても、待ち恨みとことはに、心の闇はまだ晴れず。シテ謠「すはすは村鳥の、地謠「すは〳〵村鳥の、稻葉の雲に立ち去りぬ。又いつか逢坂の、木綿附鳥か別の聲、鼓太鼓うちつれて、猶もいざや追はうよ。ツレ詞「あらうれしや今こそ某が田の鳥は皆立つて候へ。先々御休み候へ。

ワキ詞「鳥追舟に眺め入りて、故郷に歸るべきことを忘れて候。舟ども多き中に、羯鼓鳴子をかざりたる舟おもしろう候。この舟を近づけ見ばやと存じ候。如何にあれに羯鼓鳴子かざりたる舟を近う寄せよ。ツレ詞「あら不思議や、このあたりにおいて、左近尉が舟あれ寄せよなどといはうずる者こそ思ひもよらね。これは旅人にてありげに候。天晴存

刈りじほ―刈るをり

みにて打ち過ぎぬれば、後々とても頼みなし、たゞ花若が果報のなきこそうたてしう候へ。子謠「實にや落花心あり人心なし。たとひ父こそ訴訟の習ひ、此方の事思ひながら、永々在京し給ふとも、左近尉情ある者ならば、自らが名をも朽たし、母御に思をかけ申す事よもあらじ。あはれ父御にこの恨を、語り申し候はばや。シテ謠「たとひ訴訟はかなはずとも、父諸共に添ふならば、かくあさましき事よもあらじ。地謠「いつまでか、かゝる憂き目を水鳥の、はかなく袖をぬらすべき。

ツレ詞「是はさて何事を御歎き候ぞ。歎く事あらば我が家に歸りて御歎き候へ。御覽候へ、餘の田の鳥は皆立ちて候が、左近尉が田の鳥はいまだ立たず候、何のため雇ひ申して候ぞ。子謠「悲しやな家人にだにも恐るれば、身の果さらにしら露の、シテ謠「晩稲の小田も刈りじほに、色づく秋の村鳥を、子謠「苧生の浦舟漕ぎ連れて、シテ謠「思ひ〳〵の囃子物、子謠「あれ〳〵見よや、シテ謠「よその舟にも、地謠「打つ鼓、打つ鼓、空に鳴子の村雀、追ふ聲を立て添へ、さていつも太鼓はとう〳〵と、風の打つや夕波の、花若よ悲しくとも、

昨日の早苗—古今集に「昨日こそ早苗とりしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く」

落汐—引汐

トモ詞「畏つて候。　狂言シカ〳〵。

ワキ詞「實に〳〵さる事あり。九州にてはこの鳥追舟こそ一つの見事にて候へ。この舟を待ちて見ばやと存じ候。

ツレ、サシ謠「面白や昨日の早苗いつの間に、稲葉もそよぐ秋風に、田面の鳥を追ふとかや。シテ、子謠「我等は心憂鳥の、下安からぬおもひの數、ツレ謠「群れゐる鳥を立てんとて、身を捨舟に羯鼓を打ち、シテ、子謠「或は水田に庵を作り、シテ謠「又は小舟に鳴子をかけ、シテ、子ツレ謠「引きつるゝ、湊の舟の落汐に、地謠「浮たつ鳥や騒ぐらん。シテ謠「鳥も驚く夢の世に、地謠「我等が業こそ現なき。實にや夢の世の、なにか喩にならざらん。なにか喩にならざらん。身はうたかたの水鳥の、浮寝定めぬ波枕、うちなびく秋の田の、穂波につれて浮き沈み、おもしろの鳥の風情や、此頃は猶、秋雨の晴間なき、水陰草に舟よせて、我等も年に一夜妻、逢ひもやすると天の川、うはの空なる頼みかな。うはの空なる頼みかな。

シテ、サシ謠「さるにても殿は此秋の頃、下り給ふべきなどと申しつれども、それもはや詞の

某が名を云々―某が主人を苦役するといふ評判

御事はいとけなき御事にて御座候へば、苦しからざる御事にて候。上臈の御身にて御出であるべきなどと仰せ候は、某が名を御立て候はんずるために仰せ候か。シテ詞「さらば花若一人は心許なく候へば、二人ともに立ち出で鳥を追ひ候べし。ツレ詞「それはともかくも御計ひにて候べし。さらば明日舟を浮めて待ち申さうずるにて候。

シテ謠「實にや花若ほど果報なき者よもあらじ。さしも祝ひて月の春の、花若とかしづくかひもなく、おちぶれはててあさましや。地謠「賤が鳴子田引き連れて、鳥追舟に乘らんとて、上歌ともに涙の露しげき、ともに涙の露しげき、稻葉の鳥を立てんとて、人も訪はざる柴の戸を、親子伴ひ立ちいづる。親子伴ひ立ちいづる。

ワキ次第謠「秋も憂からぬ故郷に、秋も憂からぬ故郷に、歸る心ぞうれしき。詞「これは九州日暮の何某にて候。さても某自訴の事あるにより、十箇年餘り在京仕り候處に、自訴悉く安堵し悦喜の眉を開き、只今本國にまかりくだり候。如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「あなたに當つて笛鼓の音の聞え候は、何事にて有るぞ尋ねて來り候へ。

詞多き者は品少しー當時の諺

づらの鳥を追はせ申さばやと存じ候。　如何に案内申し候、　左近尉が參りて候。　シテ詞「左近尉とは何のために只今來り給ふぞ。　ツレ詞「さん候、　殿は此秋の頃御下向あるべき由申し候。　シテ詞「如何に花若がうれしう候らん。　ツレ詞「又只今參る事餘の儀にあらず、　當年某が舟に、　更に鳥追はせうずる者なく候へば、　花若殿御出であつて鳥を追うて御遊び候へかし。　左樣の事申さんために參りて候。　シテ詞「何と、　花若に田づらの鳥を追へと申すか。花若はいとけなけれども、　左近尉がためには主にてはなきか。主に鳥追へなどと申すは、かゝる左近尉ほど情なき者こそなけれ。　ツレ詞「何と、左近尉は情なき者と仰せ候か。　まづ御心を靜めて聞召され候へ。　人の御留守などと申すは、　五十日百日、　乃至一年半年をこそ御留守とは申せ。　既に十箇年に餘り、　扶持し申したる左近尉が情なき者にて候か。　所詮詞　多き者は品少しにて候程に、　花若殿御出であつて鳥御追ひなくば、　この屋をあけて何方へも御出で候へ。　シテ詞「實に〳〵申す處　理　にて候。　花若が事はいとけなく候へば、　みづから出でて鳥を追ひ候べし。ツレ詞「それこそ思ひもよらぬ事にて候へ。　花若殿の

鳥追舟

概梗

薩州の日暮殿、訴訟のために上京し、已に十年を經たる間、左近尉なる者横暴を極め、主人の母子を苦役し、鳥追舟に乘らしめて、賤しき鳥追の業をなさしむ。折から日暮殿歸京あり。つひに其子花若に相續せしめ、めでたくをさまる事を作る。(四番目)

シテ　日暮殿の妻　子方　花若　ワキ　日暮殿
ツレ　左近尉　トモ　從者

ツレ詞「かやうに候者は、九州薩摩國日暮殿の御内に、左近尉と申す者にて候。さてもこの日暮の里と申すは、前には大河流れ、末は湖水につゞけり。この湖より村鳥あがつて、浦向ひの田を食み候間、毎年鳥追舟をかざり田づらの鳥を追はせ候。又賴み奉る日暮殿は、御訴訟の事あるにより、御在京にて候が、その御留守に北の御方と、花若殿と申す幼き人の御座候。あまりに鳥追はせうずる者もなく候間、花若殿を雇ひ申し、田

狂の舞とや人の見ん。シテ謠「萬代を、地謠「萬代を萬代を、松は久しき例なり、松は久しき例なり。シテ謠「年を老松も、綠は若木の姫小松、地謠「四季にも同じ葉色の常盤木の、松菊を愛し、かなたこなたへ、足もとは泥々々々と、苔むす橋をよろめき給へば、淵陸左右に介錯し給ひて、虎溪を遙に出で給へば、淵明禪師にさて禁足は、破らせ給ふかと一度にどつと、手を拍ち笑つて、三笑の昔となりにけり。

天台―休レ疑寶尺難ニ量度一直恐金刀易ニ剪裁一噴向ニ林梢一成ニ夏雪一傾來石上ニ作ニ春雷一欲レ知便是銀河水墮ニ落人間一合ニ却廻一―唐の曹松の天台瀑布の詩合して却廻は誤讀ならん

日照ニ香爐一生ニ紫烟一―李白の詩

菊の白露―拾遺集に「我宿の菊の白露けふ毎に幾世積りて淵となるらん」

をなす。シテ詞「遠く見れば織るが如くにして天台に掛く。淵謠「寶尺を疑ふ事を休めよ度りがたし。シテ謠「直に金刀の剪裁し易きを恐る。陸謠「噴いて林梢に向つて夏雪をなし、シテ謠「傾き來つて石上に春雷をなす。淵謠「知らんと欲す是銀河の水なる事を。シテ謠「人間に墮落して、陸謠「合して、シテ謠「却つて、淵謠「廻る、地謠「三國無雙のこの瀧を、今まで拜せぬ心こそ愚なりけれ。もとより琴詩酒の友なれば、心静に昔をいざや語らん。

クセ地謠「そも〳〵この淵明と申すは、彭澤の令となる、官にある事八十餘日、印を解いて去るとかや。日夜に酒を愛し、松菊を翫ぶ。菊を東籬の下に採つて、南山を見る事も、君に忠あるゆゑとかや。シテ謠「又陸脩靜は、地謠「宋の明帝の御時に、仙の法を學んで、陸道士と申すとか。後には當山の簡寂觀に、隱居してましませり。この人々は天下にも、竝ぶ方もなき事なれば、廬山の虎溪にも劣らぬ、光なりけり。シテ謠「菊の白露積りつもつて、不老不死の藥の泉、よも盡きじ。地謠「いく萬代もかぎらじな。（舞）さす盃の廻る夜も、さす盃の廻る夜も、明くれば暮るゝも白菊の、花を肴に立ち舞ふ袂、酒

りて此く云ひ却てそれを辯解せし故事あり

雲無ㇾ心而出ㇾ岫鳥倦ㇾ飛而知ㇾ還—淵明の歸去來辭の文句

三千世界眼前盡十二因緣心裏空—都良香の句に辯才天の唱和せる句

萬仭得ㇾ名云ㇾ瀑布ㇾ遠看如ㇾ織掛ㇾ

の白妙に、あけぼのの山の姿、たとへん方ぞなかりける。

二人一聲謠「雲無心にして以て岫を出で、鳥飛ぶが如くに倦んで、還る事をや知らすらん。

上歌　頃もはや、霜降月の曙に、霜降月の曙に、野山の草の色もはや、散るもみぢ葉に移ろひて、枯野になれど白菊の、花はさながら紅の、八入に見ゆるけしきかな。八入に見ゆるけしきかな。

淵詞「如何にこの草庵に惠遠禪師の渡り候か。陶淵明陸修靜これまで參りて候。シテ詞「その時禪師は白蓮社を出で、書を以て淵明を招きければ、二人謠「二人は共に拜をなし、

上歌地謠「廬山のさかしき石橋を、心しづかに渡りつゝ、巖に腰をかけ、瀑布を眺め給へり。三千世界は眼に盡き、十二因緣は心の内に際もなし。淵詞「如何に惠遠禪師に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。淵詞「さて廬山に至らざらん者はこれ僧にあらずと申し候よなう。シテ詞「實に左樣に申し候。淵詞「さて〳〵瀑布と云ふ事は、如何なる謂のあるやらん。シテ詞「いや〳〵異なる事はなし。萬仭名を得て瀑布といふ。陸謠「日香爐を照して紫煙

別四

三笑

梗概

惠遠、盧山に籠り居り、道友と共に白蓮社を結ぶ。陶淵明陸修靜の二人山居を訪ひ、禁足の惠遠を誘うて出盧せしめ、虎溪を過ぎて三人共に笑ふ。虎溪三笑は蓋し好畫題なり。

（脇能）

シテ　惠遠禪師　ツレ　陶淵明　ツレ　陸修靜

シテ、サシ謠「晉の惠遠盧山の下に居して、三十餘年隱山を出でず、白蓮社を結び竝びに十八の賢あり。その外數百人世を捨て榮を忘れて、共に西方を誦し六字を禮してこの草庵に遊止す。下歌地謠「かくて流を枕とし、岩に口を漱ぎて、上歌行住坐臥の行に、行住坐臥の行に、座禪の床を洩る月も、西に傾くをりふしは、洞煙谷雲の内よりも、瀑布の瀧

流水を枕とし云云―孫楚王濟に對して枕石漱流といふべきを誤

地謠「山風あらく吹き落ちて、山風あらく吹き落ちて、空かき曇り、岩屋も俄にゆるぐと見えしが、磐石四方に破れ碎けて諸龍の姿は現れたり。

シテ謠「その時仙人驚きさわぎ、地謠「其時仙人驚きさわぎ、利劍をおつ取り立ち向へば、龍王は黄金の甲冑を帶し、玉具の劒の刃先を揃へ、一時が程は戰ひけるが、仙人神通の力も竭きて、次第に弱り倒れ臥せば、龍王悅び雲を穿ち、雷鳴稻妻天地に滿ちて、大雨を降らし洪水を出だして、立つ白浪に飛び移り、立つ白波に飛び移つて、又龍宮にぞ歸りける。

山人の云々ー古歌也末句千代は經ぬべし

無明の酒ー心を迷はす酒

志を知らざらんは、謠鬼畜には猶劣るべしと、地謠「夕の月の盃を、夕の月の盃を、受くるその身も山人の、折る袖匂ふ菊の露、うち拂ふにも千代は經ぬべき、契は今日ぞ始めなる。夫人謠「面白や盃の、地謠「面白や盃の、めぐる光も照り添ふや、紅葉重ねの袂を、共に翻しひるがへす、舞樂の曲ぞおもしろき。（樂）糸竹の調とり〴〵に、糸竹の調とり〴〵に、さす盃も度々めぐれば、夫人の情に心をうつし、仙人は次第に足弱車の、めぐるもたゞよふ、舞の袂をかたしき臥せば、夫人は悅び官人を引き連れ、遙遙なりし山路を凌ぎ、帝都に歸らせ給ひけり。かゝりければ岩屋の內しきりに鳴動して、天地も響くばかりなり。

シテ謠「あら不思議や思はずも、人の情の盃に、醉ひ伏したりしその隙の、龍神を封じこめ置きし、岩屋の俄に鳴動するは、何の故にて有るやらん。龍神二人謠「如何にやいかに一角仙人、人間に交り心を迷はし、無明の酒に醉ひ伏して、通力を失ふ天罰の、報いの程を思ひ知れ。

もやう〳〵暮れかゝり前後を忘じて候。一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「さればこそ人間の交りあるべき所ならず。とく〳〵歸り給へとよ。ワキ詞「そも人間の交りなきとは、さては天仙の住家やらん。先々姿を見せ給へ。シテ詞「この上は恥かしながら我が姿、謠旅人にまみえ申さんと、地謠「柴の扉を推し開き、柴の扉を推し開き、立ち出づるその姿、緑の髪も生ひ上る、牡鹿の角の束の間も、仙人を今見る事ぞ不思議なる。

ワキ詞「只今思ひ出だして候。これは承り及びたる一角仙人にて御座候か。シテ詞「さん候是こそ一角と申す仙人にて候。さて〳〵面々を見申せば、世の常の旅人に非ず。さも美しき宮女の姿、桂の黛羅綾の衣、更に只人とは見え給はず候。是は如何なる人にてましますぞ。ワキ詞「さきに申す如く。踏み迷ひたる旅人にて候。旅の疲の慰みに、酒を持ちて候一つ聞召され候へ。シテ詞「いや仙境には松の葉をすき、苔を身に著て桂の露を甜め、年經れども不老不死のこの身なり。酒を用ふる事有るまじ。ワキ詞「尤も仰はさる御事なれども、只志を受け給へと、謠夫人は酌に立ち給ひ、仙人に酒を進むれば、シテ詞「實に

山遠雲埋行客跡、松寒風破旅人夢。—朗詠集の句

曲終人不見、江上數峯靑し—唐錢起の詩

より、夫人を具し奉り、只今彼の山路に分け入り候。ワキ立衆一聲謠「山遠うしては雲行客の跡をうづみ、松寒うしては風旅人の、夢をも破る假寢かや。上歌露時雨、漏る山陰の下紅葉、漏る山陰の下紅葉、色添ふ秋の風までも、身にしみまさる旅衣、霧間を凌ぎ雲を分け、たづきも知らぬ山中に、おぼつかなくも踏み迷ふ、道の行方は如何ならん。道の行方は如何ならん。

ワキ詞「日を重ねて急ぎ候程に、何處とも知らぬ山路に分け入りて候ぞや。こゝに怪しき巖の陰より、吹き來る風のかうばしく、松桂の枝を引き結びたる庵あり。若し彼の仙境にてもや候らん。暫くこのあたりに徘徊し、事の由を窺はばやと思ひ候。シテ、サシ謠「瓶には谷漣一滴の水を納め、鼎には靑山數片の雲を煎ず。曲終へて人見えず、江上數峯靑かりし、梢も今は紅の、秋の氣色は面白や。

ワキ詞「如何にこの庵の内へ申すべき事の候。シテ詞「不思議やこゝは高山重疊として、人倫通はぬ所なり。そも御身は如何なる者ぞ。ワキ詞「是は只山路に踏み迷ひたる旅人なるが、日

一角仙人

植　梗

一角仙人、美人のために惑はされ、神通力を失ひ、岩屋に封じこめたる龍神を取逃し、そのため炎旱の天に大雨降りたりとの印度の古話を脚色す。（五番目）

シテ　一角仙人　ツレ　旋陀夫人
ツレ　龍神　ワキ　宮人

ワキ詞「是は天竺波羅奈國の帝王に仕へ奉る臣下なり。扨もこの國の傍に一人の仙人あり。鹿の胎内に宿り出生せし故により、額に角一つ生ひ出でたり。是に依つてその名を一角仙人と名づく。さる子細有つて龍神と威を爭ひ、仙人神通を以て諸龍を悉く岩屋の内に封じこむる間、數月雨下らず候。帝この事を歎き給ひ、色々の御方便をめぐらし給ひ候。こゝに旋陀夫人とてならびなき美人の御座候を、踏み迷ひたる旅人の如くにして、仙境に分け入り給はゞ、夫人に心を移し、神通を失ふ事も有るべきとの御方便に

ばかりや殘るらん。蟲の音ばかりや殘るらん。

緣と聞くものを、一河の流汲みて知る、其心淺からめや。奥山の、深谷の下の菊の水、汲めども汲めどもよも盡きじ。流水の盃は、手まづ遮れる心なり。されば廬山のいにしへ、虎溪を去らぬ室の戸の、其戒を破りしも、志を淺からぬ、思の露の玉水の、けいせきを出でし道とかや。シテ謠「それは賢き古の、地謠「世もたけ心さえて、道ある友人の數數、積善の餘慶家々に、普く廣き道とかや。今は濁世の人間、ことに拙なき我等にて、心もうつろふや、菊をたゝへ竹葉の、世は皆醉へり、さらば我ひとり醒めもせで、滿目皆紅葉せり、只松蟲の獨音に、友を待ちえいをなして、舞ひ奏で遊ばん。シテ謠「盃の、雪を廻らす花の袖、（早舞）ワカ おもしろや、千草にすだく蟲の音の、地謠「機織る音の、シテ謠「きりはたりちやう、地謠「きりはたりちやう。つゞりさせてふ蛬蜩、色々の色音の中に、わきて我が忍ぶ松蟲の聲、りん〳〵りん〳〵として、夜の聲冥々たり。すはや難波の鐘も明方の、あさまにもなりぬべし。さらばよ友人名殘の袖を、招く尾花のほのかに見えし跡絶えて、草茫々たるあしたの原に、草茫々たるあしたの原に、蟲の音

菊の水―枕慈童を見よ

廬山のいにしへ―次の三笑を見よ

けいせき―未詳

竹葉―酒の異名

世は醉へり―屈原の漁父辭に衆人皆醉我獨醒

つゞりさせてふ―古今六帖に「秋風に綻びぬらし藤袴つゞりさせてふ蛬なく」

後シテ一聲謠「あら有難の御弔ひやな。秋霜に枯るゝ蟲の音聞けば、閻浮の秋に歸る心。猶郊原に朽ち殘る、魄靈是まで來りたり。うれしく弔ひ給ふものかな。ワキ謠「はや夕影も深綠、草の花色露深き、其方を見れば人影の、幽に見ゆるは有りつる人か。シテ詞「なか〳〵なれやもとよりの、昔の友を猶忍ぶ、蟲の音ともに顯れて、謠「手向を受くる草衣の、ワキ謠「浦は難波の里も近き、シテ謠「阿倍の市人馴れ〳〵て、ワキ謠「弔ふ人も、シテ謠「訪はる我も、ワキ謠「いにしへ今こそ、シテ謠「かはれども、上歌地謠「故鄕に、住みしは同じ難波人、住みしは同じ難波人、蘆火燒く屋も市館も、かはらぬ契を忍草の、忘れ得ぬ友ぞかし。あらなつかしの心や。

クリ地謠「忘れて年を經しものを、又いにしへに歸る波の、なにはの事のよしあしも、實に隔てなき友とかや。シテ、サシ謠「朝に落花を踏んで相伴つて出づ、地謠「夕には飛鳥に從つて一時に歸る。シテ謠「然れば花鳥遊樂の瓊筵、地謠「風月の友にさそはれて、春の山邊や秋の野の、草葉にすだく蟲までも、聞けば心の友ならずや。クセ一樹の陰の宿も、他生の

朝踏ニ落花ヲ相伴出、暮隨ニ飛鳥ニ一時歸—白氏文集の句

秋の野に云々―古今集の歌

て松蟲の、友を忍びて松蟲の、音に誘はれて市人の、身を變へて亡き跡の、亡靈こゝに來りたり。恥かしや是までなり。立ちすがりたる市人の、人かげに隱れて、阿倍野の方に歸りけり。阿倍野の方に歸りけり。

ロンギ地謠「不思議やさてはこの世にも、なき影すこし殘しつゝ、この程の友人の、名殘を暫し留め給へ。シテ謠「折節秋の暮、松蟲も鳴く物を、我をや待つ聲ならん。地謠「そも心なき蟲の音の、我を待つ聲ぞとは、誠しからぬ言葉かな。シテ謠「蟲の音も、蟲の音も、忍ぶ友をば待てばこそ、言の葉にもかゝるらめ。地謠「實に〳〵思ひ出したり。古き歌にも秋の野に、シテ謠「人松蟲の聲すなり。地謠「われかと行きて、いざとむらはんと、思召すか人々、有難や。是ぞ誠の友を、忍ぶぞよ松蟲の音に、伴ひて歸りけり。蟲の音に連れて歸りけり。（中入）

ワキ上歌謠「松風寒きこの原の、松風寒きこの原の、草の假寢のとことはに、御法をなして夜もすがら、彼の跡とふぞ有難き。彼の跡とふぞ有難き。

まさり草―菊の異名

もとに、歸らんことを忘れ、いざや御酒を愛せん。上歌たとひ暮るるとも、たとひ暮るるとも、夜遊の友に馴衣の、袂に受けたる月影の、うつろふ花の顏ばせの、盃に向へば色も、猶まさり草、千年の秋をも限らじや。松蟲の音も盡きじ。いつまで草のいつまでも、變はらぬ友こそは、買ひ得たる市の寶なれ。買ひ得たる市の寶なれ。

ワキ詞「如何に申し候、只今の言葉の末に、松蟲の音に友を忍ぶと承り候は、如何なる謂れにて候ぞ。シテ詞「さん候それに付いて物語の候語つて聞かせ申し候べし。ワキ詞「さらば御物語り候へ。(物語)シテ詞「むかしこの阿倍野の松原を、ある人二人連れて通りしに、折節松蟲の聲おもしろく聞えしかば、一人の友人、彼の蟲の音を慕ひ行きしに、今一人の友人、やゝ久しく待てども歸らざりし程に、心もとなく思ひ尋ね行き見れば、彼の者草露に臥して空しくなる。謠「死なば一所とこそ思ひしに、こはそも何と云ひたる事ぞとて、泣き悲しめどかひぞなき。地謠「そのまゝ土中の埋木の、人知れぬとこそ思ひしに、朽ちもせで松蟲の、音に友を忍ぶ名の、世に漏れけるぞかなしき。上歌今もその、友を忍び

こや—此やに昆陽を掛く
岸野—住吉の岸
琴詩酒—白樂天の詩に琴詩酒友皆抛」我の句あり
花下忘歸」因美景」樽前勸」醉是春風—白氏文集の句

路に出づるなり。下歌遠里ながらほどちかき、こや住の江の浦傳ひ、上歌潮風も、吹くや岸野の秋の草、吹くや岸野の秋の草、松も響きて沖つ波、聞えて聲々友さそふ、この市人の數〳〵に、我も行き人も行く、阿倍野の原はおもしろや。阿倍野の原はおもしろや。ワキ謠「傳へ聞く白樂天が酒功贊を作りし琴詩酒の友、今に知られて市館に、樽をすゑ盃をならべて、寄り來る人を待ち居たり。詞如何に人々酒召され候へ。シテ謠「我が宿は菊賣る市もあらねども、詞四方の門邊に人さわぐと、よみしも古人の心なるべし。如何に人面〳〵に、醽酒を酌みてもてなし給へ。ワキ謠「又彼の人の來れるぞや。詞今日はいつより酒を湛へ、遊樂遊舞の和歌を詠じ、人の心を慰め給へ。早くな歸り給ひそとよ。シテ詞「何我を早くな歸りそとよ。ワキ詞「なか〳〵の事暮過ぐるとも、月をも見捨て給ふなよ。シテ謠「仰せまでもなし何とてか、この酒友をば見捨つべき。古き詠にも花のもとに、歸らん事を忘るゝは、シテ謠「美景によると作りたり。シテ、ワキ謠「樽の前に醉をすゝめては、これ春の風ともいへり。下歌地謠「今は秋の風、暖め酒の身を知れば、藥と菊の花の

松蟲

梗概　蟲を愛せし人の亡靈あらはれ、舊遊を物語ることを作る。（四番目）

シテ　亡者（前は客人）　ツレ　亡者　ワキ　市人

ワキ詞「是は津の國阿部野のあたりに住まひする者にて候。我この阿倍野の市に出でて酒を賣り候所に、何くとも知らず若き男の數多來り酒を飲み、歸るさには酒宴をなして歸り候。何とやらん不審に候間、今日も來りて候はゞ、如何なる者ぞと名を尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ三人次第謡「もとの秋をも松蟲の、もとの秋をも松蟲の、音にもや友をしのぶらん。シテ、サシ謡「秋の風更け行くまゝに長月の、有明寒き朝風に、シテ、ツレ三人謡「袖觸れつゞく市人の、伴ひ出づる道の邊の、草葉の露も深緑、立ち連れ行くや色々の、簑代衣日も出でて、阿倍の市

も、誘はれなまし心ありて、地謡「八重山吹も隔てぬ梅の、花に飛びかふ胡蝶の舞の、袂も匂ふ氣色かな。（舞）四季折々の花盛、四季折々の花盛、梢に心をかけまくも、かしこき宮の所から、しめの内野も程近く、野花黄鳥春風を領し、花前に蝶舞ふ紛紛たる、雪を廻らす舞の袖、返す〴〵もおもしろや、（破ノ舞）シテ謡「春夏秋の花も盡きて、地謡「春夏秋の花も盡きて、霜を帶びたる白菊の、花折り殘す枝を廻り、廻り廻るや小車の、法に引かれて佛果に至る、胡蝶も歌舞の菩薩の舞の、姿を殘すや春の夜の明け行く雲に羽根打ちかはし、明け行く雲に羽根打ちかはして、霞にまぎれて失せにけり。

荘子に出づ

瓶にさす山吹云云―源氏物語胡蝶の巻の故事

胡蝶にも―胡蝶の巻の歌下句八重山を隔てざりせば

があだに見し夢の、胡蝶の姿現なき、浮世の中ぞ哀れなる。定めなき世と云ひながら、官位も影高き、光源氏のいにしへも、胡蝶の舞人色々の、御船に飾る金銀の、瓶にさす山吹の、襲の衣を懸け給ふ。シテ謡「花園の、胡蝶をさへや下草に、地謡「秋待つ蟲は、疎く見るらんと詠めこし、昔語りを夕暮の、月もさし入る宮の内、人目稀なる木の本に、宿らせ給へ我が姿、夢に必ず見ゆべしと、夕の空に消えて、夢の如くなりにけり。夢の如くになりにけり。（中入）

ワキ上歌謡「あだし世の、夢待つ春の轉寝に、夢待つ春の轉寝に、頼むかひなき契ぞと思ひながらも法の聲、立つるや花の下臥に、衣片敷く木陰かな。衣片敷く木蔭かな。

後シテ謡「有難やこの妙典の功力に引かれ、有情非情も隔てなく、佛果に至る花の色、深き恨みを晴らしつゝ、梅花に戯れ匂ひに交はる、胡蝶の精魂あらはれたり。

ワキ謡「有明の月も照り添ふ花の上に、さも美しき胡蝶の姿の、現れ給ふは有りつる人か。

シテ詞「人とはいかで夕暮に、かはす言葉の花の色、謡隔てぬ梅に飛びかけりて、胡蝶に

梅が香に—新古今集の中の歌下句答へぬ影ぞ袖にうつれる

海士の子なれば—朗詠集に「白波の寄する渚に世をすぐす海士の子なれば宿も定めず」

花に馴れゆく—古今六帖に「百千鳥夜になれゆくあだし身ははかなき程にうらやまれつゝ」

莊子—莊周が夢に蝶となりし事

の年を經て、シテ謡「住む家櫻色かへて、これは都の花盛り、ワキ謡「心を留めて、シテ謡「色深き、上歌地謡「梅が香に、昔を問へば春の月、昔を問へば春の月、答へぬ影も我が袖に、移る匂ひも年を經る、古宮の軒端苔むして、昔戀しき我が名をば、何と明石の浦に住む、海士の子なれば宿をだに、定めなき身は恥かしや。定めなき身は恥かしや。

ワキ詞「猶々この宮の謂れ又御身の名をも委しく御物語り候へ。シテ詞「さのみ包むも中々に、人がましくや思召されんさりながら、眞は我は人間にあらず。我草木の花に心を染め、梢に遊ぶ身にしあれども、深き望のある身なり。などやらん昔より、梅花に縁なき事を歎き、謡 來る春毎に悲しみの、涙の色も紅の、梅花に縁なきこの身なり。

クリ地謡「實にや色に染み、花に馴れ行くあだし身は、はかなき物を花に飛ぶ、胡蝶の夢の戯れなり。シテ、サシ謡「されば春夏秋を經て、草木の花に戯るゝ、胡蝶とうまれて花にのみ、契を結ぶ身にしあれども、梅花に縁なき身を歎き、姿をかへて御僧に、詞をかはし奉り、シテ謡「妙なる法の蓮葉の、地謡「花の臺をたのむなり。クセ傳へ聞く唐土の、莊子

る古宮の、軒の檜皮も苔むして、謠昔忍の忘草、誠によしある所なり。詞又車寄の邊なる、柴垣の隙より見れば、御階の下に色殊なる梅花の、今を盛と見えて候。立ち寄り詠めばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵御僧は何くと思召して、この梅を眺め給ひ候ぞ。ワキ詞「不思議やな人ありとも見えぬ屋づまより、女性一人來り給ひ、我に言葉を掛け給ふぞや。さてこゝをば何くと申し候ぞ。シテ謠「さては始めたる御事にてましますかや。先々御身は何くより來り給へる人なるぞ。ワキ詞「是は和州三吉野の奧に山居の者にて候が、始めて都に上りて候。シテ詞「さればこそ見馴れ申さぬ御事なり。こゝは又昔より故ある古宮にて、大内も程近く、所からなるこの梅を、謠「雲の上人春毎に、詩歌管絃の御遊を催し、眺め絶えせぬ花の色、心留めて御覽ぜよ。ワキ謠「あら面白や所から、よしある花の名所を、今見る事の嬉しさよ。詞さて〳〵御身は如何なる人ぞ。謠御名を名のり給ふべし。シテ詞「名所の人にてましませば、其方の名こそ聞かまほしけれ。ワキ謠「名所には住めども心なき、身は山賤

花遲げなる―西行の歌に「吉野山櫻が枝に雪ちりて花遲げなる年にもある哉」

象の山―吉野の内

胡蝶

梗概―胡蝶の精、現れて、旅僧に對して、梅花に縁なき意を歎き、つひに佛果の縁を受くることを作る。（三番目）

シテ　胡蝶の精（前は里女）　ワキ　旅僧、

ワキ次第謠「春立つ空の旅衣、春立つ空の旅衣、日も長閑なる山路かな。詞是は和州三吉野の奥に山居の僧にて候。われ名所には住み候へども、未だ花の都を見ず候程に、この春思ひ立ち都に上り、洛陽の名所舊跡をも一見せばやと思ひ候。道行謠三吉野の、高嶺の深雪まださえて、高嶺の深雪まださえて、花遲げなる春風の、吹きくる象の山越えて、霞む其方や三笠山、茂き梢も楢の葉の、廣き御影の道直に、花の都に著きにけり。花の都に著きにけり。詞急ぎ候間、程なう都に著きて候。この所を人に尋ねて候へば、一條大宮とやらん申し候、心静に一見せばやと思ひ候。また是なる所を見れば、由ありげな

ひるがへし、袂も青き海の波、颯々の鈴も驛路の、夜は山よりや明けぬらん。夜は山よりや明けぬらん。

青海波―紅葉賀巻に源氏頭中將と此樂を舞ひしことあり

山賤へきら―へきら未詳

ゆるしの色―禁色とて勅許なくては用ひられざる袍の色

心をすます磯枕、波にたぐへて音樂の、聞ゆる聲ぞ有難き。聞ゆる聲ぞ有難き。

後シテ謠「あら面白の海原やな。われ娑婆に在りし時は、光源氏といはれ、今は都卒にかへり、天上の住まひなれども、月に詠じて閻浮にくだり、所も須磨の浦なれば、青海波の遊び舞樂に、引かれて月の夜汐の波、かへすなる、波の花散る白衣の袖、地謠「玉の笛の音聲澄み渡る、シテ謠「笙笛琴箜篌孤雲の響、地謠「天もうつるや須磨の浦の、荒海の波風灔々たり。（舞）

ロンギ地謠「雲となり雨となり、夢現とも分かざるに、天より光さす、御影の中にあらたなる、童男來り給ふぞや、さては名にしおふ、光源氏の尊靈か。シテ謠「その名もよそに白浪の、こゝもとは我が住家、猶も他生を助けんと、兜卒天より、二度こゝに天くだる、地謠「あら有難の御事や、所は須磨の浦なれば、シテ謠「四方の嵐も吹き落ちて、地謠「薄雲かゝる。シテ謠「春の空、地謠「梵釋四王の人天に、くだり給ふかと覺えたり。所から山賤へきらといはれし、ゆるし色の綺羅なるに、青鈍の狩衣たをやかにめされて、須磨の嵐に

天下に奇特の告―都にて天變神異あり

白波のこゝもと―須磨卷に波たゞこゝもとに立來る心地しての詞あり

雲隱―卷の名ありて文なし源氏の毙去を云へるなり

磨の浦、海士人の歎きを身に積みて、つぎの春、播磨の明石の浦づたひ、問はず語りの夢をさへ、現に語る人もなし。さる程に、天下に奇特の告有りしかば、又都に召しかへされ、數の外の官を經て、シテ謠「その後うちつゞき、地謠「澪標に内大臣、少女の卷に太政大臣、藤の裏葉に太上天皇、かく樂みを極めて、光る君とは申すなり。

ロンギ地謠「さてや源氏の舊跡の、さてや源氏の舊跡の、分きて何くの程やらん。委しく敎へ給へや。シテ謠「何くとも、いさ白波のこゝもとは、皆そのあとと夕暮の、月の夜を待ち給ふべし。もしや奇特を御覽ぜん。地謠「そもや奇特を見んぞとは、何をか待たん月影の、シテ謠「光源氏の御住家、地謠「昔は須磨、シテ謠「今は都卒の、地謠「天に住み給へば、月宮の影に天くだり、この海に影向有るべし。かやうに申す翁も、その品々の物語、源氏の卷の名なれや、雲隱れしてぞ失せにける。雲隱れして失せけり。(中入)

ワキ詞「さては源氏の大將假に人間と現じ、我に言葉をかはし給ふか。謠いざや今宵はこゝに居て、猶も奇特を拜まんと、上歌須磨の浦、野山の月に旅寢して、野山の月に旅寢して、

関—須磨の關をさす

いとゞしく云々—末句淺茅生に露おきそふる雲の上人、桐壺更衣の母君の歌を引く

高麗國の相人—源氏の運勢を占ふこと桐壺卷にあり

おぼろけならぬ契—朧月夜の内侍との情交

げに須磨の山櫻、名におふ若木の花ぞとて、はる〴〵こゝに分け入りて、シテ謠「わざと眺めの御志、ワキ謠「日もはや暮れて須磨の浦の、シテ謠「さらば里にもお泊りなくて、ワキ謠「野を分け山に、シテ謠「來り給ふは、地謠「關よりも、花にとまるか須磨の浦、花にとまるか須磨の浦、近き後の山里の、柴と云ふ物まで、名をとり〴〵のわざなるに、只心なき住まひとて、人な賤しめ給ひそよ。人な賤しめ給ひそよ。

ワキ詞「いかに翁、古この所は光源氏の御舊跡、ことに御事は年ふりたる者なれば、源氏の御事物語り候へ。クリ地謠「忘れて過ぎし古を、語らば袂やしをれなん。我空蟬の空しき世を案ずるに、桐壺の夕の煙、絶えぬおもひの涙をそへ、シテ、サシ謠「いとゞしく蟲の音しげき淺茅生の、地謠「露けき宿に明け暮らし、小萩が本のさびしさまで、はごくみ給ひし御惠、上歌いとも畏き勅により、十二にて初冠、高麗國の相人の、附けたりしはじめより、光源氏と名を呼ばる。帚木の巻に中將、紅葉の賀の巻に、正三位に敍せられ、花の宴の春の夜の、行方も知らで入る月の、おぼろけならぬ契故、年廿五と申せしに、津の國須

こりずま―懲りもせずに須磨を掛く
こり果てぬ―懲りに樵りを掛く
雨夜の物語―源語帚木の巻にあり

候。
シテ一聲謡「浮世の業にこりずまの、猶こり果てぬ鹽木かな。松ならで又煙と見ゆる、是や眞柴の影ならん。サシ謡「これは須磨の浦に旦暮に釣を垂れ、焼かぬ間は鹽木を運び、浮世を渡る者にて候なり。詞又この須磨の山陰に一木の花の候。謡名におふ若木の櫻なるべし。古へ光源氏の御舊跡も、この所にて有りげに候。下歌我等いやしき身なれども、有りし雨夜の物語、上歌聞くにも袖をうるほして、聞くにも袖をうるほして、山の薪の重きにも、思ひ樒を折りそへて、かの古墳ぞとゆふ花の、手向の梢折々に、心を運ぶばかりなり、心を運ぶばかりなり。詞暫く柴を下し花をも眺めばやと思ひ候。
ワキ詞「いかに是なる翁に尋ぬべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「その身は賤しき山賤なれども、この花に眺め入り家路を忘れたる氣色なり。若しこの花は故ある木にて候か。
シテ詞「賤しき山賤と承り候へども、恐れながらそなたをこそ鄙人とは見奉りて候へ。さすがに須磨の若木の櫻を、名木かとのお尋ねは、事新らしうこそ候へとよ。ワキ謡「げに

若木の櫻—須磨寺の門前にあり

須磨源氏

梗概—日向宮崎の社官藤原興範、伊勢參宮の途上、須磨にて光源氏の幽靈に會し、源氏物語の故事を聽く筋なり。（四番目）

シテ　光源氏（前は樵夫）　ワキ　藤原興範

ワキ三人次第謠「八重の汐路の旅の空、八重の汐路の旅の空、九重何くなるらん。ワキ詞「抑是は日向國宮崎の社官、藤原の興範とは我がことなり。さてもわれ鄙のすまひなるに依つて、未だ伊勢大神宮へ參らず候程に、この度思ひ立ち伊勢參宮と志して候。ワキ三人道行謠「旅衣、思ひ立ちぬる朝霞、思ひ立ちぬる朝霞、彌生の空も半にて、日影のどかに行く舟の、浦過ぎてはる〳〵と、波の淡路をよそに見て須磨の浦にも著きにけり。須磨の浦にも著きにけり。ワキ詞「やう〳〵急ぎ候程に、津の國須磨の浦に著きて候。この所は聞き及びたる源氏の大將住み給ひし在所にて候。又承り及びたる若木の櫻をも一見せばやと思ひ

歌の道こそめでたけれ。

月の桂の男山―月の桂男とは月の異名なりそを男山と言掛く

かたへ涼しき―古今集に「夏と秋と行交ふ空の通路はかたへ涼しき風や吹くらん」

秋來ぬと―同集に「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

日待ち得たる放生の、神の御幸を早むれば、シテ謡「御前飛び去る鳩の嶺、地謡「山下に連なる神拜の社人、シテ謡「小忌の衣の袖を連ね、地謡「千早振なり天少女、シテ謡「久方の、月の桂の男山、地謡「さやけき影は所から。ロンギさては神代も和歌を上げ、さては神代も和歌を上げ、舞をまひけるめでたさよ。シテ謡「なか〳〵小忌の御衣をめし、おの〳〵舞をまひ給ふ。地謡「さらば四季の和歌を上げ、その品替へて舞ひ給へ。シテ謡「春は霞の和歌を上げて、喜春樂を舞はうよ。地謡「さて又夏にかゝりては、如何なる舞をまひ給ふ。シテ謡「かたへ涼しき川水に、浮て見ゆる盃の、傾盃樂を舞はうよ。地謡「始めて長き夜も更くる、風の音に驚くは、誰踏む舞の拍子ぞ。シテ謡「秋來ぬと、目にはさやかに見えずとも、秋風樂を舞はうよ。地謡「日數も積る雪の夜は、シテ謡「廻雪の袖を翻し、地謡「さてももしきの舞には、シテ謡「大宮人のかざすなる、地謡「櫻、シテ謡「橘、地謡「もろともに、花の冠を傾けて、暘谷よりも立廻り、北庭樂を舞ふとかや。さのみは何と語るべき、言葉の花も時を得て、その風猶も盛にて、鬼も神も受納する、和歌の道こそめでたけれ、和

三つの衣—三衣は袈裟のこと

鳩の杖—老人の杖、杖頭に鳩を象どる、鳩は八幡の神使なればこゝに用ひたり

直なる道をあらはし、國富み民の竈まで、賑ふ鄙の貢舟、四海の波も靜かなり。シテ謡「利益諸衆生の御誓、地謡「二世安樂の神徳は、猶榮ゆくや、男山にし松立てる、梢も草も吹く風は、皆實相の響にて、峯の山神樂その外里神樂、懺悔の心夢覺め、夜聲もいとゞ神さびて、月かげろふの石清水の、淺からぬ誓かな。實に淺からぬ誓かな。

ロンギ地謡「不思議なりとよ老人よ、不思議なりとよ老人よ。かほど委しく木綿四手の、神の告かや有難や。シテ謡「代々に仕へし古へも、二百餘歳の春秋を、地謡「送り迎へて神徳を請けし身の齢武内の神は我なりと、名のりもあへず男山、鳩の杖にすがりて、山上さして上りけり。山上さして上りけり。（中入）

ワキ上歌謡「猶照せ、代々に變らぬ男山、代々に變らぬ男山、仰ぐ嶺より月影の、さやかに出でて隈も無く光と共に夜神樂の聲澄み上るけしきかな。聲澄み上るけしきかな。

後シテ謡「有難や百王守護の日の光、ゆたかに照らす天が下、幾萬代の秋ならん。和光の影も年を經て、神と君とに仕への臣、武内と申す老人なり。地謡「末社は各出現して、今

潭荷葉動是魚遊—朗詠集の句

八正道—正見正思惟正語正業正命正精進正念正定

行教和尚—武内大臣の裔といふ宇佐八幡宮に詣で神託を受けて之を王城に勸請す

に、上歌地謠「取り入るゝ、このうろくづを放さんと、このうろくづを放さんと、裳裾も同じ袖ひぢて、結ぶやみづから水桶を、水底に沈むれば、魚は悦び鰭ふるや、水を穿ちて岸陰の、潭荷葉動く、これ魚の遊ぶ有樣の、實にもいけるを放つなる、御誓あらたなりけり。

ワキ詞「猶々當社の御事懇に御物語り候へ。クリ地謠「抑當社と申すは、欽明天皇の昔より、一百餘歳の世々を經て、この山に移りおはします。シテ、サシ謠「然るに宗廟の神として、地謠「御代を守り國家を助け、文武二つの道廣く、九重つゞく八幡山、神にも御名は八つの文字、シテ謠「夫れ諸佛出世の本來空、地謠「眞性不生の道をしめし、八正道を顯はし、人佛不二の御心にて、正直の頭に宿りたまふ。クセ人の國より我が國、他の人よりも我が人と、誓はせ給ふ御恵み、實に有難や、我等如きのあさましき、迷を照らし給はんの、その御誓願まのあたり、行教和尚の、御法の袖に影うつる、花の都を守らんと、南の山に澄む月の、光も三つの、衣手に映り給へり。さればにや宗廟の、跡明らかに君が代の、

異國退治―此事養老四年異國襲來の時の事とて公事根源に見ゆ

日は八幡の御神事とて、皆々清淨の儀式の姿なるに、翁に限り生きたる魚を持ち、誠に殺生の業不審にこそ候へ。シテ詞「實に〳〵御不審は御理、さて〳〵今日の御神事をば、何とか知ろし召されて候ぞ。ワキ謠「さん候是は遠國より始めて參詣申して候程に、委しき事をば知らず候。いでこの御神事をば放生會とかや申すよなう。シテ謠「さればこそ放生會とは、生けるを放つ祭ぞかし。御覽候へこの魚は、生きたる魚をそのまゝにて、ツレ謠「放生川に放さんためなり。知らぬ事をな宣ひそ。シテ謠「その上古人の文を聞くに、シテ、ツレ謠「方便の殺生だに、菩薩の萬行には越ゆると云ふ。ましてやこれは生けるを放せば、魚は逃れ我は又かへつて、誓の網に漏れぬ、神の惠を仰ぐなり。ワキ謠「實に有難き御事かな。さてさて生けるを放なる、その御謂れは何事ぞ。ツレ謠「異國退治の御時に、多くの敵を亡し給ひし、幾生の善根のその爲に、放生の御願を起し給ふ。ワキ謠「謂れを聞けば有難や。さてさて生けるを放つなる、川はいづれの程やらん。シテ詞「御覽候へこの小川の、水の濁も神德の、ワキ謠「誓は淸き石淸水の、シテ謠「末は一つぞ此川の、ワキ謠「岸に臨みて、シテ謠「水桶

生けるを放つ—即ち放生のことその祭を放生會その川を放生川といふ

照る槻弓—照る月、月より槻弓、弓の矢より八幡とかけて續く

里も遠からぬ、鳥羽の細道打過ぎて、淀の繼橋かけまくも、忝しや神祭る、八幡の里に著きにけり。八幡の里に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、これは早八幡の里に著きて候。心靜に社參申さうずるにて候。

シテ、ツレ一聲謠「うろくづの、生けるを放つ川波に、月も動くや秋の水、ツレ謠「夕山松の風までも、シテ、ツレ謠「神の惠の聲やらん。シテ、サシ謠「それ國を治め人を教へ、善を賞し惡を去ること、すぐなる御代のためしなり。シテ、サシ謠「かるが故に知れるはいよ〳〵萬德を得、無知は又惠に適ひ、おのづから積善の餘慶殊に滿ち、善惡の影響の如し、かゝる御影の道弘き、誓の海のうろくづの、生きとし生ける物として、豐なる世に住まふこと、偏に當社の御利生なり。下歌つかへて年も千早振、神のまに〳〵詣で來て、上歌この御代に、照る槻弓の八幡山、照る槻弓の八幡山、宮路の跡は久方の、雨塊を濕して、枝を鳴さぬ松の風、千代の聲のみいやましに、戴きまつる社かな。戴きまつる社かな。

ワキ詞「如何に是なる翁に尋ぬべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「今

別三

放生川

梗概

鹿島の神職、男山八幡宮の放生會に參詣し、老人に會ひてそのいはれを聽き、のち武内の神の示現に逢ふよしをつくる。（脇能）

シテ　武内の神（前は老人）　ツレ　男

ワキ　鹿島神職

ワキ三人　次第謠「御影を仰ぐこの君の、御影を仰ぐこの君の、四方こそ靜かなりけれ。　ワキ詞「抑是は鹿島の神職筑波の何某とは我が事なり。さてもこの度都に上り、洛陽の寺社殘りなく拜み廻りて候。又今日は南祭の由承り候間、八幡に參詣申さばやと存じ候。

ワキ三人　道行謠「雲無き、都の山の朝ぼらけ、都の山の朝ぼらけ、氣色もさぞな小幡山、伏見の

南祭―加茂の祭を北祭といふに對して男山八幡の祭を云ふ

見我身者發菩提心、見我身者發菩提心、聞我名者斷惡修善、聽我說者得大智惠、智我心者卽身成佛、卽身成佛と祈り伏せ、行者は遙かに立ち退けば、ワキ謠「不思議や今までは、地謠「不思議や今までは、大勢力の鬼神と見えしが、立ちどころに弱り伏して、唯茫然と起き上りて、たゞよひ行くと見えつるが、有りつる姿は雲煙、有りつる姿は雲煙と立消えて鬼神の姿は失せにけり。

三所―本宮新宮那智

んと、谷の戸深く入りにけり。谷の戸深く入りにけり。（中入）

ワキ謠「あら恐しの氣色やな。小夜も半に更方の、ツレ謠「月影闇き山中に、ワキ謠「行くべき方もあらざれば、ツレ謠「あらたなりける夢の告と、ワキ謠「頼みを掛けて、ツレ謠「讀誦する。

ワキ、ツレ謠「南無や開山役の優婆塞、殊には三熊野三所權現、力を添へてたび給へ。地謠「不思議や峨々たる石根に、不思議や峨々たる石根に、黑雲一村起ると見えしが、谷峰一同に響き震動し、磐石を碎き木を折る嵐に、先立ち飛雲の光の中に、現れ出づる鬼神の姿、面をむくべき樣ぞなき。

ワキ謠「東方に降三世明王、ツレ謠「南方に軍荼利夜叉明王、ワキ謠「西方に大威德明王、ツレ謠「北方に金剛夜叉明王、ワキ謠「中央に大日大聖不動明王、ワキ、ツレ謠「唵呼嚕呼嚕旋荼利摩登枳、唵阿毘羅吽欠蘇婆呵。地謠「鬼神の通力忽ちに、鬼神の通力忽ちに、明王の繫縛にかかると見えしが、飛行をなして上らんとすれども、大地に倒れ伏し起きつまろびつ、おのれと身を責め苦しむ氣色に、行者の威力いよ〳〵増さり、珠數さら〳〵と押しもんで、

爪木の道—樵道

彼の黑主が—古今集の序の文による草紙洗小町を見よ

神代も聞かず—古今集の歌人口に膾炙す

白露も—貫之の歌下句下葉殘らず色づきにけり

シテ一聲謠「馴れつゝも、爪木の道の苦しきや、重なる老の坂ならん。詞餘りに苦しう候程に、薪を下し休まばやと思ひ候。ワキ詞「不思議やな是なる山賤を見れば、所こそ多きに、分きて紅葉の陰に休む氣色、心有り顔にて優しうこそ候へ。シテ詞「本より賤しき賤の男の、何の心の候べき。謠「彼の黑主が歌の心は、薪を負へる山人の、花の木陰に休むけしきを、殘し置きたる筆の跡、我等が休むも紅葉の木陰、いたづら事にて候なり。ワキ詞「實に心ある答かな。先々紅葉の名所々々、彼方此方に多けれども、彼の業平の心には、神代も聞かずと言ひ置きし、シテ詞「名にも龍田の紅葉の色、ワキ謠「初瀨の山は檜原が木の間に、色洩れ出づる村紅葉、シテ謠「又は八鹽の岡のもみぢ葉、ワキ謠「その外高雄、シテ謠「嵐山、上歌地謠「色色を、四方に染めなす秋の日の、四方に染めなす秋の日の、朝には雪としぐれ、夕には雨とそゝぎ、このもかのもの草木の、はや下染も時過ぎて、百入千入に薄き濃き、梢の秋は面白や。シテ謠「白露も、地謠「白露も、時雨もいたくもる山は、下葉殘らぬもみぢ葉を、片敷く今宵山伏の、一夜を明かし給はゞ、我も歸りて夜もすがら、夜遊を慰め申さ

遙々來ぬる―業平の唐衣著つつなれにし妻しあればの歌を引く

飛雲

梗概

熊野より出でて羽黒山に向ふ、山伏達、木曾路にかゝりて天狗に逢ひしかども、祈り伏せたる靈驗の程を示したる作なり。(五番目)

シテ　天狗(前は樵夫)　ワキ　山伏
ワキツレ　山伏

ワキ三人次第謠「遙けき國を三熊野の、遙けき國を三熊野の、苔路や旅の始めなる。ワキ詞「是は本山三熊野の山伏にて候。我いまだ羽黒山に參らず候程に、只今羽州に下向仕り候。ワキ三人道行謠「行く末も、遠山伏の摺衣、遠山伏の摺衣、遙々來ぬる旅をしぞ、思ひの末も幾日數、幾夜重なる麻衣、木曾の掛橋谷深み、かけ路の末も暮れかゝる、雲の八重山いかばかり。雲の八重山いかばかり。ワキ詞「急ぎ候程に、是ははや木曾路に著きて候。暫くこの所に休まうずるにて候。

まれ人－賓客

シテ謠「いで〳〵舞樂を奏しつゝ、このまれ人を慰めんと、地謠「西に向ひてうち招けば、西に向ひてうち招けば、崑崙山に住居なす、王母にかしづく仙女の數々、樂器を手に〳〵携へて、雲に乘じて忽ち來り、聞きも慣れざる仙樂を、奏せば慈童は立ち出でて、舞をかなづる姿も、たをやかに面白や。（樂）地謠「もとより藥の水なれば、もとより藥の水なれば、その身も變らず八百歳を旣に經たりや猶ことぶきは、限あらじな、限あらじな。この御藥を奉らんと、玉の甕を取り出でて、藥の水をみづから汲み入れ、勅使に之を捧げつゝ、所は酈縣の山路の菊の水、汲めやむすべや、飮むともつきじ、くめやむすべや飮むともつきせぬ、齡を延ぶるめでたさよ。

妙文―一切功德慈眼視衆生、福壽海無量是故應頂禮といふ二句の偈

きて候。この谷川は藥の水にて候べし。岸に添ひて水上を尋ねばやと存じ候。
シテ、サシ謠「山迤邐として霜侵せる紅樹、水縈回として露潤す黃菊。あら面白の折からやな。
ワキ謠「不思議やな是なる庵の内を見れば、いと美しき童子あり、詞 そも御身は如何なる人ぞ。シテ詞「われは周の代に慈童と云いし者なり。さて又御身は何のためこの深山には分け入り給ふぞ。ワキ詞「是は漢の皇帝の臣下なるが、藥の水の水上を尋ねよとの宣旨を被り來りたり。まづ〳〵彼の周の代は、八百年の昔なるに、しかも妙なる童子の姿こはそもいかなる事やらん、シテ謠「われいにしへにあやまつて、御枕を越えしによりこゝに移さる。しかれども我が君猶淺からぬ御惠、御枕に妙文をしるしましてたまはりぬ。さればわれこの水をもつて、菊の葉に彼の妙文を寫し、謠 流れにうかむれば則ち藥の水となつて、壽命を延ぶるのみならず、神通を得て樂の身に暮せるなり。詞 まづまづこれなる御枕、拜みたまへや人々よ。ワキ謠「これは不思議のことなりと、おの〳〵立寄り御枕の妙文を拜し奉る。

草悪―病

枕慈童

梗概

周の穆王の寵せし慈童といふ者、王の枕を越えし科により て遠流に逢ひ、酈縣に移さる。慈童王より給ひし妙文を菊の葉に寫して流す、その水靈藥となりて延齢の效ありといふ。此曲は魏文帝の臣下、その水上を尋ねて慈童に會ふよしを作る。（四番目）

シテ　慈童　ワキ　魏文帝臣下

ワキ次第謠「山より山の奥までも、山より山の奥までも、道ある時代なりけり。詞そもそもこれは漢の皇帝に仕へ奉る臣下なり。さてもこの程南陽の酈縣の山より藥の水流れ出づ。その水上を見て參れとの宣旨を蒙り、只今山路に赴き候。道行詞心なき山がつまでもたふとみて、山賤までもたふとみて、迎へ靡くや草悪さへもなくして速かに分けつゝ行けば程もなく、尋ぬる山に著きにけり。尋ぬる山に著きにけり。詞是は早酈縣山に著

優曇華―佛出世の時咲くといふめでたき花

三つの絆―三つは欲界色界無色界の三界

顯眞實の方便、成佛のまこと現れて、妙法蓮華經ぞかし。正直捨方便、無上の道に至るべし。實に有難やこの經に、逢ふこと難き優曇華の花待ち得たり、嬉しの今の機縁や。シテ謠「面白や妙なる法の花の袖、地謠「夕日や連れて廻るらん。(序ノ舞) シテ謠「報謝の舞の袖の上に、地謠「紫雲たなびき光さし、千草にすだく蟲の音までも、妙法蓮華の稱へかな。實にありがたき法の道、實に有難き法の道、末暗からぬ燈火の、永き闇路を照しつゝ、三つの絆も悉く、得脱成佛の御法なり。實に有難や頼もしや。シテ謠「御法の御聲も時過ぎて、地謠「御法の御聲も時過ぎて、既にこの日も入相の、鐘響き月出でて實にも妙なる法の場、身延の山の風の音、水の聲も自ら、諸法實相と響きつゝ、草木國土皆成佛の靈地なりけり。成佛の靈地なりけり。

妙覺無爲—悟を得て罪の滅すること

先だたぬ—古今集の歌下句流るる水の歸り來ぬなり

衆罪云々—觀普賢經の文句

四七品—法華經八巻は序品より普賢菩薩勸發品まで二十八巻あり

免かれ今は早、謠妙覺無爲に至るべき、妙法蓮華經の功德、不思議なる哉妙なる哉。愈佛果を授け給へ。下歌地謠「妙なる御法の花の緣、深き迷ひも忽に、變成男子我なりと、正覺の跡を追ひ、龍女に如何で劣らん。上歌かほど妙なる御事を知らで過ぎにし古の、身を知れば先だたぬ、悔の八千度悲しきは、流るゝ喜の汗涙、身の毛もよだちて扨も我、かゝる御法に逢ふ事よと、上人の御前に、涕泣するぞ哀れなる。

クリ地謠「實にや恩愛愛執の涙は、四大海より深し、聞法隨喜のその爲には、一滴も落すことなし。シテ、サシ謠「あり難や衆罪如霜露惠日の光に、消えて卽身成佛たり。地謠「彼の調達が五逆の因に、沈みはてにし阿鼻の苦しみ、終に法義の臺に變ず。シテ謠「況んや受持し讀誦せんをや。地謠たゞ一時も結緣せば、それこそ卽ち佛心なれ。クセ 歸命妙法蓮華經一部八巻四七品、文々悉く、神力を示し述べ給ふ。濁亂の衆生なれば、この經は保ち難し。暫くも保つ者は、我卽歡喜して、諸佛も然なりと、一乘の妙文なるものを、深著虛妄法、堅受不可捨ぞ悲しき。シテ謠「始め華嚴の御法より、地謠「般若に及ぶ四十餘年、未

語密意密を大日如來の三密の觀法といふ

聞くやいかに—新古今集の「聞くやいかにうはの空なる風だにも松に音するならひありとは」を引く

草結び—草庵

四方の梢も秋更けて、野邊の千草もさま〴〵に、錦を彩る白露の、おのが姿をそのまゝに、紅葉に置けば紅なり。下歌我もこの身をこのまゝに、成佛の法ぞたのもしき。上歌幼き身の母に逢ひ、幼き身の母に逢ひ、飢ゑたる者の食を求め、裸なる者の、衣を得たる如くなり。如渡得船の海の面、さゝでその儘至るべき、棹を投ぐる間も急げ人、御法に後るなよ、御法に後れ給ふな。

ワキ詞「我心願の窓に向ひ、御經讀誦の折每に、御身一時も怠る事なし。眞に志の人と見えたり。そも何くより來れる人ぞ。シテ詞「是はこの山遙かの麓に、草結びする女なるが、かく上人のこの所に、至り給ふは、上行菩薩の、謡御再誕ぞと忝くて、かゝる妙なる御法には、逢ふ事難き女人の身の、今待ち得たる法の場に、いかでか怠りさむらふべき。ワキ詞「實に〳〵是は理なり。されども遙かの麓より、時を違へぬ御參詣、猶しも思へば不審なり。御身はこの世になき人な。謡委しく語り給ふべし。シテ詞「早くも心得給ひたり。是はこの世に亡き者なるが、さも有難き上人の、御法に値遇の度重なりて、苦患を

しゆとう—宗燈か

一念三千—一心の内に十法界を具し一法界に十法界を具すを以て百法界なるそれに三十種の世界を具すれば三千界を具備ふる事となる

一心三觀—身密

身延

梗概

身延山にて法華經讀誦なせる日蓮上人の許に女體の幽靈上人の功德に感じてあらはる。もと法華讚歎の意より成れる曲也。（四番目）

シテ　亡靈　　ワキ　日蓮上人

ワキ謠「凡そ方便現涅槃、星霜二千二百餘廻、後五百歳中今少し。廣宣流布の時を待ちて、妙法しゆとう繁昌の日、めでたかるべき時節かな。下歌謠「寂寞無人聲 讀誦此經 典の窓の内、上歌一念三千の花薫じ、一念三千の花薫じ、我爾時爲現淸淨、光明 身の床のうへに、一心三觀の月滿てり。衆生の遊樂も今こゝに、身延山の風水も、讀誦の聲添へて、自然の靈地なりけり。

シテ次第謠「松吹く風も法の聲、松吹く風も法の聲、聞くやいかにと音すらん。サシ面白や

宰相三位辨の藏人、物故の百官楯を突き、あれ逐つ攘へ、又修羅の瞋恚が起るぞとよ恨めしや。地謠「修羅の戰始まれば、修羅の戰始まれば、源氏の軍兵その數浮て、かの御坐舟を中にとりこめ、攻め戰ふことおびたゞし。シテ謠「平家の公達艫舳に廻り、地謠「平家の公達艫舳に立ち渡り、矢先を揃へ切先を竝て、寄せくる敵を待ちかけたり。中にも知盛進み出でて、大薙刀を莖長に取り延べ、左を薙ぎては右を拂ひ、多くの敵を亡ぼしけるが、今は是まで沈まんとて、鎧二領に兜二はね、猶もその身を重くなさんと、遙かなる沖の碇の大綱、えいや〱と引き上げて、兜の上に碇を戴き、碇を載きて、海底に飛でぞ入りにける。

繋船—明詠集の句

內侍所—御鏡

申すに—申すはの誤歟

の合戰、今は賴みもなかりしかば、地謠「新中納言知盛二位殿に向ひ宣ふやう、今は是まで候、御痛はしながら行幸を、波の底になし參らせ、一門供奉し申すべしと、クセ涙をおさへて宣へば、二位殿は聞召し、心得て候とて、しづ〳〵と立ちたまひ、いまはの出立と思しくて、白き御袴の、つま高う召されて、神璽を脇に挾み、寶劍を腰にさし、大納言の局に、內侍所を戴かせ、皇居に參り跪き、如何に奏聞申すべし、この國と申すに、逆臣多き所なり、見えたる波の底に、龍宮と申して、めでたき都の候、行幸をなし申さんと、泣く〳〵奏し給へば、尼謠「さすが恐しと思しけるか、地謠「龍顏に御涙を浮めさせ給ひて、東に向はせおはしまし、天照大神に御暇申させ給ひ、其後西方にて、御十念も終らぬに、二位殿步みより、玉體を抱き目をふさぎて、波の底に入り給ふ。恨めしかりし事どもを、語るもよしなや、跡弔へや僧達と、夜すがらくどき給ひしに、俄にかき曇り、虛空に鬨の聲きこゆ。シテ謠「すは又修羅の地謠「合戰の始まるぞや。シテ詞「波の上に浮み出でたるは何者ぞ、何修羅の大將無明王とや。あらもの〳〵し上北面下北面、

安藝兄弟―源氏方

潯陽―白樂天の琵琶行の故事

觀身岸額離根草論命江頭不繫舟

に、安藝の太郎同じき次郎、兄弟二艘の舟を押し寄せ、能登の守とぞ戰ひける。シテ謠「物物しおのれ等に、地謠「太刀も刀も入るまじや、いざや冥途の供に連れんと、左右の腕をさし出だし、彼等を摑んで引き寄せて、左右の腕に挾んで、波の底に沈みけり。シテ謠「さてこそ人々の、地謠「幽靈ぞとは白波の、跡弔ひてたび給へ、亡き跡弔ひてたび給へ。（中入）

ワキ謠「さてもわれ夜も靜なる折節に、この海際の邊にて、平家の跡を弔ふ所に、詞不思議やな今までは、無かりし大船浮み出でて、謠さも早鞆の海なれども、流れもやらず漕ぎもせず、潯陽の江の邊ならねど、小船の內にて彈ずる祕曲、松風にも岩こす波にも、更に紛れぬ琴の爪音、あら不思議の事やな。二位局謠「如何に大納言の局、今宵は波も靜なれば、月を叡覽あらんとの御事なり、あの苫取れと申せ。地謠「楫枕、せめては月をまつ風の、せめては月をまつ風の、吹くもよしなや苫取りて、夜舟に月を待たうよ。クリ地謠「それ身を觀ずる時は岸上の草、命を知れば江の邊につながざる舟。尼、サシ謠「さる程に壇の浦

門脇殿—敎盛
莖長—柄長に同じ

や、他生の緣はありがたや。

ワキ詞「如何に尉殿、まづ〳〵舟より御上り候へ、申すべき事の候。シテ詞「心得申し候。

ワキ詞「何とやらん似合はぬ申し事にて候へども、いにしへこの浦にての軍物語が承りたく候。シテ詞「やすき間の事語つて聞かせ申し候べし。カタリさてもこの壇の浦の合戰、今はかうよと見えしとき、門脇殿の次男能登の守敎經小船に取乘り、大薙刀を莖長に取り延べ、こゝかしこを薙ぎ給ふにぞ、兵多く亡びにけり。その時新中納言使者を立て、詮なき能登殿のふるまひかな、さればとてよき敵にてもあらばこそと宣ひければ、さてはこの詞は、大將と組めと云ふ事にてや有るらんとて、敵の舟に紛れ入り、九郎判官を尋ね給ふ。地謠「如何はしたりけん、判官の舟に乘り移りぬ。シテ謠「能登殿喜び打つてかゝる。地謠「判官これを見て、判官これを見て、叶はじとや思ひけん、薙刀脇にかい挾んで、二丈ばかりの味方の舟に、ゆらりと飛び乘れば、敎經はせんかたもなく、薙刀投げ捨て腹立て叱り、あたりを拂つて立つたりけり。シテ謠「かゝりける所に、地謠「かゝりける所

一乘妙典―法華經

門司―文字を言掛く

存じ候。

シテ一聲謠「磯千鳥、友呼びかはす聲すなり、海士の子供も心せよ。ワキ詞「なう〳〵あれなる舟に便船申さう。シテ詞「なか〳〵の事召され候へ。さて船賃は候。ワキ謠「さん候出家の事にて候へば船賃は持たず候。シテ詞「門司赤間や波風の、早鞆といひて恐しき所を、謠船賃なくて渡らんとは、無道心なる僧達かな。ワキ謠「不思議の事を聞くものかな。無緣の僧に船賃を取らんと思ふ人々こそ、無道心とはいふべけれ。シテ詞「實に〳〵是は御理。さて又首に懸け給ふは、如何なる物にて有るやらん。ワキ詞「是は一乘妙典なり。御望あらば讀誦せん。シテ謠「さては嬉しや御僧の、讀誦を我等が船賃にて、ワキ謠「今この舟に法の道。シテ謠「いざ聽聞せん法華經の、門司の關の戸明かせや篝火、ワキ謠「妙法蓮華經藥王菩薩品、如子得母如渡得船。シテ謠「こは渡りに舟を得たりとや、あらたふとやこの御法、

上歌地謠「とく〳〵召され候へ、とく〳〵召され候へと、いふや願ひも三つの舟に、上人の御法こそ、よき船賃と覺えたり。實にや漏らさじの、誓の舟に法の人、他生の緣は有難

碇潜

梗概

平知盛舟人として現れ、壇浦の合戦に於ける能登守教經の物語をなし、弔問を受く。更に後段安德天皇御入水のさまより、知盛碇を載きて海底に沈むさまを見す。（四番目）

シテ　平知盛（前は舟人）　ツレ　二位尼　ワキ　旅僧

月の行方ー西の方をいふ

ワキ次第謡「雲をしるべのよそに見て、雲をしるべのよそに見て、月の行方を尋ねん。詞是は都方より出でたる僧にて候。さても平家の一門は、長門の浦にて果て給ひて候。我等も平家のゆかりの者にて候程に、一門の御跡を弔ひ申さんと思ひ、只今長門の國へと志し候。道行元よりも、浮世の旅に又出でて、浮世の旅に又出でて、宿定めなく捨つる身の、行く末なればそこととしも、波に落ちくる汐風、早鞆の浦に著きにけり。早鞆の浦に著きにけり。詞急ぎ候程に、早鞆の浦に著きて候。暫く舟を相待ち、便船を乞はばやと

加茂の宮居―室の明神は加茂と同體

韋提希夫人―明神の本地佛

てゝ、豐年月の行末を、はかるも棹の歌、うたひていざや遊ばん。ワキ詞「いかに申し候。かゝるめでたき折節に、そと御神樂を參らせられ候へ。ツレ詞「さらば御神樂を參らせうずるにて候。ツレ謠「こゝとても室山かげの神垣の、地謠「加茂の宮居はありがたや。（神樂）ツレ謠「月影の、地謠「月影の、更けゆくまゝに風をさまれば、不思議や異香薫じつゝ、和光の垂迹、韋提希夫人の、姿を現しおはします。玉のかんざし羅綾の袂、玉のかんざし羅綾の袂、風にたなびく瑞雲に乘じ、所は室の海なれや、山は上りて、上求菩提の機をすゝめ、海は下りて、下化衆生の相をあらはし、五濁の水は、實相無漏の大海となつて、花ふり異香薫じつゝ、相好まことに肝に銘じ、感涙袖を霑せば、はや明けゆくや春の夜の、はや明方の雲に乘りて、虚空にあがらせ給ひけり。

花ぞ綱手―花が人の心を引くといふを引くの語の縁より曳舟の綱手と續けたり

棹の歌―船歌

朝妻船―是も遊女の縁に云ふ

戀しき人に近江―逢ふ意を掛く

裁ち逢はぬ云々―古今集の歌

天地の開けしも云々―諾冊二尊の國土を開き給ひし故事棹のしたゝりは矛の雫の意を譬へたり

ツレ謠「室の海、地謠「室の海、波ものどけき春の夜の、月の御舟に棹さして、霞む空は面白やな、霞む空は面白や。ツレ謠「梅が香の、地謠「梅が香の、磯山遠く匂ふ夜は、出船も心ひく、花ぞ綱手なりける。この花ぞ綱手なりける。狂言シカ〳〵。

ワキ詞「近頃めでたき御事にて候。又こと〴〵く棹を御さし候ほどに、棹の歌を御うたひ候へ。

ツレ謠「棹の歌、うたふ浮世の一節を、地謠「うたふ浮世の一節を、夕波千鳥聲そへて、友よびかはす海士少女、恨みぞまさる室君の、行く船や慕ふらん。朝妻船とやらんは、それは近江の海なれや、我も尋ね尋ねて、戀しき人に近江の、海山も隔たるや、あぢきなや浮舟の、棹の歌を謠はん、水馴棹の歌うたはん。クセ裁ち縫はぬ、衣著し人もなき物を、何山姫の布晒すらん。佐保の山風のどかにて、日影も匂ふ天地の、開けしもさしおろす、棹のしたゞりなるとかや。ツレ謠「然れば春すぎ夏たけて、地謠「秋すでに暮れ行くや、時雨の雲の重りて、嶺白妙に降り積る、越路の雪の深さをも、知るやしるしの棹た

別二

室君

室君―室津の遊女

概梗

播州室の明神にて、囃物をして神事を行ふことあり。遊女棹の歌を謠ひ神樂を奏づ。かくて明神影向あらせらるゝ事を作る。(四番目)

シテ　明神(謠無し)　ツレ　室君
ワキ　神職　狂言　下人

ワキ詞「是は播州室の明神に仕へ申す神職の者にて候。さても天下泰平の折節なれば、室君たちを船に載せ、囃物をして神前にまゐる御神事の候。いまこの時もめでたき御代なれば、急ぎ御神事を執り行はゞやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「いそぎ室君たちに神前へ御參りあれと申し候へ。狂言詞「畏つて候。

合ひ附けて―切り合ふこと

妻もまつらん―自害せる妻の後を追はんとなり

ワキ詞「いや〱兎角の問答は無益、諸はや討ちとれや兵と、地謠「下知を加ふる下よりも、下知を加ふる下よりも、我も我もと面々に、結橋や堀の埋草、沈めつゝ乘り越え乘り越え、斷岸によせつけて、喚き叫んで攻めたりけり。シテ謠「われながら兄弟に、地謠「矢を放さんは恐れなれども、さりながら是は又、主君のために捨てん命、何かは科ならん。惜しからぬ我が身なり、疾く寄りて討てや人々。その時寄手の勢は、その時寄手の勢は、我眞先にと進みけるに、和泉は少しも騷がずして、もとより好む大太刀を、柄長におつとり延べて、多勢が中に割つて入りつゝ、左右に合ひ附けて、鎬を削つて戰ひけるに、一人とすゝめる武者の、甲の眞向ちやうと打ち、引く太刀にて諸膝かけず流れて、かつぱと倒れてどうと伏す。シテ謠「今は是までなり、地謠「さこそは妻も待つらんものを、いで追つ付かんと言ふ儘に、物の具取つてかしこに投げすて、日頃念ぜし持佛堂の、床の上に走りあがり、淨土に迎へ給へと、腹十文字にかき切り、床よりもころび落ちけるを、敵の兵おり重つて、追つ立て行くこそ哀なれ。

二體の義—優劣なき義理

れ候へ。シテ詞「げに健氣なる言事かな。さらば自害に及び給へ。ツレ詞「承りて候とて、心づよくも夕日の影の、シテ謠「西に向ひて、シテ、ツレ謠「手を合せ、地謠「彌陀佛助け給へと祈念して、助け給へと祈念して、心づよくも自害せんと、思ひ定めたる、夫婦の身こそ哀なれ。その時腰刀を、抜き持ちて立ちより、我も是にて腹切らん、御身も自害し給へと、いへば刀を請け取りて、胸のあたりに突き立てゝ、よろ〳〵と倒れ伏しければ、和泉は死骸に取りつきて、泣くより外の事ぞなき。泣くより外の事ぞなき。（中入）

後ワキ立衆 一聲謠「藤波のかゝれる、松の梢をば、嵐やよせて散らすらん。ワキ詞「いかに和泉の三郎確に聞け。水は逆さまに流るるものか。順逆二列の境に迷ひ、我とその身を失ふなり。恨みと更に思ふべからず。謠「尋常に腹切り給へ。シテ詞「何錦戸の討手とや。ワキ詞「なかなかの事。シテ謠「あら珍しや、詞「いで〳〵對面申さんと、物の具取つて肩にかけ、大太刀追取り櫓にあがり、大音あげて名のるやう、謠「君親ふたつは二體の義、君を重んじ親子の孝行、賢人無雙の弓取に、かへつて兎角の仰せは如何に。あら腹立や無念やな。

賢人云々―史記田單傳に忠臣不レ事二二君一烈女不レ更二二夫一の意男女によるまじや―忠貞の道は男女の別なしとの意

我が君の御運こそ末にならせ給ひて候。ツレ詞「そも我が君の御運の末にならせ給ひたるとは、何と申したる御事にて候ぞ。シテ詞「さん候我が君御對面なき事を、錦戸泰衡無念に思ひ、兄弟はや敵となり、某にも同心せよと宣へども、まづ案じても御覽ぜよ、今まで賴まれ申す主君に心を引きかへて、親の遺言背かん事、弓矢取つての恥辱なるべし。さればある詞にいはく、謠賢人二君に仕へず、貞女兩夫にまみえずと、地謠「この理を聞く時は、男女によるまじや。殊に弓馬の家に生れ、二人の主君には、いかでか仕へ申さん。

シテ詞「や、何と申すぞ。某同心せざる事を錦戸泰衡無念に思ひ、只今討手に向ふと申すか。あら何ともなや、某が事は親の遺言にて候程に、一足も落つる事は候まじ。不覺を見えんも口惜ければ、御身は何方へも御忍び候へ、ツレ詞「實に〳〵敵は寄せ來たる、いかに心は猛くとも、謠女の身にて候へば、思ひ切らせたまひたる、御身の障ともなるべきなり。まづ〳〵妾ともかくも、自害に及び候べし。御心安く御覽じ置きて、討死めさ

槻弓―盡きを掛く

その上今まで頼まれ申す、主君に心を引きかへて、敵とならせ給はんは、御兄弟のたとへに入るべからず。一家の恥は如何ならん。ワキ詞「さてはおことは承引あるまじきか。シテ詞「恐れながら、身に於いてまことに、同心申しがたし。ワキ詞「いや〳〵御身は詞を巧み宣へども、順儀の法は違ひたり。シテ詞「いや順儀を存ずる身なればこそ、親の遺言背かぬなり。ワキ詞「それは何とて正しき兄の言事をば聞き給はぬぞ。シテ謡「仰せを背くと承れども、親の遺言承引なきは、不孝の科にてましまさずや。ワキ謡「不孝の科は数多あり。詞「汝は兄の言事を、シテ謡「承引なきは主君の命、ワキ謡「その外親子、シテ謡「兄弟の、地謡「互の論は槻弓の、互の論は槻弓の、力及ばぬ事なれば、是までなりや今ははや、兄と思ふな弟とも、見る事さらに有るまじと、座敷を立つて錦戸は、歸る心ぞあさましき。歸る心ぞあさましき。

シテ詞「言語道斷の事にて候ものかな。まづ〳〵妻にて候者を呼び出し、此事を申し聞かさばやと存じ候。いかに渡り候か。ツレ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「まづ此方へ渡り候へ。さても

泰衡—伊達次郎といふ

世の人口—世間の非難
同じ主君—同じ源家に仕ふること

急ぎ參るべき由を度々仰せられ候程に、泰衡我等は同心仕り、はや賴朝へ參るべきに定めて候。いまだこの由を三男和泉の三郎に申さず候間、只今和泉が館に行き、かやうの事をも談合せばやと存じ候。

ワキ詞「いかに案內申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「某が參りて候。シテ詞「や、こなたへ御出で候へ。さて只今の御出では何のためにて候ぞ。ワキ詞「さん候只今參ること餘の儀にあらず、さても我等日々に出仕申し候へども、更に御對面もなく候間、此上は力及ばぬ事と存じ候處に、賴朝より御敎書をなされ、急ぎ參れとの御事にて候程に、泰衡我等同心し、はや賴朝へ參るべきに定めて候が、御分は何とか思ひ給ひ候ぞ。シテ詞「仰せ畏つて承り候ひぬ。我が君も人の申しなしにて、一旦の御恨事にてこそ候らめ、その上御遺言の事にて候間、只思召し御止り候へ。ワキ詞「申すところはさる事なれどもさりながら、我等他門へ參らばこそ、世の人口もあるべけれ、同じ主君に仕へん事、何の苦しう候べき。只々同心し給へとよ。シテ詞「いや賴朝への御忠節、我が君の奉公になるべからず。

錦戸

梗概

錦戸太郎(國衡)、主君義經に背きて頼朝に從はんとせしが、弟の和泉三郎(忠衡)亡父秀衡の遺命默止し難しとて應ぜざりしかば太郎遂に弟を討ち滅す事を作る。(四番目)

シテ　和泉三郎　　ツレ　三郎妻
ワキ　錦戸太郎　　立衆　大勢

ワキ詞「かやうに候者は、奥州の住人秀衡が子に、錦戸の太郎にて候。さても頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は親にて候者を御頼み有り、是まで御下向候間頼まれ申し候處に、御運の盡きさせ給ふにや、親にて候者空しく成りて候。その際に我等を近づけ、君に心變り申すなと、堅く申しつけ金打せさせて候。尤もその儀違變なく候處に、いかなる者の申し候やらん、我等君に心變り申す由を聞召し、日々に出仕申すといへども、更に御對面もなく候間、この上は力及ばぬ事と存じ候處に、頼朝より御教書をなされ、

空しく成りて—秀衡は文治三年卒す
金打せさせ—刀の鐔を鳴らして誓約せしむること

松浦─待つを掛く

親の、十三年に當りたれば、謡「科ありとても助舟の、シテ謡「松浦の川や西の海、ワキ謡「彼の國ちかき、シテ謡「極樂の、地謡「彌陀誓願の誓かや。科を助くるあはれみの、あらありがたの御慈悲や。

キリ地謡「やがて時日をうつさず、やがて時日をうつさず、かくれし夫を尋ねつゝ、もとの如くに歸りゐて、結ぶ契の末久に、松浦の川や二世の緣、げにありがたき心かな。げにありがたき心かな。

娥皇女英—二人は舜の后妃なり舜の崩ぜしを悲しみて湘浦に死す

六つの鼓—六つは午後六時五つは八時四つは十時九つは十二時なり

にたてゝ、地謠「なく鶯の青葉の竹、シテ謠「湘浦の浦や娥皇女英、地謠「諫鼓苔むすこのつゞみ、シテ謠「うつゝもなやななつかしや。上歌地謠「鼓の聲も時ふりて、鼓の聲も時ふりて、日も西山に傾けば、夜の空の近づく、六つの鼓打たうよ。五つの鼓いつはりの、契あだなる妻琴の、引き離れいづくにか、わが如く忍音の、やはら〱打たうよや、やはらやはら打たうよ。四つの鼓は世の中に、四つの鼓は世の中に、戀といふ事も恨といふ事も、なき習ひならば、獨物は思はじ。シテ謠「九つの、地謠「九つの、夜半にもなりたるや。あら戀しわが夫の、面影に立ちたり、うれしやせめてげに、身がはりに立ちてこそは、二世のかひもあるべけれ。この牢いづる事あらじ、なつかしのこの牢や、あらなつかしのこの牢。

ワキ詞「この上は諏訪八幡も御知見あれ、夫婦ともに助くるぞはや疾く出で候へ。シテ詞「げにこの上はさればとて、御僞はよもあらじ、まことは夫の在所、筑前の宰府に知る人あれば、そなたへ行きてや候らん。ワキ謠「いしくも隱さず申したり。詞しかも今年はわが

西樓に云々—背原文時の詩句に西樓月落花間曲中殿燈殘竹裏音とあるを引く

花の間—僅の間の意

異國にも云々—蘇東坡の長夜獸座數」更鼓」などを云ふか

時守の云々—萬葉集に時守の打鳴す鼓よみ見れば時にはなりぬあはぬもあやしを替へて引く

らき、はや是までぞとく出でよ。シテ詞「御志はありがたけれども、夫に代れるこの身なれば、この牢の內をば出づまじや。謠是こそ形見よなつかしや。地謠「無慙や我が夫の、身に代りたる牢の內、出づまじや雨の夜の、盡きぬ名殘ぞ悲しき。西樓に月落ちて、花の間も添ひ果てぬ、契ぞ薄き燈の、殘りてこがるゝ、影はづかしきわが身かな。ワキ詞「言語道斷。かゝるやさしき事こそ候はね。この上は夫婦ともに助くるぞ疾く出で候へ。シテ詞「かほどに情ましまさば、始めよりかく憂き目を見せ給ふべきか。謠さるにてもわがつまはいづくにあるらん、なう心が亂れさむらふぞや。一聲亂るゝは、柳の髮か春雨の、地謠「淚に咽ぶ心かな。シテ詞「なう〳〵これなる鼓は何のために懸けられて候ぞ。ワキ詞「あれこそ時守の時を知る相圖の鼓よ。シテ詞「面白し〳〵。異國にもさる例あり。かやうに鼓を懸けて時を守りしこともあり。その心を得て古き歌に、謠時守の打ちます鼓聲きけば、時にはなりぬ君は遲くて。地謠「遲くも君が來んまでぞ。シテ詞「なうこの鼓を打つて心が慰みたう候。ワキ詞「やすき間の事いかやうにも打つて慰め候へ。シテ謠「鼓の聲も音

包めども―古今集の歌末句涙なりけり

道狹き―肩身の狹きこと

シテ、サシ謠「げにや思ひ内にあれば、色は外にぞ見えつらん。包めども袖にたまらぬ白玉は、人を見ぬ目の涙かな。

狂言詞「いや言語道斷。牢中の女が狂氣になりて候。やがてこの由を申さうずるにて候。いかに申し上げ候。牢中の女が以ての外狂氣仕り候。ワキ詞「是は眞にてあるが。狂言詞「さん候。ワキ詞「あら不便や立越え見うずるにて候。やあいかに女、何故さやうに狂氣してあるぞ。シテ詞「何故狂氣するぞと承る。謠「人の心の花ならば、風の狂ずる故もあるべし。況んや偕老同穴と、契し夫もゆくへ知らで、殘る身までも道狹き、なほ安からぬ牢の内、思ひの闇のせんかたなさに、物に狂ふは僻事か。ワキ詞「げに〳〵夫の別れ牢者の思ひ、一方ならぬ身のなげきに、物に狂ふはことわりなり。さりながら、いづくに夫の在處を、知らせばやがて呼びとつて、汝は牢より出すべし眞直に申し候へ。シテ詞「是は仰せとも覺えぬものかな。たとひ夫の在處を知りたればとて、あらはし夫を失ふべきか。その上夫の在所を、夢現にも知らぬものを。ワキ謠「やさしき女の言事かなと、詞「手づから牢の戸をひ

落居—落着なり。

てあるぞ。さて彼のものの子はなきか。狂言詞「いや子はなく候。ワキ詞「妻はなきか。狂言詞「それは御座候。ワキ詞「さあらばいそいでその女をつれてきたり候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「科人を召し籠められ候上は、女までの御罪科はあまりに御情無なうこそ候へ。ワキ詞「いかに女。さても汝が夫の清次、今夜牢を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ、眞直に申し候へ。シテ詞「もとより賤しき者なれば、我が身の助かり候をこそ喜び候べけれ。わらはにはかくとも申さず候ほどに、夢にも知らず候。ワキ詞「いや〳〵何と申すとも知らぬ事はあるまじ。まづ〳〵落居の有らん程、夫の代りに牢者させ、謠その在所を糺さんと、上歌地謠「今の女を引き立てゝ、今の女を引き立てゝ、急ぎ牢者になすべしと、さもあらけなき人心、情なしとは思へども、殺害の科をのがれえぬ、報のほどぞ無慙なる。報のほどぞ無慙なる。

ワキ詞「やあいかに汝は女に向ひ何事を致すぞ。その野者げなるによつて清次をも牢より遁いてあるぞ。所詮今よりは鼓をかけて、一時づつ時を打つて番を仕り候へ。

科人―私に敵を討ちたればなり

牢者させて―入牢せしむること

籠太鼓

梗概

清次といふ者科人となりて入牢せしめられしが、牢を破りて失せしかば、其妻、捕へられて、夫の在所を責め問はれしに、狂氣となりて時守の太鼓を打つ。その物哀れさにつひに夫妻の罪を免さるゝ事を作る。（四番目）

シテ　清次妻　　ワキ　松浦某　　狂言　従者

ワキ詞「是は九州松浦の何某にて候。さても某召しつかひ候關の清次と申す者、他郷の者と口論し、念なう敵をば討つて候。さりながら科人の事にて候間、やがて牢者させて候。彼の者大剛の者にて候間、番の事かたく申しつけばやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「彼の者大剛の者にてある間、番の事堅く仕り候へ。狂言詞「畏つて候。いかに申上げ候。清次が今夜牢を破りぬけて候。ワキ詞「何と清次が牢よりぬけたると申すか。言語道斷の事。さてこそ以前より堅く申し付けてあるに、さやうに油断仕り

恐れて、よし義經をばおとし申せと、詮議を加ふる衆徒も有りけり。さる程に、時移つて、主君も今は忠信が、謀にて難なく遙に、落し申しつ、心しづかに願成就して都へとこそ歸りけれ。

地謠「神は正直の頭に宿り給ふなれば、靜が舞の袖に、暫くうつりおはしまし、我が君を守り給へと、祈るぞあはれなりける。クセ「そもそも景時が、その讒言の水上を、おもへば渡邊や、流るゝ水に滿汐の、逆櫓立てんと浮船の、梶原が申し事、よも順義にて候はじ。されば義經はすぐに脩めし三吉野の、神のちかひの眞あらば、賴朝も聞召し直され、義經執節の勅を受け、洛陽の西南は、これ分國となるべし。さあらば當山の、衆徒ことごとく參洛し、歸依渇仰の御袖に、惠をいだき給ふべし。あなかしこ、不忠なし給ふな。御科は候はじ。シテ謠「但し衆徒中に、猶いきどほり深うして、地謠「進みて追つかけ給ふとも、その名きこゆる人々を、討ちとゞめ申さんは、片岡増尾鷲の尾、さて忠信はならびなき、精兵ぞよ人々に、防矢射られ給ふなと、語ればげには衆徒中に、すゝむ人こそなかりけれ。

シテ謠「しづやしづ、（序ノ舞）ワカしづやしづ、賤の苧環くりかへし、地謠「昔を今になすよしもがな。あまりに舞の面白さに、時刻をうつして進まぬもありけり。又は判官の武勇に

執節—天皇の御代理として政治を行ふこと

片岡増尾鷲の尾—義經の郎等なり

其契約—忠信が靜の供して吉野を立退く約束
法樂の舞—神佛に奉納する舞樂
かつて知らすな—勝手の社に掛けていふ

野山、よしなき申し事、洩れ聞えなば判官の、後のとがめも恐しや。御暇申し候はん。御暇申し候はん。

シテ謠「さても靜は忠信が、その契約を違へじと、舞の裝束ひきつくろひ、忠信遲しと待ち居たり。ワキ詞「是は都道者にて候が、法樂の舞の由承り、下向道を忘れて候。はやはや舞を始め給ふべし。シテ謠「都の人と聞けばなつかしや、判官御道せばき事、世上の聞えいかなるぞ、都人こそ知るべけれ。ワキ詞「終には御中直らせ給ふべしと、聞くより人々先非を悔いて、謠皆々恐れ申すなり。シテ謠「さては嬉しや委しくも、知らせ給ふか都人。ワキ詞「あまりに事延び時移りぬ、謠心得給へ舞の袖。シテ謠「げになう言葉多き者は品すくなし。かやうに我等言の葉過ぎば、なか〳〵人も怪しみて、もしもそれとか三吉野の、かつて知らすな、一聲靜かに囃せや靜が舞に。地謠「衆徒も時刻や移すらん。シテ謠「神こそ納受ましますらめ。地謠「げに此御代も靜が舞。シテ、サシ謠「然るに彼の判官は、神道を重んじ朝家を敬ひ、地謠「ひとへに忠勤を擢んでて、私の心さらになし。シテ謠「人は讒し申すとも、

狂言―衆徒ワキに對して「いやこゝな忝くも吉野の衆會の座敷を何者なれば濡草鞋で出たぞ」など言ふことあり

上は御一體―賴朝は義經と兄弟なればとなり

吉野靜

梗概

義經吉野より落つる時、忠信、君を遠く落ちしめんとて、わざと衆徒の席に入りて問答に時を移し、靜御前に舞を舞はしむる事を作る。（三番目）

シテ　靜　ワキ　忠信　立衆　大勢　狂言　衆徒

狂言シカ〴〵。ワキ詞「これは都道者にて候、衆會の御座敷とも存ぜず候。御免あらうずるにて候。狂言詞「さては都人にて候か。判官殿の御行方をば何と申し候ぞ。ワキ詞「上は御一體なれば、終には御中直らせ給ふべき由申し候。狂言詞「さていかやうにて御落ち有りたると申し候。ワキ詞「十二騎とこそ承つて候へ。狂言詞「十二騎ならば追つかけ討ちとめ申さう。ワキ詞「暫く。十二騎と申すとも、餘の勢百騎二百騎にもむかふべし。かやうに申すは都の者、當山を信じ參る上は、いかにも御寺も宿坊も、難なくおはしませかしと、思へばかやうに申すなり。謠この上はともかくも、地謠「御はからひぞ吉野山、御ばからひぞ吉

臨川堰―臨川寺の井堰なり水車を仕懸けありたりといふ

こきりこ―あやおりの竹ともいふ

水車の輪の、臨川堰の川波、川柳は水に揉まるゝ、しだり柳は風に揉まるゝ、ふくら雀は竹に揉まるゝ、都の牛は車に揉まるゝ、茶臼は挽木に揉まるゝ、げにまこと忘れたりとよ、こきりこは放下に揉まるゝ。こきりこの二つの竹の、世々を重ねて、打ち治まりたる御世かな。

シテ、ツレ謠「さのみは何と包むべきと、兄弟ともに抜きつれて、思ふ敵に走り寄り、地謠「この年月の恨みの末、今こそ通れ願ひのまゝに、敵をぞ討つたりける。キリかくて兄弟念力の、かくて兄弟念力の、その期の有りて忽に、親の敵を討つ事も、孝行深き故により。名を末代に留めけり。名を末代に留めけり。

凍れる涙―古今集に「年の内に春は來にけり雪の氷れる涙今や解くらん」

指を忘る―圓覺經に見ゆ月を見るに端指を借る心を悟るに佛教を假る、後却て月を見て指を忘れ心を悟て敎を忘れ易しとなり

得レ魚而忘レ筌―莊子の語筌は魚を捕る具

面白や云々―小唄ぶし

の言葉なるを、謠御騷ぎあるこそ愚なれ。地謠「なにとたどなか〳〵に、磐手の山の岩躑躅、色には出でじ。南無三寶。をかしの人の心や。シテ、サシ謠「されば大小の根機を嫌はず、持戒破戒を選ばず、地謠「有無の二偏に落つる事なく、皆成佛するためしあり。シテ謠「かるが故に草木も發心の姿を現し、地謠「柳は緑花は紅なる、その色々を現せり。クセ青陽の春の朝には、谷の戸出づる鶯の、凍れる涙とけそめて、雪消の水のうたかたに、相宿りする蛙の聲、聞けば心のある物を、目に見ぬ秋を風に聞き、荻の葉そよぐ故郷の、田面に落つる雁鳴きて、稻葉の雲の夕時雨、妻戀ひかぬる小男鹿の、たゞずむ月を山に見て、指を忘るゝ思ひあり。シテ謠「浦の湊の釣舟は、地謠「魚を得て筌な捨つ、此を見彼を聞く時は、嶺の嵐や谷の聲、夕の煙朝霞、皆これ三界唯心の、理なりと思召し、心を悟り給へや。シテ謠「月の爲には浮雲の、地謠「種と心や爲りぬらん。シテ謠「面白の花の都や。地謠「筆に書くともおよばじ。東には祇園清水、落ちくる瀧の音羽の嵐に、地主の櫻はちり〳〵、西は法輪嵯峨の御寺、廻らば廻れ

ざうか—候かの約語
本末—本弭を烏に像り末弭を兎に象るといふ
方便の矢—衆生を救ふ手段として武器を執るなり
四魔—煩惱魔五衆魔天子魔死魔
引かぬ弓云々—夢窓國師の歌と云ひ傳ふ
宗體—宗旨の立て方
公案—佛祖の機緣を云ふ本文の
三昧—思を專にし想を靜むること
白雲深處金龍躍—碧巖の語

ふ。弓も御僧の道具ざうか。ツレ謠「夫れ弓と申すは本末に、烏兎の姿を像り、詞日月とここに顯し、淨穢不二の祕法を表す。されば愛染明王も、神通の弓を張り、方便の矢を爪よつて、謠四魔の軍を破り給ふ。地謠「されば我等も之を持ち、されば我等も之を持ちて、引かぬ弓、はなさぬ矢にて射る時は、中らずしかも外さざりけりと、かやうによむ歌もあり、知らずな物なのたまひそ。知らずな物なのたまひそ。

ワキ詞「さて放下僧はいづれの、祖師禪法を御傳へ候ぞ。面々の宗體が承りたく候。シテ詞「我等が宗體と申すは、教外別傳にして、言ふも言はれず說くも說かれず、言句に出せば教に落ち、文字を立つれば宗體に背く、謠たゞ一葉のひるがへる、風の行方を御覽ぜよ。

ワキ詞「げに〳〵面白う候。さて座禪の公案何と心得候べき。ツレ謠「入つては幽玄の底に動じ、出でては三昧の門に遊ぶ。ワキ詞「自身自佛はさていかに。シテ詞「白雲深き所金龍躍る。ワキ謠「生死に任せば、シテ謠「輪廻の苦。ワキ謠「生死を離れば、シテ詞「斷見の科。ワキ詞「さて向上の一路は如何に。ツレ詞「切つて三段と爲す。シテ詞「暫く。切つて三段と爲すとは、禪法

古川―降るにかく
うたかた―泡沫
十力―是處非處力業力定力根力欲力性力至處道力宿命力天眼力漏盡力
一句―禪法の一語

爭ふ謂あり。地謠「朝の嵐夕の雨、朝の嵐夕の雨、今日又明日の昔ぞと、夕の露の村時雨定めなき世に古川の、水のうたかた我いかに、人をあだにや思ふらん。人をあだにや思ふらん。

シテ詞「浮雲流水と申し候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「浮雲流水と申し候。狂言シカ〳〵。シテ詞「いや某は浮雲、あれなる者は流水にて候。狂言シカ〳〵。シテ詞「又あれなる御方の御苗字をば何と申し候ぞ。狂言シカ〳〵。シテ詞「いや苦しからず候、只放下が參りたると御申し候へ。狂言シカ〳〵。ワキ詞「いかに面々に不審申したき事の候。シテ詞「承り候。ワキ詞「凡そ沙門の形と謂つぱ十力の珠數を手に纏ひ、忍辱二體の衣を著、罪障懺悔の袈裟を掛けてこそ僧とは申すべけれ、異形のいでたち心得ず候。又見申せば拄杖に團扇を添へて持たれたり。團扇の一句承りたく候。シテ謠「夫れ團扇と申すは、動く時には清風をなし、靜なる時は明月を見す。詞明月清風只同性の內にあれば、諸法を心が所作として、諸心實修行の便にて、我等が持つは道理なり。咎めたまふぞ愚なる　ワキ詞「團扇の一句面白う候。今一人は弓矢を帶し給

禪法—禪道

瀬戸—武藏金澤

某は放下になり候べし。御身は放下僧に御なり候へ。彼者禪法に好きたる由申し候程に、禪法を仰せられうずるにて候。シテ詞「げに是は面白き了簡にて候。さらばやがて思ひ立たうずるにて候。ツレ詞「尤にて候。シテ謠「いざ〳〵さらばと思ひつゝ、行脚の姿に身をやつせば、ツレ謠「我も嬉しく思ひつゝ、放下の姿に出で立つて、シテ謠「さもすご〳〵と、ツレ謠「立ち出づる。上歌地謠「故郷の、名殘もさぞな有明の、名殘もさぞな有明の、つれなきながらふる、命ぞ限り兄弟は、我が心をや賴むらん。我が心をや賴むらん。

ワキ次第謠「歩みを運ぶ神垣や、歩みを運ぶ神垣や、隔てぬ誓賴まん。詞「これは相摸の國の住人、利根の信俊と申す者にて候。我この間打ち續き夢見惡しく候程に、瀬戸の三島へ參らばやと存じ候。

後シテ、サシ一聲謠「面白の我等が有様やな。僧俗二つの道を離れ、姿言葉も人に似ぬ、ツレ謠「その振舞を隱家と、思ひ捨つれば安き身を、シテ謠「知らでなどかは迷ふらん。シテ、ツレ一聲謠「落花一樣の春を知らず、白雲青山に蔽ふとか、ツレ謠「流水山上の秋にして、シテ、ツレ謠「紅葉を

母を惡虎に取られ―李廣の故事今昔物語にあり

放下―田樂法師の類

て只今は何の爲に來り給ひて候ぞ。シテ詞「さん候。只今參る事餘の儀にあらず。我等が親の敵の事討たばやとは存じ候へども、敵は猛勢我等は只一人にて候程に、思ふにかひなく月日を送り候。あはれ諸共に思召し御立ち候へかし。シテ詞「仰せはもつともにて候へども、我等が事は幼少より出家の身にて候程に、今更いかゞにて候。ツレ詞「御意はさる事にて候へども、親の敵を討たぬ者は不孝の由を申し候。シテ詞「さて親の敵を討つて孝に備はりたる事の候か。ツレ詞「なか〳〵の事。物語唐のことにや有りけん、母を惡虎に取られ、その敵をとらんとて、百日虎伏す野邊に出でて狙ふ。ある夕暮に、尾上の松の木陰に、虎に似たる大石のありしを敵虎と思ひ、番へる矢なればよつぴいて放つ、この矢すなはち巖に立ち、たちまち血流れけるとなり。是も孝の心深きにより、堅き石にも矢の立つと申し候へば、只思召し御立ち候へ。シテ詞「是は面白き事を引いて承り候ものかな。この上は諸共に思ひ立たうづるにて候。ツレ詞「然るべう候。シテ詞「さて彼者には何として近づき候ふべき。ツレ詞「某きつと案じ出したる事の候。此頃人の翫び候は放下にて候程に、

念無う—無念にも

放下僧

梗

牧野小次郎といふ者、兄の禪僧と共に放下になりて諸國を遍歴し、父の敵利根信俊に廻り會ひて、遂に討取ることを作る、（四番目）

シテ　牧野兄禪僧　　ツレ　牧野小次郎

ワキ　利根信俊　　狂言　從者

ツレ詞「かやうに候ものは、下野の國の住人、牧野の左衛門何某が子に、小次郎と申す者にて候。さても親にて候者は、相摸の國の住人、利根の信俊と申す者と口論し、念なう討たれて候。親の敵にて候程に討たばやとは存じ候へども、敵は猛勢我等は只一人にて候間、思ふにかひなく月日を送り候。又兄にて候者は、幼少より出家仕り、あたり近き會下に候、あまりに便もなく候間、立ちこえこの事を談合せばやと存じ候。いかに案内申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「某が參りて候。シテ詞「や、此方へ渡り候へ。さ

わたづみの―古今集の歌三句白妙の末句淡路島山

七つ五つ―天神七代地神五代

淡路―あれはの意のあはを掛く

なりける。

後シテ謠「わたづみの插頭に插せる白玉の、波もて結へる淡路島、月春の夜ものどかなる、緑の空も澄み渡る、天の浮橋の上にして、八洲の國を求め得し、伊弉諾の神とは我が事なり。治まるや國常立の始めより、地謠「七つ五つの神の代の、シテ謠「御末は今に君の代より、地謠「和光守護神の扶桑の御國に、風は吹けども山は動ぜず。（神）ロンギげにありがたき御誓。げに有難き御誓。そも〳〵天の浮橋の、その御出所はさるにても、いかなる所なるらん。シテ謠「振り下げし、鉾の滴り露凝りて、一島となりしを、淡路よと見つけし爰ぞ浮橋の下ならん。地謠「げにこの島の有樣、東西は海漫々として、シテ謠「南北に雲峯を列ね、地謠「宮殿にかゝる浮橋を、シテ謠「立ち渡り舞ふ雲の袖、謠「さすは御鉾の手風なり。引くは、潮の時つ風、治まるは波の蘆原の、國富み民も豊に、萬歳をうたふ松の聲、千秋の秋津洲、治まる國ぞ久き。治まる國ぞ久き。

御客人―參向ありし臣下をさす

現、中にも皇孫は、日向の國に天降り給ひて、地神第四の火々出見の皇子を御出生、實に有難き代々とかや。シテ謠「天下をたもちたまふ事、地謠「すべて八十三萬、六千八百餘歳なり。かゝるめでたき皇子達に、御代を楪葉の、權現と現れおはします、伊弉諾伊弉冊の神代も、只今の國土なるべし。

ロンギ地謠「實に神の代の道直に、實に神の代の道直に、今も妙なる秋津洲の、君の御影ぞ有難き。シテ謠「御影ぞと、夕日がくれの雲の端に、たなびく天の浮橋の、いにしへを現して、御客人をなぐさめん。地謠「そも浮橋のいにしへと、聞くはいかなる言の葉の、シテ謠「その神歌は烏羽玉の、我が黑髮も、地謠「亂れずに、結び定めよ小夜の手枕の、歌の種蒔きし神とも今は白波の、淡路山を浮橋にて、天の戸を渡り失せにけり。天の戸を渡り失せにけり。（中入）

ワキ上歌謠「實に今とても神の代の、實に今とても神の代の、御末はあらたなりけりと、いへば虚空に夜神樂の、月に聞えて光さす、けしきぞあらたなりけるや。けしきぞあらた

富草―稻のこと

渾沌未分―一つにて未だ二つに分れざること

目前の御誓なり。シテ謠「その上神代は遠からず、ツレ謠「今目の前にも、シテ謠「御覽せよ。上歌地謠「種を蒔き、種を收めて苗代の、種を收めて苗代の、水うらゝにて春雨の、天よりくだれる種蒔きて、國土も豐に、千里榮る富草の、村早稻の秋になるならば、種を收めん神德、あら有難の誓やな。有難の神の誓やな。

ワキ詞「なほ〳〵當社の神祕ねんごろに御物語り候へ。クリ地謠「夫れ天地開闢の昔より、渾沌未分やうやく分れて、淸く明かなるは天となり、重く濁れるは地となれり。シテ、サシ謠「然れば天に五行の神まします。木火土金水是なり。地謠「旣に陰陽相分れて、木火土の精伊弉諾となり、金水の精凝り固まつて伊弉册と顯る。シテ謠「然れども未だ世界ともならざりし前を伊弉諾といひ、地謠「國土治まり萬物出生する所を、伊弉册と申す。卽ちこの淡路の國を始とせり。クセされぱにや、二柱の御神の、磤馭盧島と申すも、この一島のことかとよ。凡そこの島はじめて、大八洲の國をつくり、紀の國伊勢志摩日向竝に、四つの海岸を作り出し、日神月神蛭子素盞嗚と申すは、地神五代の始にて、皆この島に御出

齋串―清淨なる幣

供田―神に供ふる米を作る田

然れば云々―當時神道家の俗說

春の田を作らんとては、よろづ祝ふ事の候程に、ある水口に齋串とて五十の幣帛を立て、神を祭り候、然ればある歌に、謠谷水をせく水口に齋串立て、苗代小田の種まきにけり、詞その上この御田は、當社二の宮の御供田にて御座候程に、殊には內外清淨にて御田を作り候よ。ワキ詞「さては當社二の宮にてましませば、國の一の宮はいづくにてましますぞや。若し楪葉の權現にて御座候やらん。シテ詞「畏れながら惡しく御心得候ものかな。當社は二の宮にてましませばとて、國中一二の次第にあらず。ツレ謠「御覽候へ當社の神達、二柱の社の御殿なれば、シテ詞「二つの宮居をそのまゝにて、二の宮と崇め奉るなり。シテ、ツレ謠「是は卽ち伊弉諾伊弉册の尊二柱の、神代のまゝに宮居し給ふ淡路の國の、神は一宮宮居は二つの、二の宮と崇め申すなり。ワキ謠「よく〱聞けば有難や、さて〱かゝる國土の種を、普く受くる御恩德、只この神の誓よなう。シテ詞「事新しき御諚かな。國土世界や萬物の、出生あまねき御神德、只是當社の誓なり。ツレ謠「然れば開けし天地の、伊弉諾と書いては、シテ詞「種蒔くとよみ、ツレ謠「伊弉册と書いては、シテ詞「種を收む。ツレ謠「是

陰陽—諾冊二尊男女の道を開き給ひしをさす

心の池—心の廣きを池に喩ふ

春の田を—金葉集の歌下句花に心をつくる頃かな

水口—田に水を引く口

路程なく移りきて、よそに霞みし島影や、淡路潟にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、是は早淡路の國に著きて候。この所の人を待ち、神代の古跡を尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲謡「神の代の、跡を殘して海山の、のどけき波の淡路潟、ツレ謡「種を收めし國なれば、シテ、ツレ謡「苗代水も豐なり。シテ、サシ謡「夫れ陰陽の神代より、今人界に至るまで、シテ、ツレ謡「山河草木國土は皆、神の惠に作り田の、雨つちくれを潤して、千里萬里の外までも、皆樂める時とかや。下歌頃しも今はのどかなる、心の池の云ひがたき、春の氣色もさまぐに、上歌春の田を、人に任せて我はたゞ、人に任せて我はたゞ、花に心のあこがるゝ、盛りに引かれて苗代の、水に心の種蒔て、散ればこゝもや櫻田の、雪をもかへすけしきかな。雪をもかへす氣色かな。

ワキ詞「いかに是なる翁に尋ぬべき事あり。おことの風情を見るに、小田をかへしながら水口に幣帛を立て、誠に信心の氣色なり。いかさま是は御神田にて候か。シテ詞「さん候。

吹上―吹上の濱とて名所なり

別一

淡路

概梗

神代の遺跡を尋ねんとて、淡路に參向せし廷臣、田を作れる老翁に逢ひ、その諸册二神の神德を物語るを聽く。のち老翁諸尊と現じて、まのあたり威靈を示したまふことをつくる。（能脇）

シテ　伊弉諾尊（前は老翁）　ツレ　男　ワキ　臣下

ワキ三人次第謠「治まる國の始めもや、治まる國の始めもや、淡路の神代なるらん。ワキ詞「そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり。さてもわれ宿願の子細あるにより、住吉玉津島に參詣仕りて候。又よきつでなれば、是より淡路の國に渡り、神代の古跡をも一見せばやと存じ候。ワキ三人道行謠「紀の海や、波吹上の浦風に、波吹上の浦風に、跡遠ざかる沖つ舟、汐

じ、八大龍女に引かれ給へは、師長も飛馬に鞭を打ち　馬上に琵琶を携へて、馬上に琵琶を携へて、須磨の歸洛ぞ有難き

梨壺の女御―實は宣耀殿の女御芳子

故院―源氏物語の桐壺の帝のこと

唐土より云々―平家物語にあり仁明の御宇掃部頭貞敏渡唐して歸朝する時の事なり

獅子には云々―獅子は文殊菩薩の乘物

の主たりし、村上の天皇梨壺の女御夫婦なり。地謠「御身の入唐止めん爲、夢中にまみえ須磨の浦、故院の昔の夢の告、思ひ出でよ人々とて、掻消すやうに失せ給ふ。掻消すやうに失せ給ふ。(中入)

後シテ謠「そも〳〵是は、延喜聖代の御讓り、村上の天皇とは我が事なり。その聖代の御宇かとよ、唐土より三面の琵琶を渡さるゝ。絃上青山獅子丸これなり。さる程に獅子は龍宮へ取られしを、いで召し出だし彈かせんと、漫々たる海上に向ひ、如何に下界の龍神たしかに聞け。獅子丸持參つかまつれ。

地謠「獅子丸浮むと見えしかば、獅子丸浮むと見えしかば、八大龍女を引き連れ〳〵、かの御琵琶を授け給へば、師長給はり彈きならし、八大龍王も絃管の役々、或は波の鼓を打てば、或は琵琶の名にし負ふ、獅子團亂旋に村上の天皇も、奏で給ふ。面白かりける祕曲かな。(辨)

シテ謠「獅子には文殊や召さるらん。地謠「獅子には文殊や召さるらん。帝は飛行の車に乘

絃上―玄象が正字なり

御諚なり。地謡「おもひよらずも琴の音の、押して御琵琶を賜はりて、シテ謡「祖父は琵琶を調れば、ツレ謡「姥は琴柱を立て並べて、地謡「撥音爪音、ばらり、からり、からり、からりばらりと、感涙もこぼれ、嬰兒も躍るばかりなりや。彈いたり〱面白や。師長謡「師長思ふやう、地謡「師長思ふやう、われ日の本にて、琵琶の奥儀を極めつゝ、大國を窺はんと、思ひし事のあさましさよや。まのあたり、かゝる堪能有りける事よ。所詮渡唐を止まらんと、忍びて鹽屋を出で給へば、それをも知らで琵琶琴の、心一つの嗜みにて、越天樂の唱歌の聲、梅が枝にこそ鶯は巣をくへ、風吹かば如何にせん、花に宿る鶯、宿人の歸るをも、知らで彈いたり琵琶琴。

ツレ詞「なう旅人の御立ち候。シテ詞「何旅人の御立ち候とや。なにとて留め申さぬぞと、シテ、ツレ謡「祖父と姥は走りより、地謡「琵琶琴よりも御袖を、只引けや〱横雲の、夜はまだ深し浦の名の、明かして御立ち候へ。師長謡「何しに留め給ふらん。まづこの度は歸洛して、重ねて尋ね申すべし。御名を名のり給へや。シテ、ツレ謡「今は何をか包むべき。我絃上

近々―千賀の鹽竈の意を言掛く

調子―調子の合ふこと

心にくし―ゆかしき意

思ひも―緒を言掛く

浦波は、思ふ方より風や吹くらん。地謠「それは浦波の、音通ふらし琴の音の、音通ふらし琴の音の、是は彈く琵琶の、折からなれや村雨の、古屋の軒の板庇、目ざます程の夜雨や、管絃の障なるらん。シテ詞「や、何とて御琵琶をば遊ばし止められて候ぞ。ワキ詞「さん候村雨の降り候程に、さて遊ばし止められて候。シテ詞「實に村雨の降り候ぞや。如何に姥、苫取り出だし候へ。ツレ詞「それは何の爲にて候やらん。シテ詞「苫にて板屋を葺き渡し、靜に聽聞申さんと、シテ、ツレ謠「祖父と姥は諸共に、ツレ謠「苫取出だし、シテ謠「さつと葺き、地謠「鹽竈の名の、近々と寄り居つゝ、耳を聳て聞き居たり。

ワキ詞「如何に主、かほど漏らざる板屋の上を、何しに苫にて葺きて有るぞ。シテ詞「さん候只今遊ばされ候ふ琵琶の御調子は黃鐘、板屋を敲く雨の音は盤渉にて候程に、謠「苫にて板屋を葺き隱し、今こそ一調子になりて候へ。

ロンギ地謠「さればこそ始より、只人ならず思ひしに、心にくしや琵琶琴を、いかでか彈かで有るべき。シテ、ツレ謠「所から江の邊、岩越す波の彈きやせん。琵琶琴の、思ひもよらぬ

松の柱―待を言く
海は云々―源氏物語の文句を引く

ツレ謠「されば一年雨の祈の御時、神泉苑にして、琵琶の祕曲を遊ばされしかば、シテ詞「龍神もめでけるにや、さしもの晴天にはかに曇り、大雨降る事終日、謠それよりしてこの君を、雨の大臣とは申すとかや。ツレ謠「かほどやごとなき此君に、一夜の御宿を參らせて、シテ謠「祕曲をも聽聞申すならば、シテ、ツレ謠「例なき思出。下歌地謠「彼の蟬丸は逢坂や、藁屋にて琵琶を彈き給ふ。今この君は須磨の鹽屋、露も溜らぬ軒の板間、逢ひ難き砌に、逢ふぞ嬉しかりける。上歌里離れ、須磨の家居の習ひとて、須磨の家居の習ひとて、何事を松の柱や、竹あめる垣は一重にて、風もたまらじ痛はしや、海は少し遠けれども、波たゞこゝもとに聞えきて、いつの間に、夢をも御覽候べき。よし〳〵それも御琵琶を、寢られぬまゝに遊ばせや、我等も聽聞申すべし。我も聽聞申さん。

ワキ詞「如何に申し上げ候。夜もすがら御琵琶を遊ばされ候へ。師長謠「この須磨の巻の春かとよ、源氏この浦に遷され給ひ、初めて世の味ひの辛きを知るといへども、まだ汐じまぬ旅衣、泣くばかりなる涙の露の、玉の小琴を彈き鳴らし、戀ひわびて泣く音にまがふ

雨ごさめれ—雨にてこそあるめれ

田子の浦云々—源氏物語の歌に「袖ぬるゝこひぢとかつは知りながらおりたつ田子のみづからぞうき」

わくらはに云々—上巻松風を見よ

海士の磯屋とや淡路潟、あは沖舟の漕ぎ來るは、雨ごさめれ今一返も、汐汲めや人々。上歌そよや陸奥の、そよや陸奥の、千賀の鹽竈は、名のみにて遠ければ、如何が運ばん伊勢島や、阿漕が浦の汐をば、度重ねても汲み難し。田子の浦の汐をば、いざ下りたたんわくらはに、問ふ人あらばわぶと答へて、この須磨の浦の汐汲まん。この須磨の浦の汐汲まん。シテ詞「鹽屋に歸り休まうずるにて候。

ワキ詞「鹽屋の主の歸りて候。御宿を借らばやと存じ候。如何に是なるは鹽屋の主にてあるか。シテ詞「さん候、鹽屋の主にて候。ワキ詞「是に御座候は太政大臣師長公と申して、天下に隱れましまさぬ琵琶の御上手にて候が、入唐の御望にてこの浦に御下向にて候。一夜の御宿を參らせ候へ。シテ詞「いやさやうの人にて御座候はゞ、異浦にて御宿を召され候へ。ワキ詞「あら何ともなや、難波わたりにてこそ異浦なんどとは申すべけれ、是は須磨の浦にてはなきか。たゞ御宿を參らせ候へ。シテ謡「見苦しく候へども、さらば御宿を參らせ候べし。

空、まだ夜深きに旅立ちて、末に見えたる山崎も、過ぐれば跡に早なりて、ワキ上歌謠「波越す袖の湊川、波越す袖の湊川、まだ知らぬ、方にも我は生田の漏り來る月は木の間にて、心づくしの旅の道、されども是は唐の、門出と思へば勇みある、高麗の林をよそに見て、須磨の浦にも著きにけり。須磨の浦にも著きにけり。ワキ詞「御急ぎ候程に、是は津の國須磨の浦に御著きにて候。暫くこの所に御休みあり、事の由をも御尋ねあらうずるにて候。

シテ、ツレ一聲謠「持ちかぬる、汐汲む桶の苦しきに、又力づく、老の杖、ツレ謠「拙なき業を須磨の浦、シテ、ツレ謠「眺に憂きや忘るらん。シテ、サシ謠「面白や浦に入日は海上に浮み、須磨や明石の浦の樣、鹽燒く海士の心にも、さも面白う候なり。ツレ謠「南を遙かに眺むれば、雲に續ける紀の路の小島、シテ詞「由良の戸渡る早舟も、汐追風の吹上や、ツレ謠「遠浦ながら住吉の、松こそ見ゆれ海越しに、シテ謠「富島の磯や昆陽難波、ツレ謠「名には繪島と云ひながら、シテ謠「いかで筆にも及ぶべき。シテ、ツレ謠「あら面白の浦の氣色や。下歌地謠「實にや面白き、

絃上

梗概

師長、琵琶の祕曲を傳へ受けんとて、入唐の望ある折から、須磨の月を眺めんとて下向し、鹽屋に一泊を乞ふ。鹽屋の翁嫗、師長の琵琶を聽き、二人もおの〱琵琶琴を彈ず。師長その妙技に感じ、入唐を思ひ止まる。かくて翁は村上天皇と現じ、龍宮より獅子丸といふ琵琶を持參せしめて師長に賜はる由を作る。（五番目）

シテ　村上天皇（前は老翁）　前ツレ　老女
前ツレ　藤原師長　ワキ　師長從者

師長ー賴長の子

ワキ次第謠「八重の汐路を行く舟の、八重の汐路を行く舟の、唐は何くなるらん。師長詞「そもそも是は太政大臣師長とは我が事なり。ワキ詞「さてもこの君天下に隱れなき琵琶の御上手にて御座候が、入唐の御望ましますにより、この度思召し立ち道すがら名所の月をも御覽ぜんために、只今津の國須磨の浦に御下向にて候。師長、サシ謠「我はさていつの夕を都の

も夜まぎれに、明けぬ先にと誘ひて、高安の里に歸りけり。高安の里に歸りけり。

草香山―攝津

紀の海までも見えたり、見えたり、滿目青山は心にあり。シテ謠「あゝ、見るぞとよ見るぞとよ。

地謠「さて難波の浦の致景の數々、シテ謠「南はさこそと夕波の、住吉の松陰、地謠「東の方は時を得て、シテ謠「春の緑の草香山、地謠「北は何處、シテ謠「難波なる、地謠「長柄の橋のいたづらに、かなたこなたと歩く程に、盲目の悲しさは、貴賤の人に行き合ひの、轉び漂ひ難波江の、足もとはよろ〳〵と、實にも眞の弱法師とて、人は笑ひ給ふぞや。思へば恥しやな、今は狂ひ候はじ、今よりは更に狂はじ。

ロンギ地謠「今は早、夜も更け人も靜まりぬ。如何なる人の果やらん、その名を名のり給へや。シテ謠「思ひよらずや誰なれば、我がいにしへを問ひ給ふ。高安の里なりし、俊德丸が果なり。地謠「さては嬉しや我こそは、父高安の通俊よ。シテ謠「そも通俊は我が父の、その御聲と聞くよりも、地謠「胸打騷ぎ呆れつゝ、シテ謠「こは夢かとて、地謠「俊德は、親ながら恥しとてあらぬ方へ逃げ行けば、父は追ひ付き手を取りて、何をか包む難波寺の鐘の聲

り

日想觀―時正の日には夕日回轉して西に入るとて念佛して拜むことをいふ

阿字門―梵語四十二字母の一にて最貴重なる一門をいふ

江月云々―證道歌の文句

住吉の云々―賴政の歌

思ひのあまりに盲目となりて候。あら不便と衰へて候ものかな。人目もさすがに候へば、夜に入りて某と名のり、安高へ連れて歸らばやと存じ候。やあ如何に日想觀を拜み候へ。シテ詞「實にゝゝ日想觀の時節なるべし。盲目なればそなたとばかり、謠心當なる日に向ひて、東門を拜み南無阿彌陀佛。ワキ詞「何東門とは謂れなや、こゝは西門石の鳥居よ。シテ詞「あらおろかや天王寺の、西門を出でて極樂の、東門に向ふは假事か。ワキ詞「實にゝゝさぞと難波の寺の、西門を出づる石の鳥居。シテ謠「阿字門に入つて、ワキ謠「阿字門を出づる、シテ謠「彌陀の御國も、ワキ謠「極樂の、シテ謠「東門に、向ふ難波の西の海、地謠「入日の影も舞ふとかや。

シテ詞「あら面白やわれ盲目とならざりしさきは、弱法師が常に見馴れし境界なれば、謠なに疑ひも難波江に、江月照らし松風吹き、永夜の淸宵何の爲すところぞや。住吉の、松の隙よりながむれば、地謠「月落ちかゝる淡路島山と、シテ謠「詠めしは月影の、地謠「詠めしは月影の、いまは入日や落ちかゝるらん。日想觀なれば曇も波の、淡路繪島須磨明石、

三會―興福寺の維摩會藥師寺の最勝會大極殿の御齋會をいふ釋尊逝いて第二の釋尊現れず我國色法の興隆未だしとなり

上宮太子―聖德太子のこと

如意輪―六觀音の一つ

太子の御前生云云―此事元亨釋書にあり

閻浮提金―黃金

萬代に云々―後拾遺集に「萬代にすめる龜井の水やさは富の小川の流なるらん」龜井を太子影向の井ともいふ

おし照る―難波の枕詞なるを難波のことに云へ

クリ地謠「夫れ佛日西天の雲に隱れ、慈尊の出世遙に、三會の曉未だなり。シテ、サシ謠「然るにこの中間に於て、何と心を延ばへまし。地謠「こゝによつて上宮太子、國家をあらため萬民を教へ、佛法流布の世となして、普く惠を弘め給ふ。シテ謠「然れば當寺を御建立あつて、地謠「始めて僧尼の姿を顯し、四天王寺と名付け給ふ。クセ金堂の御本尊は、如意輪の佛像、救世觀音とも申すとか、太子の御前生、震旦國の思禪師にて、渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつゝ、今日域に至るまで、佛法最初の御本尊と、現れ給ふ御威光の、眞なるかなや末世相應の御誓。然るに當寺の佛閣の、御作の品々も、赤栴檀の靈木にて、塔婆の金寶に至るまで、閻浮檀金なるとかや。シテ謠「萬代に、澄める龜井の水までも、地謠「水上清き西天の、無熱池の池水を受けつぎて、流久しき世々までも、五濁の人間を導きて、濟度の舟をも寄するなる、難波の寺の鐘の聲、異浦々に響き來て、普き誓滿潮の、おし照る海山も、皆成佛の姿なり。ワキ詞「あら不思議や、是なる者をよく〳〵見候へば、某が追ひ失ひし子にて候は如何に。

きありけば弱法師と、名付け給ふは理なり。ワキ詞「實に言ひ捨つる言の葉までも、心ありげに聞ゆるぞや。先々施行を受け給へ。シテ詞「あら有難や候。や、花の香の聞え候。いかさまこの花散りがたになり候な。ワキ詞「あう是なる籬の梅の花が、弱法師が袖に散りかかるぞとよ。シテ詞「うたてやな難波津の春ならば、只この花とこそ仰せ有るべきに、謠今は春べも半ぞかし。梅花を折つて頭に挿しはさまざれども、二月の雪は衣に落つ、あら面白の花の匂ひやな。ワキ謠「實にこの花を袖に受くれば、花もさながら施行ぞとよ。シテ詞「中々の事草木國土、悉皆御法の施行なれば、ワキ謠「皆成佛の大慈悲に、シテ謠「漏れじと施行に連なりて、ワキ謠「手を合はせ、シテ謠「袖を擴げて、上歌地謠「花をさへ、受くる施行のいろ〳〵に、受くる施行のいろ〳〵に、匂ひ來にけり梅衣の、春なれや、何はの事か法ならぬ、遊び戯れ舞ひ謠ふ、誓の網には漏るまじき、難波の海ぞ頼もしき。實にや盲龜の我等まで、見る心地する梅が枝の、花の春の長閑さは、なにはの法にもよも漏れじ、なにはの法にもよも漏れじ。

梅衣―表白裏蘇枋色

盲目なることを云ふ
夫れ云々―前の砧と似たる文句
有爲―有爲轉變
中有―極樂と地獄の中間
一行―阿闍梨にして唐玄宗の御持僧なり罪を得て果羅へ流されしこと平家物語に見ゆ
時正―こゝは彼岸中の日をさす
折ニ梅花一而挿レ頭二月之雪落レ衣―本朝文粹の句

には、波を隔つる愁ひあり。況や心あり顔なる、人間有爲の身となりて、憂き年月の流れては、妹背の山の中に落つる、吉野の川のよしや世と、思ひもはてぬ心かな。あさましや前世に誰をか厭ひけん、今又人の讒言により、不孝の罪に沈む故、思ひの涙かき曇り、盲目とさへなりはてゝ、生をも變へぬこの世より、中有の道に迷ふなり。下歌元よりも心の闇は有りぬべし。上歌傳へ聞く、彼の一行の果羅の旅、彼の一行の果羅の旅、闇穴道の巷にも、九曜の曼陀羅の光明、赫奕として行末を、照らし給ひけるとかや。今も末世と言ひながら、さすが名に負ふこの寺の、佛法最初の天王寺の、石の鳥居こゝなれや、立寄りて拜まん、いざ立寄りて拜まん。

ワキ謠「頃は二月時正の日、誠に時も長閑なる、日を得て普き貴賤の場に、施行をなして勸めけり。シテ詞「實に有がたき御利益、法界無邊の御慈悲ぞと、踵をついで群集する。

ワキ詞「や、これに出でたる乞丐人は、如何さま例の弱法師よな。シテ詞「又我等に名を付けて、皆弱法師と仰せ有るぞや。謠實にもこの身は盲目の、足弱車の片輪ながら、よろめ

弱法師

梗概

繼母の讒にあひて、父に捨てられし俊徳丸の盲目となり弱法師とて流離せしが、後、父之を悔いて天王寺にて施行をなす折しも、俊徳丸に廻り會ひ伴ひ歸るよしを作る。中に天王寺縁起を説くこと詳に、之に配するに難波の致景を以てし、肉眼盲ひたれど心眼開けたりとの意を寓する所、文情活躍せり。（四番目）

シテ　俊徳丸　　ワキ　高安通俊

ワキ詞「かやうに候者は、河内國高安の里に、左衛門の尉通俊と申す者にて候、さても某子を一人持ちて候を、さる人の讒言により暮に追ひ失ひて候。餘りに不便に候程に、二世安樂のため天王寺にて、一七日施行を引き候。今日も施行を引かばやと存じ候。

シテ一聲謠「出入の、月を見ざれば明暮の、夜の境をえぞ知らぬ。難波の海の底ひなく、深き思ひを人や知る。サシ夫れ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思ひを悲しみ、比目の枕の上

天王寺―聖徳太子物部守屋を討ちて後建立せらる

施行を引き―佛事を營み物を施すこと

出入の月云々―

入る—射るとかけて弓矢をとつゞけたり

シテ詞「さらばそと舞はうずるにて候。　地謠「心嬉しき酒宴なか。(男舞)

キリ地謠かくて時日を廻らさず、かくては時日を廻らさず、國々の兵馳せ参ずれば、程なく御勢二十萬騎になり給ひつゝ掌に、治め給へるこの君の御代の、めでたき始めも、實平正しき忠勤の道に入る、實平正しき忠勤の道に入る、弓矢の家こそ久しけれ。

たとへば云々—朗詠集に謬入ュ仙家ニ雖ㇾ爲ニ半日之客ニ恐歸ニ舊里ニ纔逢ニ七世之孫ニとあるを引く前の句は王質後の句は劉阮の故事

不覺—未練

かこは如何にとて、覺えず抱き付き泣き居たり。たとへば仙家に入りし身の、半日の程に立ちかへり、七世の孫に逢ふ事の、喩へも今に知られたり、喩へも今に知られけり。シテ詞「如何に義盛に申し候。さてこの者をば何として召しつれられ候ぞ。ワキ詞「さん候是まで伴ひ申したる謂れを、御前にて申し上げうずるにて候。シテ詞「急いで御物語り候へ。ワキ詞「さても昨日石橋山の合戰破れしかば、大場が手勢君を討ち奉らんと、大勢渚に打出でたりしに、某も一所に討つて出でしが、汀を見れば、引きかねたる若武者一騎ひかへたり。某駒かけよせて見れば御子息遠平なり。急ぎ馬より飛んで下り、生捕る體にもてなし舟底に乘せ申し、是まで伴ひ參りたり。なんぼう土肥殿に義盛は忠の者にて候ぞ。シテ謠「かゝる有難き事こそ候はね。只今の御物語を聞き候ひて落涙仕りて候を、さぞ人々の不覺の涙とや思召すらんさりながら、地謠「嬉し泣きの涙は、嬉し泣きの涙は、何か包まん唐衣、日も夕暮になりぬれば、月の盃とり〴〵に、シテ謠「主從ともに悅びの、地謠「心うれしき酒宴かな。ワキ詞「如何に實平、餘りにめでたき折なれば一さし御舞ひ候へ。

引出物—贈物のこと

ば忍び出で、月日とも頼み奉る頼朝にははなれ申し、この上は命ありても何かせん、いでいで自害に及ばんと、腰の刀に手を掛くる。シテ詞「あゝ暫く、君はこの舟に御座候。ワキ詞「何と君はその御舟に御座候とや。シテ詞「中々の事。ワキ詞「さて何とてかやうには承り候ぞ。シテ詞「是は戯言にて候。幸に陸近く候程に、その舟を寄せられ候へ。御舟をも寄せ候ひて、陸にて御對面あらうずるにて候。ワキ詞「心得申し候。さらばやがて陸へ參らうずるにて候。

シテ詞「如何に申し候。御前にて候。ワキ詞「我が君を見奉りて、今は安堵仕りて候。シテ詞「實に〳〵尤にて候。ワキ詞「如何に土肥殿に申し候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「この御供の中に、何とて御子息遠平は御座候はぬぞ。シテ詞「その事にて候。さる謂れ有つて陸に殘し置きて候。ワキ詞「疾くよりかくと申したくは候ひつれども、以前某に心を盡させられ候その返報に、今まではかくとも申さぬなり。いで土肥殿に引出物申さんと、隱し置きたる舟底より、遠平を引立て見せければ、シテ謠「その時實平あきれつゝ、地謠「夢か現

御座舟―頼朝の乘船をさす

身方―平家方

と恐しや。ワキ詞「あれに見えたるが御座舟にてありげに候。急いで舟を漕ぎ候へ。狂言詞「畏つて候。シテ詞「如何に申し候。あれに兵船一艘見えて候。先こなたより詞を掛けうずるにて候。義實詞「しかるべう候。シテ詞「如何にあれなる舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ。ワキ詞「我もそなたの船影を、怪しく思ひ休らうなり。そも誰人の舟やらん。シテ詞「是は土肥の次郎實平が乘りたる舟候よ。ワキ詞「何と土肥殿の御舟と候や。シテ詞「なか〳〵の事。さてその御舟は誰が召されたる御舟にて候ぞ、ワキ詞「是こそ和田の小太郎義盛が乘りたる船候よ。シテ詞「さては和田殿の御舟にて候か。ワキ詞「中々の事、内々申し通ぜし如く、御味方に參らんために、是まで參じて候。さて君は其御舟に御座候か。シテ詞「和田は内々申し合はせたる事の候間、只今參りて候さりながら、先づたばかつて心を見うずるにて候。如何に和田殿へ申し候。是までの御參めでたう候さりながら、面目もなき事の候。昨日の暮程より我が君を見失ひ申し、かやうに浮れ舟と爲つて尋ね申し候よ。ワキ詞「何と君はその御舟に御座なきと候や。シテ詞「さん候。ワキ詞「言語道斷の事にて候ものかな。我身方を

ゆしく見ゆる實平かなと、互の心を思ひやり、親子の別れ痛はしや。
遠平謡「父の別れは申すに及ばず、君を始め參らせて、皆人々に御名殘こそ惜しう候へ。
上歌地謡「彼の松浦佐用姫が、彼の松浦佐用姫が、唐舟を慕ひわびて、渚にひれ伏しゝ有樣も、今遠平が親と子の、別れにかはらじと、皆涙をぞ流しける。
遠平謡「契程無き早舟を、暫しとだにも言ひあへず、跡を見送りたゝずめば、地謡「はや遠ざかる浦の波立ち別れゆく有樣を、遠平謡「餘の人々は心して、地謡「あはれみあへる、遠平詞「舟の内に、地謡「實平はひたすらに、弱氣を見えじとて、なか〳〵かへり見おきもせで、心強くも行く跡に、敵大勢見えたりすはや遠平は討たるゝとて、頼朝もあはれみ陸を見給へばさすが實に、恩愛の契も只今を限ぞと思ひ實平は、磯邊に向ひ人知れず、心のまゝならば、あはれ遠平と一所に、討死せばやとあこがれて、飛び立つばかりに思ひ子の別れぞ哀れなりける。別れぞ哀れなりける。
ワキ一聲謡「弓張月の西の空、行くへ定めぬ舟路かな。狂言詞「沖なる波の音までも、関の聲か

御出門なるに―御出陣御出陣のめでたき折からの意

ゆゝしく―貴むる意

内一人おりられ候へ。シテ詞「尤にて候。餘りの道理に物なのたまひそ。如何に遠平、君よりの御諚にて有るぞ、急いで御舟より下り候へ。遠平詞「何と御舟より下りよと仰せ候か。シテ詞「なか〱の事。急いで下り候へ。遠平詞「遠平幼く候へども、君の御大事に立たん事、誰にか劣り候べき。御舟よりは下りまじく候。シテ詞「こざかしき事を申す者かな。君の御爲父が命にては無きか。急いで御舟より下り候へ。遠平詞「いや〱君の御爲父の命をば背くとも、御舟よりは下りまじく候。シテ詞「言語道斷の事を申すものかな。君の御爲父が命をば背くとも下りまじきと申すか。その儀ならば人手には掛けましいぞ。義實詞「暫く。是は君の御門出なるに、誤りたるか實平。シテ詞「何くまでも某が誤りて候。所詮おりまじきと申す者をおろさんより、某御舟より下りようずるにて候。遠平詞「如何に申し候。さらば某御舟より下り候べし。シテ詞「何と下りようずると申すか。實に〱今こそ某が子にて候へ。あれを見よ敵大勢討ち出でたり、かまへて某が子と名のつて、尋常に討死せよ。名残こそ惜しけれ。謠「かくて我が子をおろし置き、實平御舟に參りけり。地謠「ゆ

義忠―源平盛衰記によれば義貞
俣野―五郎景尙
御分―御身

賴朝詞「如何に實平、何とて遲きぞ急いでおろし候へ。シテ詞「畏つて候。如何に岡崎殿に申し候、急いで御舟より御下り候へ。義實詞「何と某に御舟より下りよと候や。シテ詞「なかなかの事。義實詞「暫く、この御供の内に、某一の老體にて候程に、かひ〴〵しく御用にも立つまじき者と御覽じ限られて、かやうに承り候な。その儀に於ては御舟よりは下り候まじ。シテ詞「いや〳〵左樣の儀にては無く候。艫板に召されて候程に、陸の近さに申し候。義實詞「いや所詮この船中に、命二つ持ちたらんずる者を御船より下され候へ。シテ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。それ人は生ずるより死するまで、命をば一つこそ持ちて候へ。二つ持ちたる謂れの候か。義實詞「さん候某も昨日までは命を二つ持ちて候を、早一つの命をば我が君に參らせ上げて候。シテ詞「さてその謂れは候。義實詞「その事にて候。昨日石橋山の合戰に、子にて候眞田の與一義忠は、副將軍を賜はり、俣野と組んで討たれぬ。されば親子は一體二つの命ならずや。見申せば土肥殿こそ、この御舟に親子一所に渡られ候へ。御分殘つて遠平をおろすか、遠平を殘して御分おるゝか、親子の

候。頼朝詞「餘りに味方無勢にある間、一先安房上總の方へ開かうずるにて有るぞ。急いで舟の事を申し付け候へ。シテ詞「畏つて候。疾くより御舟の事を申し付けて候。急いで召されうずるにて候。頼朝詞「いかに實平。シテ詞「御前に候。頼朝詞「只今船中に供したる人數は如何程あるぞ。シテ詞「さん候只七騎御座候。頼朝詞「さては頼朝までは八騎よな。急度思ひ出だしたる事有り。祖父爲義鎭西へ開きし時も主從八騎、父義朝江州へ落ち給ひしも主從八騎、思へば不吉の例なり。實平はからひて舟より一人おろし候へ。シテ詞「畏つて候。謠實平仰せ承り、舟のせがいに立上り、御供の人數を見渡せば、まづ一番には田代殿、地謠「さて二番には新開の次郎、シテ謠「又三番には土屋の三郎、地謠「四番は土佐坊五番には、シテ謠「實平候六番には、遠平謠「同じき遠平、シテ謠「艫板には、義實謠「義實あり。地謠「この人は君のため、この人々は君のため、龍門原上の土に屍をば曝すとも、惜しかるまじき命かな、何れを選出さんと、さしもの實平思ひかね、赤面したるばかりなり。赤面したるばかりなり。

鎭西―實際は東國へ下らんとし近江より引返せし也
田代殿―信綱
新開の次郎―忠氏
土屋の三郎―宗遠
土佐坊―昌俊
龍門云々―白氏文集に龍門原上土埋レ骨不レ埋レ名とあるを引く

外十三

七騎落

梗概

頼朝、石橋山の戰に敗れ、安房上總の方へ落ちんとす。乘船の砌、主從八騎となれるは、祖父が都落の折に同じくして不吉なりとて、誰か一人取殘さるゝ事となり、遂に實平は其子遠平を上陸せしむ。後、和田義盛遠平を伴ひ身方に加はり、先の愁嘆は悦の酒宴となりてめでたく收ろ。（四番目）

シテ　土肥次郎實平　　子方　土肥遠平　　ツレ　源頼朝
ツレ　岡崎義實　　ツレ　四人　　ワキ　和田義盛

シテ次第謠「身は捨小舟うらみても、身は捨小舟うらみても、かひなきや憂き世なるらん。

頼朝詞「是は兵衞佐頼朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戰に味方打負け、餘りに無勢に候程に、一先安房上總の方へ開かばやと存じ候。如何に土肥の次郎。シテ詞「御前に

うらみても云々—浦、貝の意をかけて海の縁語を用ひたり

石橋山—相摸國足柄下郡にあり

目を引き云々—時分はよしと合圖をなすこと

弓矢のいはれ—武道の名譽

シテ謠「さるほどに〱、地謠「折こそよしとて脱ぎおく獅子頭、又は八撥を、打てや打てと、目を引き袖を振り、立ち舞ふ氣色に戯れよりて、敵を手ごめにしたりけり。

地謠「この年月のうらみのすゑ、いまこそ晴るれ望月よとて、おもふかたきを討つたりけり。

キリ地謠「かくて本望遂げぬれば、かくて本望遂げぬれば、後本領に立ち歸り、子孫に傳へ今の世に、その名隠れぬ御事は、弓矢のいはれなりけり、弓矢のいはれなりけり。

獅子團亂旋－樂名にて祕なり

の時分にて候に、是なる幼き者がいざ討たうと申し候程に候よ。シテ詞「子細を御存じ候はぬ程に尤にて候。此者の謠を申したる後には、又幼き者八撥を打ち候。その八撥を打たうずると申す事にて候。從者詞「日本一の事やがて打たせうずるにて候。いかに申し上げ候。是なる幼き者が八撥を打つべき由を申し候。ワキ詞「急いで打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか。子詞「獅子舞を御所望候へ。ワキ詞「あら面白の事を申すものかな、いかに亭主、是なる幼き者の申すは、亭主は獅子舞が上手なる由を申し候。そと一さし舞ひ候へ。シテ詞「是は幼き者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候。ワキ詞「ひらに舞うて見せ候へ。シテ詞「此上は御意にて候程に、そと御前にて舞はうずるにて候。このまゝにては如何にて候間、獅子頭をかづきて參らうずるにて候、其間に此幼き者に八撥を打たせ候べし。皆々かう渡り候へ、地謠「獅子團亂旋は時を知る。雨村雲や騷ぐらん。(獅子舞)あまりに祕曲の面白さに、あまりに祕曲の面白さに、猶々廻る盃の、醉を勸めばいとゞなほ、眠も來るばかりなり。

たる處を御謠ひ候へ。

クリ、ツレ謠「夫れ迦陵頻伽は卵の内にして聲諸鳥にすぐれ、地謠「鷲といふ鳥は小さけれども、虎を害する力あり。ツレ、サシ謠「こゝに河津三郎が子に、一萬箱王とて、兄弟の人のありけるが、地謠「五つや三つの頃かとよ、父を從弟に討たせつゝ、既に年ふり日を重ね、七つ五つになりしかば、いとけなかりし心にも、父の敵を討たばやと、思の色に出づるこそ、げに哀には覺ゆれ。クセある時おとゞひは、持佛堂に參りて、兄の一萬香を燒き、花を佛に供ずれば、弟の箱王は、本尊をつくぐ〵と守りて、いかに兄御前聞召せ、本尊の名をば我が敵、工藤と申し奉り、劍を提げ繩を持ち、我等を睨みて、立たせ給ふが憎ければ、走りかゝりて御首を、打ち落さんと申せば、兄の一萬これを聞きて、ツレ謠「いはけなやいかなる事ぞ佛をば、地謠「不動と申し、敵をば工藤といふを知らざるか。さては佛にてましますかと、拔いたる刀を鞘にさし、赦させ給へ南無佛、敵を討たせ給へや。

子詞「いざ討たう。從者詞「あう討たうとは。シテ詞「暫く候。何事を御騷ぎ候ぞ。從者詞「御用心

迦陵頻迦—極樂淨土にすむ美聲の鳥

不動と申し—不動と工藤とを混じて滑稽の意を含ましむ

御下向にて候間、御祝ひの爲に酒を持たせて參りて候。然るべきやうに御申し候へ。從者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。この屋の亭主御下向めでたき由申し候ひて、御樽を持たせ參りて候。ワキ詞「此方へと申せ。從者詞「畏つて候。此方へ御參り候へ。又是なる人達はいかなる人にて候ぞ。シテ詞「さん候是はこの宿に候盲御前にて候。かやうの御旅人の御著の時は、罷り出で謠などを申し候。御前にてそと御謠はせ候へ。從者詞「日本一の事にて候。やがて申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。ワキ詞「何事ぞ。從者詞「あれに候は、この宿にある盲御前にて候が、けしからず面白く謠ふ由を申し候。謠はせられ候へ。ワキ詞「汝所望し候へ、從者詞「畏つて候。なう是なる人達、御所望にて候ぞ面白からんずる處を一節御謠ひ候へ。ツレ詞「一萬箱王が親の敵を討つたる處を謠ひ候ふべし。從者詞「いやいや思ひも寄らぬ事にて候。ワキ詞「何事を申すぞ。從者詞「是なる人達に謠を所望仕り候へば、一萬箱王が親の敵討つたる所を謠はうずる由申され候程に、御前にてはいかゞと存じいやと申して候。ワキ詞「何の苦しう候べき急いで謠はせ候へ。從者詞「さらば今の仰せられ

達せさせ参らせうずるにて候。御心やすく思召され候へ。きつと思案仕りたる事の候。今頃この宿にはやり候ものは盲御前にて候。何の苦しう候べき、夜にまぎれ杖にすがり、花若殿に御手を引かれさせ給ひ、盲の振舞にて座敷へ御出で候へ。某彼の者に酒を勧め候べし。又何にても候へ御謡ひあれと申し候はゞ、そと御謡ひ候へ。花若殿は八撥を御打ちあらうずるにて候。某は獅子舞をまなび、其まぎれに近づきて、本望を遂げさせ申さうるずにて候。ツレ詞「ともかくもよきやうに計らひて給はり候へ。シテ詞「何事も某に御まかせ候へ。

ツレ、サシ謡「嬉しやな望みし事の叶ふよと、盲の姿に出で立てば、子謡「習はぬ業も父のため、ツレ謡「竹の細杖つきつれて、地謡「彼の蟬丸の古へ、彼の蟬丸の古へ、たどりたどるも遠近の、道のほとりに迷ひしも、今の身の上も思ひはいかで劣るべき。かゝる憂き身の業ながら、盲目の身の習、歌聞召せや旅人よ。歌聞召せや人々よ。

シテ詞「いかに申すべき事の候。従者詞「何事にて候ぞ。シテ詞「此屋の亭主にて候が、めでたき

御本望―欲討のこと

ぎ候間、近江國守山の宿に著きて候。今夜はこの宿に泊らばやと存じ候。いかに誰かある。従者詞「御前に候。ワキ詞「今夜はこの宿にとまるべし、宿を取り候へ。又存ずる子細のある間、某が名をば申すまじく候。従者詞「畏つて候。いかに此屋の主の渡り候か。シテ詞「誰にて御座候ぞ。従者詞「是は信濃國へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ。シテ詞「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ぞ。従者詞「是は信濃國に隠れもなき大名、望月の秋長殿では御座ないぞ。シテ詞「苦しからず候、此方へ御入り候へ。従者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。此方へ御通り候へ。シテ詞「言語道斷の事。我頼み申して候人の北の御方、同く御子息花若殿この屋に留め申して候處に、花若殿御親の敵、望月が泊りて候事は候。やがてこの由申し上げばやと存じ候。や、いかに申し候。不思議なる事の候。今夜此處に望月が著きて候。子詞「何望月と申すか。シテ詞「暫く、あたり近く候。まづ靜まつて聞召され候へ。只今申す如く、望月がこの屋に泊りて候。是は天の與ふる所と存じ候。如何にもして今夜の内に、御本望

緩怠なき由―不都合無きこと
安堵の御教書―本領に落著くべき指令

古へ御目にかゝりたる様に存じ候。ツレ詞「いや是は行方もなき者にて候程に、思ひもよらぬ事にて候。シテ詞「何を御包み候ぞ。まづ某名のつて聞かせ申し候べし。是こそ古へ御内に召使はれ候ひし、小澤の刑部友房にて候へ。ツレ謠「さては古の、小澤の刑部友房か。あら懐やとばかりにて涙に咽ぶばかりなり。子謠「父に逢ひたることゝちして、花若小澤に取りつけば、シテ謠「別れし主君の面影の、殘るも今は恨めしや。子謠「こはそも夢か現かと、主從手に手を取りかはし、上歌地謠「今までは、行方も知らぬ旅人の、行方も知らぬ旅人の、三世の契の主從と、頼む情も是なれや。げに奇縁ある我等かな。げに奇縁ある我等かな。シテ詞「あれなる一間に御入りあつて御休み有らうずるにて候。

ワキ次第謠「歸る嬉しき故郷に、歸る嬉しき故郷に、誰憂き旅と思ふらん。詞「是は信濃國の住人、望月の何某にて候。さても同國の住人、安田の庄司友治と申す者を、某が手にかけ生害させて候科により、この十三年が間在京仕り候處に、されども緩怠なき由聞召し開かれ、安堵の御教書を賜はり悦びの色をなし、只今本國信濃に下向仕り候。急

從類―家來などをいふ
撫子―子供のことその名の花若に續けていふ

信濃國の住人、安田庄司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は、同國の住人望月の秋長に、あへなく討れ給ひし後は、多かりし從類も散り〴〵になり、頼む木蔭も撫子の、花若ひとり隱し置かんと、敵の所縁の恐しさに、思ひ子を誘ひ立ち出づる。ツレ子方下歌謠「何くとも定ぬ旅を信濃路や、上歌月を友寢の夢ばかり、月を友寢の夢ばかり、名殘を忍ぶ故郷の、淺間の煙立ち迷ふ、草の枕の夜寒なる、旅寢の床の憂き涙、守山の宿に著きにけり。守山の宿に著きにけり。

ツレ詞「急ぎ候程に、近江國守山の宿に著きて候、此所にて宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内じ申候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「是は信濃國より上る者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「安き間の事にて候。此方へ御入り候へ。不思議やな是に留め申して候御方を、いかなる人ぞと存じて候へば、某が古への主君の北の御方、幼き人は御子息花若殿には御座候は如何に。あら痛はしの御有樣や候。やがて某と名のつて力を付け申さばやと存じ候。いかにお旅人に申すべき事の候。信濃國よりと仰せ候につきて、

望月（もちづき）

梗概

小澤刑部友房といふもの、近江守山にて宿屋を營む。こゝに本の主安田庄司の妻子泊る。かゝる處に、二人敵なる望月秋長亦來合せたり。友房計略を廻らし、酒宴に事よせ、主の妻を瞽女として謠はせ、子に鞨鼓を打たせ、又自らも獅子舞をなして秋長に近づき、遂に討取りて本望を遂ぐる筋なり。（重習）

シテ　小澤刑部友房　ツレ　安田庄司の妻　子方　花若
ワキ　望月秋長　狂言　望月從者

シテ詞「かやうに候者は、近江國守山の宿 甲屋の亭主にて候。さても某本國は信濃國の者にて候が、さる子細候ひてこの甲屋の亭主となり、往來の旅人を留め申して身命を繼ぎ候。今日も旅人の御通り候はゞ、御宿を申さばやと存じ候。

ツレ、子方、次第謠「波の浮鳥住む程も、波の浮鳥住む程も、下安からぬ心かな。ツレ、サシ謠「是は

外十三

七騎落

梗概

頼朝、石橋山の戰に敗れ、安房上總の方へ落ちんとす。乘船の砌、主從八騎となれるは、祖父が都落の折に同じくして不吉なりとて、誰か一人取殘さるゝ事となり、遂に實平は其子遠平を上陸せしむ。後、和田義盛遠平を伴ひ身方に加はり、先の愁嘆は悦の酒宴となりてめでたく收る。（四番目）

シテ　土肥次郎實平　子方　土肥遠平　ツレ　源頼朝
ツレ　岡崎義實　ツレ　四人　ワキ　和田義盛

シテ次第謠「身は捨小舟うらみても、身は捨小舟うらみても、かひなきや憂き世なるらん。

頼朝詞「是は兵衛佐頼朝とは我が事なり。さても昨日石橋山の合戰に味方打負け、餘りに無勢に候程に、一先安房上總の方へ開かばやと存じ候。如何に土肥の次郎。シテ詞「御前に

うらみても云々ー浦、貝の意をかけて海の縁語を用ひたり
石橋山ー相摸國足柄下郡にあり

目を引き云々—時分はよしと合圖をなすこと

弓矢のいはれ—武道の名譽

シテ謠「さるほどに〳〵、地謠「折こそよしとて脱ぎおく獅子頭、又は八撥を、打てや打てと、目を引き袖を振り、立ち舞ふ氣色に戯れよりて、敵を手ごめにしたりけり。

地謠「この年月のうらみのすゑ、いまこそ晴るれ望月よとて、おもふかたきを討つたりけり。

キリ地謠「かくて本望遂げぬれば、かくて本望遂げぬれば、後本領に立ち歸り、子孫に傳へ今の世に、その名隱れぬ御事は、弓矢のいはれなりけり、弓矢のいはれなりけり。

獅子團亂旋―樂名にて祕なり

の時分にて候に、是なる幼き者がいざ討たうと申し候程に候よ。シテ詞「子細を御存じ候はぬ程に尤にて候。此者の謠を申したる後には、又幼き者八撥を打ち候。その八撥を打たうずると申す事にて候。從者詞「日本一の事やがて打たせうずるにて候。いかに申し上げ候。是なる幼き者が八撥を打つべき由を申し候。ワキ詞「急いで打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか。子詞「獅子舞を御所望候へ。ワキ詞「あら面白の事を申すものかな、いかに亭主、是なる幼き者の申すは、亭主は獅子舞が上手なる由を申し候。そと一さし舞ひ候へ。シテ詞「是は幼き者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候。ワキ詞「ひらに舞うて見せ候へ。シテ詞「此上は御意にて候程に、そと御前にて舞はうずるにて候。このまゝにては如何にて候間、獅子頭をかづきて參らうずるにて候、其間に此幼き者に八撥を打たせ候べし。皆々かう渡り候へ、地謠「獅子團亂旋は時を知る。雨村雲や騷ぐらん。(獅子舞)あまりに祕曲の面白さに、あまりに祕曲の面白さに、猶々廻る盃の、醉を勸めばいとどなほ、眠も來るばかりなり。

迦陵頻迦—極樂淨土にすむ美聲の鳥

不動と申し—不動と工藤とを混じて滑稽の意を含ましむ

たる處を御謠ひ候へ。

クリ、ツレ謠「夫れ迦陵頻伽は卵の内にして聲諸鳥にすぐれ、地謠「鷙といふ鳥は小さけれども、虎を害する力あり。ツレ、サシ謠「こゝに河津三郎が子に、一萬箱王とて、兄弟の人のありけるが、地謠「五つや三つの頃かとよ、父を從弟に討たせつゝ、既に年ふり日を重ね、七つ五つになりしかば、いとけなかりし心にも、父の敵を討たばやと、思の色に出づるこそ、げに哀には覺ゆれ。クセある時おとゞひは、持佛堂に參りて、兄の一萬香を燒き、花を佛に供ずれば、弟の箱王は、本尊をつく〴〵と守りて、いかに兄御前聞召せ、本尊の名をば我が敵、工藤と申し奉り、劒を提げ縄を持ち、我等を睨みて、立たせ給ふが憎ければ、走りかゝりて御首を、打ち落さんと申せば、兄の一萬これを聞きて、ツレ謠「いはけなやいかなる事ぞ佛をば、地謠「不動と申し、敵をば工藤といふを知らざるか。さては佛にてましますかと、拔いたる刀を鞘にさし、赦させ給へ南無佛、敵を討たせ給へや。

子詞「いざ討たう。從者詞「あう討たうとは。シテ詞「暫く候。何事を御騒ぎ候ぞ。從者詞「御用心

御下向にて候間、御祝ひの爲に酒を持たせて參りて候。然るべきやうに御申し候へ。從者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。この屋の亭主御下向めでたき由申し候ひて、御樽を持たせ參りて候。ワキ詞「此方へと申せ。從者詞「畏つて候。此方へ御參り候へ。又是なる人達はいかなる人にて候ぞ。シテ詞「さん候是はこの宿に候盲御前にて候。かやうの御旅人の御著の時は、罷り出で謠などを申し候。御前にてそと御謠はせ候へ。從者詞「日本一の事にて候。やがて申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。ワキ詞「何事ぞ。從者詞「あれに候は、この宿にある盲御前にて候が、けしからず面白く謠ふ由を申し候。謠はせられ候へ。ワキ詞「汝所望し候へ、從者詞「畏つて候。なう是なる人達、御所望にて候ぞ面白からんずる處を一節御謠ひ候へ。ツレ詞「一萬箱王が親の敵を討つたる處を謠ひ候ふべし。從者詞「いやいや思ひも寄らぬ事にて候。ワキ詞「何事を申すぞ。從者詞「是なる人達に謠を所望仕り候へば、一萬箱王が親の敵討つたる所を謠はうずる由申され候程に、御前にてはいかゞと存じいやと申して候。ワキ詞「何の苦しう候べき急いで謠はせ候へ。從者詞「さらば今の仰せられ

達せさせ參らせうずるにて候。御心やすく思召され候へ。きつと思案仕りたる事の候。今頃この宿にはやり候ものは盲御前にて候。何の苦しう候べき、夜にまぎれ杖にすがり、花若殿に御手を引かれさせ給ひ、盲の振舞にて座敷へ御出で候へ。某彼の者に酒を勸め候べし。又何にても候へ御謠ひあれと申し候はゞ、そと御謠ひ候へ。花若殿は八撥を御打ちあらうずるにて候。某は獅子舞をまなび、其まぎれに近づきて、本望を遂げさせ申さうるずにて候。ツレ詞「ともかくもよきやうに計らひて給はり候へ。シテ詞「何事も某に御まかせ候へ。

ツレ、サシ謠「嬉しやな望みし事の叶ふよと、盲の姿に出で立てば、子謠「習はぬ業も父のため、ツレ謠「竹の細杖つきつれて、地謠「彼の蟬丸の古へ、彼の蟬丸の古へ、たどりたどるも遠近の、道のほとりに迷ひしも、今の身の上も思ひはいかで劣るべき。かゝる憂き身の業ながら、盲目の身の習、歌聞召せや旅人よ。歌聞召せや人々よ。

シテ詞「いかに申すべき事の候。從者詞「何事にて候ぞ。シテ詞「此屋の亭主にて候が、めでたき

ぎ候間、近江國守山の宿に著きて候。今夜はこの宿に泊らばやと存じ候。いかに誰かある。従者詞「御前に候。ワキ詞「今夜はこの宿にとまるべし、宿を取り候へ。又存ずる子細のある間、某が名をば申すまじく候。従者詞「畏つて候。いかに此屋の主の渡り候か。シテ詞「誰にて御座候ぞ。従者詞「是は信濃國へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ。シテ詞「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ぞ。従者詞「是は信濃國に隱れもなき大名、望月の秋長殿では御座ないぞ。シテ詞「苦しからず候、此方へ御入り候へ。従者詞「心得申し候。いかに申し上げ候。此方へ御通り候へ。シテ詞「言語道斷の事。我頼み申して候人の北の御方、同く御子息花若殿この屋に留め申して候處に、花若殿御親の敵、望月が泊りて候事は候。やがてこの由申し上げばやと存じ候。や、いかに申し候。不思議なる事の候。今夜此處に望月が著きて候。子詞「何望月と申すか。シテ詞「暫く、あたり近く候。まづ靜まつて聞召され候へ。只今申す如く、望月がこの屋に泊りて候。是は天の與ふる所と存じ候。如何にもして今夜の内に、御本望

古へ御目にかゝりたる様に存じ候。ツレ詞「いや是は行方もなき者にて候程に、思ひもよらぬ事にて候。シテ詞「何を御包み候ぞ。まづ某名のつて聞かせ申し候べし。是こそ古へ御内に召使はれ候ひし、小澤の刑部友房にて候へ。ツレ謠「さては古の、小澤の刑部友房か。あら懷やとばかりにて涙に咽ぶばかりなり。子謠「父に逢ひたることゝちして、花若小澤に取りつけば、シテ謠「別れし主君の面影の、殘るも今は恨めしや。子謠「こはそも夢か現かと、主從手に手を取りかはし、上歌地謠「今までは、行方も知らぬ旅人の、行方も知らぬ旅人の、三世の契の主從と、頼む情も是なれや。げに奇緣ある我等かな。げに奇緣ある我等かな。シテ詞「あれなる一間に御入りあつて御休み有らうずるにて候。

ワキ次第謠「歸る嬉しき故鄕に、歸る嬉しき故鄕に、誰憂き旅と思ふらん。詞「是は信濃國の住人、望月の何某にて候。さても同國の住人、安田の庄司友治と申す者を、某が手にかけ生害させて候科により、この十三年が間在京仕り候處に、されども緩怠なき由聞召し開かれ、安堵の御教書を賜はり悅びの色をなし、只今本國信濃に下向仕り候。急

緩怠なき由―不都合無きこと
安堵の御教書―本領に落著くべき指令

従類―家來などをいふ
撫子―子供のことその名の花若に續けていふ

信濃國の住人、安田庄司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は、同國の住人望月の秋長に、あへなく討れ給ひし後は、多かりし從類も散り〴〵になり、賴む木蔭も撫子の、花若ひとり隱し置かんと、敵の所緣の恐しさに、思ひ子を誘ひ立ち出づる。ツレ子方下歌謠「何くとも定ぬ旅を信濃路や、上歌月を友寢の夢ばかり、月を友寢の夢ばかり、名殘を忍ぶ故鄕の、淺間の煙立ち迷ふ、草の枕の夜寒なる、旅寢の床の憂き涙、守山の宿に著きにけり。守山の宿に著きにけり。

ツレ詞「急ぎ候程に、近江國守山の宿に著きて候、此所にて宿を借らばやと思ひ候。いかに此屋の内へ案内し申候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「是は信濃國より上る者にて候、一夜の宿を御貸し候へ。シテ詞「安き間の事にて候。此方へ御入り候へ。不思議やな是に留め申して候御方を、いかなる人ぞと存じて候へば、某が古への主君の北の御方、幼き人は御子息花若殿には御座候は如何に。あら痛はしの御有樣や候。やがて某と名のつて力を付け申さばやと存じ候。いかにお旅人に申すべき事の候。信濃國よりと仰せ候につきて、

望月

概梗

小澤刑部友房といふもの、近江守山にて宿屋を營む。こゝに本の主安田庄司の妻子泊る。かゝる處に、二人敵なる望月秋長亦來合せたり。友房計略を廻らし、酒宴に事よせ、主の妻を瞽女として謠はせ、子に鞨鼓を打たせ、又自らも獅子舞をなして秋長に近づき、遂に討取りて本望を遂ぐる筋なり。(重習)

シテ　小澤刑部友房　ツレ　安田庄司の妻　子方　花若
ワキ　望月秋長　狂言　望月從者

シテ詞「かやうに候者は、近江國守山の宿　甲屋の亭主にて候。さても某本國は信濃國の者にて候が、さる子細候ひてこの甲屋の亭主となり、往來の旅人を留め申して身命を繼ぎ候。今日も旅人の御通り候はゞ、御宿を申さばやと存じ候。

ツレ、子方、次第謠「波の浮鳥住む程も、波の浮鳥住む程も、下安からぬ心かな。ツレ、サシ謠「是は

の鷺、心嬉しく飛び上り、心嬉しく飛び上りて、行方も知らずぞなりにける。

宣命—みことのり

に、地謡「ねらひよりねらひよりて、岩間の陰より取らんとすれば、この鷺驚き羽風を立てゝ、ばつとあがれば力なく、手を空しうして、仰ぎつゝ走り行きて、汝よ聞け勅諚ぞや、勅諚ぞと呼ばはりかくれば、この鷺立歸つて、本の方に飛び下り、羽を垂れ地に伏せば、抱きとり叡覽に入れ、實に忝き王威の恵、有難や賴もしやと、みな人感じけり。實にや佛法王法のかしこき時の例とて、飛ぶ鳥までも地に落ちて、叡慮に適ふ有難や、叡慮に適ふ有難や。猶々君の御恵、仰ぐ心もいやましに、御酒を勸めて諸人の、舞樂を奏し面々に、鷺の藏人、召し出だされてさまぐの、御感のあまり爵を賜び、共になさるゝ五位の鷺、さも嬉しげに立ち舞ふや、シテ謡「洲崎の鷺の羽を垂れて、地謡「松も磯馴るゝけしきかな。

シテ謡「畏き恵は君道の、地謡「かしこき恵は君道の、四海に翔る翅まで、靡かぬ方もなかりければ、まして鳥類畜類も、王威の恩徳のがれぬ身ぞとて、勅に從ふこの鷺は、神妙神妙放せや放せと、重ねて宣旨を下されければ、げに忝き宣命を含めて、放せばこ

神泉苑―天皇の御遊覽所又雨乞の御祈禱ある所なり

三千世界眼前盡十二因緣心裏空―竹生島明神の御作と傳ふる詩

普天の下云々―詩經に普天之下莫レ非二王土一率土之濱莫レ非二王臣一を引く

ならし通ふらん。是は妙なる御幸とて、小車の、直なる道を廻らずも、同じ雲居の大内や、神泉苑に著きにけり。神泉苑に著きにけり。

王サシ謡「面白や孤島峙つて波悠々たるよそほひ、眞に湖水の浪の上、三千世界は眼の前に盡きぬ、十二因緣は心の裏に空し。げに面白きけしきかな。上歌地謡「鷺の居る、池の汀に松舊りて、池の汀に松舊りて、都にも似ぬ住居はおのづから、實にめづらかに面白や、或は詩歌の舟を浮め、又は糸竹の、聲綾をなす曲水の、手まづ遮る盃も浮むなり。あら面白の池水やな。あら面白の池水やな。

王詞「いかに誰かある。ワキツレ詞「御前に候。王詞「あの洲崎の鷺をりから面白う候。誰にても取りて參れと申し候。ワキツレ詞「畏つて候。いかに藏人、あの洲崎の鷺をりから面白う思召され候間、取りて參らせよとの宣旨にて候。ワキ詞「宣旨畏つて承り候さりながら、かれは鳥類飛行の翅、いかゞはせんと休らへば、ワキツレ謡「よしやいづくも普天の下、率土の内は王地ぞと、ワキ謡「思ふ心を便にて、ワキツレ謡「次第々々に、ワキ謡「蘆間の陰

鷺

梗概

醍醐天皇の御代、神泉苑に行幸あり。をりから洲崎の鷺を捕れとの勅諚あり。藏人之を捕へしを御感のあまり爵を賜ひ、鷺も共に五位になさるゝ事を作る。源平盛衰記の本文に據れり。（重習）

シテ　鷺　　シテツレ　帝王
ワキ　藏人　　ワキツレ　大臣

ワキツレ一聲謠「久方の、月の都の明けき、光も君の惠かな。サシ「夫れ明君の御代のしるし、萬機の政すなほにして、四季をり／＼の御遊までも、捨て給はざる叡慮とかや、王謠「夫れ青陽の春になれば、ワキツレ謠「ところ／＼の花見の御幸、王謠「秋は時雨の紅葉狩、ツレワキ謠「日數も積る雪見の行幸、王謠「寒暑時を違へざれば、ワキツレ謠「御遊のをりも、王謠「時を得て、上歌「今は夏ぞと夕涼み、今は夏ぞと夕涼み、松のこなたの道芝を、誰踏み、

大をそ鳥—をそは偈の意萬葉集に證歌あり

や、そもかゝる人の心か。シテ謠「烏てふ、大をそ鳥を心して、地謠「うつし人とは誰かいふ、草木も時を知り、鳥獸も心あるや。げにまこと喩へつる、蘇武は旅雁に文を附け、萬里の南國に至りしも、契の深き志、淺からざりし故ぞかし。君いかなれば旅枕、夜寒の衣うつつとも、夢ともせめてなど、思ひ知らずや恨めしや

キリ地謠「法華讀誦の力にて、法華讀誦の力にて、幽靈まさに成佛の、道明らかになりにけり。是も思へば假初に打ちし、砧の聲の内、開くる法の華心、菩提の種となりにけり。菩提の種となりにけり。

三瀬川—三途の川
標梅云々—詩經に出づ男女の婚期のことを述ぶ
羊の歩み—遲きこと
隙の駒—疾きことのたとへ

る道と聞くからに、梓の弓の裏弭に、言葉をかはすあはれさよ。言葉をかはすあはれさよ。

後シテ謡「三瀬川、沈み果てにしうたかたの、あはれはかなき身の行方かな。標梅花の光を並べては、娑婆の春をあらはし、地謡「跡のしるべの燈は、シテ謡「眞如の秋の月を見する。さりながら我は邪婬の業深き、思の煙の立居だに、安からざりし報の罪の、亂るゝ心のいとせめて、獄卒阿防羅刹の、笞の數の隙もなく、うてや〱と報の砧、怨めしかりける因果の妄執、地謡「因果の妄執の思の涙、砧にかゝれば、涙はかへつて火焰となつて、胸の煙の焰に咽べば、叫べど聲が出でばこそ、砧も音なく松風も聞えず、呵責の聲のみ恐しや。上歌羊の歩み隙の駒、羊の歩み隙の駒、うつりゆくなる六つの道、因果の小車の、火宅の門を出でざれば、廻り廻れども、生死の海は離るまじや、あぢきなの浮世や。シテ地「恨は葛の葉の、地謡「恨は葛の葉の、歸りかねて執心の面影の、恥かしや思ひ夫の、二世と契りてもなほ、末の松山千代までと、かけし頼みはあだ浪の、あらよしなや空言

梶の葉―歌書きて七夕に奉る

八月九月正長夜千聲萬聲無了時。―白氏文集の句

さきだたぬ云々―古今集の歌を引く

うよ。彼の七夕の契には、一夜ばかりの狩衣、天の河波立ち隔て、逢ふ瀬かひなき浮舟の、梶の葉もろき露涙、二つの袖やしをるらん。水陰草ならば、波うち寄せようたかた。

シテ謡「文月七日の曉や、地謡「八月九月、實に正に長き夜、千聲萬聲の、憂きを人に知らせばや。月の色風のけしき、影におく霜までも、心凄き折ふしに、砧の音夜嵐、悲しみの聲蟲の音、交りて落つる露涙、ほろ〳〵はら〳〵と、いづれ砧の音やらん。

ツレ詞「いかに申し候。都より人の參りて候が この年の暮にも御下りあるまじきにて候。

シテ謡「怨めしやせめては年の暮をこそ、僞ながら待ちつるに、さてははや誠に變り果て給ふぞや。地謡「思はじと思ふ心も弱るかな。上歌聲も枯野の蟲の音の、亂るゝ草の花心、風狂じたる心地して、病の床に伏し沈み、つひに空しくなりにけり。つひに空しくなりにけり。（中入）

ワキ詞「無慙やな三年過ぎぬる事を恨み、引き別れにし妻琴の、つひの別れとなりけるぞや。上歌謡さきだたぬ、悔の八千度百夜草、悔の八千度百夜草の、陰よりも二度、歸りく

宮漏高低風北廻隣砧緩急月西傾―新撰朗詠集の句

故郷の云々―砧をうちながら松風に呼びかけて閨怨の情を述べたり文藻味ふべし

と、ツレ謠「夕霧立ちより諸共に、シテ謠「怨の砧、ツレ謠「うつとかや。

次第地謠「衣に落つる松の聲、衣に落ちて松の聲、夜寒を風や知らすらん。シテ一聲謠「音づれの、稀なる中の秋風に、地謠「憂きを知らする夕かな、シテ謠「遠里人もながむらん。地謠「誰が世と月はよも訪はじ。シテ、サシ謠「面白の折からや、頃しも秋の夕つ方、地謠「牡鹿の聲も心凄く、見ぬ山風を送り來て、梢は何れ一葉散る、空冷しき月影の、軒のしのぶにうつろひて、シテ謠「露の玉簾かゝる身の、地謠「思をのぶる夜すがらかな。宮漏高く立ちて風北に廻り、シテ謠「隣砧緩く急にして月西に流る。地謠「蘇武が旅寢は北の國、是は東の空なれば、西より來る秋の風の、吹き送れと、間遠の衣擣たうよ。故郷の、軒端の松も心せよ、己が枝々に、嵐の音を殘すなよ。今の砧の聲添へて、君がそなたに吹けや風。餘りに吹きて松風よ、わが心、通ひて人に見ゆならば、その夢を破るな。破れて後はこの衣、誰か來もて訪ふべき。來て訪ふならばいつまでも、衣は裁ちも更へなん、夏衣、うすき契は忌まはしや。君が命は長き夜の、月にはとても寢られぬに、いざ〳〵衣擣た

人目も草も―古今集に「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば」人目かるとは人の訪ひ來ぬこと

僞の―同集の歌末句嬉しからまし

臥猪の床―猪のしゝの寢所

は心の習ひぞかし。下歌地謠「鄙のすまひに秋の暮れ、人目も草もかれ〴〵の、契も絶えはてぬ。何を頼まん身のゆくへ。上歌三年の秋の夢ならば、夢ならば、憂きはそのまゝ覺めもせで思出は身に殘り、昔は變り跡もなし。實にや僞の、なき世なりせば如何ばかり、人の言の葉嬉しからん。愚の心やな、愚なりける頼みかな。

シテ詞「あら不思議や、何やらんあなたに當つて物音の聞え候。あれは何にて候ぞ。ツレ詞「あれは里人の砧擣つ音にて候。シテ詞「げにや我が身の憂きまゝに、古事の思ひ出でられて候ぞや。唐に蘇武といひし人、胡國とやらんに捨て置れしに、故郷に留め置きし妻や子、夜寒の寢覺を思ひやり、高樓に上つて砧を擣つ。志の末通りけるか、萬里の外なる蘇武が旅寢に、故郷の砧聞えしとなり。謠妾も思や慰むと、とてもさみしきくれはとり、綾の衣を砧にうちて、心を慰まばやと思ひ候。ツレ詞「いや砧などは賤しき者の業にてこそ候へ、さりながら御心慰めん爲にて候はゞ、砧をこしらへて參らせ候べし。シテ謠「いざいざ砧うたんとて、馴れて臥猪の床の上、ツレ謠「涙かたしく狹筵に、シテ謠「思をのぶる便ぞ

蘆屋の里—筑前遠賀郡

比目—比目魚雌雄二つ目を竝べて水中に住むといふ

日も添ひて、旅の衣の日も添ひて、いく夕暮の宿ならん、夢も數そふ假枕、明かし暮らして程もなく、蘆屋の里に著きにけり。蘆屋の里に著きにけり。詞急ぎ候程に、蘆屋の里に著きて候。やがて案内を申さうずるにて候。いかに誰か御入り候。都より夕霧が參りたる由御申し候へ

シテ、サシ謠「夫れ鴛鴦の衾の下には、立ち去る思を悲しみ、比目の枕の上には、波を隔つる愁有り。ましてや深き妹背の中、同じ世をだに忍草、我は忘れぬ音を泣きて、袖に餘れる涙の雨の、晴間稀なる心かな。

ツレ詞「夕霧が參りたる山それ〳〵御申し候へ。シテ詞「何夕霧と申すか、人までもあるまじ此方へ來り候へ。いかに夕霧珍しながら怨めしや。人こそ變り果て給ふとも、風の行方のたよりにも、などや音づれ無かりけるぞ。ツレ謠「さん候とくにも參りたくは候ひつれども、御宮仕の隙も無くて、心より外に三年まで、都にこそは候ひしが。シテ謠「なに都ずまひを心の外とや、思ひやれ實には都の花ざかり、なぐさみ多きをり〳〵にだに、憂き

砧

梗概

蘆屋の何某、訴訟のため在京してはや三年も經たればとて、侍女夕霧を下して、古里の妻を訪はしむ。妻は思のあまりに、砧を擣ちて閨怨の情を遣る。かくて病みて死せり。後幽靈となりて現じ、夫の弔ひを受けて成佛す。（重習）

シテ　蘆屋の妻（後は其幽靈）　前ツレ　侍女夕霧
ワキ　蘆屋某

ワキ詞「是は九州蘆屋の何某にて候。我自訴の事あるにより在京仕りて候。假初の在京と存じ候へども、當年三歳になりて候。あまりに故郷の事心もとなく候程に、召使ひ候夕霧と申す女を下さばやと思ひ候。いかに夕霧、あまりに故郷心もとなく候程に、おこどを下し候べし。この年の暮には必ず下るべき由心得て申し候へ。ツレ詞「さらばやがて下り候べし。かならずこの年の暮には御下りあらうずるにて候。道行謠「この程の、旅の衣の

吉野川—古今集の歌末句こひはしぬとも

言よせ妻—言葉をよせたる妻

玉襷—枕詞

葉守の神—木々を守る神

候べき、そと御出であつて、彼の者の姿を一目御覽ぜられ候へ。シテツレ詞「戀よ戀、我が中空になすな戀、戀には人の死なぬものかは。無慚の心やな。ワキ詞「是はあまりに忝き御諚にて候。謡「はや〳〵立たせおはしませ。シテツレ詞「いや立たんとすれば磐石に押されて、更に立つべきやうもなし。地謡「報いは常の世の習ひ。

後シテ謡「吉野川岩切り通し行水の、音には立てじ戀ひ死にし、一念無量の鬼となるも、只よしなやな誠なき、言よせ妻の空賴め。地謡「げにもよしなき心かな。シテ謡「浮寢のみ、三世の契の滿ちてこそ、石の上にも座すといふに、我はよしなや逢ひ難き、巖の重荷持たるゝものか。あら恨しや葛の葉の、玉襷畝傍の山の山守も、地謡「さのみ重荷は持たればこそ。シテ謡「重荷といふも思なり、地謡「淺間の煙あさましの身や、衆合地獄の重き苦み、さて懲り給へや懲り給へ。思の煙立ち別れ、思の煙立ち別れ、稻葉の山風吹亂れ、戀路の闇に迷ふとも、跡弔はゞ其恨は、霜か雪か霰か、終には跡も消えぬべしや。是までぞ姬小松の、葉守の神となりて、千代の陰を守らんや千代の陰をも守らん。

あはれてふ―古今集の歌三句何をかは末句束緒にせん

そ、苦しや獨寢の、我が手枕の肩替へて、持てども持たれぬ、そも戀は何の重荷ぞ。

シテ謠「あはれてふ、言だに無くは何をさて、戀の亂れの、束緒も絶えはてぬ。地謠「よしや戀ひ死なん。報はゞそれぞ人心。亂戀になして、思ひ知らせ申さん。

ワキ詞「何と荘司が空しくなりたると申すか。言語道斷近頃ふびんなる事にて候ぞや。總じて戀と申す事は、高き賤しき隔てぬ事にて候へどもさりながら、彼の者の戀の心を止めんとの御方便にて、重荷を作つて上を綾羅錦繍を以て美しく包みて、いかにも輕げに見せて持たせなば、彼の者思はんには、かほど輕げなる荷なれども、戀の叶ふまじき故に持たれぬぞと心得、戀の心や止まるべきとの御事にて候處に、賤しき者のかなしさは、是を持ち御庭を廻らば、御姿をまみえさせ給はん事を悦び、精力を盡し候へども、もとより重荷なれば持たれぬ事を恨み、嘆きてかやうに身を失ひ候事、返す〴〵すもふびんにこそ候へ、この山を申し上げうずるにて候。いかに申し上げ候。山科の荘司重荷を持ちかねて、御庭にて空しくなりて候。かやうの賤しき者の一念は恐しく候。何か苦しう

唐國の云々―李廣が虎と思ひて石を射し故事
荷前―年の終に十陵八墓に幣帛を奉らるゝ公事

んぼう美しき荷にてはなきか。シテ詞「げに〳〵美しき荷にて候。たとひ叶はぬ業なりとも、仰せならばさこそあるべけれ、況や是は賤しき業、謡さのみは隔てし名を聞くも。地謡「重荷なりとも逢ふ迄の、重荷なりとも逢ふ迄の、戀の持夫にならうよ。シテ謡「誰踏みそめて戀の路、地謡「巷に人の迷ふらん。シテ謡「名も理や戀の重荷、地謡「げに持ちかぬる此身かな。シテ・サシ謡「夫れ及びがたきは高き山、思の深きは綿津海の如し。地謡「何れ以て易からんや。げに心さへ輕き身の、塵の浮世にながらへて、よしなく物を思ふかな。

ロンギ地謡「思ひや少し慰むと、露のかごとを夕顔の、黄昏時も早過ぎぬ。戀の重荷を持つやらん。シテ謡「重くとも、思ひは捨てじ唐國の、虎と思へば石にだに、立つ矢の有るぞかし。いかにも輕く持たうよ。地謡「持つや荷前の運ぶなる、心ぞ君がためを知る。重くとも心そへて、持てや〳〵下人、シテ謡「よしとても、よしとても、この身は輕し徒らに、戀の奴になりはてて、亡き世なりと憂からじ、地謡「なき世に爲すもよしなやな、げには命ぞ只頼め。シテ謡「しめぢが腹立ちや、地謡「よしなき戀を菅筵、伏して見れども寢られればこ

所勞—病氣

か、忝くも女御の御姿を拜み申し、勿體なくも戀となりたる由承り候間、彼の者を召し出だし尋ねばやと存じ候。いかに誰かある。狂言詞「御前に候。ワキ詞「山科の莊司に此方へ來れと申し候へ。狂言詞「畏つて候。いかに山科の莊司の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。狂言詞「急ぎ御參りあれとの御事にて候。シテ詞「畏つて候。ワキ詞「いかに莊司、何とて此間は御庭をば淸めぬぞ。シテ詞「さん候此程所勞仕り候ひて、偖怠り申して候。シテ詞「尤もにて候。さて汝は戀をするといふは眞か。シテ詞「さやうの事をば何とて知しめされて候ぞ。ワキ詞「いや〱はや色に出でてあるぞとよ。さる間此事を忝くも女御聞召し及ばれ、急ぎ此荷を持ちて御庭を百度千度廻るならば、此間に御姿を拜ませ給ふべきとの御事なり。なんぼう有難き御諚にてはなきか。シテ詞「何と此事を聞召し及ばれ、其荷を持ちて御庭を百度千度まはれとかや。百度千度とは、百度も千度も持ちて廻らば、其間に御姿を拜まれさせ給ふべきと候や。ワキ詞「げによく心得て有るぞ。なんぼう有難き御事にてはなきか。シテ詞「さらば其荷を御見せ候へ。ワキ詞「此方へ來り候へ。是こそ戀の重荷よ。な

外十二

戀重荷

梗概

白河院の御時、山科莊司とて賤しき者、女御を戀ひ、重荷を持たしめられし苦役に身を空しくせしかば、女御いと不便に思召さるゝ所に莊司の幽靈現れ出でて述懷する事を作る。此文後花園院の御作なりと傳ふ。（重習）

シテ　山科莊司（後は其幽靈）　シテツレ　女御
ワキ　官人　狂言　下人

ワキ詞「そも〱是は白河の院に仕へ奉る臣下なり。さても我が君菊を御寵愛有つて、毎年あまたの菊を植ゑそだてられ候。又こゝに山科の莊司とて賤しき者の候。いつも菊の下葉を取らせられ候間、申しつけばやと存じ候。又承り候へば、彼の者いかなる折に

背レ燈共憐深夜月踏レ花同惜少年春—白氏文集の句

瞋恚の焰は荒磯の、波の打物抜いて、切つてかゝれば敵人は、矛を揃へてかゝり給へば、忠度相向つて打ち拂へば、そのまゝ見えず、敵を失ひあきれて立てば、天よりは火車降りかゝり、地よりは鐵刀足を貫き、立つも立たれず、居るも居られぬ修羅王の責、こは如何にあさましや。シテ謠「やゝあつてさゝ波や、地謠「やゝあつてさゝ波や、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かなと、梵天感じ給ひしより、劍の責を発れて、くら闇となりしかば、燈を背けては、共に憐む深夜の月、花を踏んでは同じく惜しむ、少年の春の夜も、早白々と明け渡れば、有りつる姿は消え〳〵と、有りつる姿は鷄籠の山、木隱れて失せにけり。あと木隱れて失せにけり。

人丸云々—古今集序の詞
留まりぬ—殘れる意
鳥の跡—文字のこと

も定めなし。シテ謠「その後天照大神の御兄、地謠「素盞嗚尊より、三十一字に定め置きて、末世末代のためしとかや。クセその故は、素盞嗚尊の、女と住み給はんとて、出雲國にいまして、大宮造せし所に、八色雲の立つを御覽じて、尊の一首の御詠かくばかり、八雲立つ、出雲八重垣妻こめに、八重垣つくるその八重垣をと、神詠もかたじけなや、今の世のためしなるべし。さてもわれ須磨の浦に、旅寢して詠めやる、明石の浦の朝霧と、よみしも思ひ知られたり。シテ謠「人丸世になくなりて、地謠「歌の事留まりぬと、紀の貫之も躬恒も、かくこそ書き置きしかども、松の葉の散り失せず、正木のかづら長く傳はり、鳥の跡あらんその程は、よも盡きせじな敷島の、歌には神も納受の、男女夫婦の媒とも、この歌の情なるべし。あら名殘惜しの夜すがらやな。

俊成謠「不思議や見れば忠度の、けしき變はりてけうとき有樣、こはそも如何なる事やらん。シテ詞「あれ御覽ぜよ修羅王の、梵天に攻め上るを、帝釋出で逢ひ修羅王を、謠もとの下界に追つ下す。地謠「すは敵陣は亂れ合ひ、すは敵陣は亂れ合ひ、をめき叫べは忠度も

六義—もと詩の六義より出づ賦比興風雅頌

九重の春に引かれ、共に詠めし花の色、我が面影や見えつらん。命只心に叶ふものならば、何か別れの物憂かるべき。詞如何に俊成卿、忠度こそこれまで參りて候へ。俊成謠「不思議やな夢現とも分ざるに、薩摩の守の御姿、現れ給ふ不思議さよ。シテ詞「さても千載集に、一首の歌を入れさせ給ふ御志は嬉しけれども、よみ人知らずと書かれし事心にかゝり候。俊成謠「尤それはさる事なれども、詞朝敵の御名を顯さんは世の憚なり、よしやこの歌あるならば、御名は隱れよもあらじ、謠御心安く思召せ。シテ謠「我もさこそとしら雪の、古き世までも歌あらば、俊成謠「其名もさすが武藏鐙、隱はあらじ我人の、シテ謠「情の末も深見草、俊成謠「引くや詠歌も心ある、シテ謠「故鄕の花といふ題にて、上歌地謠「さゝ波や、志賀の都は荒れにしを、志賀の都は荒れにしを、昔ながらの山櫻かなと、よみしも永き世の、譽を殘す詠歌かな、實にや浮世は電光、胡蝶の夢の戲れに、謠へや舞へや津の國の、なにはの事もたゞのりなり、疑はせ給ふな、われ疑はせ給ふな。
俊成、サシ謠「凡そ歌には六義あり。道の六道の衢に詠じ、地謠「千早振神代の歌は、文字の數

たゞのり―忠度に正法を掛く

前途程遠馳思於雁山之暮雲―朗詠集の句

候。如何に申し上げ候。トモ詞「何事にて有るぞ。トモ詞「岡部の六彌太忠澄の伺候申されて候
俊成詞「此方へと申し候へ。トモ詞「畏つて候。此方へ御參り候へ。ワキ詞「心得申し候。
俊成詞「いかに忠澄、さて只今は何のために來り給ひて候ぞ。ワキ詞「さん候只今參る事餘
の儀にあらず。西海の合戰に薩摩の守忠度をば、某が手に懸け失ひ申して候。御最期の
後尻籠を見候へば短册の御座候。承り候へば忠度とは、淺からぬ和歌の御値遇の由承
り候ふ間、御目に懸けばやと存じ、只今持ちて參りて候。俊成詞「此方へ賜はり候へ。謠「實
にや弓馬の道ならねど、いつしか世に名を殘し置き給ふ事のあはれさよ。何々旅宿の花
と云ふ題にて、謠「行き暮れて木の下陰を宿とせば、花や今宵の主ならまし。上歌地謠「痛はし
や忠度は、痛はしや忠度は、破戒無慙の罪を恐れ、仁義禮智信、五つの道も正しくて、
歌道に達者たり、弓矢に名をあげ給へば、文武二道のたゞのりの、船を得て彼岸の、臺
に至り給へや。臺に至り給へや。
シテ、サシ謠「前途程遠し、思ひを雁山の夕の雲に馳す、八重の汐路に沈みし身なれども、猶

俊成忠度

梗概

岡部六彌太、忠度を討取りたるに、「行きくれて」の歌を見出でしかば、それを俊成の許に届けたるに、折から忠度の幽靈も現れ出でて、修羅道の苦患を叙ぶることを作る。中に歌道の事を交へ說けり。上卷の忠度と併せ見るべし。（二番目）

シテ　平忠度　　ツレ　藤原俊成
ワキ　岡部六彌太　　トモ　俊成從者

ワキ謠「かやうに候者は、武藏國の住人、岡部の六彌太忠澄にて候。さても今度西海の合戰に、薩摩の守忠度をば、某が手に懸け失ひ申して候。御最期の後尻籠を見奉れば、短册の御座候。又承り候へば、五條の三位俊成卿と、和歌の御値遇の由申し候間、この短册を持ちて參り、俊成卿の御目にかけばやと存じ候。如何に案內申し候。トモ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「岡部の六彌太忠澄が參りたる由御申し候へ。トモ詞「心得申し

尻籠―矢を容るる器

旗さし―旗持の雜兵

業―罪の意

果ぞかなしき。ロンギ地謠「げに痛はしき物語。同くは御最期を、懺悔に語りたまへや。シテ謠「げにや最期のありさまを慙愧懺悔にあらはし、修羅道の苦患免れん。地謠「げに修羅道のくるしみの、その一念も最期より、シテ謠「聞きつるまゝの敵にて、地謠「すはや寄せくる。シテ謠「浦の波、地謠「團扇の旗は兒玉黨か、もの〳〵しといふまゝに、監物太郎が放つ矢に、敵の旗さしの、首の骨箆深に射させて、眞逆さまにどうと落つれば、シテ謠「主人とおぼしき武者、主人とおぼしき武者、新中納言を目にかけて、かけよせて討つ處を、親を討たせじと、知章かけ塞がつて、むずと組んでどうと落ち、取つて押さへて首かき切つて、起きあがる處を、又敵の郎等落ち合ひて、知章が首を取れば、終にこゝにて討たれつゝ、そのまゝ修羅の業に沈むを、思はざるに御僧の、弔ひは有難や、是ぞ眞の法の友よ、これぞ眞の知章が、跡とひてたび給へ　亡きあとをとひてたび給へ。

汀に打出たりしに、敵手しげくかゝりし間、又引つかへし打ちあふ程に、知章監物太郎、主従こゝにて討死する。シテ謠「その隙に知盛は、地謠「二十餘町の沖に見えたる、大臣殿の御船まで、馬を泳がせ追ひついて、御船に乘りうつり、かひなき御命助かり給ふ。クセ知盛その時に、おほいとのの御前にて、涙を流し宣はく、武藏の守も討たれぬ、監物太郎頼賢も、あの汀にて討たるゝを、見捨てゝ是まで參る事、面目もなき次第なり、いかなれば子は親のため、命を惜しまぬ心ぞや、いかなる親なれば、子の討たるゝを見すてけん、命は惜しきものなりとて、さめ〴〵と泣き給へば、よその袖も濡れにけり。おほいとのも宣はく、武藏の守はもとよりも、心も剛にして、よき大將と見しぞとて、御子清宗の、方を見やりて御涙を、流し給へば船の中に、つらなれる人々も、鎧の袖をぬらしけり。シテ謠「武藏の守知章は、地謠「生年二八の春なれば、清宗も同年にて、共に若葉の磯馴松、千代を重ねて榮ゆくや、累葉枝を連ねつゝ、一門門をならべしも、今年の今日のいかなれば、所も須磨の山櫻、若木はちりぬ埋木の、浮きてたゞよふ船人と、なりゆく

累葉—兄弟のこと

つま匂ひ―端を美しく彩れること
繪島―淡路の名所
おほいとの―内大臣宗盛のこと
監物太郎―知章の郎等賴賢

しますぞ。シテ詞「誰とはなどや愚なり。御弔ひのありがたさに、知章これまで參りたり。ワキ謠「さては平家の公達を、まのあたりに見たてまつることよと。昔にかへる浦波の、シテ謠「浮織物の直垂に、つま匂ひの鎧著て、ワキ謠「さも華やかなる御姿、シテ謠「所もさぞな、ワキ謠「須磨の浦に、上歌地謠「朧なる、假の姿や月の影、假の姿や月の影、うつす繪島の島隱れ、行く船を、惜しとぞ思ふ我が父に、別れし船影の、跡白波もなつかしや。よしとても終にわが、憂き身を捨てゝ西海の、藻屑となりし浦の波、重てとひてたび給へ、重てとひてたび給へ。

ワキ詞「さらばその時の有樣委しく御物語り候へ。クリ地謠「さてもその時の有樣語るにつけて憂き名のみ、龍田の山の紅葉葉の、くれなゐ靡く旗のあし、ちり〴〵になるけしきかな。シテ、サシ謠「主上二位殿をはじめ奉り、その外おほいとの父子、地謠「一門皆々船に取り乘り、海上に浮よそほひ、只滄波のうねに浮き沈む水鳥の如し。シテ謠「その中にも親にて候新中納言、われ知章監物太郎、主從三騎に討ちなされ、地謠「御座船をうかゞひこの

かたをなみ云々—山部赤人の歌を引く

波こゝもとや—このあたり源氏物語の語に據る

ロンギ地謠「さるほどに、日もはや暮れて須磨の浦、海士の磯屋に宿りして、逆緣ながら弔はん。シテ謠「げに有難や我とても、よそ人ならず一門の、内外に通ふ夕月の、後の世の暗を訪ひたまへ。地謠「そも一門の内ぞとは、御身いかなる人やらん。シテ謠「今は何をか包井の、水隱れて住むあはれ世に、地謠「亡き跡の名は、シテ謠「白眞弓の、地謠「歸る方を見れば、須磨の里にも野山にも、行かで汀のかたをなみ、蘆邊をさして行く田鶴の、浮きぬ沈むと見えしまゝに、後影も失せにけりや。後影も失せにけり。（中入）

ワキ上歌謠「夕波千鳥友寢して、夕波千鳥友寢して、處も須磨の浦づたひ、野山の風もさえかへり、心も墨の衣手に、この御經を讀誦する。この御經を讀誦する。後シテ一聲謠「あら有難の御弔ひやな。われ修羅道の苦しみの、隙なき内にかくばかり、魄靈にひかれて來りたり。浮むべき、波こゝもとや須磨の浦、地謠「海少しある通路の、シテ謠「うしろの山風上野のあらし、地謠「草木國土有情非情も、悉皆成佛の、彼岸の海際に、浮出でたる有難さよ。

ワキ謠「ふしぎやなさもなまめきたる若武者の、波に浮みて見え給ふは、いかなる人にてま

屈竟—丈夫

越鳥云々—故郷を戀ふる意の譬文選の古詩に基く

れつゝ、佛果に至り給へや。上歌只一念の功力だに、只一念の功力だに、三惡の罪は消えぬべし。まして妙にも說く法の、道のほとりの亡き跡を、逆緣もなどかなかるべき、逆緣もなどかなかるべき。

ワキ詞「さて知盛の御最期は何とかならせ給ひて候ぞ。シテ詞「さん候知盛は、あれに見えたる釣舟の程なりし、遙の沖の御座船に、追ひつき助かり給ひて候。ワキ詞「さてあれまでは小船に召されて候か。シテ詞「いや馬上にて候ひし。その頃非上黑とて屈竟の名馬たりしが、二十餘町の海の面を、やす〳〵と泳ぎ渡り、主を助けし馬なり。されども船中に所無かりし間、乘する人も無くして、又もとの汀に泳ぎ上り、この馬主の別れを慕ふかと思しくて、沖の方に向ひ高嘶きし、足掻きしてぞ立つたりける。謡「畜類も心ありけるよと、見る人哀を催しけり。地謡「越鳥南枝に巣をかけ、胡馬北風に嘶えしも、舊鄕を忍ぶ故なりとか、胡馬は北風をしたひ、この馬は西に行く船の、纜につながれても、行かばやと思ふ心なり。

思の珠—數珠

一見云々—上卷卒都婆小町を見よ

ますらん、あら痛はしや候。

シテ詞「なう〳〵御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「是は遠國より上りたる僧にて候が、是なる卒都婆を見れば、物故平の知章と書かれて候。御一門の御中にて候やらんと痛はしく存じ、一遍の念佛を廻向申して候。シテ詞「げに〳〵遠國の人にてましませば、知ろしめさぬは御ことわり。知章とは相國の三男新中納言知盛の御子息にて候、二月七日の合戰に、此一の谷にて討たれさせ給ひて候。さればその日も今日にあたりたれば、ゆかりの人の立てたる卒都婆にて候。時もこそあれ御僧の、今日しもこゝに來り給ひ、廻向し給ふありがたさよ。謠「一樹の陰一河の流、是又他生の縁なるべし。よく〳〵弔ひ給ひ候へ。

ワキ謠「げに〳〵仰せのごとく、他生の縁のあればこそ、かりそめながらこゝに來て、

シテ謠「無緣の利益をなす事よと、ワキ謠「思の珠の數繰りて、シテ謠「弔ふ事よさなきだに、

シテ、ワキ謠「一見卒都婆永離三惡道、何況造立者、必生安樂國、物故平の知章成等正覺。

下歌地謠「きのふは人の上、けふは我をも知らぬ身の、しかも弓馬の家人ならば、法にひか

知章

梗概

一の谷の軍敗れて、つひに討死せし知章の遺跡に廻り會ひし旅僧の、知章の幽靈現れて軍物語をなすを聽くことを作る。（二番目）

シテ　平知章（前は男）　ワキ　僧

浦なる關―須磨

要文―佛經中の重なる文句

物故―故人のこと

ワキ次第謠「春を心のしるべにて、春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ。詞 是は西國方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、只今思ひ立ち都一見と志し候。道行謠旅衣、八重の潮路をはる〲と、八重の潮路をはる〲と、猶末ありと行く波の、雲をも分くる沖つ船、われも浮世の道出でて、いづくともなき海際や、浦なる關に著きにけり。浦なる關に著きにけり。詞 さてもわれ鄙の國よりはる〲と、是なる磯邊に來て見れば、新しき卒都婆を立て置きたり。亡き人の追善と思しくて、要文さま〲書き記し、物故平の知章と書かれたり。謠 知章とは平家の御一門の御中にては、誰にてかまし

勅も重しや―勅も船も重しとなり

天の探女―岩舟に乘りて下りし神

八大龍王―上巻春日龍神を見よ

津守―積りを掛く

代の佳例をうつし、シテ謠「又は治る御代に出でて、地謠「寳の御船を守護し奉り、シテ謠「勅も重しや勅も重しや、この岩船、地謠「寳をよする波の鼓、拍子を揃へてえいや〱。シテ謠「引けや岩船、地謠「天の探女は、シテ謠「波の腰鼓、地謠「ていたうの拍子を、打つなりやさゞら波、經めぐりめぐりて住吉の松の風、吹きよせよえいさ、えいさらえいさと、おすや唐艪の、おすや唐艪の、潮の滿ちくる浪に浮んで、八大龍王は海上に飛行し、御船の綱手を手に繰り絡まき、汐に引かれ波に乘つて、長居もめでたき住吉の岸に、寳の御船を著け納め、數も數萬の捧げ物、運び出すや心の如く、金銀珠玉は降り滿ちて、山のごとくに津守の浦に、きみを守の神は千代まで、榮うる御代とぞなりにける。

岩船

梗概

住吉の浦にて市を開かれ、外國の寶を買取るため、勅使參向あり。龍神現じて寶船を曳く事を作る。御代をことほぐ祝言能なり。本文は原文を省略したる形なり。

シテ　龍神　　ワキ　勅使

濱の市──船著場に市を開くこと

ワキ三人 次第謠「げに治れる四方の國、げに治れる四方の國、關の戸さゝで通はん。ワキ詞「そもそも是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても我が君賢王にましますにより、吹く風枝を鳴らさず民戸ざしをさゝず、誠にめでたき御代にて候。さる間攝州住吉の浦に始めて濱の市を立て、高麗唐の寶を買ひ取るべしとの宣旨に任せ、只今津の國住吉の浦に下向仕り候。ワキ三人 上歌謠「げに今とても神の代の、げに今とても神の代の、誓は盡きぬしるしとて、神と君との御惠眞なりけり、有難や。眞なりけり有難や。

シテ謠「我はこれ下界に住んで、神を敬ひ君を守る、秋津島根の龍神なり。地謠「あるひは神

えいやと組むとぞ見えしが、頼光下に組み伏せられて、鬼一口に食はんとするを、頼光下より刀を拔いて、二刀三刀さしとほし〳〵、刀を力にえいやとかへし、さもいきほへる鬼神を押しつけ、怒れる首を打ち落し、大江の山をまた踏みわけて、都へとてこそ歸りけれ。

ても命は君のため、又は神國氏社、南無や八幡山王權現、我等に力をそへ給へと、頼光保昌、綱、公時、貞光、季武一人武者、心を一つにして、まどろみ伏したる鬼の上に、劔を飛ばする光の影、稻妻震動おびたゞし。後シテ謠「情なしとよ客僧達。僞あらじと云ひつるに、鬼神に横道なきものを。ヒトリ武者詞「何鬼神に横道なしとや。シテ謠「なか〳〵の事。ヒトリ武者謠「あら空言やなどさらば、王地に住んで人を取り、世の妨げとはなりけるぞ。我をば音にも聞きつらん、保昌が館に一人武者、鬼神なりとも遁すまじ。ましてや是は勅なれば、謠土も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼の宿りなるらん。地謠「餘すな洩らすな、攻めよや攻めよ人々とて、切先を揃へて切つてかゝる。山河草木震動して、山河草木震動して、光滿ちくる鬼の眼、たゞ日月の天つ星、照りかゝやきてさながらに、面を向くべき樣ぞなき。(働)

ワキ謠「頼光保昌もとよりも、地謠「頼光保昌もとよりも、鬼神なりともさすが頼光が、手なみにいかで洩らすべきと、走りかゝつてはつたと打つ手に、むずと組んで、えいや

紫苑―しをんの音をしをにと云ふより鬼の意を籠む

鬼の醜草―紫苑のことなりとも忘れ草のことなりとも云ふ

馴れてつぼい―つぼいとはいとしげといふ意にて奥州の方言なりと其蜩翁草に見ゆ

鬼の間―荒海の障子共に清涼殿に在り鬼の緣として此所に記す

狗も、我に親しき、友ぞと知ろし召されよ。いざ〳〵酒を飲まうよ。いざ〳〵酒を飲まうよ。さてお肴は何々ぞ。頃しも秋の山草、桔梗刈萱我帽額、紫苑と云ふは何やらん、鬼の醜草とは、誰がつけし名なるぞ。シテ謡「げにまこと、地謡「げにまこと、丹後丹波の境なる、鬼が城も程近し、頼もしや〳〵、飲む酒は數そひぬ、面も色づくか、赤きは酒の料ぞ、鬼とな思しそよ、恐れ給はで、我に馴れ〳〵給はゞ、興がる友と思召せ。我もそなたの御姿、打ち見には、打ち見には、恐しげなれど、馴れてつぼいは山伏。猶々めぐる盃の、たび重なれば有明の、天も花に醉へりや。足本はよろ〳〵と、たゞよふかいざよふか、雲折り敷きてそのまゝ、目に見えぬ鬼の間に入り、荒海の障子おしあけて、夜のふしどに入りにけり。夜のふしどに入りにけり。(中入)

ワキ詞「すでにこの夜も更方の、空なほ闇き鬼が城、鐵の扉を押開き、見れば不思議や今までは、人の形と見えつるが、地謡その丈二丈ばかりなる、その丈二丈ばかりなる、鬼神の裝ひ、眠れるだにも勢の、あたりを拂ふ氣色かな。かねて期したる事なれば、と

一兒二山王―當時の諺

陸奥の云々―上卷安達原をみよ
大江山云々―小式部内侍の歌を引く

る日のたてぬきに、シテ謠「飛行の道に行脚して、ワキ謠「あるひは彦山、シテ謠「伯耆の大山、ワキ謠「白山立山富士の御嶽、シテ詞「上の空なる月に行き、ワキ謠「雲の通路歸り來て、シテ詞「猶も輪廻に心ひく、ワキ謠「都のあたり程近き、シテ詞「この大江の山に籠り居て、ワキ謠「忍び〳〵の御住まひ、シテ詞「隱れすまして有りし所に、今客僧達に見顯れ申し、謠「通力を失ふばかりなり。ワキ謠「御心安く思召せ、人に顯す事あるまじ。シテ詞「うれしよ〳〵一筋に、賴み申すぞ一樹の陰、ワキ謠「一河の流を汲みて知る、心は本より慈悲の行、シテ謠「人をたすくる御姿、ワキ謠「我はもとより出家の形、シテ謠「童子もさすが山育ち、ワキ謠「さも童形の御身なれば、シテ謠「あはれみ給へ、ワキ謠「神だにも、地謠「一兒二山王と立て給ふは、神を避くるよしぞかし。御身は客僧、我は童形の身なれば、などかあはれみ給はざらん、かまへてよそにて、物語りせさせ給ふな。

上歌地謠「陸奥の、安達が原の塚にこそ、安達が原の塚にこそ、鬼こもれりと聞きし物を、眞なり〳〵、こゝは名を得し大江山、生野の道は猶遠し、天の橋立與謝の海、大山の天

大師坊―傳教大師

根本中堂―毘沙門護世堂と一切經藏との中なる一乘止觀院のこと

七社―大宮二宮聖眞子八王子客人十禪師三宮を山王七社といふ

阿耨多羅三藐三菩提―佛を讃美して稱する語

じ佇み候所に、今宵の御宿何より以て祝著申し候。さて御名を酒呑童子と申し候は、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ詞「我が名を酒呑童子と云ふ事は、明暮酒を好きたるにより、眷屬どもに酒呑童子と呼ばれ候。されば此を見彼を聞くにつけても、酒ほど面白き物はなく候。客僧達もきこし召され候へ。ワキ詞「仰せにて候程に一つ下され候べし。又この山をばいつの頃よりの御居住にて候ぞ。シテ詞「われ比叡の山を重代のすみかとし、年月を送りしに、大師坊と云ふえせ人、嶺には根本中堂を建て、麓に七社の靈神を齋ひし無念さに、一夜に三十餘丈の楠となつて奇瑞を見せし所に、大師坊一首の歌に、謡「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち、詞 我が立つ杣に冥加あらせ給へとありしかば、佛たちも大師坊にかたらはされ、出でよ〱と責め給へば、力なくして重代の、比叡のお山を出でしなり。ワキ謡「さて比叡山を御出でありて、そのまゝこゝに御座ありけるか。シテ詞「いや何くとも定めなき、霞にまぎれ雲に乗り、ワキ謡「身は久方の天ざかる、鄙の長路や遠田舎。シテ詞「御身の故郷と承る、謡 筑紫をも見て候なり。ワキ謡「さては殘らじ天が下、天ざか

の土御妹にもあり

手をさゝじ―手向はじ

狂言―この狂言方は童子の侍女にて折から川にて衣を洗ひ居るなり

ツレ謠「彼是以上五十餘人、ワキ謠「まだ夜の內に有明の、ワキ、ツレ地謠「月の都を立ち出でて、月の都を立ち出でて、行末問へば西川や、波風立てゝ白木綿の、御祓も賴もしや。鬼神なりと大君の、惠に漏るゝ方あらじ。只分け行けや足引の、大江の山に著きにけり。大江の山に著きにけり。

ワキ詞「急ぎ候程に、大江山に著きて候。いかに誰かある、狂言詞「御前に候。ワキ詞「この所にて童子の栖を尋ねて宿をとり候へ。狂言詞「畏つて候。如何に童子の御座有るか。シテ詞「童子と呼ぶは如何なるものぞ。狂言詞「山伏達の御入り候が、一夜の御宿とおほせられ候。シテ詞「何と山伏達の一夜の宿と候や。恨めしや桓武天皇に御請申し、われ比叡の山を出でしより、出家には手をさゝじと、固く誓約申せしなり。中門の脇の廊に留め申し候へ。

狂言シカ〳〵、

シテ詞「いかに客僧達、いづくより何方へ御通り候へば、この隱家へはおんいでにて候ぞ。

ワキ詞「さん候、是は筑紫彦山の客僧にて候が、麓の山陰道より道に踏み迷ひ、前後を忘

西川—京都の西なる大井川

占方—陰陽師の占ひ勘へたることをいふ

一人武者—誰とも名明ならず前

大江山

梗概

賴光保昌の一行、勅を受けて、大江山の酒呑童子を退治せんとて、山伏姿にて出で向ひ、めでたく討取りて來る事を作る。（五番目）

シテ　酒呑童子　　ワキ　源賴光

ツレ　同行山伏　　狂言　童子侍女

ワキ、ツレ一聲謠「秋風の、音にたぐへて西川や、雲も行くなり大江山。ワキ、サシ謠「抑是は源の賴光とは我が事なり。扨もこの度丹波國、大江山の鬼神の事、占方の言葉に任せつゝ、賴光保昌に仰せ付けらる。ツレ謠「賴光保昌申すやう、たとひ大勢有りとても、人倫ならぬ化生の者、いづくを境に攻むべきぞ。ワキ謠「思ふ子細の候とて、山伏の姿に出で立ちて、

ツレ謠「兜にかはる兜巾を著、ワキ謠「鎧にあらぬ篠懸や、ツレ謠「兵具に對する笈を負ひ、

ワキ謠「そのぬし〳〵は賴光保昌、ツレ謠「貞光季武綱公時、ヒトリ武者謠「又名を得たる一人武者、

眞如の槻弓—月より槻につゞく
蒼蠅なす—惡神の形容
ひもろぎ—神籬

謡「守るべし、我が國なれば皇の、萬代いつと限らまし。地謡「限らじな限らじな、榮ゆく御代を守のしるし、シテ謡「たゞ重くせよ神と君。地謡「重くすべしや重くすべしや、扉も金の御札の神體、光もあらたに見え給ふ。四海を治めし御姿、四海を治めし御姿、シテ謡「あらたに見よや君守る、地謡「八百萬代のしるしなれや。シテ謡「惡魔降伏の眞如の槻弓、地謡「さて又次には蒼蠅なす、シテ謡「荒ぶる神も祓のひもろぎ、地謡「その神託は數々に、左も右も神力の、惡魔を射拂ひ淸めをなすも、金胎兩部の形なり。(舞働)シテ謡「とても治まる國なれば、地謡「とても治まる國なれば、なか〳〵なれや君は船、臣は瑞穂の國も豐に治まる代なれば、東夷西戎、南蠻北狄の、恐れなければ、弓を外し劍を納め、君も直に民を守の、御札は宮に、納まり給へば影さしおろす玉簾、影さしおろす玉簾、ゆるがぬ御代とぞなりにける。

外十一　金札

梗概　桓武天皇御遷都の砌、勅使伏見に至りて神社造營の折ふし、奇特に逢ふ由を作る。祝言能なり。

シテ　天太玉神（前は老翁）　ワキ　勅使

ワキ三人 次第謠「風も靜に楢の葉の、風も靜に楢の葉の、鳴らさぬ枝ぞ長閑けき。ワキ詞「抑是は桓武天皇に仕へ奉る臣下なり。さても山城國愛宕の都に、平の都をたて置き給ひ、國土安全のみぎんなり。同じく當國伏見の里に、大宮造有るべきとの勅諚を蒙り、只今伏見に下向仕り候。ワキ三人 上歌謠「嬉しきかなやいざさらば、嬉しきかなやいざさらば、この松蔭に旅居して風も嘯く寅の時、神の告をも待ちて見ん、神の告をも待ちて見ん。シテ

平の都―延暦十三年平安京遷都

伏見云々―金札宮とて天太玉命を祀る社を造營せらるゝなり

倶生神―罪人を責むる神
玻璃の鏡―閻魔の廳にあり

詞「倶生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り、瞋恚の燃えたつ熱鐵の笞を振り上げて、地謠「うつ蟬の、うつ蟬の、骸は娑婆にや留まるらん、魂は冥途にもぬけの衣の、玻璃の鏡の潔き、面前に引つさげ引き向け、あれ見よ娑婆にての罪科よ。（舞働）シテ謠「こは如何に不思議やな、地謠「こは如何に不思議やな、孝子の弔ふ功力によつて、鏡の影をよくよく見れば、頭に玉釵膚は金色、兩臂をかゞみて手を合はすれば、さながら菩薩の坐像かと、御空に花降り虚空に音樂、聞かず見もせぬ冥途の奇特、すはや地獄に歸るぞとて、大地をかつぱと踏み鳴らし、大地をかつぱと踏み破つて、奈落の底にぞ入りにける。

之を水と云々—源順の賦「花光浮二水上一」の文句

陳氏—陳の徐德言の妻

冥官—地獄の官人

地謠「即ち漢女が粉を添ふる鏡淸瑩たり。母謠「花といはんとすれば、蜀人文を洗ふ錦。地謠「我とても、娑婆の故郷に立ち歸らば、錦の袴君が爲、母謠「昔を語り申すべし。地謠「夢驚かし給ふなよ。クセ唐に陳氏とて、賢女の聞え有りけるが、世の習思はずも、夫遠行の子細あり、是や限と思ひけん、形見の鏡割りて猶、光ぞ殘る三日月の、宵に待ち明けて恨み、文も絶え主も來ず、憂き年月を故郷の、軒端の荻の秋更けて、風の便りの傳聞けば、夫はその國の主となり、あらぬ妹背の川波の、立ち歸るべきやうもなし。さては逢ふ事もかた見の鏡我ひとり、淚ながらに影見れば、半月の山の端に、打ち傾いて泣くならで、せん方もなき折節に、母謠「いづくよりとも知らざりし、地謠「鵲一つ飛び來り、陳氏が肩に羽を休め、飛び廻り飛び下り、舞ふよと見しが不思議やな、有りし鏡の割となり、もとの如くになりにけり。滿月の山を出で、碧天を照らす如くなり。是や賢女の、名を磨く鏡なるべし。

後シテ謠「如何に罪人何とて遲きぞ。詞片時の暇といひつるに、謠冥官怒をなし給へば、

三吉野の云々—古今六帖の「吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり」の意

往事渺茫都似レ夢舊友零落半歸レ泉—白氏文集の句泉は黄泉なり冥途也

事もなければ、まして鏡などと申す物をも知らず候ひしを、某一年都に上りし時、鏡を一面買ひとりて彼が母に取らせて候へば、世になき事に悦び候ひしが、今はのとき姫を近づけ、我を戀しく思はん時は、この鏡を見よと申しゝ程に、我が影の映るを見て母と思ひ歎く事の不便さは候。いや〳〵所詮鏡の謂れを語つて歎きをとゞめばやと思ひ候。やあ如何に姫、總じて鏡といふ物には、何にてもあれ向ふ物の影の映るぞとよ、是是見候へ、父が立ちよれば父が影、扇を映せば扇の影、こゝを以て思ひ知れ。姫謡「實に實に父の仰せの如く、今こそかくとも三吉野の、ワキ謡「岸の山吹風吹けば　姫謡「底なる影も散れば散り、ワキ謡「靡けば靡く欸冬の、姫謡「影をあやまつ、ワキ謡「はかなさよ。地謡「子ながらも、是ほど母に似けるよと、わが影ながら懐しや。ワキ謡「父は涙にかきくれてや、地謡「我こそは曇らすれ、面目なの鏡や。

ツレ謡「子は親に、似るなる物と思はれて、戀しき時は鏡をぞ見る。クリ地謡「往事渺茫としてすべて夢に似たり。舊友零落してなかば泉に歸す。母、サシ謡「之を水といはんとすれば、

山鳥の―尾ををといふより愚に掛く山鳥のをろのはつをに鏡掛けといふ歌あり山鳥の友を戀ひしに鏡を見せし話枕草子に出づ

垂乳根の―拾遺集の歌三句以下眉ごもりいぶせくもあるか妹にあはずて

無佛世界―愚癡者の多き土地

に乗せ奉り、二たび娑婆に送り給ひし例もあり。さりながらそれは上代の事、是は末世の今の世に、さやうの事の有るべきとは存じ候はねども、かれが母も姫に名残を深く惜しみ候ひし程に、もし又さやうの事もや候らん、立寄りて鏡を見ばやと存じ候。や、さればこそ筋なき事を申し候。やあ如何に姫、この鏡に母が影のうつる事はなきぞとよ。何とて筋なき事をば申すぞ。姫謠「恨めしやあれ程母のましますを、思ひ隔てゝ山鳥の、おろかに見させ給ふかと、鏡の前に泣き居たり。クドキ實にや別れての、涙も未だ干ぬ袖に、異妻を重ね給ひぬれば、其恨みにや戀衣の、見えじと思召さるらめ、よし父にこそ疎くとも、地謠「我には見えよ垂乳根の、親の飼ふ蠶の黛の、いと細し誰をかも、戀ひ痩せ顔ぞ見ても泣く、涙がすみの悲しやな。底より曇り増鏡、あれこそ母よ御覽ぜよと、我が影に指をさす。實にあはれなりされぱこそ、幼き身の心なれ。幼き身の心なれ。ワキ謠「言語道斷の事。我が影の鏡に映るを見て、母が影にて有る由を申し候は如何に。總じてこの松の山家と申すは、無佛世界の所にて、女なれども歯鐵漿をつけず、色を飾る

鏡山─古今集黒主の歌に「鏡山いざ立寄りて見て行かん年經ぬる身は老いやしぬると」とあるを鏡の縁にて引く

るべしと、仰せ候ひし程に、ある時この鏡を見れば、母の面立映りしより、猶若やぎて見え給へば、上歌地謡「さてはなからん跡までも、さてはなからん跡までも、添ひ添はれんと面影を、殘させ給ひける、母御の慈悲ぞ有難き。不審に思召されば、見せ參らせん鏡山、立ち寄り給へ父御前、立ち寄り給へ父御前。

ワキ詞「是は不思議なる事を申す物かな。空しくなりし母の何しに鏡に映りて見え候べき。但しきつと思ひ出だしたる事の候。漢の武帝の后李夫人亡くならせ給ひて後、帝后の御別れを悲しみ給ひ、御姿を甘泉殿の壁に寫し、明暮叡覽有りしかども、もとより繪に書ける形なれば物いはず笑はず、なか〳〵愁ぞ增ると悲しみ給ふ。ある時仙人の告げて曰く、まこと后の御姿を、叡覽有りたく思召さば、月の夜の隈なからんに、反魂香を焚き給へと有りしかば、敎へにまかせて月の夜の隈なきに、反魂香を焚き給へば、煙の内に后の御姿まみえ給ひし例もあり。又我朝の聖武皇帝の后、光明皇后亡くならせ給ひて後、是も后の御別れを悲みたまひ、梵天に祈誓し給へば、閻王憐みたまひ、玉の輿

ワキ詞「あら無慙や、何事やらん姫が獨言を申し候。いかに姫が有るか。父が來りたるぞ、持佛堂を開け候へ。あら不思議や、何やらん物を立ち隱すやうに候。如何に姫、さても汝が母に後れし時、元結切り遁世せばやと存じ候ひつれども、一族どもの諫めにより、今まで浮世の住まひたり。汝男子ならば父と一所に有るべけれども、女子なれば對の屋を作り置くなり。それに父が來りて姫よと呼ばゝ、さも嬉しげにて立ち迎ふべきにさはなくして。何やらん物を立ち隱すけしきの見えて候。さては人の申すも誠にて候ひけるぞや、實に汝は今の母を木像に作り、明暮呪咀するといふは眞か。何とてさやうにあさましき心をば持ちて有るぞ。母を戀しく思はゞ、經念佛し弔ひてこそ、死したる母も成佛し、おこととも同じ蓮の緣となるべきにさはなくして、さやうに恐しき事をたくまば、正しく浮べき母も奈落に沈み、おこととも同じ罪に沈むべき事のあさましさよ。何とて物をば申さぬぞ。姫詞「さやうに御叱り候はゞ、隱さず申し候べし。いたはしや母御前、今を限りの御時、この鏡を和御前に取らするなり、母が姿を殘す形見なり、戀しき時は見

松山鏡

梗概

越後の松の山家に、母に別れし少女、亡き母を慕ひてその形見の鏡を取出しては己が姿の映るを、母よと懷しがりて暮ぜりといふを前段とし、後段にては、母は地獄にありたれど、孝女の弔ひによりて、極樂往生をなす事を作る。（五番目）

シテ　俱生神　　ツレ　母　　ツレ　姫　　ワキ　父

ワキ詞「是は越後國松の山家に住まひする者にて候。さても某久しく添ひ馴れし妻に後れ、昨日今日とは存じ候へども、はや三年になりて候。又忘れ形見に姫を一人持ちて候が、あまりに母が事を歎き候程に、對の屋を作り傍に置きて候。又今日は彼が母の命日にて候程に、持佛堂に立ち出で、燒香せばやと思ひ候。

姫、サシ謠「雲となり雨となり、陽臺の時留め難く、花と散り雪と消え、金谷の春ゆくへもなし。月日の道に關守なければ、母御に離れて今年ははや、既に三年のその日なり。

對の屋―寢殿造りの建築にて東西に構へたる建物

雲となり雨となる―楚襄王神女に會ひて別るゝ時神女の言ひし語

露時雨云々―古今集に「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」
佛果―成佛。
秋の夜の云々―伊勢物語の歌
吹きしをり―吹き撓むこと

めなき村時雨、きのふは薄きもみぢ葉も露時雨もる山は、下葉殘らぬ色とかや。シテ謠「さるにても、東の奥の山里に、地謠「あからさまなる都人の、哀も深き言の葉の、露の情に引かれつゝ姿をまみえ數々に、言葉を交す値遇の縁、深き御法を授けつゝ、佛果を得しめ給へや。

シテ謠「更け行く月の夜遊をなし、地謠「色なき袖をや返さまし。（序ノ舞）シテ、ワカ謠「秋の夜の、千夜を一夜に重ねても、地謠「言葉殘りて鳥や鳴かまし。

シテ謠「八聲の鳥も數々に、地謠「八聲の鳥も數々に、鐘も聞ゆる、シテ謠「明方の空の、地謠「所は六浦の浦風山風、吹きしをり吹きしをり、散るもみぢ葉の月に照り添ひて、唐紅の庭の面、明けなば恥し、暇申して歸る山路に、行くかと思へば木の間の月の、行くかと思へば木の間の月の、かげろふ姿となりにけり。

ワキ三人上歌謠「所から、心にかなふ稱名の、心にかなふ稱名の、御法の聲も松風も、はや更け過ぐる秋の夜の、月澄み渡る庭の面、寢られんものかおもしろや。寢られんものかおもしろや。

後シテ一聲謠「あら有難の御弔ひやな。妙なる値遇の緣に引かれて、二度こゝに來りたり。夢ばしさまし給ふなよ。ワキ謠「不思議やな月澄みわたる庭の面に、有りつる女人と思しくて、影の如くに見え給ふぞや。草木國土悉皆成佛の、この妙文を疑ひ給はで、なほ〳〵昔を語り給へ。

シテ、ツレ謠「夫れ四季をり〳〵の草木、おのれ〳〵の時を得て、地謠「花葉さま〴〵のその姿を、心なしとは誰かいふ。シテ、サシ謠「先づ青陽の春のはじめ、地謠「色香妙なる梅が枝の、かつ咲きそめて諸人の、心や春になりぬらん。シテ謠「又は櫻の花盛、地謠「只雲とのみ三吉野の千本の花にしくはなし。クセ月日經て移れば變る詠めかな。櫻は散りし庭の面に、咲きつゞく卯の花の、垣根や雪に紛ふらん。時移り夏暮れ、秋も半になりぬれば、空定

功成名遂身退天道ー老子の語

一本の跡を見て、袖のしぐれぞ山にさきだつ。シテ詞「あら有難の御手向やな。いよ〳〵この木の面目にてこそ候へ。ワキ謡「さて〳〵先に爲相の卿の御詠歌より、今に紅葉をとゞめたる、謂れは如何なる事やらん。シテ詞「實に御不審は御理。さきの詠歌に預りし時、この木心に思ふやう、かゝる東の山里の、人も通はぬ古寺の庭に、われさきだちて紅葉せずは、いかで妙なる御詠歌にも預るべき、謡 功成り名遂げて身退くは、詞 是天の通なりといふ古き言葉を深く信じ、今に紅葉をとどめつゝ、只常磐木の如くなり。ワキ謡「是は不思議の御事かな。この木の心をかほどまで、知しめしたる御身はさて、如何なる人にてましますぞ。シテ詞「今は何をか包むべき、我はこの木の精なるが、御僧たつとくましますに、只今現れ來りたり。謡 今宵はこゝに旅居して、夜もすがら御法を説き給はゞ、重ねて姿を見え申さんと、下歌地謡「夕べの空も冷ましく、この古寺の庭の面、霧の籬の露深き、千草の花をかき分けて、ゆくへも知らずなりにけり。ゆくへも知らずなりにけり。（中入）

の剃髪せし寺なり

爲相—定家の孫爲家の子母は阿佛尼

候。又あれに由ありげなる寺の候を人に問へば、六浦の稱名寺とかや申し候程に、立ち寄り一見せばやと思ひ候。なう〳〵御覽候へ山々の紅葉今を盛と見えて、さながら錦を晒せる如くにて候。都にもかやうの紅葉の候べきか。又是なる本堂の庭に楓の候が、木立餘の木に勝れ、只夏木立の如くにて、一葉も紅葉せず候。如何さま謂れのなき事は候まじ、人來りて候はゞ尋ねばやと思ひ候。

シテ謠「なう〳〵御僧は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候是は都より始めてこの所一見の者にて候が、山々の紅葉今を盛と見えて候に、是なる楓の一葉も紅葉せず候程に、不審をなし候。シテ詞「げによく御覽じ咎めて候、いにしへ鎌倉の中納言爲相の卿と申しゝ人、紅葉を見んとてこの所に來りたまひし時、山々の紅葉いまだなりしに、この木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば、爲相の卿とりあへず、謠「如何にしてこの一本に時雨けん、詞「山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより、今に紅葉をとゞめて候。ワキ詞「おもしろの御詠歌やな。われ數ならぬ身なれども、手向のためにかくばかり、謠「舊りはつるこの

星月夜―鎌倉の枕詞

六浦―武州金澤
清澄―日蓮上人

六浦

梗概

六浦の稱名寺に青葉の楓あり旅僧詣でて里人にその出來を聞き、やがて楓の精夢中に現れ出づることを作る。（三番目）

シテ　楓の精（前は里女）　ワキ　旅僧

ワキ三人次第謠「思ひやるさへ遙なる、思ひやるさへ遙なる、東の旅に出でうよ。ワキ詞「是は洛陽の邊より出でたる僧にて候。我未だ東國を見ず候程に、この秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候。ワキ三人道行謠「逢坂の、關の杉村過ぎがてに、關の杉村過ぎがてに、ゆくへも遠き湖の、舟路を渡り山を越え、幾夜な夜なの草枕、明け行く空も星月夜、鎌倉山を越え過ぎて、六浦の里に著きにけり。六浦の里に著きにけり。

ワキ詞「千里の行も一歩より起るとかや、はるぐゝと思ひ候へども、日を重ねて急ぎ候程に、是ははや相摸國六浦の里に著きて候。この渡りをして安房の清澄へ參らうずるにて

花の都の春も長閑に、花の都の春も長閑に、和歌の道こそめでたけれ。

春來遍是桃花水ー朗詠集の句又次に礙レ石遲來心竊待牽レ流遄過手先遮をも引けり

と伏し拜み、悦びて龍顏にさし上げたりや。ワキ詞「よく／＼物を案ずるに、かほどの恥辱よもあらじ、自害をせんと罷り立つ。シテ謠「なうなう暫く。謠この身皆以て、その名ひとりに殘るならば、何かは和歌の友ならん。道を嗜む志、誰もかうこそ有るべけれ。王詞「如何に黑主。ワキ詞「御前に候。王詞「道を嗜む者は誰もかうこそ有るべけれ。苦しからぬ事座敷へ直り候へ。ワキ詞「これ又時の面目なれば、宣旨をいかで背くべき。黑主御前に畏る。

地謠「實に有難き砌かな。小町黑主遺恨なく、小町に舞を奏せよと、おの／＼立ちより花の打衣、風打烏帽子を著せ申し、笏拍子を打ち座敷を靜め、シテ謠「春來つては、偏くこれ桃花の水、地謠「石に障りて遲く來れり。シテ謠「手まづ遮る花の一枝、地謠「桃色の衣や重ぬらん。シテ謠「霞たつ、（中ノ舞）ワカ霞立てば、遠山になる朝ぼらけ、地謠「日影に見ゆる松は千代まで、松は千代まで、四海の波も四方の國々も、民の戸ざしもさゝぬ御代こそ、堯舜の嘉例なれ、大和歌の起りは、荒金の土にして、素盞嗚尊の、守り給へる神國なれば、

天の川瀬に─以下洗ふといふ語を縁にして續けたり

潁川云々─許由の故事

住吉─和歌三神の一つ

子を洗はんと、次第地謠「和歌の浦わの藻鹽草、和歌の浦わの藻鹽草、波寄せかけて洗はん。シテ謠「天の川瀬に洗ひしは、地謠「秋の七日の衣なり。シテ謠「花色衣の袂には、地謠「梅の匂や交るらん。雁がねの、翅は文字の數なれど、跡定めねば顯れず、潁川に耳を洗ひしは、シテ謠「濁れる世を澄ましけり。地謠「舊苔の鬚を洗ひしは、シテ謠「川原に解くる薄氷、地謠「春の歌を洗ひては、霞の袖を解かうよ。シテ謠「冬の歌を洗へば、冬の歌を洗へば、地謠「袂も寒き水鳥の、上毛の霜に洗はん、上毛の霜に洗はん。戀の歌の文字なれば、忍草の墨消え、シテ謠「涙は袖に降りくれて、忍草も亂るゝ、忘れ草も亂るゝ。地謠「釋教の歌の數々は、シテ謠「蓮の糸ぞ亂るゝ。地謠「神祇の歌は榊葉の、シテ謠「庭火に袖ぞ乾ける。地謠「時雨に濡れて洗ひしは、シテ謠「紅葉の錦なりけり。地謠「住吉の、住吉の、久しき松を洗ひては、岸に寄する白波を、さつと掛けて洗はん。洗ひ〳〵て取り上げて見れば不思議やこは如何に、數々のその歌の、作者も題も文字の形も少しも亂るゝ事もなく、入筆なれば浮草の、文字は一字も、殘らで消えにけり。有難や〳〵。出雲住吉玉津島、人丸赤人の、御恵か

集より新古今集迄の勅撰集

しどろ—亂れたること

人目さがなや—面目無し

この歌古歌なりとて、左右の大臣その外の、局々の女房達も、小町ひとりを見給へば、夢に夢見る心地して、さだかならざる心かな。此草子を取り上げ見れば、行の次第もしどろにて、文字の墨付違ひたり、詞如何さま小町がひとり詠ぜしを黒主立聞し、帝へ古歌と訴へ申さん爲に、謡この萬葉に入筆したると覺えたり。あまりに恥しうさむらへば、淸き流れをむすび上げ、此草子を洗はばやと思ひ候。ツレ詞「小町はさやうに申せども、若し又さなき物ならば、青丹衣の風情たるべし。シテ謡「とにかくに思ひまはせども、やるかたもなき悲しさに、地謡「泣く〳〵立ちてすご〳〵と、歸る道すがら人目さがなや恥しや。ツレ詞「小町暫く御待ち候へ。その由奏聞申さうずるにて候。如何に奏聞申し候。小町申し候は、只今の萬葉の草子をよく〳〵見候へば、行の次第もしどろにて、文字の墨付も違ひて候程に、草子を洗ひて見たき由申し候。王詞「實に〳〵小町が申す如く、さらば洗ひて見よと申し候へ。ツレ詞「畏つて候。如何に小町勅諚にて有るぞ、急いで草子を洗ひ候へ。シテ謡「綸言なればうれしくて、落つる涙の玉襷、結んで肩に打掛けて、既に草

猿丸太夫—近江の人黒主も同國の人にて緣ありとするなり

富士のなるさの大將—德大寺左大臣無明の酒を名も無き酒と詠みて名無しの大將といはれ俊成富士の鳴澤をなるさと詠みてなるさの入道といはれし失策談を交ぜてなるさの大將といへるなり

四病八病—喜撰式に見え其他歌學の書に載す歌の惡き體を數へ立てたるにても と詩學より出づ

三代八部—古今

ワキ詞「げに〳〵それはさる事なれどもさりながら、御身は衣通姫の流なれば、あはれむ歌にて强からねば古歌を盗むは道理なり。シテ詞「さてはおことは古の猿丸太夫の流れ、それは猿猴の名を以て、我が名をよそに立てんとや。正しく是は古歌ならず。ワキ詞「花の蔭ゆく山賤の、シテ詞「そのさま賤しき身ならねば、何とて古歌とは見るべきぞ。ワキ詞「さて詞をたゞさで誤りしは、富士のなるさの大將や、四病八病三代八部同じ文字、シテ詞「文字もかほどの誤は、ワキ謠「昔も今もシテ謠「有りぬべし。地謠「不思議や上古も末代も、三十一字の其内に、一字も變らで詠みたる歌、是萬葉の歌ならば、和歌の不思議と思ふべしさらば證歌を出だせとの、宣旨度々下りしかば、初めは立春の題なれば、花も盡きぬと引き開く、夏は涼しき浮草の、これこそ今の歌なりとて、既に讀まんとさし上ぐれば、我身に當らぬ歌人さへ、胸に苦しき手を置けり。ましてや小町が心の內、たゞ轟の橋打渡りて、危き心は隙もなし。

シテ謠「恨めしやこの道の、大祖柿の本の太夫君も、小町をば捨てはて給ふか恨めしやな。

衣通姫―允恭天皇の御妃玉津島明神は姫を祀る和歌三神の一つ

王詞「いかに貫之。ツレ詞「御前に候。王詞「始めより小町が相手には黒主を定めたり。まづまづ小町が歌を讀み上げ候へ。ツレ詞「畏つて候。水邊の草、謠まかなくに何を種とて浮草の、波のうね〳〵生ひ茂るらん。王詞「面白と詠みたる歌や。この歌に優るはよもあらじ、皆々詠じ候へ。ツレ詞「畏つて候。ワキ詞「暫く候。これは古歌にて候。王詞「なにと古歌と申すか。ワキ詞「さん候。王詞「如何に小町、何とて古歌をば申すぞ。シテ謠「恥しの勅諚やな。先代の昔はそも知らず、詞既に衣通姫此道のすたらんことをなげき、和歌の浦わに跡を垂れ給ひ、玉津島の明神より此方、皆この道を嗜むなり。それに今の歌を古歌と仰せ候は、古今萬葉の勅撰にて候か。又は家の集にて有るやらん。作者は誰にてましますぞ、委しく仰せ候へ。ワキ詞「仰せの如くその證歌分明ならでは如何でか奏し申すべき。草子は萬葉題は夏、水邊の草とは見えたれども、讀人知らずと書きたれば、作者は誰とも存ぜぬなり。シテ詞「夫れ萬葉は奈良の天子の御宇、撰者は橘の諸兄、歌の數は七千首に及んで皆妾が知らぬ歌はさむらはず、萬葉といふ草子に數多の本の候か。覺束なうこそ候へ。

道可レ道非ニ常道一ー老子の語
御影ー肖像を掛けて祭るなり
躬恒ー古今集の撰者
貫之ー同
忠岑ー同
ほの〴〵とー此の歌を人丸の詠として古今集に出せり

左様にてはなきぞ、道の道たるは常の道にはあらず、知れるを以て道とす。不得心なる事にて候へども、只今の歌を萬葉の草子に寫し、帝へ古歌と訴へ申し、明日の御歌合に勝たばやと存じ候。

ワキ、ツレ次第謠「めでたき御代の歌合、めでたき御代の歌合、詠じて君を仰がん。サシときしも頃は卯月半、清涼殿の御會なれば、はなやかにこそ見えたりけれ。ツレ謠「かくて人丸赤人の御影を懸け、ワキ立衆謠「おの〳〵詠みたる短册を、われも〳〵と取りいだし、御影の前にぞ置きたりける。ツレ謠「さて御前の人々には、ワキ立衆謠「小町を始め河内の躬恒紀の貫之、ツレ謠「右衛門の府生壬生の忠岑、ワキ立衆謠「ひだりみぎりに著座して、ツレ謠「既に詠をぞ始めける。ほの〴〵と明石の浦の朝霧に、島隱れ行く舟をしぞ思ふ。地謠「實に島隱れ入る月の。實に島隱れ入る月の、淡路の繪島國なれや、始めて歌の遊びこそ、心和ぐ道となれ、その歌人の名所も、みな庭上に竝みゐるつゝ、君の宣旨を待ち居たり。君の宣旨を待ち居たり。

大伴の黒主―六歌仙の一人

小野小町―同

救世の提闡―世を救ふ慈悲者

片岡山の製―河内の片岡山にて餓死人を見て「しなてるや片岡山に飯に飢えて臥せる旅人あはれ親なし」と詠み給へり

ワキ　大伴黒主　狂言　大伴黒主從者

ワキ詞「是は大伴の黒主にて候。さても明日内裏にて御歌合有るべしとて、黒主が相手には小野の小町を御定め候。小町と申すは歌の上手にて、さらに相手には叶ひがたく候程に、明日の歌をさだめて吟ぜぬ事は候まじ、かの私宅へ忍び入り、歌を聞かばやと存じ候。

シテ、サシ謠「夫れ歌の源を尋ぬるに、聖徳太子は救世の提闡、片岡山の製を路生に弘め給ふ。詞さても明日内裏にて御歌合有るべきとて、小町が相手には黒主を御定め候ひて、水邊の草といふ題を賜はりたり。おもしろや水邊の草といふ題に浮みて候は如何に。

謠蒔かなくに何を種とて浮草の、波のうね〳〵生ひ茂るらん。詞この歌をやがて短册に寫しさむらはん。

ワキ詞「如何に只今の歌を聞いて有るか。狂言「さん候承りて候。ワキ詞「何と聞いてあるぞ。狂言詞「蒔かなくに何を種とて瓜蔓の、畑のうねをまろびころびあるくらん。ワキ詞「いや

草子洗小町

梗概

内裏にて歌合ある折、大伴の黒主竊に小野の小町の邸に忍びて、題詠の歌を竊み聽き、さていよ〳〵其日となり、小町が歌の殊に叡感ありしを、黒主はかねて奸計を廻らしたる如く、萬葉集に入筆したるを取出して、そは古歌なりと主張す。小町は言ひ説く術なかりしが、やがてこの草紙を洗ひ見んとて、勅許を仰ぎて洗ひしに、入筆の跡失せて、黒主の奸策露顯し、黒主面目を失す。然るに之も亦道を嗜む志、苦しからずとて免され、尙小町に舞を奏せしめられて一座めでたく納ることを作る。もと古今集の序に六歌仙の歌風を評して「小野小町は古の衣通姫のながれなり、哀なるやうにて強からず、いはゞよき女の惱める所あるに似たり、強からぬは女の歌なればなるべし。大伴の黒主はそのさま卑し、いはば薪負へる山人の花の陰に休めるが如し」とあるに據りて思ひ設けしなり。「蒔かなくに」の歌は怖らくは、小町の「わびぬれば身を萍のねをたえて誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ」の換骨脫胎なるべし。(三番目)

シテ　小野小町　子方　帝王　ツレ　貫之

よ、急ぎ歸りてなき跡を、懇に弔ひてたび給へと、泣く〳〵袂を引き別れ、立ち去る姿は蜻蛉の、小野の淺茅の露霜と、形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。

生田川の身を捨てし—大和物語の生田川に身を投げし處女の故事によりて云ふ
鸚鵡—逢ふを掛く

生田の森に著きしかば、こゝは都も程近しと、一門の人々も、喜をなしゝ折節に、シテ謠「範頼義經の其勢、地謠「雲や霞の如くにて、暫く戰ふといへども、平家は運も槻弓の、やたけ心もよわ〳〵と、皆散り〴〵になりはてゝ、あはれも深き生田川の、身を捨てし物語、かたるぞよしなかりける。

シテ詞「うれしやな夢の契の假初ながら、親子鸚鵡の袖ふれて、地謠「名殘つきせぬ心かな。（中ノ舞）シテ詞「あれに見えたるは如何なる者ぞ。何閻王よりの御使とや、片時の暇と有りつるに、今までの遲參心得ずと、謠　閻王怒らせ給ふぞと、地謠「いふかと見れば不思議やな、いふかと見れば不思議やな、黑雲俄に立ち來り、猛火を放ち劍を降らして、其數知らざる修羅の敵、天地を響かし滿ち〳〵たり。シテ謠「物々し明暮に、地謠「馴れつる修羅の敵ぞかしと、太刀眞向にさしかざし、こゝやかしこに走り廻り、火花を散らして戰ひしが、暫く有りて黑雲も、次第に立ち去り修羅の敵も、忽に消え失せて、月澄み渡りて明明たる、曉の空とぞなりたりける。シテ謠「恥しや子ながらも、地謠「かく苦しみを見る事

絶えこがれ—氣絶の意

撫子—遺子を指す

木曾の棧—かけての序詞

天ざかる—鄙の枕詞

はわが父かと、身にも覺えず走りより、地謠「袂にすがり絶えこがれ、袂にすがり絶えこがれ、泣く音にたつる鶯の、逢ふ事のうれしさも、うき身にあまるばかりなり。かくは思へど頼まれぬ、夢の契を、現に返すよしもがな。

シテ謠「無慙やな忘れがたみの撫子の、花やかなるべき身なれども、衰へはつる墨染の、袂を見るこそあはれなれ、さても御身孝行の心深き故、加茂の明神に歩みを運び、夢になりとも我父の、姿を見せてたび給へと祈誓申す。明神憐れみおはしまし、閻王に仰せつかはさる。閻王仰せを承り、暫の暇を賜はるなり。親子の契も今を限なるべし。

地謠「更け行く月の夜もすがら、昔をいざや語らん。クセ然るに平家の、榮花を極めしその始、花鳥風月の戯れ、詩歌管絃のさま〴〵に、春秋を送り迎へしに、如何なるをりか來りけん、木曾の棧かけてだに、思はぬ敵に落されて、主上を始め奉り、一門の人も悉く、花の都を立ち出で、西海の空に赴きぬ。習はぬ旅の道すがら、山を越え海を渡り、暫は天ざかる、鄙の住居の身なりしに、又立ち歸る浦波の、須磨の山路や一の谷、

昨日だに—新古今集家隆の歌末句秋は來にけり

五蘊—色受想行識の五つすべて空しとなり

秋は來にけり昨日だに、訪はんと思ひし津の國の、生田の森に著きにけり。生田の森に著きにけり。

ワキ詞「御急ぎ候程に、是ははや津の國生田の森にて候。森のけしき川の流、都にて承り及びたるにもいやまさりて面白き名所にて候。あれに見えたる野邊は生田の小野にてもや候らん。立ち寄り詠めばやと思ひ候。こゝかしこを詠め候程に、はや日の暮れて候は如何に。あれに燈の影の見えて候は人家にて有りげに候。立ち寄り宿を借らばやと思ひ候。

シテ、サシ謠「五蘊もとよりこれ皆空、何によつて平生此身を愛せん。苦を守る幽魂は夜月に飛び、屍を失ふ愚魄は秋風に嘯く。あら心すごの折柄やな。

ワキ謠「不思議やな是なる草の庵の内に、さも花やかなる若武者の、甲冑を帯し見え給ふぞや、是は如何なる事やらん。シテ謠「おろかの人の心やな。詞「面々是まで來り給ふも、我に對面のためならずや。はづかしながら古の、敦盛が幽靈來りたり。子詞「なう敦盛と

せられ候ひて、一七日詣で給ひ、今日ははや滿參にて候程に、同道申し加茂の明神へ、參詣申し候。是ははや加茂の明神にて御座候。よく〳〵御祈誓候へ。

子、サシ謠「有難や所からなる御社の、朱の玉垣神さびて、こゝろも澄める御手洗の、深き恵を頼むなり。下歌地謠「夢になりともたらちねの、その面影を見せ給へ。上歌かくばかり、祈る心の末遂げば、祈る心の末遂げば、恵になどか漏るべきと、誓ひ糺の神ともに、願ひを叶へおはしませ。願ひを叶へおはしませ。

子詞「あら不思議や少し睡眠の内に、あらたに御靈夢を蒙りて候。ワキ詞「あらめでたやな、御靈夢のやうを御物語り候へ。子詞「あの御寶殿の内よりも、あらたなる御聲にて、汝夢になりとも父を見んと思はゞ、是より津の國生田の森へ下れと、あらたに靈夢を蒙りて候。ワキ詞「是は不思議なる事にて候ものかな。黑谷へ御歸りあるまでもなく候。是より生田の森へ御供申し候べし、やがて思召し立ち候へ。道行謠「山陰の、賀茂の宮居を立出でて、賀茂の宮居を立出でて、急ぐ行くへは山崎や、霧立渡る水無瀬川、風も身にしむ旅衣、

生田敦盛

梗概

敦盛の遺孤、法然上人に養はれ居たりしが、御夢想を受けて、津の國生田の森に下り、父の幽靈に逢ふ。恩愛孝養の情偲ばれてあはれなる曲なり。(二番目)

シテ　平敦盛　子方　同遺子　ワキ　法然上人の從者

ワキ詞「是は黒谷法然上人に仕へ申す者にて候。又是に渡り候人は、あるとき上人加茂御參詣御下向の時、さがり松の下に二歳ばかりなる男子の美しきを、手箱の蓋に入れ尋常に拵へ、捨て置きて候を、上人不便に思召され抱かせ御歸り候ひて、いろ〳〵育て給ひ候程に、はや十歳に御餘り候。父母のなき事を歎き給ひ候程に、說法の後此事を御物語り候へば、聽衆の內より若き女性の走り出で、我が子にて候由おほせ候を、ひそかに御尋ね候へば、一年一の谷にて討たれ給ひし、敦盛の御子にておはしまし候。この事を聞き給ひて、夢になりとも父の姿を見せて給はり候へと、加茂の明神へ祈誓有るべき由仰

法然上人―淨土宗の開祖

珠はふたゝびー孟嘗太守となりし時郡内疲弊して珠も境を出せしに後富み榮えて再び歸り納まる

珠は、當來までの二世の願ひも成就なるべし、是までなりや、織りつる綾の浦は合浦、珠はふたゝび歸る波の、千秋萬歳の寶の玉は、千秋萬歳の寶の玉は、合浦の浦にぞをさまりける。

たゝく—水鷄の鳴聲は戸を敲く如し
埴生の小屋—賤が家
我妹子が—催馬樂に「妹が門やせなが門行過ぎかねて我行かば肱笠の雨もやふらん死出田長雨宿り笠宿り宿りてまからん死出田長」
ひれふし—平伏ひれは鰭として魚の緣語
龍女—八才の龍女が變成男子の事法華經にあり

給へ。ワキ謡「たゝく水鷄の外面に立つや久方の、埴生の小屋に小雨ふる、シテ謡「床冴えぬれば、ワキ謡「我妹子が、上歌地謡「ひぢ笠の、雨は降り來ぬ雨宿りの、賴む木陰かや、一樹の陰の宿も、この世ならぬ契なり。一河の流を汲みて知る、合浦の浦の江のほとり、鱗もなどや命恩の、その情をば知らざらん。その情をば知らざらん。

ワキ詞「何と見申せども更に人間とは見え給はず候。名を御なのり候へ。シテ詞「今は何をかつゝむべき、我は鮫人といへる魚の精なり。謡「命をつがれまゐらせし、報謝の爲に來りたり。我が泣く涙の露の玉、絕えぬ寶となるべきなり。地謡「鮫人涙に、玉をなして命恩を、寶珠を猶も捧げて、合浦にも入らせ給へと、前なる渚の波の上に、入るよと見えつるが、白魚となつてそのまゝに、ひれふして失せにけり。あとひれふして失せにけり。(中入)

後シテ謡「龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ、變成就の法をなし、地謡「奈落の底の白魚なれども、など命恩を報ぜざらんと、波立騷ぎ汐うづまいて、うたかたの上にぞ現れたる。(舞働)

シテ謡「是こそ眞如の玉の緒の、地謡「是こそ眞如の玉の緒の、壽命長遠息災延命の寶の

外十

合浦

梗概

鮫人、人家に寄寓し、去るに臨みて、報謝のため、泣く涙を寶の珠として殘しきと云ふ漢土の故事を主とし、後漢の孟嘗の太守たりし合浦の地に結附けて作れり。(五番目)

シテ　鮫人(前は童子)　ワキ　里人

ワキ詞「是は唐合浦と申す所に住まひする者にて候。今日は日もうらゝに候程に、浦に出で釣するを眺めばやと思ひ候。狂言シカ〲。

シテ一聲謠「わたづみの、そこともいさやしら波の、龍の都を出づるなり。詞いかにこの屋の内に主やましします。一夜の宿を貸し給へ。ワキ詞「日もはや暮れてとざしつるに、宿とは誰にてましますぞ。シテ詞「よし誰なりともその情に、一村雨の雨宿り、謠一夜の宿を貸し

獅子團亂旋―樂名

たいきんりきん―大金裏金又は體禁離均の字を充つ

の淨土にて、常に笙歌の花降りて、笙笛琴箜篌、夕日の雲に聞え來、目前の奇特あらたなり。暫く待たせ給へや、影向の時節も、今幾程によも過ぎじ。

地謠「獅子團亂旋の舞樂の砌、獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房にほひ滿ち〳〵、たいきんりきんの獅子頭、打てや囃せや、牡丹芳、牡丹芳、黄金の蘂現れて、花に戲れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の勢、靡かぬ草木も無き時なれや、萬歳千秋と舞ひ納め、萬歳千秋と舞ひ納めて、獅子の座にこそ直りけれ

泥梨—地獄のこと

尺にも足らずして、下は泥梨も白波の、虚空を渡る如くなり。危しや目もくれ心も、消え消えとなりにけり。おほろけの行人は、思ひもよらぬ御事。

ワキ謠「なほ〳〵橋のいはれ委しく御物語り候へ。クリ地謠「夫れ天地開闢の此方、雨露を降して國土を渡る、是すなはち天の浮橋ともいへり。シテ、サシ謠「その外國土世界に於て、橋の名所さま〴〵にして、地謠「水波の難をのがれ、萬民富める世を渡るも、すなはち橋の徳とかや。クセしかるにこの石橋と申すは、人間の渡せる橋にあらず、おのれと出現して、つゞける石の橋なれば、石橋と名を名づけたり。その面わづかに、尺よりは狹うして、苔甚だ滑かなり。その長さ三丈餘、谷のそくばく深き事、千丈餘に及べり。上には瀧の糸、雲より懸て、下は泥梨も白波の、音は嵐に響き合ひて、山河震動し、雨塊を動かせり。橋のけしきを見渡せば、雲にそびゆる粧ひの、たとへば夕陽の雨の後に、虹をなせる姿、又弓を引ける形なり。シテ謠「遙に臨んで谷を見れば、地謠「足冷しく肝消え、すゝんで渡る人もなし。神變佛力にあらずは、誰かこの橋を渡るべき。向ひは文殊

恐歸二舊里一纔逢二七世之孫一

りしも、今身の上に知られたり。今身の上に知られたり。

ワキ詞「如何に是なる山人に尋ぬべき事の候。シテ詞「何事を御尋ね候ふぞ。ワキ詞「是なるは承り及びたる石橋にて候か。シテ詞「さん候是こそ石橋にて候。向ひは文殊の淨土淸涼山、よく〱御拜み候へ。ワキ詞「さては石橋にて候ひけるぞや。さあらば身命を佛力にまかせて、此橋を渡らばやと思ひ候。シテ詞「暫く候。其上名を得給ひし高僧達も、難行苦行捨身の行にて、こゝにて月日を送り給ひてこそ、橋をば渡り給ひしに、謠 獅子は小蟲を食はんとても、先勢をなすとこそ聞け、我が法力のあればとて、行く事難き石の橋を、たやすく思ひ渡らんとや。あら危しの御事や。ワキ謠「謂れを聞けば有難や。只世の常の行人は、左右無う渡らぬ橋よなう。シテ謠「御覽候へこの瀧波の、雲より落ちて數千丈、瀧壺までは霧深うして、身の毛もよだつ谷深み、ワキ謠「巖峨々たる岩石に、シテ謠「わづかに懸る石の橋、ワキ詞「苔は滑りて足もたまらず、シテ謠「渡れば目もくれ、ワキ謠「心もはや、上歌地謠「上の空なる石の橋。上の空なる石の橋、まづ御覽ぜよ橋もとに、歩み臨めばこの橋の、面は

石橋

梗　寂昭法師入宋して、清涼山下の石橋に到りしに、樵童あらはれて橋の由來を物語り、後、獅子舞の奇特に逢ふ。能としては重き習物なり。

シテ　獅子（前樵童）　ワキ　寂昭法師

ワキ詞「是は大江の定基といはれし寂昭法師にて候。我入唐渡天し、初めて彼方此方を拜み廻り、只今清涼山に參り候。是に見えたるが石橋にて有りげに候。暫く人を待ち委しく尋ね、この橋を渡らばやと存じ候。

シテ一聲謠「松風の、花を薪に吹き添へて、雪をも運ぶ山路かな。サシ山路に日暮れぬ、樵歌牧笛の聲、人間萬事さまぐ\の、世を渡り行く身の有樣、物毎に遮る眼の前、光の陰をやおくるらん。下歌餘りに山を遠く來て、雲又跡を立ち隔て、上歌入りつる方も白波の、入りつる方も白波の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし。實にや誤つて半日の客た

定基—齋光の子文章家永延二年出家長保四年入宋

清涼山—天台山にある寺

石橋—廣さ尺に滿たず長さ數歩其下數千丈と傳ふ

山路に云々—朗詠集に山路日暮滿レ耳者樵歌牧笛之聲

誤つて云々—同書に謬入ニ仙家一雖レ爲ニ半日之客一

小狐―俗に稲荷の神體を狐なりとす

頼め只頼め。（舞働）シテ謠「童男壇の上にあがり、地謠「童男壇の上にあがつて、宗近に參拜の膝を屈し、さて御劒の鐵はと問へば、宗近も恐悦の心を先として、鐵取り出だし、教への鎚をはつたと打てば、シテ謠「ちやうと打つ。地謠「ちやう〳〵と、打ち重ねたる鎚の音、天地に響きておびたゞしや。

ワキ詞「かくて御劒を、打ち奉り、表に小鍛冶宗近と打つ。シテ詞「神體時の弟子なれば、小狐と裏にあざやかに、地謠「打ち奉る御劒の、刃は雲を亂したれば、天の叢雲とも是なれや。シテ謠「天下第一の、地謠「天下第一の、二つ銘の御劒にて、四海を治め給へば、五穀成就もこの時なれや。卽ち汝が氏の神、稲荷の神體小狐丸を、勅使に捧げ申し、是までなりと言ひ捨てゝ、又群雲に飛び乘り又群雲に飛び乘りて東山、稲荷の峯にぞ歸りける。

南瞻—須彌四洲の一
僧伽陀國—天竺の内
天國—刀鍛冶の元祖
恒沙—多數の意

を待ち給はゞ、地謡「通力の身を變じ、通力の身を變じて、必ず其時節に、參り會ひて御力を、附け申すべし待ち給へと、夕雲の稻荷山、行方も知らず失せにけり。行方も知らず失せにけり。（中入）

ワキ謡「宗近勅に隨つて、卽ち壇に上りつゝ、不淨を隔つる七重の注連、四方に本尊を懸け奉り、幣帛を捧げ、仰ぎ願はくは、宗近時に至つて、人皇六十六代、一條の院の御宇に、其職の譽を蒙る事、是私の力にあらず。伊弉諾伊弉冊の、天の浮橋を踏み渡り、豐蘆原を探り給ひし、御矛より始まれり。その後南瞻僧伽陀國、波斯彌陀尊者より此方、天國ひつきの子孫に傳へて今に至れり。願はくは、地謡「願はくは、宗近私の功名に非ず、普天卒土の勅命によれり。さあらば十方恒沙の諸神、只今の宗近に、力を合はせてたび給へとて、幣帛を捧げつゝ、天に仰ぎ頭を地に付け、骨髓の丹誠、聞き入れ納受せしめ給へや。ワキ謡「謹上再拜。

謡「いかにや宗近勅の劍、いかにや宗近勅の劍、打つべき時節は虛空に知れり。賴めや

戸ざしを忘れ―太平の象

この戰ひに、地謠「人馬巖窟に身を碎き、血は涿鹿の川となつて、紅波楯流し、數度に及べる夷も、兜を脱いで矛を伏せ、皆降参を申しけり。尊の御宇より、御狩場を始め給へり。頃は神無月、二十日あまりの事なれば、四方の紅葉も冬枯の、遠山にかゝる薄雪を、詠めさせ給ひしに、シテ謠「夷四方を圍みつゝ、地謠「枯野の草に火を懸け、餘焔しきりに燃え上り、敵攻鼓を打ちかけて、火焔を放ちかゝりければ、シテ謠「尊は劍を拔いて、地謠「尊は劍を拔いて、あたりを拂ひ忽に、焰も立ち退けと、四方の草を薙ぎ拂へば、劍の精靈嵐となつて、焰も草も吹き返されて、天に輝き地に滿ち〳〵て、猛火は却つて敵を燒けば、數萬騎の夷どもは、忽ここにて失せてんげり。その後四海治まりて、人家戸ざしを忘れしも、その草薙の故とかや。只今汝が打つべき、其瑞相の御劍も、いかでそれには劣るべき。傳ふる家の宗近よ、心安く思ひて下向し給へ。

ワキ詞「漢家本朝に於て劍の威德、時に取つての祝言なり。さて〳〵御身は如何なる人ぞ。

シテ詞「よし誰とても只賴め、まづ〳〵勅の御劍を、打つべき壇を飾りつゝ、謠 その時我

猶々不思議の御事かな。劔の勅も只今なるを、早くも知し召さるゝ事、返す〴〵も不審なり。シテ詞「實に〳〵不審はさる事なれども、我のみ知ればよそ人までも、ワキ謠「天に聲あり、シテ謠「地に響く、地謠「壁に耳、岩の物いふ世の中に、岩の物いふ世の中に、隱れはあらじ殊に猶、雲の上人の御劔の、光は何か暗からん。只頼めこの君の、惠によらば御劔も、などか心に適はざる、などかは適はざるべき。

クリ地謠「それ漢王三尺の劔、居ながら秦の亂れを治め、又煬帝がけいの劔、周室の光を奪へり。シテ、サシ謠「その後玄宗皇帝の鍾馗大臣も、地謠「劔の德に魂魄は、君邊に仕へ奉り、シテ謠「魍魎鬼神に至るまで、地謠「劔の刃の光に恐れて、その寇をなす事を得ず。シテ謠「漢家本朝に於て劔の威德、地謠「申すに及ばぬ奇特とかや。クセ又我が朝のその始め、人皇十二代、景行天皇、詔の御名をば、日本武と申しゝが、東夷を退治の勅を受け、關の東も遥かなる、東の旅の道すがら、伊勢や尾張の海面に、立つ波までも、歸る事よと羨み、いつか我も歸る波の、衣手にあらめやと、思ひつゞけて行く程に、シテ謠「こゝやかし

壁に耳岩の物いふ—祕密の洩る意

漢王云々—朗詠集の漢高三尺之劔坐制諸侯」を引く漢高は漢の高祖

煬帝—隋の天子

けいの劔—未詳

鍾馗大臣—前の鍾馗を見よ

伊勢や尾張の云云—伊勢物語を引く

領掌—御受

稲荷—伏見に鎮坐あり

なべてならざる御事—唯人ならずの意

劒も成就候べけれ。是は兎角の御返事を、申し兼ねたるばかりなり。道成詞「實に〳〵汝が申す所は理なれども、帝不思議の御告ましませば、頼もしく思ひつゝ、早々領掌申すべしと、謡重ねて宣旨ありければ、ワキ謡「この上は、兎にも角にも宗近が、地謡「兎にも角にも宗近が、進退こゝに谷りて、御劒の刃の、亂るゝ心なりけり。さりながら御政道、直なる今の御代なれば、若しも奇特の有りやせん、それのみ頼む心かな。それのみ頼む心かな。

ワキ詞「言語道斷、一大事を仰せ出だされて候ものかな。かやうの御事は神力を頼み申すならではと存じ候。某が氏の神は稲荷の明神なれば、是より直に稲荷に參り、祈誓申さばやと存じ候。

シテ詞「なう〳〵あれなるは三條の小鍛冶宗近にて御入り候か。ワキ詞「不思議やななべてならざる御事の、我が名をさして宣ふは、いかなる人にてましますぞ。シテ詞「雲の上なる帝より、劒を打ちて參らせよと、汝に仰せ有りしよなう。ワキ詞「さればこそそれに付けても

小鍛冶

宗近―姓は橘、信濃大掾たり

梗概

三條の小鍛冶宗近、勅命を蒙りて御劍を打つ。その丹誠、神に通じ、稻荷明神示現ありて加勢し給ふ事を作る。文中、劍の威德を述ぶ。（五番目）

シテ　稻荷明神（前は童子、後は狐）　ワキ　宗近

ワキツレ　橘道成

道成詞「是は一條の院に仕へ奉る橘の道成にて候。さても今夜帝不思議の御告ましますにより、三條の小鍛冶宗近を召し、御劍を打たせらるべきとの勅諚にて候間、只今宗近が私宅へと急ぎ候。如何に此屋の内に宗近が在るか。ワキ詞「宗近とは誰にて渡り候ぞ。道成詞「是は一條の院の勅使にて有るぞとよ。さても帝今夜不思議の御告ましますにより、宗近を召し御劍を打たせらるべきとの勅諚なり。急いで仕り候へ。ワキ詞「宣旨畏つて承り候。さやうの御劍を仕るべきには、我に劣らぬ者相鎚を仕りてこそ、御

ると、渦巻い廻るを、韋駄天立ち寄り寶棒にて、疾鬼を大地に打伏せて、首を踏まへて牙舍利はいかに、出だせや出だせと責められて、泣く〳〵舍利を指し上ぐれば、韋駄天舍利を取り給へば、さばかり今までは足はやき鬼の、いつしか今は足弱車の力も盡き、心も茫々と起き上りてこそ、失せにけれ。

化天云々―佛法にて言ふ天の階級卅三あり

へや御僧達。ワキ謡「こはそも見れば不思議やな、面色變り鬼となりて、シテ詞「舍利殿に臨み昔の如く、ワキ謡「金冠を見せ、シテ謡「寶座をなして、地謡「栴檀沈瑞香、栴檀沈瑞香の、上に立ち上る雲煙を立てゝ、稲妻の光に飛び紛れて、固より足疾鬼とは、足疾き鬼なれば舍利殿に飛び上り、くる〳〵と、見る人の目を暗めて、その紛れに牙舍利を取つて、天井を蹴破り、虚空に飛んで上ると見えしが、行方も知らず失せにけり。行方も知らず失せにけり。（中入）

韋駄天謡「そも〳〵是は、この寺を守護し奉る、韋駄天とは我が事なり。詞「こゝに足疾鬼といふ外道、在世の昔の執心残つて、またこの舍利を取つて行く。謡「いづくまでかは遁すべき、この牙舍利置いて行け。後シテ謡「いや叶ふまじとよこの佛舍利は、誰も望のあるものを、地謡「欲界色界無色界、欲界色界無色界、化天耶摩天他化自在天、三十三天攀上りて、帝釋天まで追ひ上ぐれば、梵王天より出で逢ひ給ひて、もとの下界に追つ下す。シテ謡「左へ行くも、地謡「右へ行くも、前後も天地も塞がりて、疾鬼は虚空にくる〳〵く

西天―天竺
日城―日本
三如來―釋迦藥師阿彌陀
四菩薩―觀音勢至普賢文殊
泥洹―涅槃
白毫―眉間の毛釋迦卅二相の一つ

二なるべし。シテ、サシ謠「しかるに後五百歳の佛法、既に末世の折を得て、地謠「西天唐土日域に、時至つて久堅の、月の都の山並に、佛法流布のしるしとて、佛骨を納め奉り、シテ謠「實に目前の妙光の影、地謠「この御舍利に若くはなし。クセ然るに佛法東漸とて、三如來四菩薩も、皆日域に地を占めて、衆生を濟度し給へり。常在靈山の秋の空、わづかに二月に臨んで魂を消し、泥洹雙樹の苔の庭、遺跡を聞いて腸を斷つ、有難や佛舍利の、御寺ぞ在世なりける。實にや鷲の御山も、在世の砌にこそ、草木も法の色を見せ、皆佛身を得たりしに、シテ謠「今は淋しく凄ましき、地謠「月ばかりこそ昔なれ。孤山の松の間には、よそ〳〵白毫の、秋の月を禮すとか、蒼海の波の上に、わづかに四諦の、曉の雲を引く空の、淋しささぞな鷲の御山、それは上見ぬ方ぞかし。こゝは正に目前の、佛舍利を拜する、御寺ぞ貴かりける。

ワキ詞「不思議やな俄に晴れたる空かき曇り、堂前に輝く電光、こはそもいかなる事やらん。シテ詞「今は何をか包むべき、その古への疾鬼が執心、猶此舍利に望あり。謠ゆるし給

後五―釋迦入滅後五百年づつ五期を重ねたる最終の一期

さを、何に喩へん墨染の、袖をも濡らす氣色かな。袖をも濡らす氣色かな。

シテ謠「有難や佛在世の御時は、法の御聲を耳に觸れ、聞法値遇の結緣に、一劫をも浮むこの身ながら、二世安樂の心を得るに、後五の時代の今さらに、猶執心の見佛の緣、嬉しかりける時節かな。

ワキ詞「我佛前に觀念し、寥々とある折節に、御法を尊む聲すなり。如何なる人にてましますぞ。シテ詞「是はこの寺のあたりに住む者なるが、妙なる法の御聲を受けて、こゝに立ち寄るばかりなり。ワキ詞「よし誰とてもその望、佛舍利を拜まん爲ならば、同じ心ぞ我も旅人、シテ謠「來るもよそ人、ワキ謠「所もまた、シテ、ワキ謠「都の邊東山の、末につゞける峯なれや、上歌地謠「月雪の、古き寺井は水澄みて、古き寺井は水澄みて、庭の松風さえかへり、更け行く鐘の聲までも、心耳を澄ます夜もすがら、實に聞けや峯の松、谷の水音澄み渡る、嵐や法を稱ふらん、嵐や法を稱ふらん。

クリ地謠「それ佛法あれば世法有り、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生もあり、善惡又不

漢果といふ資格を得たる十六人
佛舍利—佛骨

寺ぞ泉涌寺と申すげに候。寺中の人に委しく案内をも尋ねばやと思ひ候。如何に誰かわたり候。狂言詞「何事を御尋ね候ぞ。ワキ詞「是は遙かの田舍より上りたる僧にて候、當寺の御事を承り及び遙々參りて候、大唐より渡りたる十六羅漢、又佛舍利をも拜み申したく候。狂言詞「實に〳〵聞召し及ばれて御參り候か。聊爾に拜み申す事叶はず候。但し今日彼御舍利の御出で有る日にて候。我等當番にて只今戸を明け申さんとて、鍵を持つて罷り出で候。まづこの舍利を御拜み有つて、その後山門に登りて、十六羅漢をも拜ませ申し候べし。此方へ御出で候へ。がら〳〵さつと御戸を開き申して候。よく〳〵御拜み候へ。

ワキ詞「あら有難や候。さらば御供申し候べし。

ワキ、サシ謠「實にや事として何か都の愚なるべきなれども、ことさら靈驗あらたなる、佛舍利を拜み申す事の貴さよ。是なん足疾鬼が奪ひしを、韋駄天取り返し給ひし、現在奇特の牙舍利の御相好、感涙肝に銘ずるぞや。一心頂禮萬德圓滿釋迦如來。上歌地謠「有難や、今も在世の心地して、今も在世の心地して、まのあたりなる佛舍利を、拜する事のあらた

舍利

概梗

出雲より出でたる旅僧、都に上り、泉涌寺に詣でて舍利殿を拜む。嘗て外道の足疾鬼、この舍利を奪ひ去り取り返せしといふ縁起の樣を、まのあたりに現ぜらるゝ奇特に逢ふ。（五番目）

シテ　足疾鬼（前は里人）　ツレ　韋駄天
ワキ　旅僧　狂言　寺僧

ワキ詞「是は出雲國美保の關より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、この度思ひ立ち洛陽の佛閣一見せばやと思ひ候。道行謠朝立つや、空行く雲の美保の關、空行く雲の美保の關、心は留まる故鄕の、跡の名殘も重なりて、都に早く著きにけり。都に早く著きにけり。詞日を重ねて急ぎ候間、程なく都に著きて候。まづ承り及びたる東山泉涌寺へ參り、大唐より渡されたる十六羅漢、又佛舍利をも拜み申さばやと存じ候。是なる

十六羅漢―釋尊の弟子にて阿羅

あたつて惱むのみかは、命魂を斷たんと、手に手を取り組みかゝりければ、蜘蛛の精靈、千筋の糸を繰りためて、投げかけ〳〵白糸の、手足に纏はり五體をつゞめて、斃れ伏して見えたりける。（舞働）ワキ謠「然りとはいへども、地謠「しかりとはいへども、神國王地の惠を頼み、彼の土蜘蛛を中に取込め、大勢亂れかゝりければ、劒の光に少し恐るゝ氣色を便りに、切り伏せ〳〵土蜘蛛の、首打落し悦び勇み、都へとてこそ歸りけれ。

此血をたんだへ―通解に血の跡を認め行く意とせり

土も木も―初句草も末句すみかなるべき上巻田村を見よ

一人武者―保昌

下知―命令

めぬ君の御威光劒の威徳、かたぐ〱以てめでたき御事にて候。また御太刀附のあとを見候へば、けしからず血の流れて候。この血をたんだへ化生の者を退治仕らうずるにて候。頼光詞「急いで參り候へ。ワキ詞「畏つて候、（中入）

ワキ一聲謠「土も木も、我が大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる。その時一人武者すすみ出で、彼の塚にむかひ大音あげていふやう、是は音にも聞きつらん、頼光の御内にその名を得たる一人武者。いかなる天魔鬼神なりとも、命魂を斷たんこの塚を、地謠「崩せや崩せ人々と、呼ばはり叫ぶその聲に、力を得たるばかりなり。下知に從ふ武士の、下知に從ふ武士の、塚を崩し石をかへせば、塚の内より火焔を放ち、水を出すといへども、大勢崩すや古塚の、あやしき岩間の陰よりも、鬼神の形は現れたり。

後シテ謠「汝知らずや我昔、葛城山に年を經し、土蜘蛛の精魂なり。なほ君が代に障をなさんと、頼光に近づき奉れば、却つて命を斷たんとや。ワキ謠「その時一人武者進み出で、

地謠「その時一人武者すゝみ出でて、汝王地に住みながら、君を惱ますその天罰の、劒に

通姫の歌末句かねてしるしも
膝丸—太刀の名
いしくも—いみじくも

さがにの、頼光謡「蜘蛛のふるまひかねてより、知らぬといふに猶近づく、姿は蜘蛛の如くなるが、シテ詞「かくるや千筋の糸すぢに、頼光謡「五體をつゞめ、シテ謡「身を苦しむる、地謡「化生と見るよりも、化生と見るよりも、枕にありし膝丸を、抜き開きちやうと切れば、そむくる所をつゞけざまに、足もためず薙ぎ伏せつゝ、得たりやおうと罵る聲に、形は消えて失せにけり。形は消えて失せにけり。

ワキ詞「御聲の高く聞え候ほどに馳せ參じて候。何と申したる御事にて候ぞ。頼光詞「いしくも早く來たる者かな。近う來り候へ語つて聞かせ候べし。物語さても夜半ばかりの頃、誰とも知らぬ僧形の來りわが心地を問ふ。何者なるぞとたづねしに、我せこが來べき宵なりさゝがにの、蜘蛛のふるまひかねてしるしもといふ古歌をつらね、即ち七尺ばかりの蜘蛛となつて、我に千筋の糸を繰りかけしを、枕にありし膝丸にて切り伏せつるが、化生の者とてかき消すやうに失せしなり。是と申すもひとへに劒の威徳と思へば、今日より膝丸を蜘蛛切と名づくべし。なんぼう奇特なる事にて無きか。ワキ詞「言語道斷、今に始

期を待つ—死期を待つこと

色をつくして—品をつくして

我がせこが—衣

泡の、浮世にめぐる身にこそありけれ。げにや人知れぬ、心は重き小夜衣の、恨みん方もなき袖を、片敷きわぶる思ひかな。トモ詞「いかに申し上げ候。典藥の頭より御藥を持ちて胡蝶の參られて候。頼光詞「こなたへ來れと申し候へ。トモ詞「畏つて候。此方に御參り候へ。胡蝶詞「いかに申し上げ候。典藥の頭より御藥を持ちて參りて候。御心地は何と御入り候ぞ。頼光詞「昨日より心も弱り、身も苦みて、今は期を待つばかりなり。胡蝶謠「いやいやそれは苦からず。病ふは苦き習ひながら、療治によりてなほる事の、例は多き世の中に、頼光謠「思ひも捨てず樣々に、地謠「色をつくして夜晝の、色をつくして夜晝の、境も知らぬ有樣の、時の移るをも、覺えぬほどの心かな。げにや心を轉ぜず、そのまゝに思ひ沈む身の、胸を苦むる、心となるぞ悲しき。

シテ一聲謠「月淸き、夜半とも見えず雲霧の、かゝれば曇る心かな。詞「いかに頼光、御心地は何と御座候ぞ。頼光謠「ふしぎやな誰とも知らぬ僧形の、深更に及んで我を訪ふ。その名はいかにおぼつかな。シテ詞「愚の仰せ候や。惱み給ふも我がせこが、來べき宵なりさ

典薬の頭—医官

土蜘蛛

梗概

源頼光、病の床に臥せるに、土蜘蛛の精現れたるを、頼光膝丸といふ太刀もて切る。やがて郎等葛城山に向ひて土蜘蛛を退治することを作る。依りて膝丸を蜘蛛切と命ずる由来を説き、劔の徳を讃嘆す。(五番目)

シテ　土蜘蛛(前は僧)　前ツレ　頼光
同　胡蝶　ワキ　一人武者

胡蝶次第謡「浮き立つ雲の行方をや、浮き立つ雲の行方をや、風の心地を尋ねん。サシ是は頼光の御内に仕へ申す、胡蝶と申す女にて候。詞さても頼光例ならず悩ませ給ふにより、典薬の頭より御藥を持ち、只今頼光の御所へ参り候。いかに誰か御入り候。トモ詞「誰にて御座候ぞ。胡蝶詞「典薬の頭より御藥を持ちて、胡蝶が参りたる由御申し候へ。トモ詞「心得申し候、御機嫌を以て申し上げうずるにて候。頼光、サシ謡「こゝに消えかしこに結ぶ水の

現れ給ひ、即ち素盞嗚現れ給へば、さしもに猛き六天なれども、恐れをなしてぞ見えたりける。（舞働）ツレ謡「素盞嗚なほも怒り給ひ、地謡「素盞嗚なほも怒り給ひて、寶棒を取り直し打たんとせしに、飛び違ひ、須彌に上らんとするを引きとゞめ、大地に打ち伏せて、忽ち散々に苦を見せ給へば、今よりこの土に來るまじと、誓をなせば、尊は雲居に上らせ給ひ、魔王は通力盡き果てゝ、魔王は通力盡き果てゝ、虚空に跡なく失せにけり。

六種の震動―動徧動等徧動、震徧震等徧震、涌徧涌等徧涌、吼徧吼等徧吼、起徧起等徧起、覺徧覺等徧覺の六つ

により、御裳濯川と申すなり。クセそも〱當社は垂仁の御宇にはじめて、下津岩根に宮柱、太敷き立てゝ、日神月神をあがめ申すなり。蛭子素盞嗚は、枝を連ぬる御神、高天の原の昔より、シテ謠「今も變らぬ神德の、地謠「その品々の方便を、語るもいかで盡くさまし。仰ぎても猶あまりあり。かゝる惠をおしなめて、頼めや頼め神の告、木綿四手に榊葉添へ、御法の障碍有るべしと、夢に來りて申すとて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。（中入）

ワキ謠「かくて神前に心を澄ます折節に、地謠「俄に大空さへかへり、風雨雷電肝を消し、六種の震動夥しや。

後シテ謠「そも〱是は佛法を破却する、第六天の魔王とは我が事なり。地謠「さて又供奉は誰〱ぞ。シテ謠「六天には煩惱の惡魔、地謠「陰魔死魔、シテ謠「天子業魔、地謠「その外從類悟の道を、障碍の群鬼はさま〲なり。ワキ謠「その時解脫合掌して、地謠「その時解脫合掌して、觀念をなしければ、不思議や天つ空よりも、素盞嗚現れ出で給へり。即ち素盞嗚

シテ、ツレ一聲謠「神路山、御裳濯川のその上に、契りし事の末は違はじ。ツレ謠「永き代までも仕へ來て、シテ、ツレ謠「盡きぬ惠は賴もしや。シテ、サシ謠「見渡せば千木もゆがまずかたそぎもそらず、シテ、ツレ謠「これ正直捨方便の、形を現すかと見え、古松枝を垂れ老樹綠を添へ、皆これ上求菩提の相を表す。有難かりし宮居かな。下歌神風に、心安くぞ任せつる、上歌櫻の宮の花盛、櫻の宮の花盛、花の白雲立ち迷ひ、空さへ匂ふ月讀の、もりくる影も長閑にて、知るも知らぬも道の邊の、行きかふ袖の花の香に、春一しほの氣色かな、春一しほの氣色かな。

シテ詞「是なる御僧は何處よりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「是は都方より出でたる沙門にて候。和光同塵の本願は結緣の始、濁世の我等なんぞ神力の妙樂を蒙らざらんや。神祕を委しく語り給へ。シテ詞「優しき人のいひごとや。懇に語り參らせうずるにて候。

クリ地謠「夫れ御裳濯川といつぱ、倭姫の命、七百餘歳にいたるまで、宮居を尋ねおはします。シテ、サシ謠「然れば當國二見の浦に上り、地謠「裳裾の穢れ給ひしを、この川にて洗ひし

多氣郡に齋宮の御住所ある故に都といふとぞ

度會の宮—大神宮

千木—屋根の上に組違へたる木かたそぎはその一方を取離したるなり

正直捨方便—神は佛と異なり正直を主として方便を捨てゝ用ひずとなり

神風に—西行の歌末句花の盛は

月讀のもり—森に洩りを掛く月讀尊は內宮別宮の一つ

倭姫命—垂仁天皇の皇女

宮居—大神宮の鎭座在すべき土地

外九

第六天

概　梗

解脱上人、伊勢大神宮に詣で、里人に逢ひて、尊き神德の物語を聽く。かくて第六天の魔王、群鬼さま〴〵現れ、素盞嗚尊亦現じ給ふ、遂に魔群は神威に怖れて虚空に去る事を作る。脇能の類なり。

シテ　魔王（前は里女）　前ツレ　里女　ワキ　解脱上人

ワキ 次第謠「心の花を手向とて、心の花を手向とて、大神宮に參らん。詞 是は解脱と申す沙門にて候。我未だ大神宮に參らず候程に、この度思ひ立ち伊勢參宮と志し候。道行謠 旅衣、今日九重を立ち出でて、今日九重を立ち出でて、末は音羽の山櫻、花の瀧川是ぞこの、行くも歸るも逢坂の、杉の木の間に波よする、湖向ふ鏡山、やう〳〵行けば鈴鹿路や、多氣の都の程もなく、度會の宮に著きにけり。度會の宮に著きにけり。

沙門―僧

行くも歸るも―蟬丸の歌によりて書く

多氣の都―伊勢

嘉辰令月―朗詠集に嘉辰月歡無極

いはふ―殿を掛く

御利生―御かげのこと

代の太刀、春榮殿に奉り、重ねて千秋萬歲の、地謠「猶歡の盃の、影も廻るや朝日影、伊豆の三島の神風も、吹き治むべき代の始め、幾久さとも限らじや。嘉辰令月とは、この時をいふぞめでたき、猶々廻る盃の、度かさなれば春榮も、お酌に立ちて親と子の、定めをいはふ祝言の、千秋萬歲の舞の袖、飜し舞ふとかや。シテ謠「千代に八千代にさざれ石の、地謠「いはふ心は萬歲樂。

ワキ詞「いかに種直、かゝるめでたき折なれば一指御舞ひ候へ。シテ詞「さらばそと舞はうずるにて候。地謠「祝ふ心は萬歲樂。（男舞）シテ、サシ謠「東路の、秩父の山の松の葉の、地謠「千世のかげ添ふ若綠かな。若綠かなく。シテ謠「老木も若綠、地謠「立つや若竹の、シテ謠「親子の睦み、地謠「又は兄弟、かれといひこれといひ、いづれもく睦しく、親子兄弟と榮ふる事も、是孝行を守り給ふ、三島の宮の御利生と伏拜み、親子兄弟さも睦しく打連れて鎌倉へこそ參りけれ。

枯木開花は観音の慈悲

獣の雲に吠えけん―淮南安劉安の鶏犬仙薬を嘗めて昇天せし事

花や咲きぬらん。

早打詞「いかに高橋殿。鎌倉よりの早打なり、暫く御待ち候へとよ。ワキ詞「すは又早打きたれるは、遅し切れとの御使か。早打詞「いや若宮別當の申しにより、囚人七人の免狀なり。ワキ詞「さて春榮殿は。早打詞「七人の内。ワキ詞「あゝ嬉しゝ〳〵まづ讀まん。何々若宮別當の申しにより、囚人七人免狀の事。第一番には別當の御弟豊前の禪師、第二番には豊後の次郎、第三番には增尾の春榮丸。殘りは先々讀みても無益、はや助くるぞ春榮と。地謠「太刀の下より引きたてゝ、命助かる兄弟は、嬉しさもなか〳〵に思はぬほどの心かな。今の心は獸の、雲に吠えけん心地して、千々の情ありがたき、兄弟の好みこそ、誠に哀なりけれ。

ワキ詞「いかに種直に申し候。以前も申す如く、春榮殿の御事あつぱれ御命も助かり給ひ候へかし、申し受け某が一跡を繼がせ申したきとの念願かなひて候。この上は賜はり候へ。シテ詞「實にこの上は參らせ候ふべし。ワキ詞「今日は殊更最上吉日なれば、家に傳はる重

八つの苦しみ―地獄餓鬼畜生北鬱單越長壽天佛前佛後佛盲聾瘖瘂世智辯聰

唯心の淨土―極樂遠からず唯心の中にありとのこと

中有―極樂と地獄との間

雪の古枝云々―

物、何れか父母を悲まざる。必ず一世に限るべからず、世々以て父母の數々なり。シテ、サシ謠「それ十二因緣より二十五有の沈淪、生じては死し死しては生じ、地謠「流轉に廻る事、生々の親子、皆以つて誰か又自他ならん。シテ謠「然れば羊鹿牛車に乘り、地謠「火宅の境を出でずして、煩惱業苦の三つの繩に、繋がれ來ぬるはかなさよ。クセ それ生死に流轉して、人間界に生るれば、八つの苦しみ離れず。過去因果經を惟みよ、殺の報殺の緣、たとへば、車輪の如く、我人を失へば、かれまた我を害す。世々生涯、苦しみの海に浮き沈みて、御法の舟橋を、渡りもせぬぞ悲しき。殊更この國は、神國といひながら、又は佛法流布の時、教の法も盛なり。殊に所はあづまがた、佛法東漸にあり。有明の月の、わづかなる人界、急いで來迎の夜念佛、聲淸光に彌陀の國の、涼しき道ならは、唯心の淨土なるべし。シテ謠「處を思ふも賴もしや。地謠「こゝは東路の、故鄕を去つて伊豆の國府、南無や三島の明神、本地大通智勝佛、過去塵點の如くにて、黃泉中有の旅の空、長闇冥の巷までも、我らを照らし給へと、深くぞ祈誓申しける。雪の古枝の枯れてだに、二度

小太郎―從者の名。

シテ詞「仰せはさる事にて候へども、ひらに私を以て春榮を助け、某を誅して給はり候へ。ワキ詞「是は尤にて候へども、なか〱さやうにはなるまじく候。シテ詞「さては力なき事。是まで遙々來り候ひて、春榮が最期を見捨て歸る事はあるまじく候間、某をも一所に誅して給はり候へ。ワキ謠「それはともかくもにて候。

シテ詞「如何に春榮故郷へ形見を送り候へ。いかに小太郎、おことは國に歸り母御に申すべきやうは、春榮が最期の有樣あまりに見捨て難く候程に、諸共に誅せられ候。逆さまなる御弔にてこそ預り候べけれとよく〱申し候へ。クドキ謠是なる守は種直が、母御の方より賜りたる、守佛の觀世音、種直が形見に御覽候へと、よく〱申し候へ。春榮謠「是なる文は春榮が、最期の文にて候なり。又形見には烏羽玉の、我が黑髮の裾を切り、さばかり明暮一筋を千筋と撫でさせ給ひし髮を、春榮が形見に參らする。シテ謠「あら定めなやさるにても、我こそ殘りて御跡を、弔ふべきにさはなくて、成人の子をば先立てて、地謠「歎き給はん母上の、御心の内、思ひやられて痛はしや。クリ實にや生きとし生ける

を助け申さんとてこそ、家人とは申しつれ。忠が不忠になりけるか、許させ給へ兄御前、許させ給へ兄御前。上歌種直も春榮も、種直も春榮も、囚人守護の兵も、互の心を思ひやり、實に持つべきは兄弟なりとて、共に袂を濡しけり。共に袂を濡しけり。

ワキ詞「言語道斷。御兄弟の御心中を感じ申し、我等も落涙仕りて候。如何に種直に申し候。某春榮殿を痛はり申す事餘の儀にあらず、某子を一人持ちて候を、宇治橋の合戰に討たせて候が、この春榮殿の面ざし少しも違はず候間、天晴御命も助かり給ひ候へかし、某申し受け遺跡を繼がせ申し度きとの念願にて候。や何と申すぞ。是は眞にてあるか、あら何ともなや、只今申しつる事も徒事にて候。又鎌倉より早打立つて、箱根を越さぬ先に、囚人を皆誅し申せと仰せ出だされて候。御痛はしながら力なき事。春榮殿も御最期御用意をさせ申され候へ。又種直は急いで故郷へ御歸り候へ。シテ詞「暫く候。春榮が事は幼き者の事にて候間、春榮を助け、某を誅して給はり候へ。ワキ詞「仰せはさる事にて候へども、はや目録にて御目にかけて候間、中々叶ひ申すまじく候。

遺跡—跡目ともいふ家督のこと

目録にて—囚人の姓名屆出でたりとのこと

先途―大事の場合

逆さまなる御弔ひ―子が却て親より弔はるゝこと

深山木の云々―賴政の歌を引く

殷のやうか―秦のかくい共に未詳

命を捨つるまで―捨つるまでの事なりの意

たり、其際の先途をも見屆けざれば、家人といふ事弟ながらも恥しうこそ候へさりながら、一處に誅せられん爲に、是まで遙々來りたるに、何とて家人とは申すぞ。春榮詞「いかに汝は三世の好みを思ひ、是まで遙々きたりたる志し、返す〴〵もやさしけれさりながら、汝は故鄕に歸り、母御に申すべきやうは、春榮こそ誅せられ候へ、逆さまなる御弔ひにこそ預り候ふべけれと、よく〳〵申し候へ。シテ詞「猶も家人と申すか。深山木の其梢とは見えざりし、櫻は花に顯れにけり。何と家人とくだすとも、終には隱れよもあらじ。春榮謠「時を得て早くもそだつ夏木立、その木をそれと見るべきか、早とく歸れと叱りけり。シテ詞「山皆染むる梢にも、松は變らぬ習ひぞかし。春榮謠「一千年の色とても、雪には暫し隱るゝなり。シテ詞「是を物に喩ふれば、殷のやうかは父をうち、春榮謠「秦のかくいは師匠をうつ。シテ詞「今の增尾の春榮は、春榮謠「現在の兄を家人といふ。シテ詞「是は逆罪たるべきに、春榮謠「誠は深き孝行なり。シテ詞「いやとにかくに命を捨つるまで、種直これにて腹切らん。や、刀は參らせつ。御芳志に刀を給はり候へ。春榮謠「なう〳〵暫くこはいかに、地謠「命

聊爾—粗忽のこと

勝劣を見せ—眞僞を確むること

か、さあらばやがて追つ歸し候べし。如何に以前の人の渡り候か。シテ詞「是に候。ワキ詞「仰せの通りを申して候へば、物の隙より御覽候ひて、兄にては無し、譜代召し使はるゝ家人なれば、急ぎ追つ歸し申せとの御事にて候。何とて聊爾なる事をば承り候ぞ。シテ詞「暫く。まづ御心を靜めて聞召され候へ。家人の身として兄と名のり、一所に誅せらるゝ事の候べきか。如何やうにも御沙汰候ひて、引き合はせられて給はり候へ。某對面して、家人か兄かの勝劣を見せ申し候べし。ワキ詞「實に〳〵是は尤にて候。さらば某たばかつて呼び出だし候べし。その時御袖に縋られて委しく仰せ候へ。シテ詞「心得申し候。さらば是に待ち申し候べし。

ワキ詞「如何に春榮殿に申し候。只今かの者をばあら〳〵と申し追つ歸して候さりながら、彼の者の心中あまりに不便に候間、後姿をそと御覽候へ。此方へ渡り候へ。

シテ詞「如何に春榮、何とて某をば家人とは申すぞ。さてもこの度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢を拔かんとて少し傍に引き退き候隙に、御身は深入して生捕られ

存命不定—生死不明
譜代—代々

ワキ詞「春榮殿のゆかりと仰せ候はいづくに渡り候ぞ。シテ詞「さん候是に候。ワキ詞「是は春榮殿の爲には何にて渡り候ぞ。シテ詞「是は春榮が兄に、增尾の太郎種直と申す者にて候が、今度宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢をぬかんと少し傍に引き退き候間に、弟にて候春榮深入し生捕られて候間、餘りに見捨て難く候へば、某も一所に誅せられん爲に遙々これまで參りて候。春榮に引き合はせられて賜はり候へ。ワキ詞「委細承り候。是までの御出で誠にゆゝしく候。やがてその由を春榮殿へ申し候べし、暫く御待ち候へ。シテ詞「心得申し候。

ワキ詞「いかに春榮殿へ申し候。御身の御舍兄に、增尾の太郎種直と御名のりあつて、是まで御出でにて候。急いで御對面候へ。春榮詞「是は眞しからず候。兄にて候者は、宇治橋の合戰にて重手負ひ、存命不定とこそ承り候ひつれ。ワキ詞「あら不思議や、正しく御舍兄と仰せ候ものを、さりながら物の暇よりそと御覽候へ。春榮詞「不思議なる事にて候。譜代召し使ひ候家人にて候間、急ぎ追つ歸して給はり候へ。ワキ詞「さては眞に家人にて候

痛はり申されー大切にせらるゝとなり

大法ー嚴重なる掟

狂言詞「心得申し候。囚人のゆかりの人は堅く禁制にて候へども、春榮殿の御事は頼み候人別して痛はり申され候間、その由を申して見候べし、暫く御待ち候へ。トモ詞「心得申し候。狂言詞「如何に申し候。春榮殿のゆかりと申して若き男の來り候ひて、御目に懸りたき由申し候間、堅く御禁制にて候へども、春榮殿の御事にて候間申し入れて見うずる由申して候。ワキ詞「何と春榮殿のゆかりの人と申して、某に對面ありたき由申すか。汝の知る如く、囚人のゆかりに對面は禁制にて候へども、春榮殿の御事は別して痛はり申し候間、そと對面申さうずるにて候。さりながら大法のことにて候間、太刀刀を預り候へ。狂言詞「畏つて候。いかに申し候、只今の通りを申して候へば、かたく禁制にて候へども、春榮殿のゆかりの御事にて候ほどに、そと御目にかゝらうずると申され候。さらば太刀刀を給はり候へ。トモ詞「心得申し候。尋ね申して候へば、春榮殿のゆかりならば、高橋別して痛はり申し候間、對面申さうずる由申され候。さりながら大法にて候程に、太刀かたな禁制の由申し候。シテ詞「さらば太刀刀を參らせ候べし。

散らぬ先に—春榮の存生中の意

囚人の數に入らばや—春榮の身代りにならんとの意

ゆかりの者—緣者

シテ、トモ次第謠「散らぬ先にと尋ね行く、散らぬ先にと尋ね行く、花をや風の誘ふらん。

シテ詞「是は武藏國の住人、增尾の太郎種直にて候。さても宇治橋の合戰に弓手の肩を射させ、その矢を拔かんとすこし傍に引き退き候間に、弟にて候春榮深入し、やみやみと生捕られて候。承り候へば、生捕何れも近き程に誅せらるゝ由申し候間、某も囚人の數に入らばやと存じ、只今春榮がありかへと急ぎ候。シテ、トモ道行謠「住み馴し、都の空は雲居にて、都の空は雲居にて、朝立ち添ふる旅衣、日も重なりて行く程に、名にのみ聞きし伊豆の國府、三島の里に著きにけり。三島の里に著きにけり。

シテ詞「急ぎ候ほどに、伊豆の三島に著きて候。此處にて囚人の奉行をば、高橋とやらん申し候。尋ねて對面申したき由申し候へ。トモ詞「畏つて候。如何に案内申し候。囚人の奉行高橋殿と申すは何くに御座候ぞ。狂言詞「何の御用にて候ぞ。賴みたる人の事にて候。

トモ詞「いや苦しからぬ者にて候。是は春榮殿のゆかりの者にて候。高橋殿へそと御目にかゝりたき事の候ひて是まで參りて候、その由をよく〱御心得あつて御申し候へ。

春榮

梗概

増尾春榮丸といふ者、囚人となりて伊豆三島なる高橋權頭の、許に在り。その兄種直、弟に代りて誅せられんとし、尋ね行きしに、兄には非ず家人なりといひ、兄弟互に相庇ふ。たまたま鎌倉より早打來り、囚人赦免の中に春榮入る。權頭つひに春榮を養子となし、めでたく祝言あり。共に打つれ鎌倉に上る。これ友愛の德なりといふ筋なり。(四番目)

シテ　増尾種直　　トモ　從者　　子方　増尾春榮丸

ワキ　高橋權頭　　狂言　從者

ワキ詞「是は高橋權の頭にて候。扨もこの度宇治橋の合戰に身方打勝ち、分捕功名數を盡くす。某が手にも囚人數多候中にも、春榮殿と申す幼き人を生捕り申して候。この由を申し上げて候へば、近きほどに誅し申せとの、御事にて候間、春榮殿へこの由を申さばやと存じ候。

あたりなる奇特かな。

王母謡「王母は庭上に歩み出でて、地謡「王母は庭上に歩み出でて、彼の桃實を捧げ持つて、上覽に供へ奉れば、帝王御感のあまりにや、糸竹の調數を盡し、皆一同に奏で給ふ、舞樂の祕曲は面白や。（樂）舞樂も漸く時過ぎて、舞樂も漸く時過ぎて、夕陽西に傾きければ、各君に御暇申し、歸らんとせしに、帝王名殘を惜しみ給ひ、重ねて參內申すべしと、宣旨を蒙り、二人は伴なひ出でけるが、王母は斑龍にゆらりと打乘り、遙の雲路に攀ぢ上り、遙の雲路に攀ぢ上つて、又天上にぞ歸りける。

採菓汲水—難行苦行の一例

歸る波の—波はかへるいひ聲といふ語縁に用ゐたり

しまし、地謠「採菓汲水年を經て、終に成道し給ひて、大聖世尊となり給ふ。クセしかるに仙人のその數、限も知らぬ中にも、西王母と聞えしは、西方極樂無量壽佛の化現なれば、量なき命の、仙人となるぞめでたき。されば園生に植うる桃の、三千年に一度、花咲き實なるこの木の、仙藥となるぞ不思議なる。シテ謠「今は包まじ我こそは、地謠「その名も世世に隱れなき、東方朔と聞えしは、この老翁が事なり。君桃實を聞召さば、御壽命長遠に、御身も息災なるべし、急ぎ王母を伴なひ、重ねて參內申さんと、庭上を立つて歸る波の、聲ばかり殘りつゝ、形は雲に入りにけり。形は雲に入りにけり。（中入）

後シテ謠「そも／＼是は、仙鄕に入つて年久しき、東方朔とは我が事なり。詞さてもわれ西王母が桃實を、度々服せしその故に、壽命既に九千歳に及べり。彼の桃實を君に捧げ申さんとの誓あり。謠如何にやいかに西王母、疾く／＼參內申すべし。地謠「不思議や西の空よりも、不思議や西の空よりも、白雲一群降ると見えしが、三足の青鳥、翅をならべて飛び廻り、姿も妙なる王母の出立、光も輝く衣冠を著し、斑龍に乘じて顯れ給ふ、まの

秋來ぬと—古今集に「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる」

悉達太子—釋迦如來の事父は淨飯王といふ

風や十日の雨、シテ、ツレ謡「潤ふ四方の草木まで、靡き隨ふこの時に、生まれあふ身は賴もしや。下歌 時しも今日は七夕の、逢ふ瀬を急ぐ頃なれや。上歌 秋來ぬと、目に見ぬ空はおのづから、目に見ぬ空はおのづから、音かへて吹く風の、袖も涼しき夕まぐれ、靡く稻葉の色までも、千年の秋の始かな。千年の秋の始かな。

シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候。ワキツレ詞「奏聞申さんとは如何なる者ぞ。シテ詞「是はこの國の傍に住む者にて候が、申し上げたき子細候ひて參內申して候。ワキツレ詞「さらば此方へ參り候へ。シテ詞「是はこの國の傍に住む者にて候が、めでたき瑞相の御座候ひて參りて候。この程三足の青鳥御殿の上を飛び廻り候。これ西王母が寵愛の鳥にて候。卽ち西王母この君へ參禮申すべし。この事奏聞申さんために參りて候。ワキ詞「かゝるめでたき事こそ候はね。猶々仙人の謂れ懇に物語り候へ。

クリ地謡「それ仙鄕といつぱ、人間に交はらず、松の葉をすき苔を身に著て、年は經れども樂しみ盡きず、飛行自在の通を得る。シテ、サシ謡「忝くも悉達太子は、仙人に仕へおは

東方朔

梗概　前の西王母と相關聯す。東方朔西王母あらはれ出でて三千年に一度實るといふ桃實を君王に捧げ上るといふめでたき曲なり。（脇能）

シテ　東方朔（前は老人）　前ツレ　西王母　ワキ　帝王

喜見城—帝釋天の居所

ワキ、サシ謡「面白や四時時移り易くして、春過ぎ夏暮れ今は早、初秋の七日七夕の、星の祭を急ぐなり。ワキツレ謡「帝の御殿は承華殿、ワキ謡「さながら花の袖をつらね、ワキツレ謡「七寶の臺金銀の床に、君を始め奉り、ワキ謡「官軍おの〱、ワキツレ謡「竝み居つゝ、上歌地謡「御遊をなしていろ〱の、御遊をなしていろ〱の、樂み盡きぬその氣色、音に聞く喜見城も、これにはいかで勝るべき、只これ君の御威光、廣き惠は有難や。廣き惠は有難や。

シテ、ツレ一聲謡「治まれる、御代の光に數ならぬ、身までも安き住まひかな。ツレ謡「惠も廣きこの君の、シテ、ツレ謡「御影を頼むばかりなり。シテ、サシ謡「それ賢王の御代のしるし、五日の

神あげの御山ー神靈を山上に送り返す所

の役々は、シテ謠「住吉鹿島、地謠「諏訪熱田、その外三千世界の諸神は、こゝに影向なり、とり〴〵の小忌の袖、返す〴〵も面白や。（樂）地謠「舞樂も今は時過ぎて、舞樂も今は時過ぎて、更け行く空もしぐるゝ雲の、沖より疾風吹き立つ波は、海龍王の出現かや。龍神謠「そも〳〵是は、海龍王とは我が事なり。詞さても毎年龍宮より、黄金の箱に小龍を入れ、神前に捧げ申すなり。地謠「龍神卽ち現れて、龍神卽ち現れて、波を拂ひ潮を退け、汀に上り御箱をすゑ置き、神前を拜し渇仰せり。龍神謠「其時龍神御箱の蓋を、地謠「その時龍神御箱の蓋を、忽ち開き、小龍を取り出だし、卽ち神前に捧げ申し、海陸ともに治まる御代の、實に有難き恵かな。（舞働）シテ謠「四海安全に國治り、地謠「四海安全に國治つて、五穀成就福壽圓滿に、いよ〳〵君を守るべしと木綿四手の數々、神々とり〴〵に御前を拂ひ、神あげの御山に上らせ給へば、龍神平地に波浪を起し、逆卷く潮に引かれ行けば、諸神は虚空に遍滿しつゝ、げにあらたなる神は社内、げにあらたなる神は社内、龍神は海中に入りにけり。

十羅刹女—鬼神

相好—姿

なる。シテ謠「なか〳〵なれや年々に、今日の今宵の神遊、地謠「その役々も、シテ謠「數々に、

地謠「あらぶる神達の舞歌の袖、引くや御注連の名は誰と、白木綿かゝる玉垣に、立ち寄

ると見えつるが、神の告ぞと言ひ捨てゝ、社壇に入りにけり。社壇の内に入りにけ

り。（中入）

地謠「しぐるゝ空も雲晴れて、月も輝く玉の御殿に、光を添ふる氣色かな。天女謠「我は是

れ、出雲の御崎に跡を垂れ、佛法王法を守の神、本地十羅刹女の化現なり。地謠「容顏美

麗に女體の神、容顏美麗の女體の神、光も輝く玉の簪、かざしも匂ふ袂を返す、夜遊の

舞樂はおもしろや、（天女舞）實に類無き舞の袖、實に類無き舞の袖、靡くや雲の絶間より、

諸神は殘らず現れ給ひ、舞樂を奏し神前に飛行し、早疾く姿を現し給へと、夕べの月も

雲晴れて、光も朱の玉垣輝き、神體現れおはします。

ロンギ地謠「實にや尊き御相好、實にや尊き御相好、まのあたりなる神德を、受くるも君の

惠かな。シテ謠「とても夜遊の神祭、委しくいざや現し、彼の客人を慰めん。地謠「さて神樂

ワキ謠「惠普き、シテ謠「月影も、上歌地謠「神の世を、思ひ出雲の宮柱、思ひ出雲の宮柱、ふとしき立ちて敷島の、大和島根まで、動かぬ國ぞ久しき。實にや紅も、深くなり行く梢より、しぐれて渡る深山邊の、里も冬立つ氣色かな、里も冬立つ氣色かな。

ワキ詞「不知案内の事にて候へば、當社の神祕委しく御物語り候へ。クリ地謠「そも〳〵出雲國大社は、三十八社を勸請の地なり。シテ、サシ謠「然るに五人の王子おはします。地謠「第一はあじかの大明神と現れ給ふ。山王權現是なり。シテ謠「第二には湊の大明神、地謠「九州宗像の明神と現れ給ふ。第三は伊奈佐の速玉の神、常陸鹿島の明神とかや。クセ「第四には烏屋の大明神、信濃の諏訪の明神と、卽ち現じおはします。第五には出雲路の大明神、伊豫の三島の明神と、現れ給ふ御誓、實に曇無き長月や、月のみそかにとりわきて、シテ謠「住吉一所は影向なる。地謠「殘の神々は、十月一日の寅の時に、悉く影向なり、さまざまいろ〳〵の神遊、今も絕えせぬこの宮居、語るもなか〳〵愚なる誓なるべし。

ロンギ地謠「實に有難き物語、實に有難き物語、末世ながらも隔て無き。神の威光ぞあらた

三十八社―大社附屬の末社等を數へていふ

宗像―三女神

三島の明神―大山祇神

大社に集り給ふとの俗說あり隨て出雲にては神有月といふなり
八雲たつ云々ー素盞嗚尊の御歌を引く
大社ー杵築大社とて大國主神を祭る

シテ、ツレ二聲謠「八雲立つ、出雲八重垣妻こめし、宮路に運ぶ歩みかな。ツレ謠「尾上の松の梢まで、シテ、ツレ謠「神風誘ふ聲ならん。シテ、サシ謠「實にや濁世の人間と、生れ來ぬれど誓ひある、シテ、ツレ謠「神に仕ふる身にしあれば、漏れぬ惠にかゝりきて、心のまゝの春秋を、送り迎へて年月の、盡きせぬ世々を頼むなり。下歌いざや歩みを運ばん。いざや歩みを運ばん。上歌いづくにか、神の宿らぬ陰ならん。神の宿らぬ陰ならん。嶺も尾上も松杉も、山河海村野田、殘る方なく神のます、御蔭を受けて隔て無き、宮人多き往來かな、宮人多き往來かな。

ワキ詞「我出雲國大社に參り、案內をうかゞふ所に、宮人あまた來れり。如何に方々に申すべき事の候。シテ詞「是はこのあたりにては見馴れ申さぬ御事なり、いづくよりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「さん候是は朝に隙なき身なれども、當國に於て今月は神有月とて、諸神殘らず影向の地と承り及びて候へば、この度君に御暇を申し、遙々參詣申したり。

ツレ謠「實に有難や神と君との、ワキ謠「隔て無き世のしるしとて、シテ謠「歩みを運ぶこの神の、

大社

概梗

或る宮人、都より出雲に向ひ、大社にて十月に諸神集ひ給ひて神事あるに詣でられ、大神及び天女龍神の奇特に逢はるることを作る。(脇能)

シテ　杵築大神(前は宮人)　前ツレ　官人
後ツレ　天女　後ツレ　龍神
ワキ　臣下

ワキ三人　次第謠「誓數多の神祭、誓數多の神祭、出雲國を尋ねん。ワキ詞「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても出雲國に於て、今月は神有月とて諸神影向成り、御神事さま〴〵の由承り及び候程に、この度參詣仕り候。ワキ三人　道行謠「朝立つや、旅の衣の遥々と、旅の衣の遥々と、行方しぐるゝ雲霧の、山又山を越え過ぎて、神有月も名にしおふ、出雲國に著きにけり。出雲國に著きにけり。

神有月—十月を神無月と稱ふより其字によりて諸國の神々出雲

こゆるぎの云々―古今集に「こよるぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波」めざしは少女のこ

（天女舞）天女謡「さる程に〳〵、地謡「和布刈の時至り、虎嘯くや風早鞆の、龍吟ずれば雲起り雨となり、潮も光り鳴動して、沖より龍神現れたり。龍神すなはち現れて、龍神すなはち現れて、シテ謡「和布刈の所の水底を穿ち、地謡「拂ふや汐瀬に、こゆるぎの磯菜摘む、シテ謡「めざし濡らすな沖に居れ波。地謡「沖に居れ波と夕汐を退け、屏風を立てたる如くに分れて、海底の砂は平々たり。（舞）

ワキ謡「神主松明振りたてゝ、地謡「神主明松振りたてゝ、御鎌を持つて岩間を傳ひ、つたひ下つて半町ばかりの、海底の和布を刈り、歸り給へば程なく跡に、汐さし滿ちて、もとの如く荒海となつて、波白妙のわたづみ和田の原、天を浸し、雲の波煙の波風、海上に收まれば、蛇體は龍宮に飛んでぞ入りにける。

長く海路の通ひを、たち隠す波の玉の御子を、捨てつゝ豊玉姫は、龍宮に入り給ふ。その後潮さしひきの、朝暮の時はありながら、人畜類の生を背き、境をさかりにき。シテ謡「然れば神代の昔より、地謡「この早鞆の神祭、神慮普き誓なれや。上は非想の雲の上、下は下界の龍神まで、渇仰の心中、まことに深き蒼海を、陸地になしてこの國の、長門の通ひ隔てもなき、海藏の御寶も、心の如くなるべし。

ロンギ地謡「げにや心の如くにて、げにや心の如くにて、この結緣もさまぐの、人の願の無かるべき。ツレ謡「今は何をか包むべき、我が住む方は久方の、地謡「天つ少女の雲の袖、シテ謡「かざしの花の手向草、地謡「色こそ變れ、シテ謡「わたづみの、地謡「花は波路の底よりも、龍宮の捧げもの、天地ともに渇仰の、天つ少女は雲に乗れば、翁は老の波に、隠れ入り給ひけりや。隠れ入らせ給ひけり。（中入）

地謡「汀に神幸なり給へば、汀に神幸なり給へば、虚空に音樂、松風に和して、皎月照らし異香薫ずる龍女は波をもかざしの袖を、返すも立ち舞ふ袂かな。

非想—天上界

海藏—海中に祕藏せる意

鱗―魚類のこと

春秋の云々―新勅撰集の歌

海陸の隔て―人間界と龍宮界との間をいふ

ん。ツレ謠「是は賤しき海士少女の數には有らぬ憂き身なるが、手向を捧ぐるばかりなり。シテ詞「我は又年經て住める此浦の、漁翁の罪を恐るゝ故、賤しき者は輕き身を、浮めんためにて候なり。ワキ謠「なかく\なれや鱗までも、誓に漏れぬこの浦の、シテ謠「海士の漁火焦がるとも、シテ、ツレ謠「和光の影は曇無く、地謠「明らかなれや天地の、開けし御代の如くにて、直なるべき人心、いやましの瑞驗、あらはれにけるぞ有難き。上歌海原や、博多の海も程近く、博多の海も程近く、汐引島も見え渡る、早鞆の友千鳥、沖の鷗の群れ立つや、春秋の、雲居の雁も留め得ぬ、誰が玉章の門司の關守と、詠みし心も理や。詠みし心も理や。

クリ地謠「それ地神第四の御代、火々出見尊、豐玉姫と契をなし、海陸の隔て無かりしに、シテ、サシ謠「その御産の時豐玉姫、尊に向ひ宣はく、地謠「産期に於て我が姿を、敢て見給ふ事なかれと、御約諾の詔、互に固く誓ひ給ふ。クセ然れども時至り、さすがに御氣色いぶかしく思しけるかとよ。かいまみえせさせ給ひしを、いとあさましと恨みかこち、

年の極め—一年の最終

蘊藻の禮奠—和布を供物とて祭ること

海士のしわざ—漁業

かひ有るべしや—貝に効の意をかく

を執りおこなはばやと存じ候。サシ謡「有難や今日早鞆の神の祭、年の極めの御祭と言つぱ、又新玉の年の始めを、祝ふ心は君が爲、上歌「春の野に出でて摘む若菜、春の野に出でて摘む若菜、生ひ行く末の程もなく、年は暮るれど緣なる、和布刈の今日の神祭、心を致しさま〴〵に、君の恵を祈るなり。君の恵を祈るなり。

シテ、ツレ一聲謡「天地の開けし御代は久堅の、神と君との御影かな。ツレ謡「今日に廻るも早鞆の、シテ、ツレ謡「共に暮れ行く年なれや。シテ、サシ謡「有難やそれ秋津洲の内において、神所の御祭さま〴〵なれども、シテ、ツレ謡「此早鞆の神祭、世界わたづみ隔てなくて、蘊藻の禮奠感應の、海松藻浮藻の花も咲く、波をかざしの手向草、塵に交る神心、誓に漏るゝ方もなし。下歌「歩みを運ぶこの神に、いざ結緣をなさうよ。上歌「所は早鞆の、所は早鞆の、ゆききの舟楫をも絶え、數々の捧物、海士のしわざに至るまで、かひあるべしや志、それこそ花の手向なれ。それこそ花の手向なれ。

ワキ謡「不思議やな夕影すぐる神の御前に、手向を捧ぐる人影は、そもや如何なる人やら

和布刈

概梗

早鞆明神にて大晦日に和布刈の神事行はるゝことを以て脚色す。初め神職出でて神事を行ふ事を述ぶる所に、漁翁海士あらはれ、神德を讃歎し、龍宮の故事を物語る。やがて二人は龍神天女と現じて、奇特を見す。（脇能）

シテ　龍神（前は漁翁）　ツレ　天女（前は海士）

ワキ　早鞆神職

ワキ次第謠「今日早鞆の神祭、今日早鞆の神祭、盡きせぬ御代ぞめでたき。ワキ詞「そもく是は長門國早鞆の明神に仕へ申す神職の者なり。さても當社に於いて御祭さまぐ御座候中にも、十二月晦日の御神事をば、和布刈の御神事と申し候。今夜寅の時に至つて、龍神潮を守護し、波四方に退いて平々たり。その時神主海中に入つて、水底の和布を刈り神前に供へ申し候。殊に當年は不思議の奇瑞御座候間、いよく信心を致し、御神事

和布―めとは海藻の總名

蓬萊山—仙人の住む島

姫小松—小松を引くは正月子の日の嘉例なり

雲の上人—百官卿相をいふ

難き。君の惠ぞ有難き。

ワキ詞「いかにも奏聞申すべき事の候。毎年の嘉例の如く、鶴龜を舞はせられ、其後月宮殿にて舞樂を奏せられうずるにて候。シテ詞「ともかくも計らひ候へ。地謠「龜は萬年の齡を經、鶴も千代をや重ぬらん。（中ノ舞）千代のためしの數々に、千代のためしの數々に、何を引かまし姫小松の、綠の龜も舞ひ遊べば、丹頂の鶴も一千年の、齡を君に授け奉り、庭上に參向申しければ、君も御感の餘りにや、舞樂を奏して舞ひ給ふ。（樂）キリ月宮殿の白衣の袂、月宮殿の白衣の袂の、色々妙なる花の袖、秋は時雨の紅葉の葉袖、冬はさえ行く雪の袂を、翻へす衣も薄紫の、雲の上人の舞樂の聲々に、霓裳羽衣の曲をなせば、山河草木國土豊に、千代萬代と舞ひ給へば、官人駕輿丁御輿を早め、君の齡も長生殿に、君の齡も長生殿に、還御なるこそめでたけれ。

青陽―春のこと
節會―朝廷にて行はせらるゝ儀式
庭の砂は―以下禁庭の莊嚴なる形容金銀瑠璃硨磲瑪瑙は七寶の内

外八

鶴龜

梗概

一名月宮殿といふ。年の初のめでたき儀式に鶴龜の舞を叡覧ある事を作る。祝言の曲なり。朗詠集の長生殿裏春秋富、不老門前日月遲の語意を前後に用ひたり。(脇能)

シテ　皇帝　　ワキ　大臣

シテ、サシ謠「夫れ青陽の春になれば、四季の節會の事始、地謠「不老門にて日月の、ひかりを天子の叡覧にて、シテ謠「百官卿相に至るまで、袖を連ね踵を接いで、地謠「その數一億百餘人、シテ謠「拜を進むる萬戸の聲、地謠「一同に拜するその音は、シテ謠「天に響きて、地謠「夥し。上歌「庭の砂は金銀の、庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の樞、硨磲の行桁瑪瑙の橋、池の汀の鶴龜は、蓬萊山もよそならず、君の惠ぞ有

菊の露云々―拾遺集に「我宿の菊の白露けふ毎に幾世積りて淵となるらん」

れたり。地謠「頃は秋の夜月おもしろく、頃は秋の夜月おもしろく、汀の波も更け靜まりて、數多の猩々大瓶に上り、泉の口を取るとぞ見えしが、涌き上り涌き流れ、汲めども汲めども盡きせぬ泉、何れも戯れ舞ふとかや。(中ノ舞)シテ謠「菊の露、積りて盡きぬこの泉。地謠「盡きせぬ宿に、シテ謠「返し授け置き、地謠「是迄なりや、醉伏す夢の、覺ると思へば又起上り、命長柄の柄杓の酒を、道俗男女に殘さず進め、もとの泉に收りければ、何れも何れも、足もとはよろ〳〵と、繰言茂く、千秋萬歳君千代までと、千秋萬歳君千代までと、榮る御代こそめでたけれ。

あり酒をはめたる文

さにぬり—丹塗

菊月—九月

菊の盃—重陽の嘉例

人の心にひきかへて、是は琴にも盃、詩を作るにも盃、只酒飲の友ばかり。恥しやさこそげに、市人の我を笑ふらん。ワキ詞「この程は何處の人とも辨へず、今日は御名を名のり在しませ。シテ詞「今は何をか包むべき、是は潯陽の江に年久しき、猩々と云へる者なるが、御身親に孝有るにより、天の哀れみ深ければ、泉の壺を與へんなり。謠「疑ひ給ふなかうふうと、地謠「夕の空も近ければ、夕の空も近ければ、暇申してさらばとて、行くかと見ればさにぬりの、面も赤く樣變りて、市人に立紛れて、跡も見えずなりにけり。跡をも見せずなりにけり。（中入）

地謠「御酒と聞く、御酒と聞く、名も冷しく秋の來て、暖め酒と菊月の、頃も早紅葉の、早色づくか一重山、薄き紅葉ば色々の、菊の盃する置き、秋の夜深く待ちけるに、ツレ二人謠「不思議やこの友の、地謠「不思議やこの友の、來らぬは覺束な、沖に向ひて我が友の、など遲なはり給ふぞや、急ぎ給へ友人。又猩々はあらはれ出でて、又猩々は現れ出でて、彼のかうふうに、妙なる泉を與へんとて、波間を分けて潯陽の江の、汀も近く現

わたづみ―海のこと

市人―童子をさす

琴詩酒―白氏文集に之を三友と云へり

酒功贊―同書に

大瓶猩々

梗概

かうふうといふ酒賣る男の孝行なるをめでて、猩々多く現れ來り、汲めどもつきせぬ大瓶の酒泉を授けめでたく舞ひ納む。上卷の猩々に相似たり。（五番目―留）

シテ　猩々（前は童子）　後ツレ　猩々

ワキ　かうふう

ワキ詞「是は唐かねきん山の麓に、かうふうと申す民にて候。我親に孝行なるにより、次第次第に富貴の家と罷り成りて候。又この間何處とも知らず童子數多來り、某が酒を買ひ取り候。今日も來りて候はゞ、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。シテ一聲謠「わたづみの、そことも知らぬ波間より、現れ出づる日影かな。ワキ詞「今日の市人は何とて遲く來り給ふぞ。シテ詞「嬉しやさらばと內に入り、謠いつもの酒を愛しけり。上歌地謠「琴詩酒と、聞くも隔てぬ友人の、聞くも隔てぬ友人の、いつも變らぬ酒功贊に、酒を愛せし來し方の

めだれ顔—見苦しき意歟
十方切—以下劍術の法
三つ頭—きつさき
御曹司—牛若のこと
二つになつて—眞二つに斬られたること

地謠「あらはかゞしや盗人よ、あらはかゞしや盗人よ。めだれ顔なる夜討はするとも、我には叶はじものをとて、透間あらせず切つてかゝる。熊坂も大太刀使の曲者なれば、さそくをつかつて十方切、八方拂や腰車、破圦の返し、風まくり、劍降らしや獅子の齒がみ、紅葉重、花重、三つ頭より火を出だして、鎬を削つて戰ひしが、祕術を盡す大太刀も、御曹司の小太刀に切り立てられ、請太刀となつてぞ見えたりける。

地謠「打物業にて叶ふまじ、打物業にて叶ふまじ、組んで力の勝負せんとて、太刀投げ捨てて、大手を廣げて飛んでかゝるを、背けて諸膝薙ぎ給へば、切られてかつぱと轉びけるが、起き上らんとてつつ立つ所を、眞向よりも割りつけられて、一人と見えつる熊坂の長範も、二つになつてぞ失せにける。

あら物々しや—牛若の心中を語る

大鳥歩み—大股に歩くこと

三つが三つながら消えて候。シテ詞「それこそ大事よ。夫松明の占手といつぱ、一の松明は軍神、二の松明は時の運、三は我等の命なるに、三つが三つながら消ゆるならば、今夜の夜討はさてよな。ツレ詞「御諚の如く、このまゝにては鬼神にてもたまるまじく候。只退いて御歸り候へ。シテ詞「實に〳〵盗も命の有りてこそ。いざ退いて歸らう。ツレ詞「尤もにて候。シテ謡「いや熊坂の長範が、今夜の夜討を仕損じて、何くに面を向くべきぞ、謡只攻め入れや若者どもと、大音あげて呼ばはりけり。地謡「鬨を作つて切つて入りけり。

地謡「あら物々しやおのれ等よ、あら物々しやおのれ等よ、先に手並は知りつらん、それにも懲りず打入るか。八幡も御知見あれ、一人も助けてやらじものをと、小口に立つてぞ待ちかけたる。

地謡「熊坂の長範六十三、熊坂の長範六十三、今宵最後の夜討せんと、鐵屐を踏ん脱ぎ捨て、五尺三寸の大太刀を、するりと拔いて打ちかたげ、大鳥歩みにゆらり〳〵と、歩み出でたる有様は、如何なる天魔鬼神も面を向くべき樣ぞなき。

松明の占手―松明を投げて首尾を占ふこと

居たり。

ツレ大勢 一聲謠「寄せかけて、打つ白波の音高く、鬨を作つて騒ぎけり。シテ詞「如何に若者ども、ツレ詞「御前に候。シテ詞「大手がくわつと開けたるは、内の風ばし早いか。ツレ詞「さん候内の風早くして、或は討たれ、又は重手負ひたると申し候。シテ詞「不思議やな内には吉次兄弟ならでは有るまじきが、さて何者かある。ツレ詞「投松明の影より見候へば、年の程十二三ばかりなる幼き者、小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候。シテ詞「さて摺針太郎兄弟は、ツレ詞「是は火振の親方として、一番に切つて入りしを、例の小男渡り合ひ、兄弟の者の細首を、只一打に打ち落したる由申し候。シテ詞「えい／＼何と何と。彼の者兄弟は、餘の者五十騎百騎には増さうずるものを。謠 あゝ斬つたり／＼、詞 彼奴は曲者よ。ツレ詞「高瀬の四郎は之を見て、今夜の夜討悪しかりなんとや思ひけん、下 手勢七十騎にて退いて歸りて候。シテ詞「きやつは今に始めぬ臆病者。さて松明の占手は如何に。ツレ詞「一の松明は切つて落し、二の松明は踏み消し、三は取つて投げ歸して候が、

白波―盗賊のこと

恨みと更に思はじ。シテ謠「東路の御はなむけと、思召され候へとて、地謠「この御腰の物を、強ひて參らせ上げければ、力なしとて請け取り、我若しも世に出づならば、思ひ知るべしさらばとて、商人と伴ひ憂き旅に、やつれはてたる美濃國、赤坂の宿に著きにけり。赤坂の宿に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、赤坂の宿に著きて候。如何に吉六、この所に宿を取り候へ。吉六詞「畏つて候。（中入）

ワキ詞「是は何と仕り候べき。吉六詞「我等も是非を辨へず候。牛若詞「面々は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候我等この所に泊り候を、このあたりの惡黨ども聞き付け、今夜夜討に討たうずる由申し候程に、さやうの談合仕り候。牛若詞「縱ひ大勢ありとても、表にたよん兵を、五十騎ばかり切り伏すならば、やはか引かぬ事は候まじ。ワキ詞「是は頼もしき事を仰せ候ものかな。悉皆頼み候。牛若詞「面々は物の具して待ち給へ。謠「我は大手に向ふべしと、地謠「夕も過ぎて鞍馬山、夕も過ぎて鞍馬山、年月習ひし兵法の、術を今こそは、現し衣の妻戸を、開きて沖つ白波の、打入るを遲しと待ち居たり。打入るを遲しと待ち

こんねんだう—古年刀にて古刀の事かと云ふ

飾磨の徒歩—播州飾磨にて褐といふ染物を出すよりかく言掛けたり

候か。ツレ詞「こんねんだうと申す御腰の物にて候。シテ詞「實に〳〵承り及びたる御腰の物にて候。さては鞍馬の寺に御座候ひし、牛若殿にて御座候な。さあらば追つ付き、この御腰の物を參らせ候べし。おことも渡り候へ。や、いまだ是に御座候よ。是に女の候が、この御腰の物を見知りたる由申し候程に、召し上げられて賜はり候へ。牛若謠「不思議やな行くへも知らぬ田舍人の、我に情の深きぞや。シテ、ツレ謠「人違へならば御免しあれ、鞍馬の少人牛若君と、見奉りて候なり。牛若謠「實に今思ひ出だしたり。若し正清がゆかりの者か。ツレ謠「御目の程の賢さよ。わらはは鎌田が妹に、牛若謠「あこやの前か。ツレ謠「さん候。牛若謠「實に知るは理我こそは、地謠「身のなる果の牛若丸、人がひもなき今の身を、語れば主從と、知らるゝ事ぞ不思議なる。

ロンギ地謠「はや東雲も明け行けば、はや東雲も明け行けば、月も名殘の影うつる、鏡の宿を立ち出づる。シテ、ツレ謠「痛はしの御事や。さしも名高き御身の、商人と伴ひて、旅を飾磨の徒歩跣足、目もあてられぬ御風情。牛若謠「時代に變る習ひとて、世のため身をば捨衣、

やいや烏帽子の代りは定まりて候程に、思ひもよらず候。牛若詞「只御取り候へ。シテ詞「さらば賜はらうずるにて候。さこそ妻にて候ものの悦び候はん。ツレ「如何に渡り候か。ツレ「何事にて候ぞ。シテ詞「幼き人の烏帽子の御所望と仰せ候程に、折りて參らせ候へば、この刀を賜はりて候。なんぼう見事なる代りにてはなきか。よく〳〵見候へ。あら不思議や、かやうの事をば天の與ふる事とは思ひ給はで、さめ〴〵と落涙は何事にて候ぞ。ツレ謠「恥しや申さんとすれば言の葉より、まづ先だつは涙なり。クドキ今は何をか包むべき、是は野間の内海にて果て給ひし、鎌田兵衛正清の妹なり。常磐腹には三男、牛若子生れさせ給ひし時、頭の殿よりこの御腰の物を、御守刀にとて參らせ給ひし、その御使をば、わらは申してさむらふなり。痛はしや世が世にてましまさば、かく憂き目をば見まじきものを、あらあさましや候。シテ詞「何と鎌田兵衛正清の妹と仰せ候か。ツレ詞「さん候。シテ詞「言語道斷。この年月添ひ參らすれども、今ならでは承らず候。さてこの御腰の物をしかと見知り申されて

なのめに—今いふ斜ならずの意

引出物—下され物元は馬を引き出して贈れるよりいふ

烏帽子櫻—櫻の名

三色組—白赤青の組緒

に、この左折の烏帽子を折らせられ、君に御出仕有りし時、帝なのめに思召し、その時の御恩賞に、奥陸奥國を賜つて候。我等もまたその如く、嘉例めでたき烏帽子折にて候へば、謡この烏帽子を召されて程なく御代に、地謡「出羽國の守か、陸奥の國の守にか、ならせ給はん御果報有つて、世に出で給はん時、祝言申しゝ烏帽子折と、召されて目出度う、引出物賜ばせ給へや。あはれ何事も、昔なりけり御烏帽子の、左折のその盛、源平兩家の繁昌、花ならば梅と櫻木、四季ならば春秋、月雪の詠め何れぞと、爭ひしにやいつの間に、保元のその以後は、平家一統の、代となりぬるぞ悲しき。よしそれとても報いあらば、世變り時來り、折知る烏帽子櫻の花、咲かん頃を待ち給へ。シテ謡「かやうに祝ひつゝ、地謡「程なく烏帽子折り立てて、花やかに三色組の、烏帽子懸緒取り出だし、氣高く結ひ濟まし、召されて御覧候へとて、御髪の上に打ち置き、立ち退きて見れば、あつぱれ御器量や、是ぞ弓矢の大將と申すとも不足よもあらじ。

シテ詞「日本一烏帽子が似合ひ申して候。牛若詞「さらば此刀を參らせうずるにて候。シテ詞「い

東男—關東の田舍者

折りて—烏帽子を作ることを折るといふ

左折の烏帽子—烏帽子の頂を左へ折返すこと源氏は左折平氏は右折

く聞き候へば、我等が身の上にて候。この儘にては叶ふまじ、急ぎ髪を切り烏帽子を著、謡 東男に身をやつして下らばやと思ひ候。詞 如何にこの内へ案内申し候。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。牛若詞「烏帽子の所望に參りて候。シテ詞「何と烏帽子の御所望と候や、夜中の事にて候程に、明日折りて參らせうずるにて候。牛若詞「急ぎの旅にて候程に、今宵折りて賜はり候へ。シテ謡「さらば折りて參らせうずるにて候。先づ此方へ御入り候へ。さて烏帽子は何番に折り候べき。牛若詞「三番の左折に折りて賜はり候へ。シテ詞「是は仰せにて候へども、それは源家の時にこそ、今は平家一統の世にて候程に、左折は思ひもよらぬ事にて候。牛若詞「仰せは尤にて候へども、思ふ子細の候間、只折りて賜り候へ。シテ詞「幼き人の御事にて候程に、折りて參らせうずるにて候。この左折の烏帽子に付いて、嘉例めでたき物語の候、語つて聞かせ申さうずるにて候。牛若詞「さらば御物語候へ。

シテ詞「さても某が先祖にて候者は、元は三條烏丸に候ひしよな。いでその頃は八幡太郎義家、安倍の貞任宗任を御追伐あつて、程なく都に御上洛あり、某が先祖にて候者

高荷—大荷物

粟田口—逢ふを言掛く

藁屋の床—蟬丸の故事

守山—漏るを言掛く

早打—早飛脚

高荷どもを集め東へ下らうずるにて候。吉六詞「委細心得申し候。やがて御立ち有らうずるにて候。

牛若詞「なう／＼あれなる旅人、奥へ御下り候はゞ御供申し候はん。ワキ詞「やすき間の御事にて候へども、御姿を見申せば、師匠の手を離れ給ひたる人と見え申して候程に、思ひも寄らぬ事にて候。牛若詞「いや我には父もなく母もなし。師匠の勘當蒙りたれば、謠只伴なひて行き給へ。ワキ謠「この上は辭退申すに及ばずして、この御笠を參らすれば、牛若謠「牛若この笠おつ取つて、今日ぞ始めて憂き旅に、地謠「粟田口松坂や。四の宮河原逢坂の、關路の駒の跡に立ちて、いつしか商人の、主從なるぞかなしき。上歌藁屋の床の古、藁屋の床の古、都の外の憂き住まひ。さこそはと、今思ひ粟津の原を打過ぎて、駒もとゞろと踏み鳴らし、勢田の長橋打ち渡り、野路の夕露守山の、下葉色照る日の影も、傾くに向ふ夕月夜、鏡の宿に著きにけり。鏡の宿に著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、鏡の宿に著きて候。この所に御休みあらうずるにて候。狂言シカ／＼、牛若詞「只今の早打をよくよ

烏帽子折

梗概

金賣吉次信高、弟吉六と共に奥州へ下らんとする所に、牛若丸鞍馬寺より下りて、同行を求め、江州鏡の宿にて、烏帽子折のもとに到りて左折の烏帽子を折らしめ、その禮に刀を與ふ。烏帽子折の妻なる者鎌田正清の妹とて、思ひも寄らぬ對面あり。やがて美濃の赤坂の宿に著く。時に熊坂長範の一黨夜討に來りしを、牛若散々に斬り廻りて、途に長範をも討取るといふ筋也。前の熊坂と併せ見るべし。（五番目）

前シテ　烏帽子屋亭主　　後シテ　熊坂
前シテ　烏帽子屋の妻　　後ツレ　手下共（大勢）
子方　牛若丸　　ワキ　三條の吉次
ワキツレ　弟吉六

ワキ、ワキツレ次第「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々と急ぐらん。ワキ詞「是は三條の吉次信高にて候。我この程數の寶を集め、弟にて候吉六を伴なひ、只今東へ下り候。如何に吉六、

今はかうよと遙かの谷を、蝶鳥の如くに飛び翔り、蝶鳥の如くに飛び翔つて、都をさしてぞ急ぎける。

なく頼朝よりの仰せに隨ひ、當山の者ども判官殿の御迎へに參りたり。とう〳〵出でさせ給ふべし。シテ詞「あらはかゞしや忝くも我が君に思ひかゝらんとや。よし先づ軍のこゝろみに、この矢一筋受けて見よと、地謠「高櫓に走り上り、高櫓に走り上り、中差取つて打ち番ひ、よつ引いて放つ矢に、眞先かけたる武者數多、一矢にどうと轉べば、目を驚かし肝を消して、一度にどつとぞ譽めたりける。刀を拔き持ちて、刀を拔き持ちて、弓手の脇より馬手の脇へ、一文字に切るとぞ見えしが、空腹切つて櫓より、後の谷にぞ轉び落つ。敵の兵これを見て、寄れや者共首を取れと、一度にばつと寄り、打ち破り亂れ入り、をめき叫んで震動すれば、シテ謠「その隙に忠信は、地謠「その隙に忠信は、かねて用意の小太刀おつ取り、ひそかに忍び出で、茨からたち、分けつ潛りつ慕ひ行くを、怪しむる者有りて、あれは如何にと呼ばはりかくれば、地に伏し隱れ、闇きを便に忍ばんとするを、遁すまじとて、走りかゝつて拂ふと見えしが、眞向破られて二つになれば、つゞく兵大太刀かざし、打つ太刀を受け流し、諸膝かけて切り放し通つて、

中差—箙の眞中に差したる矢

眞向—額の眞中

諸膝—兩膝

かまへて云々ー義經の詞と見るべし

つて承り候ふさりながら、某が事は何處までも御供に召し俱せられ候ひて、餘人に仰せ付けられ候へ、若し辭し申す者あらば、この時御意をば背き申すまじく候。判官詞「いや汝を賴む上は、とかくの事はあるまじく候。シテ詞「御意をばいかで背くべき。しかも一人選まれ申し、防矢仕れとの御諚、弓矢取つての面目なれば、忝うこそ候へとよさりながら、我が君を始め奉り、謠皆人々に御名殘こそ惜しう候へ。地謠「不覺の淚を抑へて、御前を立つ。皆哀にぞ覺ゆる。かくては時刻移るとて、かくては時刻移るとて、我が君を始め奉り、門前を出でて間道より、ひそかに忍び出で給へば、シテ謠「忠信暫しは御供し、地謠「御暇申し留れば、かまへて命を全うして、御供に參らずは、不忠なるべし心得よと、淚を流させ給へば、忝しと忠信は、只ひとり留る心の、便も淚なるらん。便も淚なるらん。（中入）

立衆一聲謠「吉野川、水のまに〱騷ぎ來て、波打ち寄する嵐かな。法師武者詞「いかにこの坊中へ案內申し候。シテ詞「今は夜更け人靜まるに、案內申さんとは如何なる者ぞ。法師詞「わり

この事申し上ぐべき爲に參りて候。判官詞「是は眞にて有るか。ワキ詞「さん候。判官詞「口惜しや我幾ばくの難を逃れ、命を重んずる事も、朝敵の虚名を晴らさんそのためなり。それに當山の衆徒夜討すべきを告げ知らする條、是偏へに天の御加護なり。とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし。誰か一人留り防矢を射、その後命を全うして、路次にて追つ付くべき者やある。義盛計らひ候へ。ワキ詞「御諚畏つて承り候さりながら、某を始め皆いづくまでも御供とこそ存じ候べけれ。恐れながら誰にても召し出だされて、直に仰せ付けられよかしと存じ候。判官詞「それこそ我等が思ふ所なれ。さらば佐藤忠信を此方へと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。如何にこの屋の内に忠信の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「君よりの御使に義盛が參じて候。少し御用の事候へば、御參りあれとの御事にて候。シテ詞「畏つて候。ワキ詞「忠信參りて候。判官詞「いかに忠信、當山の者ども心變りし、今夜夜討すべき事一定のやうに申し候。とにかくに我は夜に入りこの所を開くべし。汝一人留り防矢を射、その後命を全うして、路次にてやがて追つ付き候へ。シテ詞「御諚畏

開く—落ち行くこと
路次—途中

忠信

梗概

九郎判官義經、吉野の僧徒を頼みて忍びしに、彼等心變りして討ち向ふに至りければ、義經山を下らんとす。從者の中に佐藤忠信たゞ一人、命を受けて踏みとゞまり、防矢射て戰ひ、やがて腹掻切りて失すよと見せかけ、遁れ出でて義經の跡を追ふ事を　る。（四番目）

シテ　佐藤忠信　　ツレ　源義經
ツレ　從者　　ワキ　伊勢三郎

衆徒―吉野の僧兵

ワキ詞「是は判官殿の御内に、伊勢の三郎義盛にて候。さても我が君判官殿は、この吉野を頼み御座候處に、衆徒の詮議變り、今夜夜討すべき事一定のやうに申し候間、この事申し上げばやと存じ候。如何に申し上げ候、義盛が參りて候。判官詞「此方へ來り候へ。ワキ詞「畏つて候。判官詞「さて只今は何のために來りて有るぞ。ワキ詞「さん候只今參る事餘の義にあらず。當山の者ども心變りし、今夜夜討を仕るべき事一定のやうに申し候間、

痣丸—太刀の名

少し祈念を致しつゝ—隱形の祕術を行ふこと

やと存じ候。謠 如何にや如何に警固の兵たしかに聞け。只今見えし痴者を、早打つ取つて參らせよと、さも高聲に下知すれば、地謠「畏つて候とて、かねて用意の警固の兵、皆一同に立騷ぐ。

シテ詞「その時景清又立出でて思ふやう、こゝ立ち退きては弓矢の恥辱となるべきなれば、今一太刀は打ちあひて、重ねて時節を待つべしと、大音上げて呼ばはりけり。謠 そもそも是は平家の侍惡七兵衛景清と、地謠「名のりもあへず痣丸を、名のりもあへず痣丸を。するりと拔き持ち立向ひ、大勢に割つて入れば、さしも固めし警固なれども、四方へばつとぞ逃げにける。中に若武者進み出でて、走りかゝつてちやうと切ればひらりと飛んで手もとにより、忽ち勝負を見せにけり。今は景清是までなりと、少し祈念を致しつゝ、彼の痣丸をさしかざせば、霧立ち隱すや春日山、茂みに飛び入り落ちけるが、又こそ時節を待つべけれと、虛空に聲して失せにけり。

今日ばかりこそ云々―伊勢物語の歌に「翁さび人なとがめそ狩衣けふばかりとぞたづもなきけ」

下に、身を隱すべき便なき、憂き身の果ぞあはれなる。宮人の、姿を暫し狩衣、地謠「今日ばかりこそ翁さび、シテ謠「人なとがめそ神だにも、地謠「塵に交はる宮寺の、供養の場に立ち出づる。

ワキ詞「こは何者なれば御前眞近く參るぞそこ退き候へ。シテ詞「是は春日の宮つこなるが、今日の佛の御供養、場を淸めの役人なるを、何しにとがめ給ふらん。ワキ謠「春日祭にあらばこそ、詞是は佛の御供養、シテ謠「なう水波の隔てと聞く時は、佛も神も同一體、その上貴賤の事なるに、何とて選み給ふべき。ワキ謠「包むとすれど神はなほ、君を守の御威光、シテ詞「あらはれけるか白張の、ワキ謠「脇より見ゆる具足の金物、シテ謠「光りを放つ、ワキ謠「打物の、地謠「鞘つまりたる言葉の末、名のれ〳〵と責めければ、顯れたりと思ひつゝ、さらぬやうにて立歸り、又人かげに隱れけり。

ワキ詞「言語道斷の事。只今の者を如何なる者ぞと存じて候へば、平家の侍惡七兵衛景淸にて候。正しく我が君をねらひ申すと存じ候程に、警固の者に申し付け討ち取らせば

シテ詞「早夜の明けて候程に御暇申し候。母詞「かまへて御身をよく〳〵愼みて、重ねて來り給ふべし。シテ謠「實に有難き母の慈悲、御言葉の末も頼もしき。地謠「柞の森の雨露の、柞の森の雨露の、梢も濡らす我が袖を、しほりかねたる涙かな。いつしか親心、悲しむ母の門送、景清も後を見返りて、涙と共に別れけり。涙と共に別れけり。（中入）

立衆一聲謠「世に隱れなき大伽藍、佛の供養急ぐなり。頼朝謠「そも〳〵是は源家の官軍、右大將頼朝とは我が事なり。立衆謠「忝くもこの御寺は、聖武皇帝の御建立、大佛殿にておはします。ワキ謠「又この君の御威光、今この御寺にあひにあふ、立衆謠「大伽藍の御供養、大伽藍の御供養、光りかゝやく春の日の、三笠の山に影高き、法の御聲のさま〴〵に、供養をなすぞ有難き。供養をなすぞ有難き。

シテ一聲謠「面白や奈良の都の時めきて、色々飾る物詣で、詞「我はそれには引きかへて、敵をうたん謀を、思ふ心はおのが名の、謠「惡七兵衛景清と、詞「よそにもそれと人やもし、白張淨衣に立烏帽子、實に我ながら思はざる、謠「姿に今は楢の葉の、時雨降り置く天が

この君—後白河法皇をさす

白張淨衣云々—假に神主の扮裝をなす

今めかしき―今更めきたる意

起きもせず―古今集に「起きもせず寝もせで夜半を明しては春のものとてながめ暮しつ」

御座船―安徳天皇ましますをいふ

候程に、かやうの折節貴賤に紛れ、御音信の爲に參りて候。母詞「さては嬉しくも來り給ひて候。又尋ね申すべき事の候。包まず申すべきか。シテ詞「是は今めかしき仰せかな。何事にても候へ申し上げうずるにて候。母詞「まことや人の申すは、頼朝をねらひ申すと聞き及びて候が眞にて候か。シテ詞「是は思ひもよらぬ仰せにて候さりながら、西海にて亡び給ひし御一門の、御弔ひにもなるべきかと、思へばねらひ申すなり。母詞「申す處はさる事なれども、明日をも知らぬ老の身の、果をも見屆け給へかし。シテ謠「風にたゞよふ浮舟の、教經の御供申さずして、母謠「物を思へば、シテ謠「起きもせず、地謠「寝もせで夜半を明かしかね、この身を隱すかひもなく。景清が心の内、母もあはれと思召せ。上歌「一門の船の内、一門の船の内に、肩を竝べ膝を組みて、所狹く澄む月の、景清は誰よりも、御座船になくて叶ふまじ、一類その以下、武略さま〴〵に多けれど、名を取楫の船に乘せ、主從隔てなかりしは、さも羨まれたりし身の、麒麟も老いぬれば、駑馬に劣るが如くなり。

を源頼朝後白河法皇の院宣にて建久六年三月十二日再建す
向顔ー面會
帚木ー母を掛く

南都へと急ぎ候。サシ謠あはれや實に古へは、さしも榮えし花紅葉の、壽永の秋の如何なれば、思はぬ風に誘はれて、さしも馴れにし都の空、引きかへ鄙の憂き住まひ、下歌繫がぬ船のかひもなく、弓矢の家に生まれ來て、上歌三笠の森の蔭頼む、三笠の森の蔭頼む、その帚木のながらへて、いまだこの世の御住居、神も敎の牡鹿鳴く、春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。詞急ぎ候程に、南都若草邊に著きて候。このあたりにて御行方を尋ねばやと存じ候。

母詞「さても我が子の景清は、この程何處に在るやらん。謠南無や三世の諸佛、我が子の景清に、ふたゝび逢はせてたび給へ。

シテ詞「如何に案內申し候。母詞「我が子の聲と聞くよりも、覺えず樞に立出でて、景清なるかと悅べば、シテ詞「暫く。あたりに人もや候らん。某が名をば仰せられまじいにて候。

母詞「まづ此方へ渡り候へ。さてこの程は何處に候ひつるぞ。シテ詞「さん候西國の方に候ひしが、宿願の子細有るにより、都に上り淸水に參籠申し候處に、大佛供養の由承り

大佛供養―東大寺の大佛は治承四年平重衡のために燒かれたる

大佛供養

梗概

平家西海へ没落の後、惡七兵衛景清は都に忍びてありしが、南都大佛供養の折から、母を尋ねて春日の里に到り、對面す、母は景清の志を噂に聽き居りて、よく／＼身を愼みて重ねて訪へかしとて立別るゝを前段とす。後段には、大佛供養の場に、景清いよ／＼賴朝を狙ひ撃たんとて現れしか、隱謀發覺して、立ち退き身を隱すといふ筋なり、（四番目）

シテ　惡七兵衛景清　ツレ　同母　ツレ　源賴朝

ツレ　從者　ワキ　從者

シテ次第謡「忘れは草の名に聞きて、忘れは草の名に聞きて、忍ぶや我が身なるらん。詞是は平家の侍惡七兵衛景清にて候。我この間は西國の方に候ひしが、宿願の子細あるにより、この程罷り上り淸水に一七日參籠申して候。又承り候へば、南都大佛供養の由申し候。某も若草邊に母を一人持ちて候程に、かやうの折節貴賤に紛れ、向顔のため只今

又咲く花の、雲に乘り、又咲く花の、雲に乘りて、行くへも知らずぞなりにける。

五節の舞―十一月に行はるゝ公事、舞姫は五人なり、此起りは昔天武天皇吉野の宮にまし〳〵し時琴をひき給ひしに天女天降り羽衣の袖を五たび返して舞ひ奏でし故事なり

ワキ詞「如何に申すべき事の候。かやうに家路を忘れ花を眺め給ふ事、いよ〳〵不審にこそ候へ。シテ詞「實に御不審は御理。今は何をか包むべき、眞は我は天人なるが、花に引かれて來りたり。今宵はこゝに旅居して、信心を致し給ふならば、そのいにしへの五節の舞、小忌の衣の羽袖を返し、月の夜遊を見せ申さん。謠「暫くこゝに待ち給へと、地謠「夕映匂ふ花の蔭、夕映匂ふ花の蔭、月の夜遊を待ち給へ。少女の姿現して、必ずこゝに來らんと、迦陵頻伽の聲ばかり、雲に殘りて失せにけり、雲に殘りて失せにけり。

ワキ謠「不思議や虚空に音樂聞え、異香薫じて花降れり。地謠「是治まれる御代とかや。いひもあへねば雲の上、いひもあへねば雲の上、琵琶琴和琴笙篳篥、鉦鼓羯鼓や糸竹の、聲澄み渡る春風の、天つ少女の羽袖を返し、花に戯れ舞ふとかや。（天女ノ舞）地謠「少女は幾度君が代を、少女は幾度君が代を、撫でし巖も盡きせぬや、春の花の梢に舞ひ遊び、飛び上り飛び下る、實にも上なき君の惠、治まる國の、天つ風、雲の通ひ路吹きとづるや、少女の姿とゞまる春の、霞も棚引くみよし野の、吉野の山櫻うつろふと見えしが、

に「青柳の絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」

花下忘レ歸依ニ美景ー白氏文集の句

花色の、朝じめりして氣色立つ、吉野の山に著きにけり。吉野の山に著きにけり。

ワキ詞「急ぎ候程に、是ははや吉野の山に著きて候。御覽候へ峯も尾上も花にて候。猶々奥深く分け入らばやと思ひ候。

シテ詞「なう〳〵あれなる人々は何事を仰せ候ぞ。ワキ詞「さん候是は都の者にて候が、このみよし野の花を承り及び、始めてこの山に分け入りて候。又見申せばやごとなき御姿なるが、この山中に入らせ給ふは、如何なる人にてわたり候ぞ。シテ詞「是はこのあたりに住む者なるが、春立つ山に日を送り、さながら花を友として、山野に暮らすばかりなり。

ワキ謠「實に〳〵花の友人は、他生の緣と言ひながら、我等も同じその心、シテ謠「所も山路の、ワキ謠「友なれや。上歌地謠「見もせぬ人や花の友、見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花の陰に、相宿りして諸人の、いつしか馴れて花衣の、袖觸れて木の本に、立ちよりいざや眺めん。實にや花の下に、歸らん事を忘るゝは、美景によりて花心、馴れ〳〵初めて眺めん。いざ〳〵馴れて眺めん。

糸よりかけて—古今集遍昭の歌

外七

吉野天人

梗概—都の人、吉野の花見に行きしに、天つ少女現れて、舞樂を奏せし事を作ろ。優麗なる能なり。（三番目）

シテ　天人（前は里女）　ワキ　都人

ワキ三人 次第謠「花の雲路をしるべにて、花の雲路をしるべにて、吉野の奥を尋ねん。ワキ詞「これは都方に住居するものにて候。さても我春になり候へば、こゝかしこの花を一見仕り候。中にも千本の櫻を年々に詠め候。この千本の櫻は、みよし野の種取し花と承り及び候間、若き人々をも作なひ、此度は和州に下向仕り候。ワキ三人 道行謠「この春は、殊に櫻の花心、殊に櫻の花心、色香に染むや深緑、糸よりかけて青柳の、露も亂るゝ春雨の、夜ふりけるか

雪山—釋迦の修行せし所

すやすと遣りかけて、飛ぶ車とぞなりたりける。
ロンギ地謠「小車の、山の蔭野の道すがら、法の道の邊遊行して、貴賤の利益なすとかや。
シテ謠「所から、こゝは浮世の嵯峨なれや、雪の古道跡深き、車の轍に足引の、大雪にはよも行かじ。地謠「實に雪山の道なりと、法の車路平かに、シテ謠「行くか行かぬかこの原の、
地謠「草の小車雨添へて、シテ謠「打てども行かず、地謠「止むれば進む、シテ謠「この車の、
地謠「法の力とて、嵯峨小倉大井嵐の、山河を飛び翔つて、眩惑すれども騒がばこそ、誠に奇特の車僧かな、あら貴や恐しやと、魔性を和らげ大天狗は、合掌してこそ失せにけれ。

行比べ―行力を比べ合ふこと

シテ謠「佛法あれば世法あり、地謠「煩惱あれば菩提あり。シテ謠「佛あれば衆生もあり。地謠「車僧あれば、シテ謠「太郎坊の行者も有り。地謠「祈らば祈るべし、行せば行德も、劣るまじとよ劣るまじとよ。いざ車僧行比べせん。

ワキ詞「如何に汝妨ぐるとも、それには寄らじ爭はじ。我はもとより不增不滅。謠 あらおもしろの時節やな。シテ詞「實に面白き時節ならば、雪中に車を廻らし、嵯峨野の原にいざ遊ばん。ワキ詞「遊ばば遊べ糸遊の、我が心をば引かれめや。シテ詞「などかは引かで有るべきと、笞を振り上げ車を打つ。ワキ詞「おう車を打たば行くべきか、牛を打たば行くべしや。シテ詞「實に〳〵車は心無し。さて牛を打たんも、有らばこそ。ワキ詞「愚や汝人牛の道、見えたる牛をばなど打たぬ。シテ詞「見えたる牛とはさて如何に、そも人牛は、ワキ詞「打つとも行かじ。シテ詞「さて御僧の打たば行くべきか。ワキ詞「なか〳〵の事。いで〳〵さらば露地の白牛を打つて見せんと、謠 拂子を上げて虛空を打てば、地謠「不思議やなこの車の、不思議やなこの車の、ゆるぎ廻りて今までは、足弱車と見えつるが、牛も無く人も引かぬに、や

して六道輪廻の中にありとなり

愛宕山云々―曾禰好忠の歌

べき我があらばこそ。シテ詞「乗りも得るべきわがあらばこそと云ふは誰そ。ワキ謠「空堂風涼し、シテ詞「我が名のみ高雄の山に言ひ立つる、ワキ詞「人は愛宕の嶺に住むな。シテ詞「さて御僧のすみかは。ワキ詞「一所不住。シテ詞「車は如何に。ワキ詞「火宅の出車。シテ詞「廻れど、ワキ詞「廻らず。シテ詞「押せど、ワキ詞「押されず。シテ詞「引くも、ワキ詞「引かれぬ、シテ謠「車僧の、地謠「三界無安猶如火宅をば、出でたる三つの車僧かな。廻るも直なる道なりけり。あう、乗り得たり乗り得たり、上歌見聞く人、心空なる雲水の、心空なる雲水の、深立つ空も冷ましく、嵐も聲々に愛宕山、嶺どよむまで響き合ひて、車路は無けれども、我が住む方は愛宕山、太郎坊が庵室に、御入りあれや車僧と、呼ばはりて夕山の、黒雲に乗りて上りけり。黒雲に乗りて上りけり。（中入）

後シテ一聲謠「愛宕山、樒が原に雪積り、花摘む人の跡だにもなし。詞「實に雪中に山路無し。さて車輪は如何に車僧、我程貴き者あらじと、慢心の心路跡無からんや。然らば無著法欲心に、引くか移るか車僧。謠「魔道にも心を寄せよ車僧。地謠「善惡二つは兩輪の如し。

車僧

梗概

天狗来りて、車僧を魔道に引入れんとし、互に行力を比べ合ひしが、善知識なる僧にはかなはず、天狗はあら貴や恐しやと、合掌して飛び去れりといふ事を作る。上巻の山姥と共に禅味有る曲なり。（五番目）

シテ　太郎坊　　ワキ　車僧

ワキ次第謠「後の世かけて車僧、後の世かけて車僧、常寝の眠いつまで。上歌降り曇る、空は小倉の嶺の雪、空は小倉の嶺の雪、散るや嵯峨野の嵐山、瀧の響も聲添へて、かさなる雲の大井川、筏の床の浮枕、片敷く袖も白妙の、空も程なく廻る日の、西山本に著きにけり。西山本に著きにけり。詞暫く此所に車を立て、四方の景色を詠めうずるにて候。

シテ詞「如何に車僧。ワキ詞「何事ぞ。シテ謠「浮世をば、ワキ謠「浮世をば、シテ謠「浮世をば、何とか廻る車僧、まだ輪の内に在りとこそ見れ。ワキ謠「浮世をば廻らぬ物を車僧、詞乗りも得る

小倉―嵐山の北空は小暗しと掛く

西山―嵐山のこと

輪の内に在り―煩悩去りやらず

の禪師、地謠「墨染の下に忍辱の鎧、悪魔降伏の劍、三尺の長刄指しかざしたり。討つべき樣こそなかりけれ。

地謠「心得給へ祐宗と、木戸を開いて切つて出づれば、手許に近づき過すな、射取れや射取れ梓弓、疋田の小三郎が進んでかゝるを、長刀取り延べ、法師のきるとて袈裟がけなり。南無佛無慙やな。シテ謠「たとへば沙門の體とて、地謠「思ひゆるすも事にこそよれ、只一命の勝負をせんと、狩野の源六其外若武者、我も〱とかゝりけれども、禪師は騷がず打物合はせ、こゝやかしこに切り立てられ、門前の外まで引退けば、是までなりと長刀投げ捨て、護摩の壇上に走り上り、御本尊に向ひて、阿毘羅吽欠につなぬかれ、禮盤の上より落ちけるを、生捕にせんとて利劍を奪ひ、鎌倉へこそ上せけれ。鎌倉へこそは上せけれ。

袈裟がけ―肩先より斜に斬る事を法師の着る袈裟と洒落て書けり

つなぬかれ―貫かれ

禮盤―祈禱の折の高產

百座の護摩—護摩の祈禱を百度すること

えねば、涙ながらにかきくれて、九上の寺に送りけり。九上の寺に送りけり。（中入）

シテ詞「是は九上の禪師にて候。我此間別行の子細の候間、百座の護摩を焼かばやと存じ候。

立衆一聲謡「藤波の、かゝれる木々の梢をば、嵐や寄せて散らすらん。ワキ詞「是は伊藤の九郎祐宗なり。さても過ぎにし二十八日の夜、曾我兄弟の者、井手の館に忍び入り、親の敵を討ち、その身も卽座に討たれて候。その弟に九上の禪師と申して候を、幼少の時より某養子として出家させ申し候を、如何なる者の申し候やらん、君聞召し及ばせ給ひ、急ぎ搦め捕つて參らせよとの御事にて候程に、只今九上の寺に押寄せ候。是は早九上の寺にて候。まづ〳〵案内を請はうずるにて候。如何に案内申し候。伊藤の九郎祐宗が參りたり、急いで門を開き候へ。シテ詞「祐宗は何のために御出でにて候ぞ。ワキ詞「鎌倉殿より搦め捕つて參れとの御事なり。疾う〳〵出で候へ。シテ詞「や、祐宗は某が討手のためな。よし〳〵尋常に討死し、御名を揚げて參らせん。謡「抑是は河津の三郎が末の子に、九上

水莖の—筆跡の事、見るを掛く

泣きて歸りしは、花を見捨つるかりがね。それは越路に歸る山、是は名高き富士の嶺の、煙見えたる東屋に、歸りかねたる心かな、歸りかねたる心かな。

團三郎詞「急ぎ候程に、是は早曾我の里に著きて候。先々案内を申さうずるにて候。如何に案内申し候。鬼王團三郎が參りたる由それ〳〵御申し候へ。母詞「何鬼王團三郎と申すか、人までも有るまじ此方へ來り候へ。さて只今は何の爲に來りたるぞ。團三郎詞「さん候面目もなき御使に參りて候。母詞「面目もなき使とは、如何なる事にて有るやらん。團三郎詞「過ぎにし二十八日の夜、井手の館へ忍び入り、やす〳〵と敵を討ち、御身も即座に討たれ給ひて候。又御形見の物を持ちて參りて候。是々御覽候へ。母詞「祐經を討つ程なれば、何とて落ち延びざりけるぞ。謠「敵を討つは父がため、母をば思はぬ子供の形見、恨めしや。鬼王詞「實に〳〵御歎き尤もにて候。まづ箱根へ人を御登せ候へ。母「箱根へと聞けば思ひ出だしたり。まづ〳〵九上の寺へ參り候へ。團三郎詞「實に〳〵禪師の御事よなう。たとひ御身は捨人なりとも、母謠「如何なる目をも、團三郎謠「水莖の、地謠「筆の立てども覺

禪師曾我

梗概

鬼王團三郎の兄弟、祐成時致二人の形見を、母の許に持歸る事を前段とす。夜討曾我と併せ見るべし。後段には二人の弟に九上の禪師とて伊藤祐宗の養子にて出家せるがあり、それを鎌倉殿の命にて討取らんとて、助宗、禪師の許に押寄せ、遂に生捕にして鎌倉へ上すことを作れり。(四番目)

シテ　九上禪師　　ツレ　團三郎　　ツレ　鬼王
ツレ　曾我兄弟の母　　ワキ　伊藤祐宗　　ワキツレ　同從兵

ツレ二人 次第謠「散りにし花の名殘には、散りにし花の名殘には、香ばかり送る嵐かな。團三郎詞「是は曾我兄弟の人々に仕へ申す鬼王團三郎にて候。さても兄弟の人々は、過ぎにし二十八日の夜、井手の館に忍び入り、やすく〳〵と敵を討ち、その身も卽座に討たれ給ひて候。我等兄弟も御供申し候へども、形見の品々を持ちて、故鄕へ下れとの御事にて候程に、かひなき命助かり、御形見を持ち、只今故鄕へ下り候。道行謠「使の泣きて歸りしは、使の

散りにし花—曾我兄弟の討たれしことを譬ふ
井手の館—工藤祐經の陣屋

打渡す―古今集旋頭歌に「打渡す遠方人に物申す我そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」

の、つまいたうこがしたりしに、この花を折りて參らする。シテ謠「源氏つく〴〵と御覽じて、地謠「打渡す、遠方人に問ふとても、それその花と答へずは、終に知らでもあるべきに、逢ひに扇を手に觸るゝ、契の程のうれしさ、折々尋ね寄るならば、定めぬ海士のこの宿の、主を誰と白波の、よるべの末を頼まんと、一首を詠じおはします。折りてこそ、

（序ノ舞）シテ謠「折りてこそ、それかとも見め黄昏に、地謠「ほの〴〵見えし、花の夕顏、花の夕顏、花の夕顏、シテ謠「終の宿りは知らせ申しつ、地謠「常にはとむらひ、シテ謠「おはしませと、地謠「木綿附の鳥の音、シテ謠「鐘もしきりに、地謠「告げ渡る東雲、あさまにもなりぬべし、明けぬ先にと夕顏の宿り、明けぬ先にと夕顏の宿りの、又半蔀の内に入りて、そのまゝ夢とぞなりにける。

雨濕原憲之樞—朗詠集の句

山の端の—夕顏上の歌末句影やたえなん

山賤の云々—夕顏上が頭中將におくりし歌

後シテ一聲謠「藜藋深く鎖せり、夕陽の殘晴新に窓を穿つて去る。地謠「愁嘆の泉の聲、シテ謠「雨原憲が樞を濕す。下歌地謠「さらでも袖を濕すは、廬山の雪の曙。上歌窓頭に向ふ朗月は、窓頭に向ふ朗月は、琴瑟に當り、愁傷の秋の山、物すごの氣色や。

ロンギ地謠「實に物凄き風の音、簀戸の竹垣有りし世の、夢の姿を見せ給へ、菩提を深く弔はん。シテ謠「山の端の、心も知らで行く月は、上の空にて絶えし跡の、又いつか逢ふべき。地謠「山賤の、垣穂荒るとも折々は、シテ謠「哀をかけよ撫子の、地謠「花の姿をまみえなば、シテ謠「跡訪ふべきか、地謠「なか〳〵に、シテ謠「さらばと思ひ夕顏の、地謠「草の半蔀押上げて、立ち出づる御姿、見るに涙の止まらず。

クセ地謠「その頃源氏の中將と聞えしは、この夕顏の草枕、たゞ假臥の夜もすがら、隣を聞けばみよし野や、御嶽精進の御聲にて、南無當來導師、彌勒佛とぞ稱へける。今も尊き御供養に、その時の思ひ出でられて、そゞろに濡るゝ袂かな。猶それよりも忘れぬは、源氏この宿を、見そめ給ひし夕つ方、惟光を招き寄せ、あの花折れと宣へば、白き扇

手に取れば云々―後撰集遍照の歌
白き花の云々―源氏物語夕顏の卷の語
名は人めきて―夕顏の卷に花の名は人めきてかうあやしき垣根になん咲き侍りける云々の語に據る
空目せし間―「光ありと見し夕顏の上露は黃昏時の空目なりけり」といふ夕顏上の歌による
瓢簞屢空草滋顏淵巷藜藿深

シテ謠「手に取ればたぶさに穢る立てながら、三世の佛に花奉る。ワキ詞「不思議やな今までは、草花りようとして見えつる中に、白き花のおのれ獨り笑の眉を開けたるは、如何なる花を立てけるぞ。シテ謠「愚の御僧の仰せやな。黃昏時の折なるに、などかはそれと御覽ぜざる。さりながら名は人めきて賤しき垣ほにかゝりたれば、知ろしめさぬは理なり。是は夕顏の花にて候。ワキ謠「實に〳〵さぞと夕顏の、花の主は如何なる人ぞ。シテ詞「名のらずと終には知ろし召さるべし。我は此花の蔭より參りたり。ワキ謠「さてはこの世に無き人の、花の供養に逢はんためか、それに付けても名のり給へ。シテ詞「名は行りながら亡き跡に、なりし昔の物語、ワキ謠「何某の院にも、シテ謠「常はさむらふ眞には、上歌地謠「五條あたりと夕顏の、五條あたりと夕顏の、空目せし間に夢となり、面影ばかり亡き跡の、立花の蔭に隱れけり。立花の蔭に隱れけり。（中入）

ワキ謠「有りし敎に隨つて、五條あたりに來て見れば、實にも昔の居まし所、さながら宿りも夕顏の、瓢簞しば〳〵空し、草顏淵が巷に滋し。

半蔀

梗概

源氏物語夕顔の巻に、夕顔上といふ女の光源氏に契りし物語あり。之を本據として作りたるは、上巻所收の夕顔なり。夕顔にてはその幽靈をして昔語をなさしめたるが、此曲は僧が立花供養をなす事よりして、花の精を出し、以て夕顔上の物語に及ぼしめたる也。（鬘物）

シテ　夕顔の精（前は女）　ワキ　僧

ワキ詞「是は都紫野雲林院に住まひする僧にて候。扨も我一夏の間花を立て候。早安居も過ぎ方になり候へば、色よき花を集め、花の供養を取り行はばやと存じ候。敬つて白す、立花供養の事、右非情草木たりといへども、此花廣林に開けたり、諸豈心無しといはんや、就中泥を出でし蓮、一乘妙典の題目たり。この結縁に引かれ、草木國土悉皆成佛道。

安居―夏季九十日間禁足修行すること

れ候。ワキ詞「さやうの事こそ聞かまほしう候へ。我等も是にて祈念申さうずるにて候。ワキ謠「さりとも年月頼みをかくる、大聖不動明王の威力、ツレ謠「又は山神護王善神、ワキ謠「殊には開山役の
ツレ山伏謠「さても師匠のその歎、理過ぐる有様を、見聞くも同じ心かな。
優婆塞、ツレ謠「哀愍納受垂れ給ひ、地謠「使者の鬼神の伎樂伎女を、遣し助けおはしませ。
地謠「伎樂鬼神は飛び來り、伎樂鬼神は飛び來つて、行者の御前に跪いて、頭を傾け仰せを受けて、谷行に飛び翔つて、上に蓋へる土木磐石、押倒し取拂つて、上なる土をばやはら〳〵と、靜かにかへして彼小童を、つゝがもなく抱きあげ、行者の御前に參らすれば、行者は喜悦の色をなし、慈悲の御手に髮を撫で、善哉々々孝行切なる、心を感ずるぞとて、歸らせたまへば伎樂も共に、御先を拂つてさかしき路を、分けつくゞりつ上るや高間の、雲霧つたふや葛城の、人の目にこそかゝらざれども、まことは渡せる岩橋を、大峯かけて遙々と、虛空を渡つて失せにけり。

伎樂—吳の音樂その男神女神を小角の部下に從ふ

岩橋—小角鬼神を使ひて岩橋をかけしこと上卷葛城を見よ

開山―葛城山を聞きしは役小角なり

彼の人を、嶮しき谷に陥れ、上に被ふや石瓦、雨壊を動かせる、心を痛め聲を上げ、皆面々に泣き居たり。皆面々に泣き居たり。

小先達詞「早日のたけて候。急ぎ御立あらうずるにて候。ワキ詞「愚僧は罷り立つまじく候。

小先達詞「先達の御立ちなく候ひては、我々はなにと仕り候べき、只急いで御立ち候へ。

ワキ詞「まづ案じても御覧候へ、我等都に上り、彼の者の母には何と申すべきぞ。所詮病氣も歎も同じ事にて候へば、我等をも谷行に行ひて給はり候へ。小先達詞「御歎き尤にて候。如何にかた〴〵へ申し候。先達の仰せ候は、病氣も歎きも同じ事なれば、先達も谷行に行ひ申せと仰せ候、さて何と仕り候べき。ツレ詞「實に〳〵御歎き尤にて候。我々存じ候は、この年月の行徳もかやうの時にてこそ候へ。開山役の優婆塞、并びに大聖不動明王の索にかけ、松若殿の御命を再び蘇生させ申さうずるにて候。小先達詞「是は尤もにて候。如何に申し候。皆々申され候は、此年月の行徳もかやうの時にてこそ候へ、開山役の優婆塞、殊には大聖不動明王の索にかけ、松若殿の御命を蘇生させ申さうずる由皆々申さ

冥見—神明の見給ふこと

如夢幻云々—金剛般若經の文

ん、進退谷りて候。子詞「仰せ承り候。この道に出でて命を捨てん事こそ、最も望む所なれども、謠母の御歎きの色、それこそ深き悲しみなれ。又かりそめも他生の緣、皆人々に御名殘こそ惜しう候へ。地謠「何といひやる方もなく、皆聲をあげ涙に咽ぶ心ぞ哀なる。

山伏、サシ謠「かくて面々一同に、あはれ悲しき世の習ひ、ことさら是は大法の、冥見私なきまゝに、谷行にこそ行ひけれ。ワキ謠「先達も師弟の契の中なれば、何といひやる方もなく、只くれ〳〵と目もあやなく、上歌地謠「泣く涙、せかれぬ道なれば、身も諸共にともかくも、ならばやと思ふさへ、叶はぬ事ぞ悲しき。悲しみの、至りて悲しきは、生別離の心なり。なか〳〵死別ならば、かほどの歎きよもあらじ。クセ一切有爲の世の習ひ、如夢幻泡影如露亦如電、應作如是觀の心をも、思ひ知らずやさしもこの、行者の道には出でながら、火宅の門を去りやらで、猶安からぬ三界の、親子恩愛の、歎きに等しかりけり。小先達謠「かくて時刻も移るとて、地謠「皆面々に思ひ切り、邪見の劍身を碎く、心をなして

谷行—同行者に病人あれば谷に陥るゝこと

違例—病氣

にて候。小先達詞「松若殿風の心地と承り候は、何と御座候ぞ御心もとなく候。ワキ詞「さん候是はならはぬ旅の疲れにてありげに候。苦しからず候。小先達詞「さては御心安く候。ツレ詞「いかにかた〴〵へ申し候。松若殿旅の疲れの由仰せられ候が、以ての外に見え給ひて候。何とて大法の如く谷行に行ひ給ひ候はぬぞ。小先達詞「實に〳〵是は尤にて候。さらば先達へ其由申さうずるにて候。如何に申し候。先に松若殿の御事を尋ね申して候へば、旅の疲れと承り候が、今ははや以ての外に見えさせ給ひて候。憚り多き申し事にて候へども、昔よりの大法にて候へば谷行に行ひ申さうずるよし皆々申され候。ワキ詞「何と松若を谷行に行はれうずると候や。小先達詞「さん候。大法の事にて候程に、是非をば申さず候さりながら、彼の者の心中あまりに不便に候へば、大法の由を懇に申し聞かせうずるにて候。小先達詞「尤にて候。

ワキ詞「如何に松若たしかに聞け。この道に出でてかやうに違例する者をば、谷行とて忽ち命を失ふ事、是れ昔よりの大法なり。謡「御身にかはるものならば、何か命の惜しから

こは誰が―木幡を掛け拾遺集の「山城の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ來る君を思へば」の歌を引く

都出で云々―古今集に「都出て今日みかの原泉川河風寒し衣かせ山」

ワキ、サシ謡「かくて小童思ひの外、峯入の姿山伏の、兜巾篠懸苔の衣、上歌山伏謡「今日思ひ立つ道のべの、今日思ひ立つ道のべの、たよりぞ深き志、只孝行の神力に、馬はあれども徒歩に行く、こは誰が爲ぞ宇治の里、都出で、今日みかの原泉川、河風さむみ千鳥鳴く、聲こそ今日の夕なれ。聲こそ今日の夕なれ。ふりさけ見れば春日なる、ふりさけ見れば春日なる、三笠の山をさし過ぎて、布留の神杉過ぎがてに、三輪の山本よそに見て、たれ我庵と定めけん、峯の巖の苔衣、かたしきそむる葛城の、露こそ宿りなりけれ。露こそ宿りなりけれ。

ワキ詞「急ぎ候程に、是は早一の室に著きて候。暫く是にあらうずるにて候。小先達詞「承り候。子詞「いかに申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。子詞「道より風の心地にて候。

ワキ詞「暫く、此道に出でてさやうの事をば申さぬ事にて候。それは習はぬ旅の疲にて有るべし、よく〳〵休み候へ。

小先達詞「松若殿道より風の心地の由承り候。先達に尋ね申さうずるにて候。山伏詞「尤

父におくれ—父に死別れたること

足引の—山にかかる枕詞を大和につゞく

よそに見る—新古今集の歌末句峯の白雲

と云ひ、難行捨身の道と申し、かたぐ叶ふまじき由申して候へば、御祈りの爲に供すべき由申され候。如何が候べき。シテ詞「仰せ承り候。まづは松若申す如く、峯入の御供申さん事こそ、最も望む所なれども、謡「御身の父に後れし日より、只獨子のひたすらに、身に添ふ時だに見ぬ隙は、露程だにも忘られず、思ふ心を思へかし、只思ひ止り候へ。子詞「仰せはさる事にて候へども、謡「身は難行の道に出でて、母の現世を祈らんと、思ひ立ちたるばかりなりと、地謡「かきくどきたるその氣色、師匠も母も諸共に、あはれ孝行の、深きや涙なるらん。

ロンギ、シテ謡「この上なれば力なし。さらば師匠の御供して、疾く〳〵歸り給へや。子謡「歸るさの、心をとめて出づる日も、やがて急ぐや足引の、大和路遠き思ひかな。シテ謡「思ひを盡す手向には、子謡「つゞりの袖も切るべきに、地謡「別れはさまぐの、行末知ればよそにのみ、見てや止みなん葛城や、高間の山の峯の雲、晴れぬは親の思ひ子の、名殘惜しさをいかにせん、名殘惜しさをいかにせん。（中入）

難行捨身—身を捨てゝ難行苦行すること

をも存ぜず候。まづ〳〵某が參りたる由御申し候へ。子詞「如何に申し候。師匠の御出でにて候。シテ詞「此方へと申し候へ。子詞「こなたへ御入り候へ。ワキ詞「久く參らず候。又松若申され候は、風の心地の由承り候。如何樣に御座候ぞ。シテ詞「風の心地ははや苦しからず候。御心安く思召され候へ。ワキ詞「さてはめでたう候。又近き間に峯入を仕り候程に、御暇乞の爲に參りて候。シテ謠「實に〳〵峯入とやらんは、大事の行とこそ承りて候へ、さて松若も御供にて候か。ワキ詞「幼き者の供すべき道にてはなく候。シテ詞「さてはめでたうやがて御歸り候へ。ワキ詞「さらばやがて參らうずるにて候。子詞「いかに申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。子詞「松若も峯入の御供申さうずるにて候。ワキ詞「いや〳〵只今も母御に申し候如く、此道は難行捨身の行體にて、思ひもよらぬ事にてあるぞ。その上母の風の心地を見捨つべきにあらず。かた〴〵思ひもよらぬ事、只止り候へ。子詞「いや母の風の心地にて候へば、御祈りの爲に參らうずるにて候。ワキ詞「さあらばこの由を母御に申さうずるにて候。又參りて候。松若峯入の供せうずる由申され候間、母御の風の御心地

今熊野―京都にあり

峯入―深山に入りて修行することにて葛城に登ることを大峯入といふ

谷行（たにかう）

梗概

帥阿闍梨の弟子松若、病める母の祈のために師に同行して峯入をなし、途中病を得、山伏の大法谷行に行はれて、山谷に捨てられしが、師も之を悲しみ嘆きしに、一同途に行者の功力にて蘇生せしむ。一つには松若の孝行、鬼神を感ぜしめしなりとの筋。（五番目）

前シテ　母　　後シテ　鬼神　　ツレ　同行山伏

子方　松若　　ワキ　帥阿闍梨

ワキ詞「是は今熊野椰の木の坊に、帥の阿闍梨と申す山伏にて候。さても某弟子を一人持ちて候が、彼の者の父空くなり、母ばかりに添ひて候。また某は近き間に峯入を仕り候程に、暇乞の爲に只今出京仕り候。いかに案内申し候、子詞「誰にて御入り候ぞ、や、師匠の御出でにて候よ。ワキ詞「如何に松若、何とて久く寺へは上りたまひ候はぬぞ。子詞「さん候母御の風の心地にて候程に參らず候。ワキ詞「言語道斷。ゆめ〳〵さやうの事

よそに調の中の緒の—源氏の歌に「あふまでのかたみに契る中の緒の調はことにかはらざらなん」源氏が明石上と別るゝとき形見に琴をせしをいふ

忘れ草—昔より住吉の浦につけて詠む

身をづくし云々—源氏の歌

數ならで云々—明石上の返歌

牛の車—名殘も憂しと續く

ほのぐと—人麿の歌を引く

ロンギ地謡「不思議やな、有りし明石の浦波の、立ちも歸らぬ面影の、それかあらぬか舟影の、忍ぶもぢずり誰やらん。シテ謡「誰ぞとは、よそに調の中の緒の、其音違はず逢ひ見んの、頼めを早く住吉の、岸に生ふてふ草ならん。源氏謡「忘れ草、忘れ草、生ふとだに聞く物ならば、そのかね言もあらじかし。地謡「實になほざりに頼め置く、その一言も今は早や、源氏謡「有りし契の緣あらば、地謡「やがての逢ふ瀬も程あらじの、心は互に、變らぬ影も盃の、度重なれば惟光も、惟光謡「傅御酌をとりぐの、地謡「醉に引かるゝ戲れの舞、おもはゆながらも移り舞。(中ノ舞) シテ謡「身をづくし、戀ふるしるしにこゝまでも、地謡「廻り逢ひける緣は深しな。シテ謡「數ならで、なにはの事もかひなきに、何身をづくし思ひそめけん。互の心を夕汐滿ち來て、地謡「入江の田鶴も聲惜しまぬ程、あはれなる折から、人目も包まず、逢ひ見まほしくは思へども、早漕ぎ離れて、行く袖の露けさも、昔に似たる旅衣、田簑の島も遠ざかるまゝに、名殘も牛の車にめされて、上れば下るや稻舟の、舟影もほのぐと明石の浦わの、舟をし思ひの別れかな。

關―須磨の關をさす

津守の浦―住吉の岸

玉襷―掛けにつゞく枕詞

シテ、ツレ二人一聲謡「明石潟、月まつ方に行く舟の、波靜なる浦傳ひ、上歌地謡「舟出せし、後の山の山颪、後の山の山颪、關吹き越えて行く程に、須磨の浦わもいつしかに、跡の名殘もおしてるや、難波入江に寄するなる、波はさながら白雪の、津守の浦に著きにけり。津守の浦に著きにけり。

ツレ女謡「松原の深緑なる木陰より、花紅葉を散らせる如くなる、色の衣々數々に、のゝしりて詣づる人影は、いかなる人にて有るやらん。惟光謡「是は都に光君、過ぎにし須磨の御願はたしに、詣で給ふといさ知らぬ、人もありける不思議さよ。シテ謡「あら恥しや光君と、聞くより胸打騷ぎつゝ、いとゞ心も上の空の、惟光謡「月日こそあれ今日この頃、詣で來んとは、シテ謡「白露の、地謡「玉襷、掛けも離れぬ宿世とは、掛けも離れぬ宿世とは、思ひながらもなか〳〵に、この有様を、よその見る目も恥しや。さりとては浦波の、歸らば中空に、ならんも憂しやよしさらば、難波の潟に舟とめて、祓だに白波の、入江に舟をさし寄する。

河原の大臣―左大臣源融

我見ても云々―伊勢物語の歌

ワキ詞「只今の御參詣めでたう候。惟光詞「さあらば祝詞を參らせられ候へ。ワキ謠「いで〳〵祝詞を申さんと、神主御幣を捧げつゝ、旣に祝詞を申しけり。謹上再拜、敬つて白す神慮すゞしめの神樂、八人の八少女五人の神樂男、颯々の鈴の音、ていとうの鼓の聲々に、うたふ榊葉の神歌、幾久方の天地開闢、泰平諸人快樂。福壽圓滿に守らしめ給へや。そもそも立つる所の、諸願成就皆令滿足有難や。地謠「來方の、御願に猶も打添へて、御願に猶も打添へて、さも有難き神慮の、納受もかくやと、感涙肝に銘じけり。いよ〳〵歡びの御盃、神主に給びければ、折節御供に、河原の大臣の御例とて、内より賜はれる。童隨身その時に、御酌に立ちて慰めの、今樣朗詠す。

子方謠「一樹の陰や一河の水、地謠「皆是他生の緣といふ、白拍子をぞかなでける。（中ノ舞）

子方謠「我見ても、久しくなりぬ住吉の、地謠「岸の姫松幾世へぬらん。千代萬代の舞の袂千代萬代の舞の袂、いよ〳〵廻る盃の、有明になる沖つ舟の、ほの〴〵明くる住吉の、浦より遠の淡路島、あはれ果なき詠めかな。あはれ果なき詠めかな。

和光同塵云々ー天台止觀の語を引く

し社内をも清め、その心得をなすべき由申し付けばやと存じ候。立衆一聲謠「小車の、轅も續く都路の、直に治まる時世かな。惟光謠「そも〳〵是は譽世に越え威光曇らぬ光源氏にておはします。さてもこの君頼みをかけし、住吉の神に所願を滿てんと、立衆謠「今日思ひ立つ旅衣、薄き日影も白鳥の、鳥羽の戀塚秋の山、過ぐればいとゞ都の月の、面影隔つる山崎や、關戸の宿も移り來ぬ。下歌拂はぬ塵の芥川、猪名の笹原分け過ぎて、上歌見渡せば、薄霧まがふそなたより、薄霧まがふそなたより、ほの見えそむるむら紅葉、之や交野に狩り暮れて、春見し花のそれならん。猶行く先は渡邊や、大江の岸に寄る波も、音立かへて住吉の、浦わになるも程ぞなき、浦わになるも程ぞなき。源氏、サシ謠「聞きしに超えていよ〳〵有難き、神の誓も潔き、浦わの波の瑞籬の、久しき御代を守り給へ、地謠「日の本の、神の誓はおしなめて、神の誓はおしなめて、和光同塵は、結縁の御始、八相成道は利物の、果しなきまで國富み、民を憐む御心を、誰かは仰がざるべき。誰かは仰がざるべき。

外　六

住吉詣

梗　概

光源氏、住吉神社へ參詣あり。折から又明石上播磨より舟にて上り、こゝに詣で、思はざるに再び對面あり。頗ろ美しき能がらなり。明石上は明石入道の女にて、源氏が須磨へ留りし頃、契りしことは明石の卷にあり。その腹に姬君生るゝこと澪標の卷に見え、後母の尼姬君共に都に移り住む事は松風の卷に載せたり。（三番目）

シテ　明石上　ツレ　女　侍女　ツレ　男　源氏の君
ツレ　男　惟光　子　方　童隨身　ワ　キ　住吉神主

さる宿願の子細─須磨へ左遷の折歸洛を祈りし御禮參り

ワキ詞「是は攝州住吉の神主、菊園の何某にて候。さてもこの頃都に於て譽竝びなき光源氏、さる宿願の子細あつて、當社御參詣と仰せ出だされ候程に、社人どもを召し出だ

道ぞめでたき。咲きかへる道ぞめでたき。

人のかごと―讒誣のこと

諸天―天は佛神

とやおことが計ひとして、この雲雀山の谷蔭に、柴の庵を結び隱し置きたるとは聞きしかども眞しからぬ所に、今御事を見てこそさてはと思へ、姫は何くにあるぞ包まず申し候へ。シテ詞「是は仰せとも覺えぬものかな。謡人のかごとを御用ひありて、失ひ給ひし中將姫の、何しに此世にましますべき、如何に御尋ねありとても、地謡「今は御身も夏草の、茂みに交る姫百合の、知られぬ御身なり。何をか尋ね給ふらん。ワキ詞「實に〳〵夫はさる事なれども、先非を悔ゆる父が心、涙の色にも見ゆらんものを、はや在所を申すべし。シテ詞「まことさやうに思召すか。ワキ「なか〳〵諸天氏の神も、正に照覽あるべきなり。シテ謡「さらば此方へ御出であれと、其處とも知らぬ雲雀山の、草木を分けて谷蔭の、栞を道に足引の、地謡「山懐の空木に、草を結び草を敷きて、四鳥の塒に親と子の、思はず歸り逢ひながら、互に見忘れて、只泣くのみの心かな。實にや世の中は、定なきこそ定なれ、夢ならば覺めぬ間に、早疾く〳〵と有りしかば、乳母御手を引き立てゝ、御輿に乘せ參らせて、御悦びの歸るさに、奈良の都の八重櫻、咲きかへる

櫻色に云々—拾遺集の歌

鵙の草ぐき—草くゞりの意

遠近の—古今集の歌末句呼子鳥かな

地謡「春の心や惜しむらん。クセ思へ櫻色に、染めし袂の惜しければ、衣更へ憂き、今日にぞ有りける。それのみかいつしかに、春を隔つる杜若、いつ唐衣遥々の、面影残るかほよ鳥の、鳴きうつる聲まで、身の上に聞くあはれさよ。斯くてぞ花にめで、鳥を羨む人心、思ひの露も深見草の茂みの花衣、野を分け山に出で入れども、さらに人は白玉の、思は内にあれど、色になどや顯はれぬ。シテ謡さるにても、馴れしまゝにていつしかに、地謡「今は昔に奈良坂や、兒の手柏の二面、とにもかくにも故郷の、よそになりて葛城や、高間の山の嶺續き、こゝに紀の路の境なる、雲雀山に隠れ居て、霞の網にかゝり、目路もなき谷陰の、鵙の草ぐきならぬ身の、露に置かれ雨に打たれ、斯くても消えやらぬ、御身の果ぞ痛はしき。遠近の、(中ノ舞)シテ謡遠近のたづきも知らぬ山中に、覺束なくも呼子鳥の、雲雀山にや待ち給ふらん。いざや歸らん。いざや歸らん。

ワキ詞「やあ如何におことは乳母の侍從にてはなきか。豊成をば見忘れてあるか。さてもわが姫よしなき者の讒奏により失ひしかども、科なき由を聞き後悔すれども叶はず、まこ

深見草・牡丹の異名

春霞云々—古今集の歌

欵冬誤綻暮春風—朗詠集の句

又躑躅は—朗詠集に躑躅の題にて夜遊人欲尋來把とあるを引く

檻前に笑んで聲いまだ聞かず、鳥林下に鳴いて涙盡き難し。實にも盡きぬは花の種、色色なれや紅は、いづれ深百合深見草、御心寄せに召され候へとよ。トモ詞「實に面白き賣物かな、さてその花を賣る事は、分きて謂れのあるやらん。シテ詞「あらむつかしと御尋ねあるや。謡「召されまじくは御心ぞとよ。地謡「色々の、色々の、人の心は白露の、枝に霜は置くとも、猶常磐なれや橘の、目覺草の戯れ、其方の身には何事も、包む事はなくとも、こし方なれや、古をも、忍草を召されよや、忍草を召されよや。シテ謡「あさもよい、地謡「あさもよい、紀の關守が手束弓、いるさか歸るさか、何れにてもましませ。などや、花は召されぬ。あら花好かずの人々や。花好かぬ人ぞをかしき。

トモ詞「さらばこの花を買ひ取り候べし。又御身の來しかたを懇に御物語り候へ。シテ謡「春霞、立つを見捨てゝ行く雁は、地謡「花なき里に住みや習へると、心そらなる疑ひかな、シテ、サシ謡「欵冬あやまつて暮春の風に綻び、地謡「又躑躅は夜遊の人の折を得て、驚く春の夢の内、胡蝶の遊び色香にめでしも、皆是心の花ならずや。シテ謡「實に面白き遊花の友、

櫻狩云々―後拾遺集の歌
交野―河内
天の川―同國
五月待つ云々―古今集の歌
故ある木の實を集めつゝ―垂仁天皇の朝道間守が常世の國にて橘を得來りしこと
羽束師の森―山城恥かしの意を掛く

上歌「梓の眞弓春くれば、梓の眞弓春くれば、霞む外山の櫻狩、雨は降り來ぬ同じくは、濡るとも花の木蔭に宿らん。さて又月は夜を殘す、雪には明くる交野の御野、禁野につづく天の川、空にぞ雁の聲は居る、空にぞ雁の聲は居る。

シテサシ一聲謠「五月待つ花橘の香をかげば、昔の人の袖の香ぞする。詞「實にや昔も君のため、故ある木の實を集めつゝ、常世の國まで行きしぞかし。謠「我も主君の御爲に、色ある花を手折りつゝ、葉末に結ぶ露の御身を、殘しやすると思ひ草、いろ〳〵の、頃を得て、咲く卯の花の杜若、地謠「紫染むる山草の、シテ謠「色香にめでて花召れ候へ。上歌地謠「月は見ん、月には見えじながらへて、月には見えじながらへて、憂き世を廻る影も羽束師の、森の下草咲きにけり。花ながら刈りて賣らうよ。日頃經て、待つ日は聞かず時鳥、匂ひもとめて尋ねくる、花橘や召さるゝ。花橘や召さるゝ。

トモ詞「如何に尋ね申すべき事の候。その花をば何の爲に持ち給ひて候ぞ。シテ詞「さん候是は故ある人に參らせん爲に持ちて候。いづれにても候へ色香にめでて召され候へ。謠「花

び出し、里へ下さばやと存じ候。如何に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ツレ詞「今日も又里へ御出で候へ。シテ詞「さらば姫君に御暇を申し候べし。ツレ詞「やがて御暇を申し里へ御出で候へ。シテ詞「如何に申すべきことの候。今日も里へ出でてやがて歸り候べし。

子、サシ謠「實にや閑窻に煙絶えて、春の日いとゞ暮し難う、シテ謠「弊室に燈消えて、秋の夜猶長し。家貧にしては親知少く、賤き身には故人疎し。親きだにも疎くなれば、下歌地謠「よそ人はいかで訪ふべき。上歌さなきだに狭き世に、さなきだに狭き世に、隱れ住む身の山深み、さらば心の有りもせで、たゞ道せばき埋れ草、露いつまでの身ならまし。露いつまでの身ならまし。かくて煙も絶え〴〵の、かくて煙も絶え〴〵の、光の陰も惜き間に、よその情を頼まんと、草の樞を引きたてゝ、又里へこそ出でにけれ。又里へこそ出でにけれ。

ワキ、トモ次第謠「傾く嶺の雲雀山、傾く嶺の雲雀山、上るや雲路なるらん。ワキ詞「これは横佩の右大臣豊成とは我がことなり。ワキ、トモ次第謠「それ狩場は四季の遊びにて、時折節の興を増す、

雲雀山

概　梗

横佩右大臣豊成の女中將姫、繼母の讒言にかゝりて、雲雀山に捨て失はれんとせしを、乳母の侍從いたはりかしづきて之をはぐくみ、木草の花を里に持ち行きて賣代して暮す。豊成一日遊獵に出でて侍從に廻り會ひ、つひに姫を求めて、めでたく館に歸り入る。（四番目）

シテ　侍從（乳母）　子方　中將姫　ツレ　男

ワキ　横佩右大臣　トモ　從者

ツレ詞「かやうに候者は、奈良の都横佩の右大臣豊成公に仕へ申す者にて候。さても姫君を一人御持ち候を、さる人の讒奏により、大和紀の國の境なる、雲雀山にて失ひ申せとの仰せにて候程に、是まで御供申して候へども、如何にして失ひ申すべきと存じ、柴の庵を結びとかくいたはり申し候。さる程に侍從と申す乳母、春は木々の花を手折り、秋は草花を取りて里に出で、往來の人に是を代なし、彼姫君を過し申し候。今日も侍從を呼

讒奏―讒言といふべき所なり
雲雀山―鶴山とも日張山とも書く

只賴め云々―清水觀音の歌宰府にも寺あり
北闕―朝廷
宿因―京女の前世の善因

道場如帝珠、十寳三寳影現中、我身敬禮三寳前、頭面接足歸命禮、南無天滿天神、廣く舊里を去つて、遍く幕下を兼ねたり。明才衆に越え、明智世に勝れ、西海の西都に、安樂寺の地を點じて、春秋を招く。地謠「や本地覺王如來、寂光の都を出でて、この太宰府に住み給ふ。

後シテ謠「只賴めしめぢが原のさしも草、我世の中に在らん限は。地謠「御殿頻に鳴動して、顯れ給ふぞ忝き。上歌昨日は北闕に、昨日は北闕に、悲みを蒙る身なれども、今日は西都に蘇さんと、生きて恨み死して歡ぶ、有難の誓や。シテ謠「抑當社と申すは、地謠「そもそも當社と申すは、法性の都を出でて、分段同居の境に入つしより此方、冥々と有る苦海に沈み、菩提涅槃に至らず。こゝに宿因内に通じて、受けがたき人身を受け、智識外に助け、逢ひ難き誓の春に又逢ふ事も、只是當社の神恩ぞと、悅びの祝詞を奉り、よろこびの祝詞を奉れば、神は上らせ給ひけり。

平生の顔色は云云―以下京女の死體を形容す

あやあ神主殿御出で有るぞ、皆々のき候へ。

ワキ詞「如何に申し候。さても御下り夢にも知らず候。梅千代が事は某一跡を譲り世に立てうづるにて候。又御跡をも懇に弔うて參らせ候べし。かまへて我を恨み給ふなと、いへども〳〵、クセ地謠「いへども平生の顔色は、草葉の色に異ならず。芳態あらたに眠りて、眼蓋を開く事なし。嬋娟の黒髪は、亂れて草根にまとはり、婉轉たる黛は、消え失せて面影の、亡き身の果ぞ悲しき。ワキ謠「紅顔空に消えて、地謠「華麗を失へり。飛揚の魂何處にか獨赴く、有樣あはれむべし、累々たる古墳の邊、顔色終に消え失せて、郊原に朽ち果てゝ、思ひや跡に殘るらん。ワキ詞「いかに左近の尉、彼の者の心中餘りに不便にある間、臨時の幣帛を捧げ肝膽を碎き、彼の者の命を二度蘇生させばやと思ふは如何に。ツレ詞「實に〳〵是は尤にて候。ワキ詞「さらば祝詞を參らせうずるにて候。ツレ詞「然るべう候。

ワキ謠「神主御幣おつ取つて、神前に參り跪き、既に祝詞を申しけり。イロ謹上再拜、我此

御姿にては―清淨なる神官の身に死人に近づくは憚りありとの意

の御時は、中務頼澄宰府の神主や、言語道斷の次第にて候ものかな、今まではよその事とこそ存じて候に、かゝる不思議なる事こそ候はね。あの幼き者を此方へ連れて來り候へ。ツレ詞「畏つて候。如何に申し候。神主殿の物仰せられうずると仰せ候。此方へ御出で候へ。ワキ詞「あら不便の者や。さて眞の父に逢ひたくはなきか。子詞「かほどに情ましまさば、謠父に逢はせてたび給へ。ワキ謠「實に〳〵是は理なりと、名乘らんとすれば涙に咽び、子謠「目もくれ心、ワキ謠「月影に、地謠「それと見えねど梅千代が、顏も姿も馴れし母に、違はぬ面影の、是こそ父よ無慙やな、さこそ便も嘆きの力を添へて木綿附の、取り付き髮掻撫で、よそめ思はぬ氣色かな。

ワキ詞「いかに左近の尉、あまりに彼のもの不便に候程に、そと見うずると思ふはいかに。

ツレ詞「御意尤にて候さりながら、御姿にてはいかゞにて御座候。ワキ詞「實に〳〵汝が申す如く、總じて死人を見る事はなけれども、彼者の心中餘りに不便にある間、苦しからぬ事ぞと一目見うずるにて有るぞ。死骸のあたりなる人をのけ候へ。ツレ詞「畏つて候。や

是は云々—遺言状の文言

申し候。あれに左近の尉が候ひて、謂れを申し上げうずるとて是へ參りて候。ワキ詞「いかに左近の尉、身を投げたると申すはいかやうなる者ぞ。ツレ詞「さん候都より女性の、人を尋ねて下り候が、逢はぬを恨みて身を投げたる由申し候。ワキ詞「言語道斷。都よりはるばる下りたるに、逢はぬは不得心なる者にてあるよな。あれなる幼き者はいかやうなる者にてあるぞ。ツレ詞「あれは彼の者の子にて候。ワキ詞「手に持ちたるは文にてあるか。ツレ詞「さん候文にて候。ワキ詞「そと見たき由申して取りて來り候へ。ツレ詞「畏つて候。なうその文をそと人の御覽ぜられたき由仰せ候、給はり候へ。子詞「いや是は母御の御形見にて候程に、參らせ候まじ。ツレ詞「そと御覽じてやがて返し申されうずるにて候。此方へ給はり候へ。文を取りて參りて候。ワキ詞「是は梅千代が方へ書き置き候。憂き身はもとより捨妻の、きぬぐ\なれば恨みもなし。いかに情知らずとも、子に知れぬ親の候べきか。いひかひなくは出家になし、扶持し給はゞ草の蔭にて、守りの神となるべきなり。大内にありし時は梅壺の侍從、一條今出川の御留主、當所の御名は知らねども、御在京

て、母に追ひ付き申さんと、藍染川に歩み行く。藍染川に歩み行く。

ツレ詞「暫く。是は勿體なき御働きにて候。おこと身を投げ給ひては、さて母御の御跡を誰か弔ひ申すべき。只思召し止まり給ひ候へ。是は母御の遊ばされたる文にて候。御形見によく御持ち候へ。かゝる痛はしき事こそ候はね。

ワキ詞「是は宰府の神主にて候。我此間は他所に候ひて、只今罷り歸り候。あら不思議や、あの藍染川に人の多く集まりて候は何事にて候らん。や、推量申して候。某他所に候間に網を引かすると存じ候。如何に誰かある。トモ詞「御前に候。ワキ詞「あの藍染川に人の多く集まりて有るは、網をばし引くか。殺生禁斷の所にてあるに、急いで皆々上れと申し付け候へ。トモ詞「畏つて候。やあ〳〵神主殿の御出でにてあるぞ。網をばし引くか。殺生禁斷の所にてあるぞ、急いで皆々上り候へ。何と人の身を投げたると申すか。や、左近の尉にて渡り候か、これへ神主殿の御出でにて候、急ぎ御參りあつて、この謂を御申し候へ。ツレ詞「心得申し候。トモ詞「いかに申し上げ候。網にてはなく候。人の身を投げたる由

夕顔の空目して—源氏物語の歌に「光ありと見し夕顔の白露は黄昏時の空目なりけり」を引く

末の露—遍昭の「末の露本の雫や世の中の後れ先立つ例なるらん」を引く

いや母の御けしき心もとなく候程に、離れ申す事は候まじ。シテ詞「うたてやな父こそ變り給ふとも、母が心の變はるべきか。只々おことはこの所にて、謠母が歸さを待ち給へ。子謠「母の仰せを眞と思ひ、さらば疾く〳〵歸り給へ。シテ謠「母は今こそ限なれと、下安からぬ思の色、行きも遣られぬ袖の別れ、子謠「引止められて、シテ謠「親心の、地謠「思ひ煩ふ母が身の、思ひ煩ふ母が身の。亡き跡いかにと、別れ得ぬ今の憂き身かな。とにかくに、歸らん迄は待ち給へと、夕顔の空目して、藍染川に身を投ぐる。藍染川に身を投ぐる。

ツレ詞「何と申すぞ、藍染川に人の身を投げたると申すか。如何やうなる者ぞ立越え見ばやと存じ候。や、言語道斷、いかなる者ぞと存じて候へば、某が所に泊たる女性にて候は如何に。なう梅千代殿母御の身を投げ給ひて候ぞ。急いで御覽候へ。子詞「なう母上。

謠恨めしの御有樣やな。母御のかくてましませばこそ、頼もしく思ひ候ひつるに、是は夢かやあさましや。悲しやな知らぬ筑紫の果に來て、父母さへに捨子となる、自らは誰を頼むべき。下歌地謠「末の露、本の雫もよしやよし、我とても、ながらへ果てじ身を捨て

一跡—家督の意

筑紫人、虚言するとーかゝる諺ありしならん

人目さすがにーしかすがに恥しき意

樣變へばやー法體となりたし

や候。

子詞「いかに母上いたくな御嘆き候ひそ。梅千代斯くて候へば、御心安く思召せ。シテ詞「實に子ながらも恥しや。父が心の變る事を、身の上に嘆くと思ふかや。謠御身を父に見せ、一跡をも嗣がせばやと思ひてこそ、遙々伴なひ下りたるに、孤となすべき事の悲しさよ。

子謠「よしなうそれも力なし、今さら何と嘆くべき。上歌地謠「筑紫人、虚言すると聞きつるに、筑紫人、虚言すると聞きつるに、賴みけるこそ中々に、はかなかりける心かな。かきくらす、心の闇のひたすらに、夢現なき道のべの、便と賴む木蔭さへ、今は亡き身となるべしと、思ふに付けて獨子を、殘し置くべき悲しさよ。殘し置くべき悲しさよ。

ツレ詞「如何に申し候。御痛はしう候へども、神主殿より此所には置き申すなとの御事にて候間、急いでこの屋を出でて何方へも御出であらうずるにて候。

シテ詞「いかに梅千代。子詞「何事にて候ぞ。シテ詞「このまゝ都に上らん事も人目さすがに候へば、あれなる庵室に立越え、樣變へばやと思ふなり。御事は是に待ち給へ。子詞「いや

シカ　ツレ詞「さん候。神主殿へ申し上ぐべき子細あつて參り候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「それは恐れがましく候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「都より女性旅人の我等が宿に御泊り候が、此文を神主殿へ參らせよと申され候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「畏つて候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「さん候。幼き人を連れ申されて候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「未だ某が屋に御座候。狂言シカ〳〵。ツレ詞「言語道斷。さやうの御事をば存せず候程に留め置きて候。さらばやがて追ひ出だし申さうずるにて候。狂言シカ〳〵。

ツレ詞「いかに旅人へ申し候。只今の文を神主殿へ御目にかけて候へば、やがて御返事を給はりて候、急いで御覽候へ。シテ詞「あら嬉しと早く御屆け候ものかな。さらばやがて御返事を見うずるにて候。御下り珍しく候へども、男の身なりとも、遙々の遠國に一人は下り難し。いかさま珍しき人に誘はれて御下りかと思ひ候へば、對面申す事はあるまじく候。是は梅千代が方へ申し候、本よりこの身は不肖なれば、親ありとも思ふべからず、はや〳〵都に歸り給へ。謡あらつれなやつれなと書かれたり。是は夢かやあらあさまし

御下り珍しく云云―文の文言なり本妻が神主の返事と僞りて書けるなり

菅の根の―長しにかゝる枕詞

て、シテ子方下歌謡「馴れもなれぬに遠旅の、心は子にや迷ふらん。上歌筑紫とは、西ぞとばかり聞きしより、西ぞとばかり聞きしより、月の入るさをしるべにて、ゆくへも知らぬ旅衣、野山幾重か重ぬらん。かゝる思を菅の根の、長門の關路程もなく、香椎博多を打過ぎて宰府に早く著きにけり。宰府に早く著きにけり。

シテ詞「あら嬉しや急ぎ候程に、宰府とやらんに著きて候。まづこの所にて宿を借らうずるにて候。此方へ來り候へ。如何にこの屋の内へ案内申し候。ツレ詞「誰にて渡り候ぞ。シテ詞「是は都方の者にて候。一夜の宿を御貸し候へ。ツレ詞「心得申し候。是は女性旅人にて候程に、奥の間に置き申さうずるにて候　此方へ御入り候へ。シテ詞「いかに申し候。この所に宰府の神主殿と申す人の渡り候か。ツレ詞「中々の事此在所の主にて御座候。我等もその御内の者にて候。シテ詞「都より文をことづかりて候。神主殿へ參らせられて給はり候へかし。ツレ詞「易き御事にて候。やがて屆けて參らせうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや候。さらばこの文を參らせ候、御返事を取りてたまはり候へ。ツレ詞「心得申し候。誰か渡り候。狂言シカ

藍染川

梗概

太宰府の神主中務頼澄、在京の砌、契を結びて、一子梅千代を生める京女の、その後かれ〴〵になりしが、母子諸共にはるばる宰府に下り行きしが、本妻のはからひにて、もとの夫に會ひえず。思ひのあまりに女は藍染川に投身す。神主たまたま他より歸り來て、この凶變に會し、祝詞を奉りて天神を下し、女を蘇生せしむる事を作る。末段天滿宮の神威あらたかなる意を寓す。(四番目)

前シテ　女　　後シテ　天滿天神　　子方　梅千代
ワキ　太宰府神主　　ツレ　左近尉　　トモ　從者
狂言　神主本妻

シテ、子方次第謠「忘れは草の名にあれど、忘れは草の名にあれど、忍ぶは人の面影。シテサシ謠「是は一條今出川に住む女にて候。實にやあだなる契とて、心をさへに筑紫人の、袖觸れ初めし憂き中の、疎くなりぬる身の果は、兎にも角にもあらばあれ、この子が爲に父を尋ね

袖觸れ初めし―契り交すこと

三十番神―一月を一日宛受持ちて守護する神々

山の、夢現とも分かざるうき世に、因果は廻り合ひたり、今更さこそ悔しかるらめ、さて懲りや思ひ知れ。シテ謡「殊更恨めしき、地謡「殊更恨めしき、あだし男を取つて行かんと、臥したる枕に立ち寄り見れば、恐しや幣帛に、三十番神まし〳〵て、魍魎鬼神は穢らはしや、出でよ〳〵と責め給ふぞや、腹立や思ふ夫をば、取らであまさへ神々の、責めを蒙る悪鬼の神通、通力自在の勢絶えて、力もたよ〳〵と足弱車の廻り逢ふべき、時節を待つべしや、先此度は帰るべしと、いふ聲ばかりは定かに聞えて、いふ聲ばかり聞えて姿は、目に見えぬ鬼とぞなりにける。目に見えぬ鬼となりにけり。

二十八宿—四方に各七星あり

我は貴船の云々—和泉式部が貴船に參りての歌に「物思へば澤の螢も我身よりあくがれ出づる玉かとぞみる」

あしかれと—和泉式部の歌下句生ふなるものを

人のなげき—嘆きを木の字によりて生ふと詠む

うはなり—後妻

後シテ謠「夫れ花は斜脚の暖風に開けて、同じく暮春の風に散り、月は東山より出でて早く西嶺に隱れぬ。世上の無常かくの如し。因果は車輪の廻るが如く、我に憂かりし人々に、忽ち報いを見すべきなり。戀の身の浮む事なき鴨川に、地謠「沈みしは水の青き鬼、シテ謠「我は貴船の河瀬の螢火、地謠「頭に戴く鐵輪の足の、シテ謠「焰の赤き鬼となつて、地謠「臥したる男の枕に寄り添ひ、如何に殿御よ珍しや。シテ謠「恨めしや御身と契りし其時は、玉椿の八千代二葉の松の末かけて、變はらじとこそ思ひしに、などしも捨ては果て給ふらん。あら恨めしや、捨てられて、地謠「捨てられて、思ふ思ひの涙に沈み、人を恨み、シテ謠「夫をかこち、地謠「ある時は戀しく、シテ謠「又は恨めしく、地謠「起きても寢ても忘れぬ思ひの、因果は今ぞと白雪の、消えなん命は今宵ぞ、痛はしや。惡しかれと、思はぬ山の峰にだに、思はぬ山の峰にだに、人のなげきは生ふなるに、いはんや年月、思ひに沈む恨みの數、積つて執心の鬼となるも理や。シテ謠「いで〱命を取らん、地謠「いでいで命を取らんと、しもとを振り上げうはなりの、髮を手にからまいて、打つや宇津の

茅の人形—ちかやにて人間の形を作る
人尺—當人のす尺
謹上再拜—以下祝詞の文
みとのまぐはひ—結婚のこと
魍魎—鬼類
九曜—日月火木土金水羅睺計都の九星或は北斗七星に金輪妙見の二星をも加へて云ふ

か。ツレ詞「さん候何をか隠し申すべき、我本妻を離別し、新しき妻を語らひて候が、もし左様の事にてもや候らん。ワキ詞「實にさやうに見えて候。彼の者佛神に祈る數積つて、御命も今夜に窮つて候程に、某が調法には叶ひがたく候。ツレ詞「是まで參り御目に懸り候事こそ幸にて候へ、平に然るべき樣に御祈念有つて給はり候へ。ワキ詞「此上は何ともして、御命を轉じかへて參らせうずるにて候。急いで供物を御調へ候へ。ツレ詞「畏つて候。ワキ謠「いで〱轉じかへんとて、茅の人形を人尺に作り、夫婦の名字を内に籠め、三重の高棚五色の幣、おの〱供物を調へて、肝膽を碎き祈りけり。謹上再拜、夫れ天開け地固まつしより此方、伊弉諾伊弉冊尊、天の磐座にして、みとのまぐはひ有りしより、男女夫婦のかたらひをなし、陰陽の道長く傳はる。それに何ぞ魍魎鬼神妨げをなし、非業の命を取らんとや。地謠「大小の神祇、諸佛菩薩、明王部天童部、九曜七星二十八宿を驚かし奉り、祈れば不思議や雨降り風落ち、神鳴り稻妻頻りに滿ち〱、御幣もざゞめき鳴動して、身の毛よだちて恐しや。

晴明―一條天皇の時の陰陽師

ひもよらぬ仰せにて候。わらはが事にては有るまじく候。定めて人違にて候べし。狂言詞「いやいやしかとあらたなる御夢想にて候程に、御身の上にて候ぞ。かやうに申す内に何とやらん恐しく見え給ひて候、急ぎ御歸り候へ。シテ詞「是は不思議の御告かな。先々我が屋に歸りつゝ、謠夢想の如くなるべしと、地謠「いふより早く色變はり、いふより早く色變はり、氣色變じて今までは、美女の形と見えつる、綠の髮は空さまに、立つや黑雲の、雨降り風と鳴神も、思ふ中をば避けられし、恨の鬼となつて、人に思ひ知らせん、憂き人に思ひ知らせん。

ツレ詞「かやうに候者は、下京邊に住まひする者にて候。我此間打續き夢見惡しく候程に、晴明の許へ立ち越え、夢の樣をも占はせ申さばやと存じ候。如何に案內申し候。ワキ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「さん候下京邊の者にて候が、此程打續き夢見惡しく候程に、尋ね申さん爲に參りて候。ワキ詞「あら不思議や。勘へ申すに及ばず、是は女の恨みを深く被りたる人にて候。殊に今夜の内に、御命も危く見え給ひて候。若し左樣の事にて候

糺―下賀茂の社
御泥池―上賀茂社の東にあり

知らで、契りそめにし悔しさも、只我からの心なり。餘り思ふも苦しさに、貴船の宮に詣でつゝ、住むかひもなき同じ世の、内に報いを見せ給へと、下歌 頼みを懸けて貴船川、早く歩みを運ばん。上歌 通ひなれたる道の末、通ひなれたる道の末、夜も糺のかはらぬは思ひに沈む御泥池、生けるかひなき憂き身の、消えん程とや草深き、市原野邊の露分けて、月遲き夜の鞍馬川、橋を過ぐれば程もなく、貴船の宮に著きにけり。貴船の宮に著きにけり。

シテ詞「急ぎ候程に、貴船の宮に著きて候。心靜に參詣申さうずるにて候。狂言詞「如何に申すべき事の候、御身は都より丑の時參り召さるゝ御方にて渡り候か。今夜御身の上を御夢想に蒙りて候。御申し有る事ははや叶ひて候。鬼に、なりたきとの御願にて候程に、我が屋へ御歸りあつて、身には赤き衣を著、顏には丹を塗り頭には鐵輪を戴き、三つの足に火を燈し、怒る心を持つならば、忽ち鬼神と御なりあらうずるとの御告にて候。急ぎ御歸りあつて告の如く召され候へ。なんぼう奇特なる御告にて御座候ぞ。シテ詞「是は思

貴船の宮―鞍馬山の北

丑の時參り―午前二時頃人を呪ふ爲に參詣すること

蜘蛛のい―いは絲なり巣なり今は蜘蛛のいへと謠ふ

あだ人―薄情の男

鐵輪（かなわ）

梗概

夫に捨てられし女の、嫉妬の一念より、貴船の神に祈りて、鬼女となり恨を晴らさんとせしに、晴明に調伏せられて立去る事を作る。太平記劔之巻に、嵯峨天皇の御宇に或公卿の息女のこととしてかゝる物語見えたるを以て脚色せるなり。（五番目）

シテ　女（後は鬼女）　ワキ　安倍晴明
ツレ　男　狂言　貴船社人

狂言詞「かやうに候者は、貴船の宮に仕へ申す者にて候。さても今夜不思議なる靈夢を蒙りて候。その謂は、都より女の丑の時參りをせられ候に、申せと仰せらるゝ子細、あらたに御靈夢を蒙りて候程に、今夜參られ候はゞ、御夢想の樣を申さばやと存じ候。

シテ次第謠「日も數そひて戀衣、日も數そひて戀衣、貴船の宮に參らん、サシ實にや蜘蛛のいに暴れたる駒は繋ぐとも、二道かくるあだ人を、賴まじとこそ思ひしに、人の僞末

衡門―冠木門

わきつぢ―脇の門の欅かと云ふ

りたり、かくて鬼神は怒をなして、かくて鬼神は怒をなして、持ちたる兜をかつぱと投げ捨て、その長衡門の軒にひとしく、兩眼月日の如くにて、綱を睨んで立つたりけり。（舞働）ワキ謠「綱は騷がず太刀さしかざし、地謠「綱は騷がず太刀さしかざし、汝知らずや王地を侵す、その天罰はのがるまじとてかゝりければ、鐵杖を振りあげ、えいやと打つを、飛び違ひちやうと切る。切られて組みつくを、拂ふ劍に腕打ち落され、ひるむと見えしがわきつぢにのぼり、虛空をさして上りけるを、慕ひゆけども黑雲おほひ、時節を待ちて又取るべしと、呼ばはる聲もかすかに聞ゆる、鬼神よりも恐しかりし、綱は名をこそ揚げにけれ。

重代─祖先傳來の意

つて出でけるが、立ち歸り方々は、人の心を陸奥の、安達が原にあらねども、こもれる鬼を從へずは、二度又人に、面を向くる事あらじ、是までなりや梓弓、引きはかへさじ武士の、やたけ心ぞ恐ろしき。やたけ心ぞ恐ろしき。（中入）

ワキ一聲謠「さても渡邊の綱は、只かりそめの口論により、鬼神の姿を見んために、物の具取つて肩に掛け、同じ毛の兜の緒をしめ、重代の太刀を佩き、地謠「たけなる馬に打乘つて、舍人をもつれず只一騎、宿所を出でて二條大宮を、南がしらに歩ませけり。春雨の、音も頻りに更くる夜の、春雨の音も頻りに更くる夜の、鐘も聞ゆる曉に、東寺の前を打過ぎて、九條おもてに打つて出で、羅生門を見渡せば、物冷しく雨落ちて、俄に吹き來る風の音に、駒も進まず高嘶し、身振してこそ立つたりけれ。その時馬を乘り放し、そのとき馬を乘り放し、羅生門の石壇に上り、しるしの札を取り出だし、壇上に立ておき歸らんとするに、後より兜の、錣を摑んで引き止めにければ、すはや鬼神と太刀拔き持つて、切らんとするに、取りたる兜の緒を引きちぎつて、おぼえず壇より飛び降

羅生門ー南朱雀通にあり内裏外郭の總門

土も木も云々ー上卷田村を見よ

野心ーこゝは異存の意

て候程に、皆〳〵近う御參り候へ。頼光詞「いかに申し候。此程珍しき事はなく候か。保昌詞「さん候　此頃不思議なる事を申し候、九條の羅生門に鬼神の住んで、暮るれば人の通らぬ由を申し候。ワキ詞「いかに保昌筋なきことな宣ひそ。さすがに羅生門は、都の南門ならずや、土も木も我が大君の國なれば、いづくか鬼の宿と定めんと聞く時は、たとひ鬼神の住めばとて住ますべきにもあらず、かゝる麁忽なる事を仰せ候ぞ。保昌詞「さては某詐を申すと思召し候か。この事世上に隱れなければ申すなり。まこと不審に思召さば、今夜にてもあれ彼の門に御出であつて、誠か僞か御覽候へ。ワキ詞「さては某參るまじき者と思召され候か、其儀にて候はゞ、今夜彼の門に行き、誠か僞かを見候べし。しるしを賜はり候へ。ワキツレ謠「滿座のともがら一同に、是は無益とさゝへけり。ワキ詞「いや保昌に對し野心は無けれども、一つは君の御爲なれば、謠しるしを給べと申しけり。頼光詞「げにげに綱が申すごとく、一つは君の御爲なれば、しるしを立てゝ歸るべしと、謠札を取り出で給ひければ、ワキ上歌謠「綱はしるしを賜はりて、地謠「綱はしるしを賜はりて、御前を立

心中—白氏文集の句

たり。ワキ、ツレ四人上歌謠「曇無き、君の御影は久方の、君の御影は久方の、空ものどけき春雨の、音も靜に都路の、七つの道も末すぐに、八洲の浪も音せぬ、九重の春ぞ久しき、九重の春ぞ久しき。

つくぐ〜と云々—新古今集の歌

賴光詞「いかに面々、さしたる興も候はねども、この春雨の昨日今日、晴間も見えぬつれづれに、謠今日も暮れぬと告げ渡る、聲も寂しき入相の鐘。上歌地謠「つくぐ〜と、春のながめの寂しきは、春のながめの淋しきは、しのぶに傳ふ、軒の玉水音凄く、獨ながむる夕まぐれ、伴なひ語らふ諸人に、御酒をすゝめて盃を、とりぐ〜なれや梓弓、彌猛心の一つなる、つはものの交り、賴みある中の酒宴かな。クセ思ふ心のそこひなく、只うちとけてつれぐ〜と、降り暮らしたる宵の雨、これぞ雨夜の物語。賴光謠「しなぐ〜言葉の花も咲き、地謠「匂ひも深き紅に、面もめでて人心、隔てぬ中の戲れは、面白や諸共に、近く居寄りて語らん。

賴光詞「餘り寂しき夜にて候程に、皆々近う寄つて御物語り候へ。ワキ詞「畏つて候。仰せに

羅生門

梗概

此曲一名綱といふ。頼光の家臣渡邊綱、雨夜の物語の折から、羅生門に鬼棲めりと聞き、さらば討取らんとて、出で向ひ、門の石壇にあがりて、しるしの札を立て歸らんとする砌に、鬼神あらはれ、互に格鬪せしが、遂に鬼神は腕を切り落されて、虚空に遁げ去れりといふ事を作る。（五番目）

シテ　鬼神　　ワキ　渡邊綱　　ツレ　源頼光
ツレ　平井保昌　　ツレ　碓井貞光　　ツレ　卜部季武
ツレ　坂田公時

源の頼光ー滿仲の子

四海安危照二掌中一百王理亂懸二

ワキ、ツレ四人次第謠「治まる花の都とて、治まる花の都とて、風も音せぬ春べかな。頼光詞「是は源の頼光とは我が事なり。さても丹州大江山の鬼神を從へしより此方、貞光季武綱公時、この人々と日夜朝暮參會申し候。殊更此程は、晴間も見えぬ春雨にて候程に、酒を勸めばやと存じ候ふ。サシ謠「有難や四海の安危は掌の中に照らし、百王の理亂は心の中に懸け

を差出せば、沓をおつ取り劒を收め、又川岸にえいやと上り、さて彼沓を取り出し、石公に履かせ奉れば、シテ謠「石公馬より靜に下り立ち、地謠「石公馬より靜におりたち、さるにても汝、善哉々々と、彼の一卷を取り出だし、張良に與へ給ひしかば、卽ち披き悉く拜見し、祕曲口傳を殘さず傳へ、また彼大蛇は觀音の再誕、汝が心を見んためなれば、今より後は守護神となるべしと、大蛇は雲居に攀ぢ上れば、石公遙の高山に上り、金色の光を虛空に放し。忽ち姿を黃石と現し、殘し給ふぞ有難き。

彼の一卷―兵法の書

黃石と現し―黃石公一卷の書を張良に與へ今より十三年後に我を濟北の穀城山下に見るべし黃石は卽ち我なりとて去れる故事による

いしくも—いみじくもに同じ

面もふらず—傍見もふらず

ひ、眼の光りもあたりを拂ひ、姿もかゝやく威勢に恐れて、橋本にかしこまり待ち居たり。

シテ詞「いかに張良、いしくも早く來るものかな、近づき給へ物言はん。ワキ詞「その時張良立上り、衣冠正しく引繕ろひ、土橋を遙かに上り行けば、シテ謠「あつぱれ器量の謠人體かなと、思ひながらも今一度、謠心を見んと石公は、地謠「履いたる沓を馬上より、履いたる沓を馬上より、遙かの川に落し給へば、張良續いて飛んでおり、流るゝ沓を取らんとすれども、所は下邳の巖石いはほに、足もたまらず早き瀨の、矢を射る如く落ちくる水に、浮きぬ沈みぬ流るゝ沓を、取るべき樣こそなかりけれ。

地謠「不思議や川浪立返り、不思議や川浪立返り、俄に河霧立ち暗がつて、浪間に出づる蛇體の勢、紅の舌をふりたてふりたて、張良を目がけてかゝりけるが、流るゝ沓をおつとり上げて、面もふらずかゝりけり。(龍神働)ワキ謠「張良騷がず劍を拔き持ち、地謠「張良さわがず劍を拔き持ち、蛇體にかゝれば、大蛇は劍の光に恐れ、持ちたる沓

瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳レ天巴峽秋深五夜之猿叫レ月—朗詠集の句

謠 兵法の師といはれんと、地謠「思ふ心を見ん爲と、思ふ心を見ん爲と、知れば歸るも恨みなし、又こそこゝに來らめと、勇みをなして歸りけり。勇みをなして歸りけり。(中入)

ワキ一聲謠「瑤臺霜滿てり、一聲の玄鶴空に鳴く、巴峽秋深し、五夜の哀猿月に叫ぶ、物冷しき山路かな。地謠「有明の、月も隈なき深更に、月も隈なき深更に、山の峽より見渡せば、所は下邳の川波に、渡せる橋におく霜の、白きをみれば今朝はまだ、渡りし人の跡もなし。嬉しや今は早、思ふ願ひも滿つ潮の、曉かけてはるかに、夜馬に鞭うつ人影の、駒をはやむる氣色あり。

後シテ謠 抑 是は、黄石公と云ふ老人なり。詞 こゝに漢の高祖の臣下張良と云ふ者、ただ公程を見て君臣を重んじ、義を全うして心 詞 猛く、賢才人に越え、器量すぐれ、地謠「國を治め民をあはれむ 志、シテ謠「天道に通じて忽ちに、地謠「諸佛も感應まのあたり、シテ謠「大事を傳へて高祖につかへ、地謠「敵を平らけ味方を勇め、天下を治めん 謀、汝に傳へんと、駒を速めて來り給ふを、張良遙に見奉れば、ありしにかはれる石公の粧

り、今日より五日に當らん日こゝに來れ、兵法の大事を傳ふべきよし申して夢さめぬ。道行謡やう〳〵日を考へ候へば、今日五日に相當り候程に、只今下邳の土橋へと急ぎ候。五更の天も明け行けば、五更の天も明け行けば、時や遲きと行く程に、道は遙に山の端も、白み渡れる川波や、下邳の土橋に著きにけり。下邳の土橋に著きにけり。

シテ謡「あら遲なはりやいかに張良、年老いたる者と契り置きし、その言の葉もはや違ひぬ、詞我は先刻よりこゝに來り、曉鐘をかぞへ待ちつるに、謡はやその時刻も杉の門、上歌地謡「待つかひもなしはやかへれ。待つかひもなしはや歸れ。汝誠の志、あらば今日より五日に、當らんその日夜深く來らば我もまたこゝに、かならず出で逢ひ、約束の如く傳へん。後れ給ふな張良と、怒をなして老翁は、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。

ワキ詞「言語道斷、以ての外の機嫌にて候は如何に。又我ながら斯くの如く、ゆくへも知らぬ御事に、かやうに恐れ從ふ事、その故なきには似たれども、大事を傳へて末世に遺し、

五更―午前四時頃

杉の門―杉に過ぎを掛く

公程—公務の意

外五

張良

梗概

漢の高祖の名臣張良、嘗て下邳の土橋に一老人に會ひ、その落せる履を拾ひ取りて與へし縁により、兵法を授けられたる史談を脚色す。（五番目）

シテ　黄石公（前は老人）　ワキ　張良

ワキ詞「是は漢の高祖の臣下張良とは我が事なり。われ公程に隙なき身なれども、或る夜不思議の夢を見る。是より下邳と言ふ所に土橋あり、かの土橋に何となく休らふ所に、一人の老翁馬上にて行き逢ふ。かの者左の沓を落し、某に取つて履かせよといふ。何者なれば我にむかひ、かく言ふらんと思ひつれども、かれが氣色只者ならず、その上老いたるを貴み親と思ひ、沓を取つて履かせて候。その時彼の者申すやう、汝誠の志あ

一矜伽羅—以下不動明王に屬する童子

日、しば〳〵身命を惜しまず、採菓汲水に隙を得ず、一矜伽羅二制多伽、三に倶梨伽羅七大八大金剛童子、ワキ謠「東方、(働)シテ謠「東方降三世明王もこの鏡にうつり、地謠「又は南西北方を寫せば、シテ謠「八面玲瓏と明かに、地謠「天を寫せば、シテ謠「非想非々想天まで隈なく、地謠「さて又大地をかゞみ見れば、シテ謠「先地獄道、地謠「先は地獄の有様を現す。一面八丈の淨玻璃の鏡となつて、罪の輕重罪人の呵責、打つや鐵杖の數々、悉く見えたり、さてこそ鬼神に横道を正す、明鏡の寶なれ、すはや地獄に歸るぞとて、大地をかつぱと踏鳴らし、大地をかつぱと踏破つて、奈落の底にぞ入りにける。

年行—年々の修行

台嶺—比叡山を支那の天台山に比して云ふ

地謠「疑はせ給ふかや。鬼の持ちたる鏡ならば、見ては恐れやし給はん。眞の鏡を見ん事は、叶ふ眞白の鷹を見し、水鏡を見給へとて、塚の内に入りにけり。塚の内にぞ入りにける。（中入）

ワキ謠「かゝる奇特に逢ふ事も、是れ行德の故なりと、思ふ心を便にて、鬼神の住みける塚の前にて、肝膽を碎き祈りけり。我年行の功を積める、その法力の眞あらば、鬼神の明鏡現して、我に奇特を見せ給へや、南無歸依佛。

後シテ謠「有難や天地を動かし鬼神を感ぜしめ、地謠「土砂山河草木も、シテ謠「一佛成道の法味に引かれて、地謠「鬼神に橫道曇なく、野守の鏡は現れたり。

ワキ謠「恐しや打火かゞやく鏡の面に、寫る鬼神の眼の光、面を向くべき樣ぞなき。シテ謠「恐れ給はゞ歸らんと、鬼神は塚に入らんとす、ワキ謠「暫く鬼神待ち給へ、夜はまだ深き後夜の鐘、シテ謠「時は虎臥す野守の鏡、ワキ謠「法味にうつり給へとて、シテ謠「重ねて數珠を、

ワキ謠「押揉んで、地謠「台嶺の雲を凌ぎ、台嶺の雲を凌ぎ、年行の功を積む事、一千餘箇

木居―木に止まれること
箸鷹の云々―新古今集の歌

ワキ詞「さらば御物語り候へ。シテ詞「昔この野に御狩の有りしに、御鷹を失ひ給ひ、彼方此方を御尋ね有りしに、一人の野守參り合ふ。翁は御鷹の行くへや知りて有りけるぞと問ひ給へば、彼の翁申すやう、さん候是なる水の底にこそ、御鷹の候へと申せば、何しに御鷹の水の底に在るべきぞと、狩人ばつと寄り見れば、謠「實にも正しく水底に、地謠「あるよと見えて白斑の鷹、あるよと見えて白斑の鷹、よく／＼見れば木の下の、水に映れる影なりけるぞや。鷹は木居に在りけるぞ、さてこそ箸鷹の、さてこそ箸鷹の、野守の鏡得てしがな、思ひ思はず、よそながら見んと詠みしも、この鷹を寫す故なり。眞に賢き時代とて、御狩も茂き春日野の、飛火の野守出で合ひて、叡慮にかゝる身ながら、老の思出の世語を、申せば進む涙かな。申せば進む涙かな。

ロンギ地謠「實にや昔の物語、聞くにつけても眞の、野守の鏡見せ給へ。シテ謠「思ひよらずの御事や。それは鬼神の鏡なれば、如何にして見すべき。地謠「さてや鏡の有所、聞かまほしきに春日野の、シテ謠「野守と云ふも我なれば、地謠「鏡はなどか、シテ謠「持たざらんと、

箸鷹―鶻をも訓むはいたかとも云ふ

を寫し申すにより、野守の鏡と申し候。又誠の野守の鏡とは、昔鬼神の持ちたる鏡とこそ承り及びて候へ。ワキ詞「何とて鬼神の持ちたる鏡をば、野守の鏡とは申し候ぞ。

シテ詞「昔この野に住みける鬼の有りしが、晝は人となりてこの野を守り、夜は鬼となつて是なる塚に住みけるとなり。されば野を守りける鬼の持ちし鏡なればとて、野守の鏡とは申し候。ワキ謠「謂を聞けば面白や。さてはこの野に住みける鬼の、持ちしを野守の鏡とも云ひ、シテ詞「又は野守が影を寫せば、水をも野守の鏡と云ふ事、ワキ謠「兩説何れも謂れあり。シテ謠「野守がその名は昔も今も、ワキ謠「かはらざりけり。シテ謠「御覽ぜよ、上歌地謠「立寄れば、實にも野守の水鏡、實にも野守の水鏡、影を寫していとゞ猶、老の波は眞清水の、あはれ實に見しまゝの、昔の我ぞ戀しき。實にや慕ひても、かひあらばこそ古への、野守の鏡得し事も、年古き世の例かや、年古き世の例かや。

ワキ詞「如何に申すべき事の候。箸鷹の野守の鏡とよまれたるも、この水に付きての事にて候か。シテ詞「さん候この水に付きてのいはれにて候。語つて聞かせ申し候ふべし。

飛火の野守出でて見よ今幾日ありて若菜つみてん」

五重唯識—唯識は經文の名五重とは遺虚存實識捨濫留純識攝末歸本識隱劣顯勝識遺相攝性識

宮寺—興福寺

存じ候。

シテ一聲謠「春日野の、飛火の野守出でて見れば、今幾程ぞ若菜摘む。サシ是に出でたる老人は、此春日野に年を經て、山にも通ひ里にも行く、野守の翁にて候なり。有難や慈悲萬行の春の色、三笠の山に長閑にて、五重唯識の秋の風、春日の里に音づれて、眞に誓も直なるや、神のまに〳〵行き歸り、運ぶ歩みも積る老の、榮行く御影仰ぐなり。下歌唐土までも聞えある、この宮寺の名ぞ高き。上謠昔仲麿が、昔仲麿が、我が日の本を思ひやり、天の原、ふりさけ見ると詠めける、三笠の山陰の月かも。夫は明州の月なれや、こゝは奈良の都の、春日長閑けき氣色かな。春日長閑けき氣色かな。

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ詞「何事を御尋ね候ぞ。ワキ詞「御身は此所の人か。シテ詞「さん候是はこの春日野の野守にて候。ワキ詞「野守にてましまさば、是によし有りげなる水の候は名の有る水にて候か。シテ詞「是こそ野守の鏡と申す水にて候へ。ワキ詞「あら面白や野守の鏡とは、何と申したる事にて候ぞ。シテ詞「我等如きの野守、朝夕影

鹿島—春日と同體の神

春日野の—古今集に「春日野の

野守

梗概

野守の鏡といふは、奥儀抄袖中抄など歌學の書に傳ふる所兩說ある事は、この曲中に「野を守りける鬼の持ちし鏡なれば」とも「又は野守が影をうつせば、水をも野守の鏡といふ」ともあるが如し。この曲はかゝる歌學上の故事を本として作り、初に野守の翁を出し、後に鬼神の鏡を現す。（五番目）

シテ　鬼神（前は野守翁）　ワキ　山伏

ワキ 次第謠「苔に露けき袂にや、苔に露けき袂にや、衣の玉を含むらん。 詞 是は出羽の羽黑山より出でたる山伏にて候。我大峰葛城に參らず候程に、此度和州へと急ぎ候。 道行謠こ の程の、宿鹿島野の草枕、宿鹿島野の草枕、子に臥し寅に起き馴れし、床の眠も今更に、假寢の月の影共に、西へ行くへか足引の、大和國に著きにけり。大和國に著きにけり。 詞 急ぎ候程に、和州春日の里に著きて候。人を待ちてこのあたりの名所をも尋ねばやと

うれしさを―古今集に「嬉しさを何に包まん唐衣袂ゆたかにたてといはましを」

を、地謡「ひきとゞむべき言の葉もなし、言の葉もなし。シテ謡「言の葉もなき君の御心、地謡「われらが身までも物思ひに、立ち舞ふべくもあらぬ心、今は却りてうれしさを、何に包まん唐衣ゆたかに、袖打合せ御暇申し、急ぐ心も勇める駒に、ゆらりと打乗り、歸る姿のあとはるゞゝと、小督は見送り仲國は、都へとてこそ歸りけれ。

唐帝云々―玄宗皇帝と楊貴妃のこと

勅なればー「勅なればいとも畏し鶯の宿はと問はばいかゞ答へん」の古歌を引く

こがらしにー源氏物語帚木巻の歌

煙に殘る面影も、ツレ謠「見しは程なき哀の色、地謠「なか〳〵なりし契かな。クセ唐帝の古へも、驪山宮の私語、洩れし始めを尋ぬるに、あだなる露の淺茅生や、袖に朽ちにし秋の霜、忘れぬ夢を訪ふ嵐の風の傳まで身にしめる、心なりけり。ツレ謠「人の國まで訪ひの、地謠「哀を知れば常ならで、なき世を思ひの數々に、餘りわりなき戀心、身を碎きてもいやましの、戀慕の亂れなるとかや。是はさすがに同じ世の、頼みも有明の、月の都の外までも、叡慮にかゝる御惠、いとも畏き勅なれば、宿はと問はれて、無しとはいかが答へん。

ロンギ、シテ謠「是までなりやさらばとて、直の御返事たまはり、御暇申し立ち出づる。ツレ謠「月に訪ふ、宿りは假の露の世に、これや限の御使、思出の名殘ぞと、慕ひて落つる涙かな。地謠「涙もよしや星合の、今は稀なる中なりと、ツレ謠「終に逢ふ瀬は、地謠「程あらじ、迎への舟車の、やがてこそ參らめと、いへど名殘の心とて、シテ謠「酒宴をなして糸竹の、地謠「聲すみわたる月夜かな。シテ謠「月夜よし。(男舞)ワカこがらしに、吹きあはすめる笛の音

身に白玉のおのづから―玉の緒を含めて次の存へてに續く
漢王云々―漢武帝と李夫人とのこと

トモ詞「仲國御目に懸らざらんほどは歸るまじきとて、あの柴垣の本に露にしをれて御入り候。謠勅諚と申し痛はしさといひ、何とか忍ばせ給ふべき、こなたへや入れ參らせ候はん。ツレ詞「げに〳〵我もさやうには思へども、謠餘りの事の心亂れに、身の置所も知らねども、さらばこなたへと申し候へ。トモ詞「さらば此方へ御入り候へ。シテ詞「畏つて候勅諚に任せ是まで參りて候。さてもかやうにならせ給ひて後は、玉體衰へ叡慮なやましく見えさせ給ひて候。せめての御事に御行方を尋ねて參れとの宣旨を蒙り、辱くも御書を賜はつて是まで持ちて參りて候。謠恐れながら直の御返事を賜はりて、奏し申し候はん。ツレ謠「もとよりも辱かりし御惠、及びなき身の行方までも、賴む心の水莖の、跡さへ深き御情、地謠「變らぬ影は雲井より、猶殘る身の露の世を、憚りの心にも、訪ふこそ涙なりけれ。クリげにや訪はれてぞ、身に白玉のおのづから、存へて憂き年月も、嬉しかりける住まひかな。ツレ、サシ謠「たとへを知るも數ならぬ、身には及ばぬ事なれども、地謠「妹背の道は隔てなき、かの漢王のその昔、甘泉殿の夜の思ひ、たへぬ心や胸の火の、

人目づつみ—包みに堤を掛く

嵯峨の山—後撰集の歌「嵯峨の山御幸絶えにし芹川の千代の古道あとはありけり」

この戸開けさせ給へ。ツレ謡「誰そや門に人音のするは。心得て聞き候へ。トモ詞「中々にとかく忍ばゞ悪しかりなんと、まづこの樞を押開く。シテ詞「門さゝれては叶ふまじと樞をおさへ、謡是は宣旨の御使、仲國これまで參りたり。其由申し給ふべし。ツレ謡「現なやかゝる卑しき賤が屋に、何の宣旨の候べき、門違へにてましますか。シテ詞「いや如何に包ませ給ふとも、人目づつみも洩れ出づる、謡袖の涙の玉琴の、調は隱れなきものを。ツレ謡「げに恥かしや仲國は、殿上の御遊の折々は、シテ謡「笛仕れと召し出だされて、ツレ謡「馴れし雲井の月も變らず、シテ、ツレ謡「人を訪ひ來てあひにあふ、その糸竹の夜の聲、地謡「ひそかに傳へ申せとの、勅諚をば何とさは、隔て給ふや中垣の、葎が下によしさらば、今宵は片敷の、袖ふれて月に明かさん。上歌所を知るも嵯峨の山、所を知るも嵯峨の山、御幸絶えにし跡ながら、千代の古道たどり來し、ゆくへも君の惠ぞと、深き情の色香をも、知る人のみぞ花鳥の、音にだに立てよ東屋の、あるじはいさ知らず、調は隱れよもあらじ。

おのづから—自らに緒を掛く

何をかくねる—拗ること

人に語るな—古今集遍照の歌に「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我おちにきと人に語るな」

牡鹿なく此山里—通解に源氏物語に「牡鹿なく秋の山里いかならん小萩が露のかゝる夕暮」とある歌の句を引けるにやとあるよりも後葉集の牡鹿鳴く此山里の嵯峨なれば悲しかりけり秋の夕暮」を證歌とすべし嵯峨にならはしの意のさがといふ語を掛く

法輪—寺の名

に觸れなるゝ世の習ひ、飽かぬは人の心かな。下歌地謠「いざ〳〵さらば琴の音に、立てゝもしのぶこの思ひ、せめてや暫し慰むと、地歌せめてや暫し慰むと、かきなす琴のおのづから、秋風にたぐへば、なく蟲の聲も悲みの、秋や恨むる戀や憂き、何をかくねる女郎花、我も浮世のさがの身ぞ、人に語るな、この有樣も恥かしや。

シテ一聲謠「あら面白のをりからやな。三五夜中の新月の色、二千里の外も遠からぬ、叡慮かしこき勅を受けて、心も勇む駒の足なみ、夜の歩みぞ心せよ。牡鹿なく、この山里とながめける、地謠「嵯峨野の方の秋の空、さこそ心も澄みわたる、片折戸をしるべにて、名月に鞭を擧げて、駒を早め急がん。シテ謠「賤が家居の假なれど、地謠「若しやと思ひ此處彼處に、駒を駈寄せ駈寄せて、控へ〳〵聞けども、琴彈く人は無かりけり。月にやあくがれ出で給ふと、法輪に參れば、琴こそ聞え來にけれ、峯の嵐か松風か、それかあらぬか、尋ぬる人の琴の音か、樂は何ぞと聞きたれば、夫を想ひて戀ふる名の、想夫戀なるぞ嬉しき。シテ詞「疑ひもなき小督の局の御調にて候。やがて案内を申さうずるにて候。如何に

寮―左馬寮右馬寮とて貢の馬を養ひ置く役所

秋の夜の―源氏物語の歌末句時の間もみん

大弼仲國をめして、小督の局の御行方を、尋ねて參れとの宣旨に任せ、只今仲國が私宅へと急ぎ候。いかに仲國の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ワキ詞「是は宣旨にて候。さても小督の局の御行方、嵯峨野の方に御座候由聞召し及ばせ給ひ、急ぎ尋ね出でこの御書を與へよとの宣旨にて候。シテ詞「宣旨畏つて承り候。さて嵯峨にては如何やうなる處とか申し候。ワキ詞「嵯峨にては只片折戸したる所とこそ聞召されて候へ。シテ詞「左樣の賤が屋には片折戸と申す物の候。今夜は八月十五夜にて候間、琴彈き給はぬことあらじ。小督の局の御調をば、よく聞き知りて候間、御心安く思召せと、謠「委しく申し上げければ、ワキ謠「この由奏聞申しければ、御感の餘忝くも、寮の御馬を賜はるなり。シテ謠「時の面目畏つて、地謠「やがて出づるや秋の夜の、やがて出づるや秋の夜の、月毛の駒よ心して、雲井に翔れ時の間も、急ぐ心の行方かな。急ぐ心の行方かな。（中入）

ツレ、サシ謠「げにや一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、みなこれ他生の緣ぞかし。

ツレ、トモ謠「あからさまなる事ながら、馴れて程ふる軒の草、しのぶたよりに賤の女の、目

小督

梗概

小督の局は少納言信西の孫、櫻町中納言成範卿の女也。高倉帝の寵を受けしが、清盛に忌まれて、嵯峨野の奥に隱る。彈正の大弼仲國、仲秋明月の夜、御使として小督の許を尋ね行きて對面し、直に返事を受取り立別るゝ砌、酒宴ありて一さしの舞をかなで、後駒に跨りて、歸る都の空の名殘ゆかしかりけるさまを脚色す。(四番目)

シテ　源仲國　　ツレ　小督の局
トモ　侍女　　ワキ　勅使

相國—太政大臣のこと清盛をさす
夜の大殿—御寢殿
南殿—紫宸殿

ワキ詞「これは高倉の院に仕へ奉る臣下なり。さても小督の局と申して、君の御寵愛の御座候。中宮は又まさしき相國の御息女なれば、世の憚りを思召しけるか、小督の局暮に失せ給ひて候。君の御歎き限なし。晝は夜の大殿に入り給ひ、夜は又南殿の床に明かさせ給ひ候處に、小督の局の御行方、嵯峨野のかたに御座候由聞召し及ばれ、急ぎ彈正の

重手—重傷

ゆふつけ—ゆふつけ鳥は鶏のこと

はつしと打つて弓手へ越せば、追つ懸け透かさずこむ長刀に、ひらりと乗れば刃向になし、しさつて引けば馬手へ越すを、おつ取り直してちやうと切れば、宙にて結ぶをほどく手に、却つて拂へば飛びあがつて、そのまゝ見えず形も失せて、こゝやかしこと尋ぬる處に、思ひもよらぬうしろより、具足の透間をちやうと切れば、こは如何にあの冠者に、切らるゝ事の腹立さよと、いへども天命の、運の極めぞ無念なる。

地謠「打物わざにて叶ふまじ、打物わざにて叶ふまじ、手取にせんとて長刀投げ捨て、大手をひろげて、こゝの面廊かしこの詰りに、追つかけ追つ詰め取らんとすれども、陽炎稻妻水の月かや、姿は見れども手に取られず。シテ謠「次第々々に重手は負ひぬ。地謠「次第次第に重手は負ひぬ、猛き心、力も弱り弱り行きて、シテ謠「此松が根の、地謠「苔の露霜と消えし昔の物語、末の世助けたび給へと、ゆふつけも告げ渡る、夜も白々と赤坂の、松陰に隠れけり。松陰にこそは隠れけれ。

行疫神―改訂本に此字を充つ通解には陽厄神かといへり拾葉抄には右いづれをも載せたり

しようや―拾葉抄に枝葉やとし通解もそれに從へり寶生流謠本に笑止やとせるをよしとす

供養―亡者への弔ひ

ふこそ程も久けれ、言ふこそ程も久けれ。皆我先にと松明を、投げ込み〳〵みだれ入る、勢は行疫神も、面を向くべきやうぞなき。然れども牛若子、少し恐るる氣色なく、小太刀を拔いて渡り合ひ、獅子奮迅虎亂入、飛鳥の翔の手を碎き、攻め戰へばこらへず、表に進む十三人、同じ枕に切り伏せられ、其外手負ひ太刀を捨て、具足を奪はれはふ〳〵逃げて、命ばかりを遁るもあり。熊坂いふやう、此者どもを手の下に、討つは如何さま鬼神か、人間にてはよもあらじ、盜も命のありてこそ、あらしようや引かんとて、長刀杖につき、うしろめたくも引きけるが、シテ謠「熊坂思ふやう、地謠「熊坂思ふやう、もの〳〵しその冠者が、切るといふともさぞ有るらん。熊坂祕術を振ふならば、如何なる天魔鬼神なりとも、中につかんで微塵になし、討たれたるもののどもの、いで供養に報ぜんとて、道より取つて返し、例の長刀引きそばめ、折妻戸を小楯に取つて、彼の小男をねらひけり。牛若子は御覽じて、太刀拔きそばめ物あひを、少し隔てゝ待ち給ふ。熊坂も長刀かまへ、互にかゝるを待ちけるが、いらつて熊坂左足を蹈み、鐵壁も徹れと突く長刀を、

與力—加勢

磨針—近江にある峠の名

引場—退却の場所

目の内—眼光

信高とて、黄金を商なふ商人あつて、毎年數駄の寳を集めて、高荷を作つて奥へ下る、詞あつぱれ之を取らばやと、與力の人數は誰々ぞ。ワキ謠「さて國々より集りし、中に取りても誰が有りしぞ。シテ謠「河内の覺紹、詞磨針太郎兄弟は、面討には竝びなし。ワキ謠「さて又都のその内に、多き中にも誰が有りしぞ。シテ「三條の衞門壬生の小猿。ワキ謠「火ともしの上手分切には、シテ詞「是等に上はよも越さじ。ワキ謠「さて北國には越前の、シテ詞「麻生の松若三國の九郎、ワキ謠「加賀の國には熊坂の、シテ詞「此長範を始として、究竟の手柄の痴者等、七十人は與力して、ワキ謠「吉次が通る道すがら、野にも山にも宿泊に、目付を附けて之を見す。シテ詞「この赤坂の宿に著く、こゝこそ究竟の所なれ、引場も四方に道多し、見れば宵より遊君するゐ、數百のあそび時をうつす。ワキ謠「夜も更け行けば吉次兄弟、前後も知らず臥したりしに、シテ謠「十六七の小男の、目の内人に勝れたるが、障子の透間物合の、そよともするを心にかけて、ワキ謠「少しも臥さでありけるを、シテ詞「牛若殿とは夢にも知らず、ワキ謠「運の盡きぬる盗人等、シテ謠「機嫌はよきぞ、ワキ謠「はや、シテ謠「入れと、地謠「い

眠藏―寢所

を見彼を聞き、他を是非知らぬ身の行くへ、迷ふも悟るも心ぞや、されば心の師とはなり、心を師とせざれと、古き詞に知られたり。かやうの物語、申さば夜も明けなまし。お休みあれや御僧達、我もまどろまんさらばと眠藏に、入るよと見えつるが、形も失せて庵室も、草むらとなりて松陰に、夜を明したる不思議さよ。夜を明したる不思議さよ。（中入）

ワキ上歌謠「一夜臥す、男鹿の角の束の間も、男鹿の角の束の間も、寢られん物か秋風の、松の下臥夜もすがら、聲佛事をやなしぬらん。聲佛事をやなしぬらん。

後シテ謠「東南に風立つて西北に雲靜ならず、夕闇の夜風烈しき山陰に、地謠「梢木の間やさわぐらん。シテ謠「有明頃かいつしかに、地謠「月は出でても朧夜なるべし、切り入れ攻めよと前後を下知し、弓手や馬手に心を配つて、人の寶を奪ひし惡逆、娑婆の執心、これ御覽ぜよあさましや。

ワキ詞「熊坂の長範にてましますか、その時の有樣御物語り候へ。シテ謠「さても三條の吉次

拄杖—禪僧の持物

垂井青墓—共に美濃の地名

多門—毘沙門天

六度—布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智恵の六つ

始めうずると存じ候處に、安置し給ふべき繪像木像の形もなく、一壁には大長刀、拄杖にあらざる鐵の棒、そのほか兵具をひつしと立て置かれ候は、何と申したる御事にて候ぞ。シテ謠「さん候この僧は、未だ初發心の者にて候が、御覽候如くこのあたりは、垂井青墓赤坂とて、その里々は多けれども、間々の道すがら、青野が原の草高く、青墓小安の森しげれば、晝ともいはず雨の内には、山賊夜盗の盗人ら、高荷を落し里通ひの、下女やはしたの者までも、打ち剝ぎとられ泣き叫ぶ、さやうの時はこの僧も、例の長刀ひつさげつゝ、こゝをば愚僧に任せよと、呼ばはりかくれば實には又、一度はさもなき時もあり、さやうの時はこの所の、便にもなるものぞかしと、喜びあへば然るべしと思ふばかりの心なり。なんぼうあさましき世を捨者の所存候ぞ。謠「殊勝なき手柄、地謠「似あはぬ僧の腕立、さこそをかしと思すらん。さりながら佛も、彌陀の利劍や愛染は、方便の弓に矢を矧げ、多聞は鉾を横たへて、惡魔を降伏し、災難を拂ひ給へり。シテ謠「されば愛著慈悲心は、地謠「達多が五逆に勝れ、方便の殺生は、菩薩の六度に勝れりとか。これ

青野が原―美濃
赤坂―同

往復―こゝは往生の意

こそ青野が原ながら、色づく色か赤坂の、里も暮れ行く日影かな。里も暮れ行く日影かな。

シテ詞「なう〳〵あれなる御僧に申すべき事の候。ワキ詞「こなたの事にて候か何事にて候ぞ。シテ詞「今日はさる者の命日にて候弔ひて給はり候へ。ワキ詞「それこそ出家の望なれ。さりながら誰と志して回向申すべき。シテ詞「たとひその名は申さずとも、あれに見えたる一木の松の、少し此方の茅原こそ、只今申す古墳なれ。往復ならねば申すなり。ワキ詞「あら何ともなや、誰と名を知らで回向は如何ならん。シテ詞「よしそれとても苦しからず。法界衆生平等利益、ワキ謡「出離生死を、シテ謡「離れよとの、地謡「御弔ひを身に受けば、御弔ひを身に受けば、たとひその名は名のらずとも、受け喜ばゞ、それこそ主よ有難や。回向は草木國土まで漏らさじなれば分きてその、主にと心あてなくとも、さてこそ回向なれ、浮までは如何あるべき。シテ詞「さらばこなたへ御入り候へ。愚僧が庵室の候に一夜を明して御通り候へ。ワキ詞「さらばかう參らうずるにて候。如何に申し候、持佛堂に參り勤めを

熊坂

梗概

熊坂長範はもと加賀の出といふ。名高き盜賊にて、美濃の青野が原にて强盜をなす。折から金賣吉次、牛若丸を伴なひて奥へ下る。長範之を狙ひて奪掠せんとし、手下の者共を集めて夜討をせしに、皆々牛若に擊たれ、長範亦命を殞す。此曲は、長範の幽靈現れて、旅僧に往昔の物語をなす事を作る。前シテを僧形とせるは、張範廿一歲の時法師になれりと傳ふればなり。(五番目)

シテ　熊坂長範(前は僧)　　ワキ　僧

ワキ 次第謠「憂しとは言ひて捨つる身の、憂しとは言ひて捨つる身の、ゆくへいつとか定むらん。 詞 是は都方より出でたる僧にて候。我いまだ東國を見ず候程に、只今思ひ立ち東國修行と志し候。 道行謠 山越えて、近江路なれや湖の、近江路なれや湖の、粟津の森も見え渡る、瀬田の長橋うち過ぎて、野路篠原に夜をこめて、朝立つ道の露深き、名

九條の御所—牛若の宿所なり御所とは實は當らず

委しく名のりおはしませ。牛若謡「今は何をか包むべき、我は源牛若。地謡「義朝の御子か。牛若謡「さて汝は、地謡「西塔の武藏辨慶なり。互に名のり合ひ、互に名のり合ひ、降參申さん御免あれ、少人の御事、我は出家、位も氏も健氣さも、よき主なれば頼むなり。麁忽にや思召すらんさりながら。是又三世の奇緣の始め、今より後は主從ぞと、契約堅く申しつゝ、薄衣被かせ奉り、辨慶も長刀打ちかついで、九條の御所へぞ參りける。

小姓ー小童

ひざまに長刀の、柄元をはつしと蹴上ぐれば、シテ謡「すは痴者よ物見せんと、地謡「長刀やがて取り直し、長刀やがて取り直し、いで物見せん手並の程と、斬つてかゝれば、牛若は、少しも騒がずつつ立ち直つて、薄衣引きのけつゝ、靜々と太刀抜き放つて、つつ支へたる長刀の、鋒に太刀打ち合はせ、つめつ開いつ戰ひしが、何とかしたりけん、手元に牛若寄るとぞ見えしが、たゝみ重ねて打つ太刀に、さしもの辨慶合はせ兼ねて、橋桁を二三間、しさつて肝をぞ消したりける。あら物々しあれ程の、あら物々しあれ程の、小姓一人を斬ればとて、手並にいかで洩らすべきと、長刀柄長くおつ取りのべて、走りかゝつてちやうと切れば、そむけて右に飛びちがふ。取り直して裾を薙ぎ拂へば、跳りあがつて足もためず、ちうを拂へば頭を地に付け、ちどに戰ふ大長刀、打ち落されて力なく、組まんと寄れば切り拂ふ、すがらんとするも便なし。せん方なくて辨慶は、希代なる少人かなとて、呆れ果てぞ立つたりける。

ロンギ地謡「不思議や御身誰なれば、まだいとけなき姿にて、かほどけなげにましますぞ。

七夜）を思はしむ
夕顔の花の色―源氏物語の趣を思浮べしむ
草摺長―大鎧の狀をいふ
女の姿なり―薄衣をかづきたれば云ふ

そゞろ浮き立つ我が心、波も玉散る白露の、夕顔の花の色、五條の橋の橋板を、とゞろとゞろと踏み鳴らし、音も靜に更くる夜に、通る人をぞ待ち居たる。通る人をぞ待ち居たる。

シテ詞「既にこの夜も明方の、三塔の鐘も杉間の雲の、光り輝やく月の夜に、著たる鎧は黑革の、縅しに縅せる大鎧、草摺長に著なしつゝ、もとより好む大長刀、眞中取つて打ちかつぎ、ゆらり／＼と出でたる有樣、謠如何なる天魔鬼神なりとも、面を向くべきやうあらじと、我が身ながらも物頼もしうて、手に立つ敵の戀しさよ。

牛若謠「川風も早更け過ぐる橋の面に、通る人もなきぞとて、心すごげに休らへば、シテ詞「辨慶かくともしら波の、立ち寄り渡る橋板を、さもあらゝかに踏み鳴らせば、牛若詞「牛若彼を見るよりも、すはやうれしや、人來るぞと、薄衣猶も引被き、かたはらに寄り添ひたたずめば、シテ詞「辨慶彼を見付けつゝ、（立廻）言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり。我は出家の事なれば、思ひわづらひ過ぎて行く。シテ詞「牛若彼をなぶつて見んと、行きちが

化生の者―ばけもの

たちまちに―川波の立つことより立待つ意にかけ立待の月（十

し御止まりあれかしと存じ候。シテ詞「言語道斷の事を申す者かな。たとへば天魔鬼神なりとも、大勢には叶ふまじ、おつ取りこめて討たざらん。トモ詞「おつ取りこむれば不思議にはづれ、敵を手元に寄せ付けず、シテ謡「手近く寄れば、トモ謡「目にも、シテ謡「見えず、地謡「神變奇特不思議なる、神變奇特不思議なる、化生の者に寄せ合せ、かしこう御身討たすらん。都廣しと申せども、是程の者あらじ。實に奇特なる者かな。

シテ詞「さあらば今夜は思ひ止まらうずるにて有るぞ。いや辨慶程の者の、聞き遁げは無念なり。今夜夜更けば橋に行き、化生の者を平げんと、上歌地謡「夕べ程なく暮方の、夕べ程なく暮方の、雲の氣色も引きかへて、風凄しく更くる夜を、遲しとこそは待ち居たれ。遲しとこそは待ち居たれ。（中入）

牛若一聲謡「さても牛若は母の仰せの重ければ、詞明けなば寺へ上るべし、今宵ばかりの名殘なれば、五條の橋に立ち出でて、川波添へてたちまちに、月の光を待つべしと、一聲謡「夕波の、氣色はそれか夜嵐の、夕程なき秋の風、上歌地謡「面白の氣色やな、面白の氣色やな、

橋辨慶

梗概

辨慶、五條の天神へ詣づる途中、五條の大橋にて牛若に廻り會ひ、彼は薙刀、此は太刀にて、各〻力を盡して闘ふに、牛若の神變不思議の早業には辨慶つひに敵すべくもなく、かくて互に名のり出でて、主從の契約をなす。この事義經記に基くと思はる。但し義經記には、場所を橋畔とせずして天神の築土の邊とす。（四番目）

シテ　辨慶　　トモ　從者　　子方　牛若

丑の時―午前二時頃
滿參―宿願の日數滿つること

シテ詞「是は西塔のかたはらに住む武藏坊辨慶にて候。我宿願の子細有つて、五條の天神へ、丑の時詣を仕り候。今日滿參にて候程に、只今參らばやと存じ候。如何に誰か有る。トモ詞「御前に候。シテ詞「五條の天神へ參らうずるにて有るぞ、其分心得候へ。トモ詞「畏つて候。又申すべき事の候。昨日五條の橋を通り候所に、十二三ばかりなる幼き者、小太刀にて切つて廻り候は、さながら蝶鳥の如くなる由申し候。先々今夜の御物詣は、思召

瞋恚―怒なり火焰に喩ふ

の伎樂を奏しつゝ、おの〳〵伎樂を奏しつゝ、夢の黄楊櫛彈く琴琵琶の、四面に鬨の聲を上ぐれば、又執心の攻め來るぞや、あら苦しの苦患やな。ツレ謠「虞氏は思ひに堪へかねて、地謠「虞氏は思ひに堪へかね給ひて、高樓に登りて、落つるはさながら涙の雨の、身を投げ空くなり給へば、(舞働)シテ謠「項羽は虞氏が別れと我が身の、地謠「成り行く草葉の露諸共に、消え果てし悲さ、思ひ出づれば、劍も鉾も皆投げ捨てゝ、身を燒くばかりに口惜しかりし、夢物語ぞ哀れなる。シテ謠「あはれ苦しき瞋恚の焰、地謠「あはれ苦しき瞋恚の焰の、立上りつゝ身力を見れば、高祖に屬して寄せ來る波の、荒き聲々聞けば腹立ち、いで物見せんと自ら駈け出で、敵を近づけ取つては投げ捨て、又は引き伏せ捻首とり〴〵に、恐しかりける勢なれども、「運盡きぬれば烏江の野邊の、土中の塵とぞなりにける。

は、一日に千里を駈くる名馬なれども、主の運命盡きぬれば、膝を折つて一足も行かず。その時項羽はちつとも騷がず、馬よりしづ〳〵とおり立つて、如何に呂馬童、我が首取つて高祖に捧げ、謠名を揚げよやと呼ばはれども、地謠「呂馬童は恐れて近づかず。不覺なる者の心かな、是見よ後の世に語り傳へよと、言ひあへず、劍を拔いてあへなくも、我と我が首を掻き落し、呂馬童に與へそのまゝ、この原の露と消えにけり。望雲騅は膝を折り、黄なる涙を流せば、さのみ語れば我が心、昔に歸る身の果、今は包まじ我こそは、項羽が幽靈現れたり、跡弔ひてたび給へ。跡弔ひてたび給へ。（中入間語）

ワキ上歌謠「樣々に、弔ふ法の聲立てゝ、弔ふ法の聲立てゝ、波に浮寢の夜となく、晝とも分かぬ弔ひの、般若の船のおのづから、その纜をとく法の、心を靜め聲をあげ、一切有情、殺害三界不墮惡趣。

後シテ謠「昔は月卿雲客打圍み、今は樵歌野田の月、爛體霧深し、古松下の陰。地謠「苔紛紛として舊銘を埋む。シテ謠「紫の雲間よこぎる出立は、地謠「天つ少女の調かな。おのお

般若の船―佛の智慧にて凡夫を救ふこと

昔は云々―昔は榮え今は衰へたる態を叙ぶ

爛體―たゞれたる肉體

美人草と申して—是より虞氏の事を云ひ項羽の身の上に及ぶ

さても云々—是より漢楚の軍談に入る

仰せられ候よ。その爲にこそ向ひにて申し定めて候に、何とて聊爾なる事をば承り候ぞ。シテ詞「いや船賃と申せばとて、別の子細にても候はどこそ。それ程多き草花をなど一本賜はり候はぬぞ。ワキ詞「あら優しや。何れにても召され候へ。シテ詞「さらばこの花を賜はらうずるにて候。ワキ詞「不思議やな是程多き草花の中に、何とてその花をば選つて召され候ぞ。シテ詞「さん候是は美人草と申して、故有る花にて候。ワキ詞「あら面白や美人草とは、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ詞「是は項羽の后虞氏と申せし人の、身を投げ空しくなり給ひしを、取り上げ土中に築き込め候へば、その塚より生ひ出でたる草なればとて、さて美人草とは申し候。ワキ詞「さらば項羽高祖の戰の樣を、御存じ候はど、そと御物語り候へ。シテ詞「さらば語つて聞かせ申し候べし。

物語「さても項羽高祖の戰、七十餘度に及ぶといへども、始めは項羽打勝ち給ひ、一度も高祖の利なかりしに、ある時項羽の兵心變りし、却つて項羽を狹めつゝ、四面に鬨の聲をあぐれば、虞氏は思ひに堪へかねて、いかゞはせんと伏し給ふ。又望雲騅と云ふ馬

蒼苔路滑僧歸寺紅葉聲乾鹿在林―溫庭筠の詩

荻の穂―穂に帆を言掛く

露刈り込めて―露のかゝれるまゝ刈り取れる意

惜しむか心あれ。花を惜しむか心あれ。詞便船を待ち向へ越さうずるにて候。

シテ、サシ謡「蒼苔路滑にして僧寺に歸り、紅葉聲乾いて牡鹿鳴くなる夕ま暮、心も澄める面白さよ。一聲秋毎に、野分を船の追風にて、地謡「荻の穂かくる露の玉。

ワキ詞「なう〳〵その船に乘らうずるにて候。シテ詞「あう召され候へ。さて船賃は候。

ワキ詞「我等如きの者の船賃參らせたる事はなく候。シテ詞「船賃なくばこの舟に叶ひ候まじ。

ワキ詞「さらば上の瀬へ廻らうずるにて候。シテ詞「なう〳〵道理は申しつ船に召され候へ。

ワキ謡「乘りおくれじと草刈は、もとの渚に立ち寄れば、シテ謡「とく乘り給へとさし寄する。

上歌地謡「露刈り込めて秋草の、露刈り込めて秋草の、葉毎に影宿る、月をや舟に乘せつらん。天の川、たな渡りして七夕の、たな渡りして七夕の、年に一夜は心せよ。秋風吹けば波の音、湊に近き海士小舟、水音なしに行く船の、水馴棹をさゝうよや。水馴棹をさゝうよ。

シテ詞「船が著いて候御上り候へ。ワキ詞「御船恐れて候。シテ詞「さて船賃は候。ワキ詞「又船賃と

烏江—今の安徽省和州の東北にあり

外四　項羽

梗概

草刈男、烏江の渡頭に便船に乘る。船頭、男に美人草を所望す。それより話題は虞美人の事より漢楚の合戰に及ぶ。船頭は我こそ項羽なりと名のる。やがて項羽の幽靈、虞美人諸共に現れ出でて、最後の合戰の狀を見する事を作る。（五番目）

シテ　項羽（前は船頭）　ツレ　虞氏　ワキ　草刈

ワキ 次第謠「詠め暮して花に又、詠め暮して花に又、宿かる草を尋ねん。詞 是は烏江の野邊の草刈にて候。今日も草を刈り只今家路に歸り候。下歌謠 野邊は錦の小萩原、刈萱交る烏江野に、草刈るをのこ心なく、草刈るをのこ心なく、花を刈るとや思草、家づとなれば色々の、草花の數を刈り持ちて、歸れば跡は秋暮れて、枯野にすだく蟲の音も、花を

ロンギ地謡「有難の御事や。そも君道を守らんの、其誓願の御誓、如何なる謂れなるらん。シテ謡「鍾馗及第の、鍾馗及第の砌にて、我と亡ぜし悪心を、翻へす一念、發起菩提心なるべし。地謡「實に誠ある誓とて、國土をしづめわきて實に、シテ謡「禁裏雲井の樓閣の、地謡「こゝやかしこに遍滿し。シテ謡「あるひは玉殿、地謡「廊下の下、御階の下までも、御階の下までも、劍をひそめて忍び〳〵に、求むれば案の如く、鬼神は通力失せ、顯はれ出づれば忽ちに、ずだ〳〵に切り放して、まのあたりなるその勢、只此劍の威光となつて、天に輝き地に遍く、治まる國土となる事、治まる國土となる事も、實に有難き誓かな。實に有難き誓かな。

淨藏淨眼—妙莊嚴王の二子にして大神力福德智慧あり父を念ふ事深く神變を現して父王の心を淨く信解せしむといふ

七多羅樹—貝多ともいふ木高さ四十九尺ありといふそれを七つ重ねたる高さなり

知らすらん。あはれなりける人界を、いつかは離れ果つべき。

ワキ詞「是は不思議の御事かな。急ぎ帝都に赴きつゝ、委しく奏聞申すべし。暫く待たせ給へとよ。シテ詞「とても見みえし夢の中、誠の姿を顯はさんと、ワキ謠「いふより早く、シテ謠「氣色變りて、地謠「傳へ聞く佛在世の、傳へ聞く佛在世の、淨藏淨眼の如くに、その高さ七多羅樹、虛空に上りては座せしめ、地に入つては火焰を放して、水を踏むこと陸地の如くに、さら〳〵と走り去つて、形はさながら山彥の、形はさながら山彥の、聲ばかりして失せにけり。聲ばかりして失せにけり。（中入）

ワキ上歌謠「苔の席に法をのべ、苔の席に法をのべ、さも冷しき山陰の、嵐と共に聲立てゝ、この妙經を讀誦する。この妙經を讀誦する。

後シテ謠「鬼神に橫道なしといふに、なんぞみだりに騷がしく。汝知らずや我が心、國土を守る誓あり。地謠「寶劍光冷しく、日月影おろそかに、松嵐梢を拂ふが如く、惡鬼の亂れ恐れ去つて、實にも鍾馗の精靈たり。

進士—任官の試驗に合格せる者
有爲—有爲轉變のこと
有漏—煩惱
四手の田長—時鳥のこと

さて御身は如何なる人ぞ。シテ謠「今は何をか包むべき。我は鍾馗と云へる進士なるが、及第の砌に亡ぜし、その執心を飜へし、後世に猶望あり。ワキ詞「實に〳〵鍾馗の御事は、世に隱れなき進士なるが、その亡心にてましますか。シテ謠「なか〳〵なりと夕暮の、ワキ謠「物冷しき、シテ謠「折柄に、上歌地謠「草蟲露に聲しをれ、草蟲露に聲しをれ、尋ぬるに形なく、老松既に風絕えて、問へども松は答へず。實にや何事も、思ひ絕えなん色も香も、終には添はぬ花紅葉、いつをいつとか定めん。いつをかいつと定めん。クセ一生は風の前の雲、夢の間に散じ易く、三界は水の上の泡、光の前に消えんとす。綺爛殿の內には、有爲の悲みを告げ、翡翠の帳のうちには、有漏の願力有りとかや。榮花は是春の花、昨日は盛なれども、今日は衰ふわんりきの、秋の光朝に增じ、夕に減ずとか。春去り秋來つて、花散じ葉落つ。時移り氣色變じて、樂み既に去つて、悲びはやく來れり。シテ謠「朝顏の、花の上なる露よりも、地謠「はかなき物はかげろふの、有るか無きかの心地して、世を秋風の打靡き、群れ居る田鶴の音を鳴きて、四手の田長の一聲も、誰が黃泉路をか

鍾馗

梗概―上卷に收めたる皇帝に似たる曲なり。卽ち鍾馗の靈現れ出でて、國土を守護せんとの誓を叙ぶる事を作る。(五番目)

シテ　鍾馗　ワキ　旅人

ワキ詞「是は唐終南山の麓に住居する者にて候。さても我奏聞申すべき事の候間、只今帝都に赴き候。道行謠終南山を立ち出でて、終南山を立ちいでて、野草の露を分け行けば、遠村に煙滿ち、人屋しるき眺望の、海路遙に過ぐれば、釣の小舟もかへる波、寄る程もなき眺かな。寄る程もなき眺かな。

シテ詞「なう〳〵あれなる旅人に申すべき事の候。ワキ詞「何事にて候ぞ。シテ詞「我昔誓願の子細あるにより、悪鬼を亡ぼし國土を守らんとの誓あり。君賢人をなしたまはゞ、宮中に現じ奇瑞をなすべきとの、この事を奏してたび給へ。ワキ詞「是は不思議の御事かな。さて

君賢人をなし給はゞ―賢人を用ひ給はゞの意

今よりこのさゝら、さつと捨てゝさ候はゞ、あれなる御僧に、連れ參らせて佛道、連れ參らせて佛道の、修行に出づるぞうれしかりける。出づるぞうれしかりける。

鬼が城—大江山

平野の峯—比良山

山上—吉野山

う御僧は何事を仰せられ候ぞ。ワキ詞「さん候この花月は某が俗にて失ひし子にて候程に、さてかやうに申し候。狂言詞「筋無き事を承り候。まづ〳〵そなたへ御のき候へ。いかに花月へ申し候。いつものやうに八撥を御うち候ひて、皆人に御見せ候へ。シテ詞「さても我筑紫彦山に登り、謠七つの年天狗に、地謠「とられて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ。とられて行きし山々を、思ひやるこそ悲しけれ。まづ筑紫には彦の山、深き思ひを四王寺、讃岐には松山、降り積む雪の白嶺、さて伯耆には大山、さて伯耆には大山、丹後丹波の境なる、鬼が城と聞きしは、天狗よりも恐ろしや。さて京近き山山、さて京近き山々、愛宕の山の太郎坊、平野の峰の次郎坊、名高き比叡の大嶽に、少し心のすみしこそ、月の横川の流れなれ。日頃はよそにのみ、見てや止みなんと眺めしに、葛城や高間の山、山上大峰釋迦の嶽、富士の高嶺にあがりつゝ、雲に起き臥す時もあり、かやうに狂ひめぐりて、心みだるゝこのさゝら、さら〳〵〳〵と、磨つては謠ひ舞うては數へ、山々嶺々里々を、めぐり〳〵てあの僧に、逢ひ奉るうれしさよ。

御所變―化現のこと
千手―千手觀音

春の頃、草創ありしこの方、今も音羽山、嶺の下枝の滴りに、濁るともなき清水の、流れを誰か汲まざらん。ある時この瀧の水、五色に見えて落ちければ、それを怪しめ山に入り、その水上を尋ぬるに、金朱泉の岩の洞の、水の流れに埋もれて、名は青柳の朽木あり。その木より光さし、異香四方に薫ずれば、シテ謠「さては疑ふ處なく、地謠「楊柳觀音の、御所變にてましますかと、皆人手を合せ、猶もその奇特を、知らせて給べと申せば、朽木の柳は緑をなし、櫻にあらぬ老木まで、皆白妙に花咲きけり。さてこそ千手の誓には、枯れたる木にも花咲くと、今の世までも申すなり。

ワキ詞「あら不思議や。是なる花月をよく〳〵見候へば、某が俗にて失ひし子にて候は如何に。名のつて逢はゞやと思ひ候。如何に花月に申すべき事の候。シテ詞「何事にて候ぞ。ワキ詞「御身は何くの人にて渡り候ぞ。シテ詞「是は筑紫の者にて候。ワキ詞「さて何故かやうに諸國を御廻り候ぞ。シテ詞「我七つの年彦山に登り候ひしが、天狗に捕られてかやうに諸國を廻り候。ワキ詞「さては疑ふ處もなし。是こそ父の左衞門よ見忘れてあるか。狂言詞「なうな

養由―周の代弓の名人

大口―袴の類

さればにや云々―上巻田村の曲に同じ文句あり

らばこそ、花月が身に敵のなければ、太刀刀は持たず、弓は的射んがため、又かゝる落花狼藉の小鳥をも、射て落さんがためぞかし。異國の養由は、百歩に柳の葉を垂れて、百に百矢を射るに外さず。我は又花の梢の鶯を、射て落さんと思ふ心は、その養由にも劣るまじ。謠あら面白や。地謠「それは柳これは櫻、それは鴈がねこれは鶯、それは養由これは花月、名こそ替はるとも、弓に隔てはよもあらじ。いで物見せん鶯とて、履いたる足駄を踏脱いで、大口のそばを高く取り、狩衣の袖をうつ肩ぬいで、花の木陰に狙ひ寄つて、よつぴきひやうと、射ばやと思へども、佛の戒め給ふ、殺生戒をば破るまじ。

狂言詞「言語道斷面白き事を仰せられ候。また人の御所望にて候。當寺の謂れを曲舞に作りて御謠ひ候由を聞召して候、一節御謠ひ候へとの御所望にて候。シテ詞「やすき事謠うて聞かせ申さうずるにて候。サシ謠さればにや大慈大悲の春の花、地謠「十惡の里に香しく、三十三身の秋の月、五濁の水に影淸し。クセ 抑〻この寺は、坂の上の田村丸、大同二年の

定めて云々ー此詞の前にワキと狂言方との間に問答ありワキ何か面白き見物はなきかと問ひ狂言方花月の曲舞を舞ふ事を話す

香象ー華嚴宗の祖師香象大師

雲居寺ー昔祇園社の南に在りし寺

狂言詞「定めて今日は清水へ御參りなき事はあるまじく候。御供申し彼人に見せ申し候べし。

シテ詞「抑〳〵是は花月と申す者なり。ある人我が名を尋ねしに答へていはく、月は常住にして云ふに及ばず。さて花の字はと問へば、春は花夏は瓜、秋は菓冬は火。因果の果をば末期まで、一句のためにのこすといへば、人これを聞いて、地謠「さては末世の香象なりとて、天下に隱れもなき、花月と我を申すなり。狂言詞「何とて今までは遲く御出で候ぞ。シテ詞「さん候今までは雲居寺に候ひしが、花に心を引く弓の、春の遊びの友達と、中たがはじとて參りたり。狂言詞「さらばいつもの如く小歌を謠ひて御遊び候へ。シテ謠「こしかたより。地謠「今の世までも絕えせぬものは、戀といへる曲者。實に戀は曲者、曲者かな。身はさら〳〵〳〵、さら〳〵さらに戀こそ寢られね。

狂言詞「あれ御覽候へ鶯が花を散らし候よ。シテ詞「實に〳〵鶯が花を散らし候よ。某射て落し候はん。狂言詞「急いであそばし候へ。シテ詞「鶯の花踏み散らす細脛を、大長刀もあ

花月

梗概

花月といふ者、幼少の時、天狗に奪ひ去られて、今は清水のあたりにはかなき歌舞をなしてさすらへたり。こゝにその父なる法師廻りあふ事を作る。（四番目）

彦山―豐前豐後筑前に亘れる山
俗―出家せざりし時
出離―出家のこと

シテ　花月　ワキ　旅僧　狂言　清水門前の者

ワキ次第謠「風に任する浮雲の、風に任する浮雲の、とまりはいづくなるらん。詞 是は筑紫彦山の麓に住居する僧にて候。我俗にて候ひし時、子を一人もちて候を、七歳と申しゝ春の頃、いづくともなく失ひて候程に、これを出離の縁と思ひ、かやうの姿と爲りて諸國を修行仕り候。道行謠 生れぬ先の身を知れば、生れぬ先の身を知れば、憐れむべき親もなし。親のなければ我が爲に、心を留むる子もなし。千里を行くも遠からず、野に臥し山にとまる身の、是ぞ誠の住家なる、是ぞ誠の住家なる。詞 急ぎ候程に、これははや花の都に著きて候。先づ承り及びたる清水に參り、花をも詠めばやと思ひ候。

片そぎの―住吉の神詠とて「夜や寒き衣や薄き片そぎのゆきあひのまより霜やおくらん」
神をあげ―神靈を天に歸すこと
大峰―金峯山
華藏世界―極樂
密嚴淨土―同

重垣、片そぎの寒き世のためし、言はずとも傳へ聞きつべし。神のしめゆふ糸櫻の、風の解けとぞ思はるゝ。

ワキ詞「さあらば祝詞を參らせられ候ひて、神を上げ申され候へ。シテ謠「謹上再拜、そも〳〵當山は、法性國の巽、金剛山の靈光、この地に飛んで靈地となり、今の大峰これなり。

地謠「されば御嶽は金剛界の曼荼羅、シテ謠「華藏世界、熊野は胎藏界、地謠「密嚴淨土有難や。(神樂) 地謠「不思議や祝詞の神子物狂ひ、不思議や祝詞の神子物狂ひの、さもあらたなる飛行を出して、神がたりするこそ恐しけれ。シテ謠「證誠殿は阿彌陀如來、地謠「十惡を導き、シテ謠「五逆を憐む。地謠「なかの御前は。シテ謠「藥師如來。地謠「藥となつて、シテ謠「二世を助く。地謠「一萬文殊、シテ謠「三世の覺母たり。地謠「十萬普賢、シテ謠「滿山護法、地謠「數々の神々、彼覡につくもがみの、御幣も亂れて空に飛ぶ鳥の、翔り〳〵て地に又踊り、珠數を揉み袖を振り、高足下足の舞の手を盡し、是までなりや、神は上らせ給ふと云ひ捨つる、聲の内より狂ひ覺めて、又本性にぞなりにける。

正直捨方便—正直を主として方便を捨つる意

總持—陀羅尼とて梵語のまゝに唱ふる經文

三難—地獄畜生餓鬼三道の苦しみ

靈山の云々—「靈山の釋迦の御前に契りてし眞如くちせずあひ見つる哉」

伽毘羅衛に云々—「伽毘羅衛に共に契りしかひありて文殊の御顏あひみつるかな」右二首の歌の事袋草紙にあり

るべきと、謡よみしは疑ひなきものを。地謡「もとより正直捨方便の、誓曇らぬ神心、直なる故にかくばかり、納受あれば今は早、疑はせ給はで歌人を、ゆるさせ給ふべし。または心中に隱し歌も、神の通力と知るなれば、實に疑ひの仇心、打ち解け此繩を、疾く疾く免し給へや。

クリ地謡「それ神は人の敬ふによつて威を增し、人は神の加護によれり。シテ、サシ謡「されば樂しむ世に逢ふ事、これ又總持の義によれり。地謡「言葉少うして理を含み、三難耳絶えて寂念閑靜の床の上には、眠り遙に眼を去る。クセこれによつて、本有の靈光忽ちに照らし、自性の月漸く雲收れり。一首を詠ずれば、よろづの惡念を遠ざかり、天を得れば清く、地を得れば安し。あらかじめ、唯有一實相、唯一金剛とは說かずや。シテ謡「されば天竺の、地謡「婆羅門僧正は、行基菩薩の御手を取り、靈山の釋迦の御許に契りて、眞如朽ちせず逢ひ見つと、詠歌あれば御返歌に、伽毘羅衛に、契りし事のかひありて、文殊の御顏を、拜むなりと、互に佛々を顯すも、和歌の德にあらずや。また神は出雲八

なう〳〵云々―天満宮の神靈神子に憑きて宣ふ詞

御注連の縄―縛りたることを此く譬へていふ

岩代の松―萬葉集に「岩代の濱松が枝を引結びまさきくあらば又かへり見ん」

シテ詞「なう〳〵その下人をば何とて縛め給ふぞ。その者は昨日音無の天神にて、一首の歌をよみ我に手向けし者なれば、納受あれば神慮、少し涼しき三熱の、苦みを免る、それのみか、謡人倫心なし、詞その縄解けとこそ。謡解けや手櫛の亂髪、地謡「解けや手櫛の亂髪の、神は受けずや御注連の縄の、引き立て解かんとこの手を見れば、心強くも岩代の松の、何とか結びし情なや。ワキ詞「是はさて何と申したる御事にて候ぞ。シテ詞「この者は音無の天神にて、一首の歌をよみ我に手向けし者なれば、とく〳〵縄を解き給へ。ワキ詞「是は不思議なる事を承り候ものかな。かほど賤しき者の歌などよむべき事思ひもよらず。如何様にも疑はしき神慮かと存じ候よ。シテ詞「猶も神慮を僞とや。さあらば彼者昨日我に手向けし言の葉の、上の句を彼に問ひ給へ。我又下の句をばつゞくべし。ワキ詞「此上はとかく申すに及ばず。如何に汝誠に歌をよみたらば、その上の句を申すべし。ツレ謡「今は憚り申すに及ばず、彼の音無の山陰に、さも美しき冬梅の、色異なりしを何となく、心も染みてかくばかり。おとなしにかつ咲きそむる梅の花、シテ詞「にほはざりせば誰か知

麻裳よい—「き」の枕詞

遠き千里の濱邊、山は苔路のさかしきを、いつかは越えん旅の道、休らふ間もなき心かな。下歌是とても、君の惠によも洩れじ。上歌麻裳よい、紀の關越えて遙々と、紀の關越えて遙々と、山又山を其處としも、分けつゝ行けば是ぞこの、今ぞ始めて三熊野の、御山に早く著きにけり。御山に早く著きにけり。詞急ぎ候程に、三熊野に著きて候。先々音無の天神へ參らばやと思ひ候。や、冬梅の匂ひの聞え候、何くにか候らん。實に是なる梅にて候。この梅を見て何となく思ひ連ねて候。南無天滿天神、心中の願をかなへて給はり候へと、地謠「神に祈りの言の葉を、心の内に手向けつゝ、急ぎ參りて、先づ君に仕へ申さん。

ツレ詞「いかに案内申し候。都より巻絹を持ちて參りて候。ワキ詞「何とて遲なはりたるぞそのために日數を定め參る中に、謠汝一人おろかなる、地謠「その身の科は遁れじと、その身の科は遁れじと、やがて縛めあらけなき、苦しみを見せて目のあたり、罪の報いを知らせけり。罪の報いを知らせけり。

巻絹

梗概

勅使國々より集められし巻絹を熊野權現に納めんとて出立つ。こゝに都よりの男巻絹持参の儀遅なはりたれば、縛しめらる。然るに此男熊野に着きて音無の天神へ詣で歌一首を詠めり、それを天神納受し給ひ、神子にのりうつりて縛の繩を解かしめ給ふ事を作る。歌の徳を叙べし曲也。（四番目）

巻絹—疋の巻きたるなり

手振—風俗

シテ　神子　　ツレ　男　　ワキ　勅使

ワキ詞「そもそも是は當今に仕へ奉る臣下なり。」さても我が君あらたなる靈夢を蒙り給ひ、千疋の巻絹を三熊野に納め申せとの宣旨に任せ、國々より巻絹を集め候。さる間都より参るべき巻絹遅なはり候。参りて候はゞ神前に納めばやと存じ候。

ツレ次第謡「今を始めの旅衣、今を始めの旅衣、紀の路にいざや急がん。サシ都の手振なりとても、旅は心の安かるべきか、殊更是は王土の命、重荷をかくる南の國、聞くだに

宗徒の―重立ちたる

引立ちけるを―逃ぐるを云ふ

ワキ詞「實にゆゝしくも名のるものかな。さては汝は土佐が郎等、我には不足の者なれども、謡志をば報ぜんと、地謡「長刀やがて取直し、長刀やがて取直し、無慙や汝手に懸けんと、込む長刀を打ち拂ひ、受け流せば又取直し、ちやうと打てばはつたと合はせ、重ねて打つに打ち込まれて、何かはたまらん唐竹割に、二つになつてぞ失せにける。正尊これを見るよりも、正尊これを見るよりも、宗徒の郎等數輩討たせて、今は叶はじと馬より下り立ち、亂れ入るを、義經打物取直し給ひ、隙間を有らせず戰ひ給へば、靜も諸共に切り拂ひ切り拂ふ。正尊叶はじと引立ちけるを、辨慶追つ詰め戰ひけるが、押し竝べむずと組み、えいやと投伏せ、大勢取り込め繩うち懸けて、喜び勇み囚人を引かせ、御門の内にぞ入り給ふ。

御腹めされよ—切腹あれかしとなり

打物—刀

寄せ來る勢を待ち給ふ。

立衆一聲謠「白波と、よそにや聞かんわたづみの、深き心はある物を。シテ詞「その時正尊駒しづしづと打ち寄せて、大音上げて名のるやう、謠そもそも是は鎌倉殿の御使、土佐正尊とは我が事なり。詞九郎大夫判官殿の、討手の大將たまはつたり。とうとう御腹めされよと、大音上げてぞ呼ばはりける。地謠「味方の勢は之を見て、味方の勢は之を見て、あの土佐坊を討ち取らんと、我もくと進む中に、江田の源三熊井太郎、辨慶を先として、門外に切つて出づれば、寄手の兵渡り合ひ、喚き叫んで戰うたり。

ワキ詞「其時辨慶表に進み、如何に土佐坊確に聞け。さても書きつる虛起請の、罰を忽ち與ふべし。いざ一太刀と呼ばはれば、光景詞「大將討たせて叶はじと、好む打物ひつさげて、辨慶を目懸けてかゝりければ、ワキ詞「天晴器量の人體かな。さて汝は誰そと尋ぬれば、光景詞「物その物にあらねども、正尊が内に名を得たる、謠陸奥の國の住人に、姉和の平次光景なりと、大音上げてぞ名のりける。

新宮那智
阿鼻—地獄の名
讀み上げたるは云々—讀み上げたりとも作る
君が代は云々—後拾遺集の歌
著背長—鎧のこと

し、文治元年九月日、正尊と讀み上げたるは、身の毛もよだちて書いたりけり。地謠「もとより虚言とは思へども、文を揮うて書いたる、器用を感じ思召し、御盃を下さるゝ。折節御前に、磯の禪師が娘に、靜と云へる白拍子、今樣を謠ひつゝ、御酌に立ちて花葛、かゝる姿ぞ類なき、舞の袖。（中ノ舞）靜謠「君が代は、千代に一度ゐる塵の、地謠「白雲かゝる山となるまで。山となるまで、山となるまで、靜謠「變らぬ契を頼む中の、地謠「變らぬ契を頼む中の、隔てぬ心は神ぞ知るらん、よく〳〵申せと靜に諫められ、土佐坊御前を罷り歸れば、君も御寢所に入らせ給へば、各退出申しけり。（中入）

ワキ詞「如何に申し上げ候。只今土佐が宿所を見せに遣はし候處に、幕の内には矢を負ひ弓を張り、兵ども皆武具をし、只今打つ立つ氣色見えて、更に物詣の氣色は見えぬよし申し候。判官詞「元より覺悟の前なれば、何程の事のあるべきぞと、ワキ謠「其まゝやがて御座を立ち、靜謠「靜は著背長參らする。地謠「義經之を召されつゝ、義經之を召されつゝ、御佩刀を取つて靜々と、中門の廊に出で給ひ、門を開かせ諸共に、寄せ來る勢を待ち給ふ。

さすがに武略の武藏殿、さは有るまじきと申されてこそ、御兄弟の御中に、物いひさがなき事あるまじけれ。まづ靜まつて事のわけを、委しく聞き給へ武藏坊。是は御諚にて候へども、何によつて只今さる御事の候べき。いさゝか宿願の事の候間、熊野參詣のために罷り上りて候。判官詞「梶原が讒奏により、義經を鎌倉へも入れられず、道より追ひ歸されし事は如何に。シテ詞「その事は如何御座候やらん、身に於ては全く緩怠あらざる趣、起請文に書き表し、謠「只今御目に懸くべしと、上歌地謠「當座の席を遁れんと、當座の席を遁れんと、土佐は聞ゆる文者にて、自筆に是を書き付け、辨慶にこそは渡しけれ。シテ謠「敬つて申す起請文の事。上は梵天帝釋四大天王、閻魔法王五道の冥官泰山府君、下界の地には、伊勢天照大神を始め奉り、伊豆箱根富士淺間、熊野三所金峯山、王城の鎭守、稻荷、祇園、加茂、貴船、八幡、三所、松尾、平野、總じて日本國の大小の神祇冥道、請じ驚かし奉る。殊には氏の神、全く正尊討手に罷り上る事なし、この事僞是あらばこの誓言の御罰を中り、來世は阿鼻に、墮罪せられんものなり。仍つて起請文かくの如

物いひさがなき事—讒言の入る
緩怠—異心の意に用ゐる
起請文—誓約書
辨慶にこそは渡しけれ—御前に於て讀みたりけりとも作る
上は云々—神明へ誓ふ言
五道—餓鬼畜生修羅天上人間の五界
泰山府君—閻魔王の子にて人の魂魄を司る
熊野三所—本宮

否にはあらず―古今集の歌に「最上川上れば下る稲舟のいなにはあらず此月ばかり」上句は序詞なり
あらましごと―豫期せる事
和僧―和はわぬしわどのなどのわにて汝の意

坊も、上歌地謡「否にはあらず稲舟の、否にはあらず稲舟の、上れば下る事もいさ、あらましごとも徒に、なるともよしや露の身の、消えて名のみを殘さばや、消えて名のみを殘さばや。

ワキ詞「如何に申し上げ候。土佐正尊を召連れて參り候。判官詞「此方へと申し候へ。ワキ詞「畏つて候。此方へ參られ候へ。判官詞「如何に土佐坊珍しや。さて何のために上りて有るぞ。鎌倉殿より御文はなきか。シテ詞「さん候さしたる御事も御座なく候間、御文は參らず候。詞に申せと候ひしは、都に別の子細なく候事、偏に御渡り候故と思召し候、かまへてよく守護させ給へとこそ御諚候ひつれ。判官詞「よもさは有らじ。義經討ちに上りたる御使とこそ覺えたれ。ワキ詞「御諚の如く、大名どもをさし上せられ候はゞ、宇治瀬田の橋をも引き、都鄙の騷ぎとなつては惡しかりなんと思召し、土佐坊上つて物詣するやうにて、たばかつて討ち申せとこそ仰せ付けられ候ひつらめ。和僧に於ては此法師、手なみの程を見すべきなり。シテ詞「あら勿體なや。たとひ人の讒言により、君こそ仰せ出さるゝとも、

上洛―上京

違例―不快

引し給はざりし遺恨により、我が君を讒奏申し、御兄弟の御中不和になり給ひて候。又鎌倉より土佐正尊と申す者、昨日都へ上りて候が、是は我が君を狙ひ申さんためと聞召され、急ぎ召連て參れとの御諚にて候程に、只今土佐が旅宿へと急ぎ候。如何に案内申し候。判官殿より御使に武藏が參じて候。正尊はこの屋の内に御入り候か。シテ詞「武藏殿かやあら珍しや。まづ此方へ御入り候へ。ワキ詞「承り候。先以て御上りめでたう候。是は君よりの御使にて候。上洛のよし聞召し及ばれ、何とて御伺候は候はぬぞ、鎌倉殿の御意も聞召されたく候間、急いで御參りあれとの御事にて候。シテ詞「さん候宿願の子細候ひて、熊野參詣のためにふと罷り上りて候、昨日京著仕り候へども、路次より違例仕り散々の事にて候程に、今まで遲なはり申して候。ワキ詞「委細承り候。仰せはさる事なれども、只今御供申せとの御事にて候。シテ詞「畏つては候へども、今少し養生を加へ、必ず伺候申し候べし。ワキ詞「いや〱片時も早く國の御事をば聞召されたく思召せば、只々御供申さんと、シテ謠「是非をいはせぬ武藏殿に、ワキ謠「さしも剛なる、シテ謠「土佐

正尊

梗概

土佐坊正尊、實は昌俊なるを謡曲に替へて作れるなり。頼朝の内命を受けて、義經を討ちに上京せしを、義經の方より夙に見抜かれ、その館に呼ばれて起誓をなす。されど遂に攻込みければ、辨慶昌俊と組打ちて之を捕ふる事を作る。

（四番目）

シテ　土佐坊正尊　　ツレ　光景　　ツレ（立衆）土佐郎等
ツレ　源義經　　同　江田源三　　同　熊井太郎
子方　靜　　ワキ　辨慶

> 西塔—叡山三塔の一
> 去年—元暦元年
> 此春—文治元年

ワキ詞「是は西塔の武藏坊辨慶にて候。扨も我君判官殿は、鎌倉殿より大名十人付け申されて候へども、内々御中不和になり給ふにより、心を合せて一人づつ皆くだりはてゝ候。扨も去年の正月木曾義仲を追討せしより此方、度々平家を攻め落し、この春亡ぼしはてゝ候。一天を鎭め四海を澄ます勸賞行はるべき處に、渡邊にて梶原が逆艪の意見を承

青蓮のまなじり―開かざる蓮の葉を目尻の形容とす
金の峰―金峯山こと

御手を上げては、シテ謠「忽ち苦海の煩惱を拂ひ、地謠「惡魔降伏の青蓮のまなじりに、光明を放つて國土を照らし、衆生を守る誓を顯はし、子守勝手藏王權現、同體異名の姿を見せて、おの〳〵嵐の山に攀ぢのぼり、花に戯れ梢に翔つて、さながらこゝも金の峰の、光も輝く千本の櫻、光も輝く千本の櫻の、榮ゆく春こそ久けれ、

神遊—神樂のこと

青根が峯—吉野の内

小倉山—嵐山の北

龜山—小倉山の南

藏王權現—忿怒の相にて右手に獨鈷を持ち右足を揚ぐる

想の雲も晴れぬべし。千本の山櫻、長閑き嵐の山風は、吹くとも枝は鳴らさじ。此日もすでに呉竹の、夜の間を待たせ給ふべし。明日も三吉野の山櫻、立ちくる雲に打乘りて、夕陽殘る西山や、南の方に行きにけり。南の方に行きにけり。

地謠「三吉野の、三吉野の、千本の花の種植ゑて、嵐山あらたなる、神遊ぞめでたき。この神遊ぞめでたき。ツレ二人謠「色々の、地謠「色々の、花こそ交れ白雪の、子守勝手の、惠なれや松の色、ツレ二人謠「青根が峯こゝに、地謠「青根が峯こゝに、小倉山も見えたり。向ひは嵯峨の原、下は大井川の、岩根に波かゝる、龜山も見えたり。萬代と、萬代と、囃せ囃せ神遊、千早ぶる。（中ノ舞）地謠「神樂の鼓聲澄て、神樂の鼓聲澄みて、羅綾の袂を飜し、飜す舞樂の祕曲も度重なりて、感應肝に銘ずる折から、不思議や南の方より吹きくる風の、異香薰じて瑞雲たなびき、金色の光輝きわたるは、藏王權現の來現かや。

地謠「和光利物の御姿、和光利物の御姿、シテ謠「我本覺の都を出でて、分段同語の塵に交はり、地謠「金胎兩部の一足をひつさげ、シテ謠「惡業の衆生の苦患を助け、地謠「さて又虚空に

る人やらん。シテ詞「さん候　是は嵐山の花守にて候。又嵐山の千本の櫻は、皆神木にて候程に、花に向ひ渇仰申し候。ワキ詞「そも嵐山の千本の櫻の、神木たるべき謂れは如何にシテ詞「げに御不審は御道理。名におふ吉野の千本の櫻を、うつし置かれし其故に、謡人こそ知らね折々は、木守勝手の神ともに、この花に影向なるものを。ワキ謡「げにやさしもこそ厭ふ憂き名の嵐山、詞　取りわき花の名所とは、何とて定め置きけるぞ。シテ詞「それこそ猶も神慮なれ。名におふ花の奇特をも、顯はさんとの御恵、シテ、ツレ詞「げに頼もしや御影山、靡き治まる三吉野の、神風あらばおのづから、名こそ嵐の山なりとも、下歌地謡「花はよも散らじ、風にも勝手木守とて、夫婦の神は我ぞかし。音高や嵐山、人にな知らせ給ひそ。

上歌笙の岩屋の松風は、笙の岩屋の松風は、實相の花ざかり、開くる法の聲たてゝ、今は嵐の山櫻、夏箕の川の水清く、眞如の月の澄める世に、五濁の濁ありとても、流れは大井川、其水上はよも盡きじ。いざ／＼花を守らうよ。いざ／＼花を守らうよ。春の風は空に滿ちて、春の風は空に滿ちて、庭前の木を切るとも、神風にて吹きかへさば、妄

木守—もと水神にて水分と書きてみくまりと稱へ後みこもりと訛り略してこもりといふに至れり

勝手—木守と共に吉野に鎮坐せる神

さしもこそ—新千載集の歌下句花の所といかでなりけん

笙の岩屋—吉野山の奥

夏箕の川—吉野川の上流

花は雲かと―古今集の序に春の朝吉野山の櫻は人丸が心には雲かとのみなむ覺えけるとあり

戸無瀬―大井川の早瀬

には、げにも嵐の山櫻、げにも嵐の山櫻、千本の種はそれぞとて、尋ねて今ぞ三吉野の、花は雲かと詠めける、その歌人の名殘ぞと、よそ目になれば猶しもの、詠め妙なるけしきかな。詠め妙なるけしきかな。ワキ詞「急ぎ候程に、是ははや嵐山に著きて候。心靜に花を詠めうずるにて候。

シテ、ツレ一聲謠「花守の、住むや嵐の山櫻、雲も上なき梢かな。ツレ謠「千本に咲ける種なれや、

シテ、ツレ謠「春も久しきけしきかな。シテ、サシ謠「是はこの嵐山の花を守る、夫婦の者にて候なり。

シテ、ツレ謠「夫れ圓滿十里の外なれば、花見の御幸なきまゝに、名におふ吉野の山櫻、千本の花の種とりて、この嵐山に植ゑ置かれ、後の世までの例とかや。是とても君の惠かな。

下歌「げに頼もしや御影山、治まる御代の春の空、上歌「さも妙なれや九重の、さも妙なれや九重の、内外に通ふ花車、轅も西にめぐる日の、影ゆく雲の嵐山、戸無瀬に落つる白波も、散るかと見ゆる花の瀧、盛久き氣色かな。盛久氣色かな。

ワキ詞「不思議やな是なる老人を見れば、花に向ひ渇仰のけしき見えたり。御ことは如何な

外三

嵐山

梗概

嵐山は吉野山の櫻を移したるなり。その春景色を見て參れとの仰せ畏みて、勅使參向あり。こゝに木守勝手神、竝びに一體分身の藏王權現の顯れ給ふ事を作る。以て神木の來歷を說き、御代を祝ふ意をよせたり。(脇能)

前シテ　翁　　シテツレ嫗　　後シテ　藏王權現
ツレ　木守神　　ツレ　勝手神　　ワキ　勅使

ワキ三人 次第謠「吉野の花の種とりし、吉野の花の種とりし、嵐の山に急がん。ワキ詞「抑〻是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州吉野の千本の櫻は、聞召し及ばれたる名花なれども、圓滿十里の外なれば、花見の御幸かなひ給はず、さるにより千本の櫻を嵐山にうつしおかれて候間、この春の花を見て參れとの宣旨を蒙り、只今嵐山へと急ぎ候。ワキ三人 道行謠「都

吉野の花の種とりし—龜山天皇の時吉野の櫻を移植す
千本—一目千本のこと
圓滿十里—都のこと

上帶―鎧の上に結ぶ帶

信樂笠―信樂といふ地の名産の笠を著て世を忍ぶ意

此松が根に伏し給ひ、御枕のほどに御小袖、肌の守を置き給ふを、巴泣く〳〵賜はりて、死骸に御暇申しつゝ、行けども悲や行きやらぬ、君の名殘を如何にせん、とは思もへどくれ〴〵の、御遺言の悲さに、粟津の汀に立ち寄り、上帶切り、物具心靜に脱ぎ置き、梨打烏帽子同じく、かしこに脱ぎ捨て、御小袖を引きかづき、其際までの佩添の小太刀を、衣に引き隱し、所はこゝぞ近江なる、信樂笠を木曾の里に、涙と巴はただひとり、落ち行きしうしろめたさの、執心を弔ひて給び給へ。執心を弔ひて給び給へ。

乘替—副馬

枕をたゝんで—枕を並べて斃るること

てども、引く方も渚の濱なり、前後を忘じて控へたまへり。こは如何にあさましや。かかりし處に、自ら駈けよせて見奉れば、重手は負ひ給ひぬ、乘替に召させ參らせ、この松原に御供し、はや御自害候へ、巴もともと申せば、其時義仲の仰せには、汝は女なり、忍ぶ便も有るべし、是なる守小袖を、木曾に届けよこの旨を、背かば主從、三世の契り絶えはて、永く不興とのたまへば、巴はともかくも、涙にむせぶばかりなり。

地謠「かくて御前を立ち上り、見れば敵の大勢、あれは巴か女武者、餘すな漏らすなと、敵手繁くかゝれば、今は引くとも遁るまじ、いで一軍うれしやと、巴少しも騷がず、わざと敵を近くなさんと、長刀を引きそばめ、少し恐るゝけしきなれば、敵は得たりと切つて懸かれば、長刀柄ながくおつ取りのべて、四方を拂ふ八方拂ひ、一所に當るを木の葉返し、嵐も落つるや花の瀧波、枕をたゝんで戰ひければ、皆一方に切り立てられて、跡も遙に見えざりけり。跡も遙に見えざりけり。

シテ謠「今は是までなりと、地謠「立歸り我君を、見奉れば痛はしや、はや御自害候ひて、

粟津の汀—粟津に泡を掛く

信濃を出で—治承四年のこと

礪波山—加賀越前の境

倶利伽羅—同山の南の谷

志保—加賀能登の境

猶し—なををしと謠ふ名をしかとも云ふ

運槻弓—盡を槻に掛く

順緣—偶然ならぬ緣

さよ。シテ詞「なか〳〵に巴と言ひし女武者、女とて御最期に、召しそせざりしその恨み、ワキ謠「執心殘つて今までも、シテ謠「君邊に仕へ申せども、ワキ謠「恨みはなほも、シテ謠「荒磯海の、地謠「粟津の汀にて、波の討死末までも、御供申すべかりしを、女とて御最期に、捨てられ參らせし恨めしや。身は恩のため、命は義による理、誰か白眞弓取の身の、最期に臨んで、功名を惜まぬ者やある。クセ さても義仲の、信濃を出でさせ給ひしは、五萬餘騎の御勢、鑣を竝べ攻め上る。礪波山や倶利伽羅、志保の合戰に於ても、分捕高名の其數、誰に面を越され、誰に劣る振舞の、なき世がたりに、猶し思ふ心かな。シテ謠「されども時刻の到來、地謠「運槻弓の引く方も、渚に寄する粟津野の、草の露霜と消え給ふ、所はこゝぞ御僧達、同所の人なれば、順緣に訪はせたまへや。ロンギ さてこの原の合戰にて、討たれ給ひし義仲の、最期を語りおはしませ。シテ謠「頃は正月の空なれば、地謠「雪はむら消えに殘るを、たゞ通路と汀をさして、駒をしるべに落ち給ふが、薄氷の深田に駈け込み、弓手も馬手も鐙は沈んで、下り立たん便りもなくて、手綱にすがつて鞭を打

はつか—草の葉といふより續くはつかの意

直道—人間は非常の草木と異なりて直接に經文を聽き得るを以て云ふ

有明月の義仲の、佛と現じ神となり、世を守り給へる、誓ぞ有難かりける。旅人も一樹の陰、他生の縁と思召し、この松が根に旅居し、夜もすがら經を讀誦して、五衰を慰め給ふべし。有難き値遇かな。實に有難き値遇かな。さる程に、暮れて行く日も山の端に、入相の鐘の音の、浦わの波に響きつゝ、いづれも物すごきをりふしに、我も亡者の來りたり。其名をいづれとも知らずはこの里人に、問はせ給へと夕暮の、草のはつかに入りにけり。草のはつかに入りにけり。（中入）

ワキ上歌謠「露を片敷く草枕、露を片敷く草枕、日も暮れ夜にもなりしかば、粟津が原の哀れ世の、なき影いざや弔はん。なき影いざや弔はん。後シテ一聲謠「落花空しきを知る、流水心無うしておのづから、澄める心はたらちねの　地謠「罪も報いも因果の苦しみ、今は浮まん御法の功力に、草木國土も成佛なれば、況んや生ある直道の弔ひ、彼是いづれも頼もしや。頼もしやあら有難や。

ワキ謠「不思議やな粟津が原の草枕を、見れば有りつる女性なるが、甲冑を帶する不思議

行教和尚―清和の朝大安寺の僧

誓を示し―國家鎭護のため鎭座あること

も頼もしや。ワキ詞「不思議やな是なる女性の神に參り、涙を流し給ふ事、返す〴〵も不審にこそ候へ。シテ詞「御僧は自が事を仰せ候か。ワキ詞「さん候神に參り涙を流し給ふ事を不審申して候。シテ詞「おろかと不審し給ふや。傳へ聞く行教和尚は、宇佐八幡に詣で給ひ、一首の歌に曰く 謠 何事のおはしますとは知らねども、詞 忝さに涙こぼるゝと、かやうに詠じ給ひしかば、神もあはれとや思召されけん、御衣の袂に御影をうつし、それより都男山に誓を示し給ひ、謠 國土安全を守り給ふ。おろかと不審し給ふぞや。ワキ謠「やさしやな女性なれどもこの里の、都に近き住ひとて、名にし負ひたるやさしさよ。シテ詞「さて〳〵御僧の住みたまふ、在所は何處の國やらん。ワキ詞「是は信濃國木曾の山家の者にて候。シテ詞「木曾の山家の人ならば、粟津が原の神の御名を、問はずは如何で知り給ふべき。是こそ御身の住み給ふ、木曾義仲の御在所、同じく神と齋はれ給ふ、拜み給へや旅人よ。ワキ謠「不思議やさては義仲の、神と現れこの所に、いまし給ふは有難さよと、神前に向ひ手を合はせ、地謠「古の、是こそ君よ名は今も、是こそ君よ名は今も、

巴

概梗

木曾の山里より出でたる僧、江州粟津に到りて、木曾義仲の跡を弔ふに、巴御前の幽靈現れて、ありし世の軍物語をなす事を作る。（二番目）

シテ　巴（前は里女）　ワキ　僧

ワキ　次第謠「行けば深山も麻裳よい、行けば深山も麻裳よい、木曾路の旅に出でうよ。詞「是は木曾の山家より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、此度思立ち都に上り候。道行謠「旅衣、木曾の御坂を遙々と、木曾の御坂を遙々と、思立つ日も美濃尾張、定めぬ宿の暮毎に、夜を重ねつゝ日を添へて、行けば程なく近江路や、鳰の海とは是かとよ。鳰の海とは是かとよ。詞「急ぎ候程に、江州粟津の原とやらんに著きて候。この所に暫く休らはばやと思ひ候。

シテ、サシ謠「おもしろや鳰の浦波靜なる、粟津の原の松陰に、神を齋ふや政事、實に神感

麻裳よい—著るといふ意にて木曾の枕詞とす

鳰の海—琵琶湖のこと

みやびたる―嫺寵たる

大童―さばけ髪をかぶりたること

花は根に―千載集に「花は根に鳥は古巣に歸る也春のとまりを知る人ぞなき」

ワキ謡「山も震動。シテ謡」海も鳴り、ワキ謡「雷火も亂れ、シテ謡「惡風の、地謡「紅烟の旗を靡かし、紅烟の旗を靡かして、閻浮に歸る生田川の、波を立て水を返し、山里海川も、皆修羅道の巷となりぬ。こは如何にあさましや。

シテ謡「暫く心を靜めて見れば、地謡「心を靜めて見れば、所は生田なりけり。時も昔の春の、梅の花盛りなり。一枝手折りて箙にさせば、もとよりみやびたる若武者に、相逢ふ若木の花鬘、懸くれば箙の花も源太も、我さきがけんさきがけんとの、心の花も梅も、散りかゝつて面白や。敵の兵之を見て、あつぱれ敵よ遁すなとて、八騎が中に取り籠めらるれば、シテ謡「冑も打ち落されて、地謡「大童の姿となつて、シテ謡「郎等三騎に後を合はせ、地謡「向ふ者をば、シテ謡「拜み打ち、地謡「又廻り合へば、シテ謡「車斬、地謡「蜘蛛手掛繩十文字、鶴翼飛行の祕術を盡すと見えつる内に、夢覺めて、しら〳〵と夜も明くれば、是までなりや旅人よ、暇申して花は根に、鳥は古巣に歸る夢の、鳥は古巣に歸るなり。よくよく弔ひて給び給へ。

うば玉の云々―古今集小町の歌に「いとせめて戀しき時はうば玉の夜の衣を返してぞ寢る」とあるを夢を見る縁に引く

涿鹿―黄帝蚩尤と戰ひし地

とてぞ失せにける。（中入）

ワキ上歌謡「うば玉の、夜の衣を返しつゝ、夜の衣を返しつゝ、更け行くまゝに生田川、水音も澄む夜もすがら、花の木陰に臥しにけり。花の木陰に臥しにけり。

後シテ一聲謡「魂は陽に歸り魄は陰に殘る。執心却來の修羅の妄執、去つて生田の名にしおへり。地謡「血は涿鹿の河となり、シテ謡「紅波楯を流しつゝ、地謡「白刃骨を碎く苦しみ、月をも日をも手に取る影かや、長夜のやみ〳〵と眼もくらみ、心も亂るゝ修羅道の苦しみ、御覽ぜよ。

ワキ謡「不思議やなそのさまいまだ若武者の、胡籙に梅花の枝をさし、さも華やかに見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。シテ謡「今は何をか包むべき、是は源太景季、他生の緣の一樹の陰に、夢中の對面向顏をなす、御身貴き人なれば、法味を得んと魄靈の、魂に移りて來りたり、跡弔ひ給へといはんとすれば、又瞋恚の敵の責。あれ御覽ぜよ御聖。

ワキ謡「實に〳〵見れば恐ろしや、劍は雨と降りかゝつて、シテ謡「天地をかへす如くにて、

生田のおのづから―生田の小野といふ語をもて續く
一華開天下春―大集經の語
魚鱗鶴翼―軍陣の法
天の鳥船―舟の古名
夕草の―夕月のとあるに從ふべきか
鶯宿梅―上卷東北を見よ

とに、生田のおのづから盛りを得て、かつ色見する梅が枝、一花開けては天下の春よと、軍の門出を祝ふ、心の花もさきがけぬ。さる程に身方の勢、六萬餘騎を二手に分けて、範賴義經の追手搦手の、海山かけて須磨の浦、四方を圍みて押し寄する。シテ謠「魚鱗鶴翼もかくばかり、地謠「後の山松にむれゐるは、殘りの雪の白妙に、ねぐらを立たん眞鶴の、翼を連ぬるその氣色、雲にたぐへて夥し。浦には海人樣々の、漁夫の船影數見えて、漁たく火もかげろふや、嵐も波も須磨の浦、野にも山にも漕ぎ寄する、兵船はさながら、天の鳥船もかくやらん。

ロンギ地謠「はや夕ばえの梅の花、月になり行く假枕、一夜の宿を貸し給へ。シテ謠「我は宿りも白雪の、花の主と思召さば、下臥に待ち給へ。地謠「花の主と思へとは、御身如何なる人やらん。シテ謠「今は何をか包むべき、我は此世に亡き影の、地謠「跡弔はれんと夕草の、シテ謠「その景季が幽靈なり。地謠「御身他生の緣ありて、一樹の陰の花の緣に、鶯宿梅の木の本に、宿らせ給へ我は又、世を鶯のねぐらは、この花よとて失せにけり。この花よ

室山―源行家平家と戰ひし地
水島―源義仲平家と戰ひし地

とより―明石の門といふ語をかく續く

ばとて、箙の梅とは申すなり。ワキ謠「實にや名將の古跡と云ひ名木と云ひ、名殘盡きせぬ年々に、シテ詞「降るは程なき春雨の、古きに歸る名を聞けば、ワキ謠「その景季の盛りなりし、シテ詞「若木の花の白眞弓、ワキ謠「箙の梅の、シテ謠「今までも、上歌地謠「名を留めし、主は花の景季の、主は花の景季の、末の世かけて生田川の、身を捨ててこそ、名は久けれ武士の、やたけ心の花に引く、弓筆の名こそ妙なれや。弓筆の名こそ妙なれ。

クリ地謠「さるほどに平家は去年播磨の室山、備中の水島二箇度の合戰に打ち勝つて、山陽道南海道、あはせて十四箇國の兵、都合十萬餘騎、津の國一の谷にぞ籠りける。

シテ、サシ謠「東は生田の森、西は一の谷を限つてその間三里が程は、滿ち／＼たり。

地謠「浦々には數千艘の船を浮め、陸には赤旗いくらも立てならべ、春風に靡き天に飜る有樣、猛火雲を燒くかと見えたり。シテ謠「總じてこの城の前は海後は山、地謠「左は須磨右は明石の、とよりかくより行きかふ舟の、共音の千鳥も聲々なり。クセ時しも如月、上旬の空の事なれば、須磨の若木の櫻も、まだ咲きかぬる薄雪の、さえかへる波こゝも

無常も亦悟り次第にて常住なりとの意
無非中道—悟るに非ず迷ふに非ざる人
夢の直路—直路は通路
箙の梅—生田神社の境内に之を傳ふ

葉の無常は又、常住不滅の榮をなし、一色一香の緣生は、無非中道の眼に應す。人間個個、緣生の觀念、猶以て到り難し。あら定めなの身命やな。下歌人間有爲の轉變は、眼子の中に顯れて、閻浮に歸る妄執の、閻浮に歸る妄執の、其生死の海なれや、生田の川の幾世まで、夢の巷に迷ふらん。よしとても身の行くへ、定めありとても終には、夢の直路に歸らん。夢の直路に歸らん。

ワキ詞「如何に申すべき事の候。是なる梅は名木にて候か。シテ詞「さん候是は箙の梅と申し候。ワキ詞「あら面白や箙の梅とは、いつの代よりの名木にて候ぞ。シテ詞「いや名木程の事は候はねども、只私に申しならはしたる異名にて候。ワキ詞「よし〳〵私に名附たる異名なりとも、委く御物語候へ。シテ詞「そも〳〵此生田の森は、平家十萬餘騎の追手なりしに、源氏の方に梶原平三景時、同じき源太景季、色ことなる梅花の有りしを、一枝折つて箙にさす。この花すなはち笠印となりて、氣色あらはに著く、功名人に勝れしかば、景季かへつてこの花を禮し、謡すなはち八幡の神木と敬せしより此方、名將の古跡の花なれ

箙

梗概

攝津の國生田の森に、箙の梅とて名木あり。之は元暦元年生田の森の戰に、範頼の軍なる梶原景季、その一枝を折りて箙にさし、功名を得し名殘なり。旅僧其跡を訪れ、夢の内に景季の幽靈に逢ひて、軍物語を聽く事を作る。祝言能として用ゐる。（二番目）

シテ　景季（前は男）　ワキ　僧　ワキツレ　從僧

ワキ、ワキツレ二人次第謠「春を心のしるべにて、春を心のしるべにて、憂からぬ旅に出でうよ。ワキ詞「是は西國方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、此度都に上り洛陽一見と志し候。道行三人謠「旅心、筑紫の海の船出して、筑紫の海の船出して、八重の潮路を遙々と、分けこし方の雲の波、煙も見えし松原の、里の名問へば須磨の浦、生田の川に著きにけり。生田の川に著きにけり。

シテ次第謠「來る年の矢の生田川、來る年の矢の生田川、流れて早き月日かな。サシ「飛花落

飛花落葉云々―

背レ燭共憐深夜月—白樂天の詩句

紅波—血のこと

姿、はや人々に見えけるぞや。謠 あの燈火を消し給へとよ。地謠「燈火を背けては、燈火を背けては、共にあはれむ深夜の月をも、手に取るや帝釋修羅の、戰ひは火を散らして、瞋恚の猛火は雨となつて、身にかゝれば、拂ふ劍は他を惱まし、我と身を切る、紅波はかへつて猛火となれば、身を燒く苦患はづかしや、人には見えじものを、あの燈火を消さんとて、其身は愚人夏の蟲の、火を消さんと飛び入りて、嵐と共に燈火を吹き消して、暗まぎれより、魄靈は失せにけり。魄靈の影は失せにけり。

大絃云々—白氏文集琵琶行の語
第一第二云々—同集五絃彈の句
一聲鳳管秋驚秦嶺之雲—朗詠集の句
衣笠山—仁和寺の北にあり

手向の琵琶を調ぶれば、ワキ謠「時しも頃は夜半樂、眠を覺ますをりふしに、シテ詞「不思議や晴れたる空かき曇り、俄に降りくる雨の音、ワキ謠「しきりに草木を拂ひつゝ、時の調子も如何ならん。シテ謠「いや雨にてはなかりけり。あれ御覽ぜよ雲の端の、地謠「月に雙の岡の松の、葉風は吹き落ちて、村雨の如くにおとづれたり。おもしろや折からなりけり、大絃は嘈々として村雨の如しさて、小絃は切々として、私語に異ならず。クセ第一第二の絃は、索々として秋の風、松を拂つて疎韻落つ。第三第四の絃は、冷々として夜の鶴の、子を思うて籠の内に鳴く、鷄も心して、夜遊の別れとゞめよ。シテ謠「一聲の鳳管は、地謠「秋秦嶺の雲を動かせば、鳳凰も是にめでて、梧竹に飛び下りて、翅を連ねて舞遊べば、律呂の聲々に、心聲に發す、聲あやをなす事も、昔を返す舞の袖、衣笠山も近かりき、おもしろの夜遊や、あらおもしろの夜遊や。あら名殘惜しの夜遊やな。

シテ詞「あら恨めしやたま〳〵閻浮の夜遊に歸り、心をのぶるをりふしに、謠「又瞋恚の起る恨めしや。ワキ謠「さきに見えつる人影の、なほ顯はるゝは經政か。シテ詞「あら恥かしや我

吳竹の云々―經政仁和寺の宮に御暇乞に詣でしに宮の御歌下されしに答へて「吳竹の筧の水はかはれども尙住み飽かぬ宮の内かな」とよめり

面をさらす―名を知らるゝこと

心に洩るゝ花―經政風懷に入らぬ花もなし

ものを、實にや吳竹の、筧の水はかはるとも、住み飽かざりし宮の內、幻に參りたり。夢幻に參りたり。

ワキ詞「不思議やな經政の幽靈形は消え聲は殘つて、猶も詞をかはしけるぞや。謠よし夢なりとも現なりとも、法事の功力成就して、亡者に言葉をかはす事よ。あら不思議の事やな。シテ詞「我若年の昔より宮の內に參り、世上に面をさらす事も、偏に君の御恩德なり。謠中にも手向け下さるゝ、靑山の御琵琶、娑婆にての御許されを蒙り、常は手馴れし四つの緒に、下歌地謠「今も引かるゝ心故、聞きしに似たる撥音の、是ぞ正しく、妙音の誓なるべし。上歌されば彼の經政は、されば彼の經政は、いまだ若年の昔より、外には仁義禮智信の、五常を守りつゝ、內には又花鳥風月、詩歌管絃を專とし、春秋を松陰の、草の露水のあはれ世の、心に洩るゝ花もなし。心に洩るゝ花もなし。

ワキ詞「亡者のためには何よりも、娑婆にて手馴れし靑山の琵琶、おのおの樂器を調へて、謠糸竹の手向をすゝむれば、シテ詞「亡者も立ちより燈火の影に、人には見えぬ者ながら、

風吹二枯木一晴天雨月照二平砂一夏夜霜─白樂天の詩句朗詠集に見ゆ

弔ひ給ふ有難さよ。地謠「ことに又、かの青山と云ふ琵琶を、かの青山と云ふ琵琶を、亡者のために手向けつゝ、同じく糸竹の、聲も佛事をなし添へて、日々夜々の法の門、貴賤の道も普しや。貴賤の道も普しや。

シテ、サシ謠「風枯木を吹けば晴天の雨、月平沙を照らせば夏の夜の、霜の起居も安からで、假に見えつる草の陰、露の身ながら消え殘る、妄執の緣こそつたなけれ。

ワキ謠「不思議やな早深更になるまゝに、夜の燈火かすかなる、光の内に人影の、有るか無きかに見え給ふは、如何なる人にてましますぞ。シテ詞「我經政が幽靈なるが、御弔ひの有難さに、是まで現れ來りたり。ワキ謠「そも經政の幽靈と、答ふるかたを見んとすれば、又消え〳〵と形もなくて、シテ謠「聲は幽かに絕えのこつて、ワキ謠「まさしく見えつる人影の、シテ謠「有るかと見れば、ワキ謠「又見えもせで、シテ謠「有るか、ワキ謠「無きかに、シテ謠「かげろふの、地謠「幻の、常なき身とて經政の、常なき身とて經政の、もとの浮世に歸り來て、それとは名のれどもその主の、形は見えぬ妄執の、生をこそ隔つれども、我は人を見る

經政

梗　概

但馬守平經政は經盛の子也。琵琶の上手にて、仁和寺の守覺法親王より、青山といふ琵琶をたまはりて祕藏せしが、都落の時之を返上して、其身は討死せり。此曲は經政追善のため管絃講を催されしに、經政の靈現れ出づる事を作る。

（二番目）

シテ　平經政　　ワキ　僧都行慶

ワキ詞「是は仁和寺御室に仕へ申す、僧都行慶にて候。さても平家の一門但馬守經政は、いまだ童形の時より、君御寵愛なのめならず候、然るに今度西海の合戰に討たれ給ひて候。又青山と申す御琵琶は、經政存生の時より預け下されて候、彼の御琵琶を佛前にすゑ置き、管絃講にて弔ひ申せとの御事にて候ほどに、役者をあつめ候。サシ謠「實にや一樹の陰に宿り、一河の流れを汲む事も、皆これ他生の緣ぞかし。ましてや多年の御値遇、惠を深くかけまくも、忝くも宮中にて、法事をなして夜もすがら、平の經政成等正覺と、

仁和寺—仁和年中光孝天皇の建立し給ひし寺宇多法皇入り給ひしかば御室の名あり

童形—元服以前

管絃講—音樂を催して法事を營むこと

役者—笛笙琵琶等夫々の役

百八―煩惱の多き數をいふ數珠の玉の數を之に象どる

枝より、木の實を振ひ落して、彼尊性に與へつゝ、これこそ思の玉を貫く、數は百八煩惱の、數は百八煩惱を、かたどる數珠の、道明寺の鐘、鼓に神樂の夢は覺めにけり。

缶—酒壺の如き物にて拍子をうつ樂器

韓神—神樂歌の一つ

笏拍子—笏を二つに割りたる物拍子をうつに用ゐる

七德—樂名

舞樂の役々とり〴〵に、琵琶琴和琴笛竹の、夜は更け行けども缶の役者、などや遲きぞ白太夫、急いで出でよと待ち給ふ。

後シテ謠「月もかゝやく宮寺の、常の燈明々たり。天女謠「如何に白太夫の神、七社の御前に韓神催馬樂、うたふや缶笏拍子の。役とは知らずや白太夫。シテ詞「仰せは重く候へども、既に名にだに白太夫が、星霜積る老が身の、謠役をば免し給ふべし。天女謠「いやとよその役定りたり、謠急いで役をなすべきなり。シテ詞「さては辭すとも叶ふまじ。謠さてその役は、天女謠「韓神催馬樂、シテ謠「庭火の影や、天女謠「朱の玉垣、地謠「かゝやけるその中に、かゝやけるその中に、白太夫が小忌の袖より、取るや笏拍子とう〳〵と、打つも寄るも老の波の、雪の白太夫が缶の、笏拍子は面白や。（樂）シテ謠「只今かなづる舞歌の曲、地謠「只今かなづる舞歌の曲、七德雙調七拍子、膝を屈して佛を敬ひ、さす腕には魔緣を拂ひ、をさむる手には壽福を招き、千秋樂には民を養ひ、萬歲樂には命を延ぶる、法の筵を敷妙の、枕は袂、上は尊き木槵樹の、梢に翔りて降るや一味の雨風を、そゝぎて枝

あたりは云々—菅公宰府にての詩に都府樓看二瓦色一觀音寺唯聽二鐘聲一離レ家三四月落涙百千行萬事皆如レ夢時々期二彼蒼一—菅公彼地にての詠彼蒼を期すとは運を天に任する意

白太夫—天神の攝社に祭る、もとは菅公在世の時睦しかりし伊勢の神主度會春彦の靈

はせ給ひしかば、あたりは都府樓の瓦、觀音寺の鐘の聲、明暮に響く折々は、都の春秋を、思召し出でぬ時はなし。シテ謠「家をはなれて三四月、地謠「落つる涙は百千行、萬事は皆夢の如し、より〳〵彼蒼を期すといふ、その御心の至りにや、昨日は北闕に悲しみを被むる士たり、今日は西都に恥を淸むる屍たりと、御神感あらたに、生きての恨み死しての悦び、普しや天滿、陽感ぞめでたかりける。

ロンギ地謠「實に有難や草も木も、實に有難や草も木も、皆成佛の木の實まで、玉を連ぬる光かな。シテ謠「枯れたる木にだにも、誓の花は咲くぞかし。ましてや面前木槵樹、花咲き實なる御覽ぜよ。地謠「實にや花咲き實なるなる、梢の色もあらたにて、シテ謠「法を稱ふる理を、地謠「思の玉の、シテ謠「おのづから、地謠「あの梢の木の實こそ、この數珠の御法なれ、必ず授け申さんとて、歸ると見れば立ち止りて、我は天神の御使、名をば誰とか白太夫の、神と申す翁草の、霜曇りしてげりや。霜曇りに失せにけり。（中入）

地謠「久堅の、天の岩戸の神遊び、今思ひ出も面白や。（天女舞）地謠「舞樂の役々とり〴〵に、

昔在靈山云々—南岳大師の語

後五—佛滅後五百年を五返りせる最後の五百年

西都—太宰府の意

君が住む—菅公筑紫に下らるゝをりの歌末句拾遺集にはかへりみしはや、大鏡にはかへりみし哉とあり

たての聖の仰やな。今に始めぬ天神の、彌陀一體の御値遇、天神と申すに其御本地、救世觀音にてましますぞや。ワキ謠「實に〳〵是は理なり。昔在靈山名法華、シテ謠「今在西方名阿彌陀、ワキ謠「娑婆示現觀世音、シテ謠「三世利益同一體。ワキ謠「その外神や、シテ謠「佛とは、上歌地謠「只是れ水波の隔てにて、神佛一如なる寺の名の、道明らかに曇らぬ神の宮寺ぞ尊き。有難し〳〵、實に神力も佛說も、同じ和光の影に來て、拜むぞ尊かりける、拜むぞ尊かりける。

クリ地謠「それ佛の昔 神の今、後五の時代に至るまで、神も濁世に應じ給ひて、暫く西都に移り給ふ。シテ、サシ謠「如月下の五日にして、都を出でさ給ひせつゝ、地謠「此土師の里に旅宿あつて、樣々の御神物をとゞめ、末代値遇の御結緣、今に絕ゆることとなし。シテ謠「かくても留まらぬ道のべの、地謠「草葉の露もしをるゝばかり。クセ君が住む、宿の梢を行く〳〵も、隱るゝまでに、かへり見ぞするとの御ながめ、さこそと知るぞかたじけなき。さてもいつしかに、ならはせ給はぬ旅の空、名におふ心筑紫とて、天ざかる鄙の國に、住ま

香の衣―香染とて淡紅に黃色を帶びたる色合の衣

七社―日吉山王の七社

五部の大乘經―華嚴大集般若法華涅槃の五部の經

相摸國田代と申す所に、尊性と申す聖にて候が、我念佛往生の志有るにより、此度信濃國善光寺へ參り、一七日參籠申す處に、如來御厨子の御戸を開き香の衣に香の袈裟かけ給ひたる老僧の、あらたなる御聲にて、汝念佛往生の志眞に懇なり、然らば五畿內河內の國土師寺は、天神の御在所なり、彼の所に神明を始め奉り、七社の神々を勸請申されたり、又天神は一切衆生現當二世のために、五部の大乘經を書き供養して埋まれたり、其軸より木槵樹の木生ひ出でたり、其木の實を取り數珠とし、念佛百萬遍申さば、往生疑ひあるまじきと承つて夢覺めぬ、なんぼう有難き御夢想候ぞ。

シテ詞「かゝる有難き御事こそ候はね。やがて寺中の人々に觸れ申し候べし。まづ只今仰せられ候ふ木槵樹を見せ申し候べし。此方へ御出で候へ。ワキ詞「さらばやがて御供申し候べし。シテ詞「是に神明を始め奉り、七社の神々をいはひ申され候、又此方なるは天神にて御座候。あれに見えたるこそ、只今御物語り候木槵樹にて候。よく／＼御拜み候へ。

ワキ詞「有難や神も佛も同一體とは申せども、天神同意の御結緣今始めて承り候。ツレ詞「う

土師—紅葉の櫨と掛く

天滿神—菅公の神號

宮寺—道明寺は十一面觀音を本尊として天滿宮を祀る故に宮を兼ねたる寺の意

十かへり—百年の十返り千年のこと

シテ、ツレ一聲謠「長月の、色も梢の秋を得て、照るや紅葉の土師の里、ツレ謠「猶晴れ殘る音とてや、シテ、ツレ謠「松風ひとり時雨るらん。シテ、サシ謠「これに出たる老人は、この里名も土師寺の、佛神に仕へ申す者なり。シテ、ツレ謠「有難や利生はさま〲多けれども、わきて誓も影高き、天滿神の宮寺に、歩みを運ぶ御値遇、實に身を知れば心なき、我等がためは賴もしや。下歌いざや歩を運ばん。いざや歩を運ばん。上歌神さぶる、松は十かへり千代の秋」松は十かへり千代の秋、霜を重ねて下草の、露の身ながらながらへて、神に仕へ奉る、宮路久しき瑞籬の、深き誓は有難や。深き誓は有難や。

ワキ詞「如何に是なる宮人に申すべきことの候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「是は善光寺の如來の御夢想により、遙々當寺に參りて候。寺中の人に逢ひ申し、御夢想の樣を語り申したく候。シテ詞「不思議なる事を承り候ものかな、まづ御夢想の樣を此老人に御物語り候へ。某承つて寺中の人々へ廣め申し候べし。ワキ詞「あら嬉しや候。さらば委しく申し候べし、寺中の人々に御廣め候へ。シテ詞「心得申し候。ワキ詞「是は

道明寺

梗概

尊性といふ聖、善光寺に籠りて靈夢を受け、河内の道明寺に参詣す。白太夫神及び天女出現して、天満宮の神徳を語り、舞樂を奏する事を作る。(脇能)

シテ　白太夫神(前は宮人)　ツレ　天女(前は宮人)

ワキ　尊性　ワキツレ　従僧二人

善き光ぞと—善光寺の名に因む

土師寺—道明寺の一名

ワキ、ワキツレ二人 次第謡「善き光ぞと名を聞くや、善き光ぞと名を聞くや、佛の御寺なるらん。ワキ詞「かやうに候者は、相摸國田代と申す所に、尊性と申す者にて候。我善光寺の如來に一七日参籠申して候へば、あらたに御靈夢を蒙りて候程に、是より河内國土師寺へ参らばやと思ひ候。ワキ、ワキツレ二人 道行謡「捨てゝ早、久かりつる世の中を、久かりつる世の中を、又思ひ立つ旅衣、昨日の山を跡に見て、猶行く方は白雲の、海も見えたる西の空、夕日隠れの霧間より、流れも是や河内なる、土師の里にも著きにけり。土師の里にも著きにけり、

の衣なるらん。シテ謠「いろ〳〵の捧物、地謠「いろ〳〵の捧物の、中に妙に見えたるは、西王母の其姿、光庭宇をかゞやかし、黄錦の御衣を著し、シテ謠「劒を腰に提げ、地謠「劒を腰に提げ、眞纓の冠を著、玉觴に盛れる桃を、侍女が手より取りかはし、シテ謠「君に捧ぐる桃實の、地謠「花の盃取りあへず。（天女舞）花も醉へるや盃の、花も醉へるや盃の、手まづさへぎる曲水の宴かや、御溝の水に、戯れ戯るゝ手弱女の、袖も裳裾もたなびきたなびく、雲の花鳥春風に和しつゝ、雲路に移れば、王母も伴ひ攀ぢ上る、王母も伴なひ攀ぢ上るや天路の、行方も知らずぞなりにける。

曲水の宴—三月上巳の御遊

三千年に—拾遺集の歌末句あひにけるかな

花のみ—實に身を掛く

理王—仙人の名

迦陵頻伽—天上極樂の鳥

の園の桃が、シテ謠「なかく\にそれとも今は物いはじ、ワキ謠「さればこそそれぞ殊更名におふ花の、シテ謠「桃李言はず、ワキ謠「春いくばくの年月を、シテ謠「送り迎へて、ワキ謠「この春は、地謠「三千年に、なるてふ桃の今年より、なるてふ桃の今年より。花咲く春に逢ふ事も、只これ君の四方の惠、あつき國土の千々の種、桃花の色ぞ妙なる。

ロンギ地謠「さては不思議や久堅の、天つ少女の日のあたり、姿を見るぞ不思議なる。シテ謠「疑ひの、心な置きそ露の間に、宿るか袖の月の影、雲の上までその惠、普き色にうつりきぬ。地謠「うつろふ物は世の中の、人の心の花ならぬ、シテ謠「身は天上の、地謠「樂みに、明けぬ暮れぬと送り迎ふ、年は經れど限もなき、身の程も隔なく、眞は我こそ西王母の、分身よまづ歸りて、花のみをも顯はさんと、天にぞ上りける。天にぞ上り給ひける。(中入)

上歌ワキ謠「糸竹呂律の聲々に、糸竹呂律の聲々に、調をなして音樂の聲すみ渡る天つ風、雲の通路心せよ。雲の通路心せよ。地謠「面白や、面白やかゝる天仙理王の、來臨なれば數々の、孔雀鳳凰伽陵頻伽、飛び廻り聲々に、立ち舞ふや袖の羽風、天つ空の衣ならん。天

論語に北辰居其所衆星共之

喜見城―帝釋天の居所

桃李言はず―史記李廣傳の贊の語

靈山會場―釋迦如來の說法せし所但下自ら蹊をなす

にむらがりて、市をなし、金銀珠玉光を交へ、光明赫奕として、日夜の勝劣見えざりけり。かゝるためしは喜見城、その樂みも如何ならん。その樂みも如何ならん。

シテ、ツレ 一聲謠「桃李もの言はず、下おのづから市をなし、貴賤交はり隙もなし。シテ、サシ謠「面白や四季折々の時を得て、草木國土おのづから、シテ、ツレ 謠「皆これ眞如の花の色香、妙なる法の三つの心、潤ふ時や至りけん、三千年に咲く、花心の、をり知る春のかざしとかや。

下歌 いざや君に捧げん。いざ〳〵君にさゝげん。上歌 すべらぎの、その御心は普くて、その御心は普くて、隙行く駒の法の道、千里の外まで上もなき、道にいたりて明けき、靈山會場の法の場、廣き敎の眞ある、君々たれば誰とても、勇みある世の心かな。勇みある世の心かな。

シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候。ワキ詞「奏聞とは如何なるものぞ。シテ詞「是は三千年に花咲き實なる桃花なるが、今この御代に至り花咲く事、たゞこの君の御威德なれば、仰ぎて捧げ參らせ候。ワキ謠「そも三千年に花咲くとは、如何さま是は聞き及びし、その西王母

外二

西王母

梗概

西王母といふ仙女、天降りて、三千年に一たび實るといふ桃實を國王に捧げ奉る事を作る。御代をことほぐ意を寓したるめでたき曲なり。出典は漢武内傳。(脇能)

シテ　西王母(前は女)　ツレ　侍女
ワキ　王　ワキツレ　大臣二人

(狂言口開け)ワキ、サシ謠「有難や三皇五帝の昔より、今この御代に至るまで、かゝる聖主のためしはなし。地謠「その御威光は日の如く、ワキツレ謠「その御心は海の如くに、地謠「豐に廣き御惠、ワキ謠「天に輝き地に滿ちて、地謠「北辰の拱する數々の、北辰の拱する數々の、滿天に廻る星の如く、百官卿相雲客や、千戸萬戸の旗を靡かし、鉾を横たへ、四方の門邊

三皇五帝―諸説異同あり鄭樵の通志には太昊伏羲氏炎帝神農氏黄帝軒轅氏を三皇となし帝少昊帝顓頊帝嚳帝堯帝舜を五帝となす
北辰の拱する―

大日覺王如來―龍田明神に假託す

足引の―山の枕詞

らがねの―土の枕詞

形、尤も佛法流布の國たるべしやな、有難や。地謡「南無や歸命頂禮、大日覺王如來、シテ謡「昔伊弉諾伊弉册の尊、この御矛を携へて、天の浮橋を踏み渡り給ひ、地謡「卽ち御矛をさし下し、卽ち御矛をさし下し給ひ、青海原を、かき分け／＼探り給へば、矛のしただり凝り固まつて國となれり。シテ謡「まづ淡路島、地謡「紀の國伊勢志摩筑紫四國、總じて八つの國となつて、大八洲の國と名付け、天地人の三才となる事も、その矛の德なりあら有難や、（拜）シテ謡「扨國々は荒島なれば、地謡「扨國々は荒島なれば、さながら嶮しき蘆原なりしを、矛の手風、はやてとなつて、蘆原をなぎ拂ひ、引き捨て置けば山となりぬ。足引の山といひ、土はさながら石かねなりしを、矛の刃先にあたり碎けば、平かなるをあらがねの土といひ、其外東西南北十方を治め、惡魔を退け豐蘆原の、國治りて、御矛を守りの倶利迦羅明王、この寶山に納め奉り、毎日めぐるや日の本の、寶の山に龍田の神は、寶の山に龍田の神は、御矛を守りの神體なり。

榊葉―神樂歌

古鳥蘇―樂の名

ロンギ地謠「實にや龍田の神の名の、實にや龍田の神の名の、寶の御矛同じくは、所を分きて見せ給へ。シテ謠「むつかしの旅人や、影恥しき龍田山の、紅葉衣の千早振、神の祭早めんと、地謠「颯々の鈴の聲、ていとうと打つ波の、鼓も同じ瀧祭の、神は我なりと、木綿四手を靡かし、榊葉をうたひ夜に入りて、月の夜聲もすみやかに、入ると見えて失せにけり、分け入ると見えて失せけり。（中入）

ワキ上歌謠「御山の、柞の紅葉かたしきて、柞の紅葉かたしきて、こゝに假寢の枕より、音樂聞え花降りて、異香薫ずる不思議さよ、異香薫ずる不思議さよ。地謠「樂に引かれて、古鳥蘇の、舞の袖こそゆるぐなれ。（天女舞）後シテ謠「そも／＼是は、天の御矛を守護し奉る、瀧祭の神、和光に出でて龍田の神、地謠「あるひは天つ御空の御矛、シテ謠「又は寶山倶利迦羅御嶽、地謠「戴きまつれや、シテ謠「驚かし奉れや瀧祭。地謠「柏手響く山の雲霧、晴れ行く日の光の如くに、天の御矛は顯れたり。

シテ謠「そも／＼大日本國といつぱ神國たり。神は本覺眞如の都を出でて、和光同塵の御

紅葉の八葉—八つに尖りたるをいふ

候へ。シテ詞「委しく語つて聞かせ申し候べし。
クリ地謡「そも〱瀧祭の御神とは、即ち當社の御事なり。昔天祖の詔、末あきらかなる御國とかや。シテ、サシ謡「こゝに第七代に當つて現れ給ふを、伊弉諾伊弉册と號す。地謡「時に國常立伊弉諾に託して宣はく、豐葦原千五百種の國あり。汝よく知るべしとて、即ち天の御矛を授け給ふ。クセ伊弉諾伊弉册は、天祖の御教、直なる道をあらためんと、天の浮橋に、二神たゞずみ給ひて、此御矛を海中に、さし下し給ひしより、御矛を改めて、天の逆矛と名づけそめ、國富み民を治め得て、二神の始より、今の代までの寶なり。其後國土治りて、御世平かになりしかば、瀧祭の明神、此御矛を預りて、所も普ねしや、この御山に納めて、寶の山と號すなり。シテ謡「そも〱御矛の主たりし、地謡「名も潔き瀧祭の、神の社は何くぞと、問へば名を得し龍田山、紅葉の八葉も、即ち鉾の刃先より、照らす日影や紅の、光さし下す矛の露、天地すなほなる事も、こゝこそ寶身は知らず國の寶の山高み、よく〱禮し給へや。

神南備の―拾遺集の歌末句水の濁れる

瀧祭―龍田明神は伊勢の瀧祭の神と同體なりといふ

寶山―龍田山のこと

寶の御矛―諾冊二神の國土を經營し給ひし天瓊矛の事

シテ、ツレ謠「錦を張れる氣色かな。シテ、サシ謠「是は當社龍田の里に、住みて久しき者なるが、シテ、ツレ謠「農職ながら昔より、神前に仕へ奉り、名におふ龍田の神垣や、宮路を通ひいつとなく、頼む願も淺からず、惠を千代と祈るなり。下歌「頃は長月廿日あまり、紅葉も徒に、只闇の夜の錦なり。上歌「神南備の、御室の岸や崩るらん、御室の岸や崩るらん、龍田の川の水の色に、濁るとも隔てじな、塵に交はる神慮、直に御陰ももみぢ葉の、こゝは常磐の色はえて、誓も絶えぬ瀧祭、いたゞく神の手向かな、いたゞく神の手向かな。

ワキ詞「如何に是なる火の光について尋ね申すべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。ワキ詞「是は此所始めて一見の者なり。寶山への道しるべして給はり候へ。シテ詞「やすき間の御事、是こそ夜祭に參る者にて候へ。御道しるべ申し候べし。此方へ御出で候へ。シテ詞「あら嬉しややがて參らうずるにて候。シテ詞「なう〱是こそ寶山にて候へ。ワキ詞「承り及びたるより神さび殊勝にこそ候へ。又日本第一の寶の御矛を納めしは、この御山の事にて候か。シテ詞「なか〱の事此所の御事にて候。ワキ詞「さらばこの山の謂れを御物語り

逆矛

梗概

朝臣、逆矛を納めたる龍田社へ參詣したるに、瀧祭の神現れ給ひて、當社の緣起を語り、矛の德を示されし事を作る。上卷龍田と合せ見るべし。(脇能)

シテ　瀧祭の祭(前は老翁)　ツレ　男(後ツレ天女)
ワキ　臣下

大和にも織る唐錦—即ち大和錦に大和國の意を含めそれを裁つといひかけて龍田の序詞とす

井手の下紐—末かけての序詞これは井手の下帶ともいひて男女の一度別れて再會するを云ふ大和物語の故事

ワキ三人 次第謠「大和にも織る唐錦、大和にも織る唐錦、龍田の神に參らん。ワキ詞「そもそも是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても和州龍田の明神は、靈神にて御座候程に、此度君に御暇を申し、只今龍田に參詣仕り候。ワキ三人 道行謠「國々の、末は七つの都路を、末は七つの都路を、夜深く出でて淀舟や、立つ旅衣遙々と、猶雲遠き山城の、井手の下紐末かけし、跡も昔に奈良坂や、龍田の山に著きにけり。龍田の山に著きにけり。

シテ、ツレ 一聲謠「龍田川、錦織り掛く神無月、色づく秋の梢かな。ツレ謠「紅葉の色も時めきて、

日月燈明佛―日月の光を燈明として捧ぐる佛

天女謠「久方の、雲井に渡る橋立は、天つ御空の御階かな。地謠「月も更け行く天の原、月も更け行く天の原、紫雲棚引き異香薫じ、天つ少女の雲の羽袖、光も妙なる御燈を捧げ、松の梢に天降り、天降る。かゝりければ龍宮より、捧ぐる御燈の光、海上に浮んで見えたるよそほひ、あらたなりける出現かな。

後シテ謠「本光普き燈火の、龍宮の内裏を照らすなり。地謠「そらには日月燈明佛、空には日月燈明佛、シテ謠「又下界には龍神の燈火、地謠「潮にゆられ浮き沈めども、光はいとゞかかやき明りて、天地の兩燈一つになりあひ、九世の戸の明方明々たり。（舞）シテ謠「本より龍神は飛行自在に、地謠「本より龍神は飛行自在に、通力遍滿の奇特を見せんと、平地に波瀾を起しつゝ、海山虚空に飛び翔つて、嵐を蹴立て雨を起して、吹き曇り／＼震動すれども、御燈の光は明かに、なほ澄み昇るや天つ少女の、姿も雲居に入らせ給へば、又龍神は波を蹴立て、逆巻く潮の廻ると共に、逆巻く潮の廻ると共に、引かれて波にぞ入りにける。

に亙りて悟の母となる意

有頂―天のこと

に安置し給ひけり。クセこの橋立を作らんと、約諾ありしその頃は、神の代いまだ遠からず、雲霧虚空に滿ち〳〵て、常闇の如くなりしかば、各〻神火を燈して、日夜に土を運びて、同じく松を植ゑ給ふ、その燈火のあまりを、かしこに置かせ給ひしより、火置の島とて、是も故ある神所なり。シテ謠「かくて神々集りて、地謠「天竺五臺山の文殊を勸請し給へば、上は有頂の雲を分け、下は下界の龍神、音樂さま〴〵の花降り、御燈を捧げ奉る、その影向の有樣、語るも愚なりけり。

ロンギ地謠「實に有難き神の代の、實に有難き神の代の、昔語も今の世に、殘る燈火曇なき、御影を松の木陰かな。シテ謠「短夜の、空も更け行く浦風の、音を靜めて待ち給へ、必ず御燈顯れん。地謠「不思議やさてもかくばかり、委しく語る浦人の、其名をのり給へや。シテ謠「今は何をか包むべき、我は知らずやこの寺の、地謠「大聖文殊の御前なる、さいしやう老人は我なり。御身信心清淨の、心を感じ來りたりと、いひ捨てゝその姿、松の木陰に失せにけり。松の木陰に失せにけり。（中入）

り、こゝにて天竺五臺山の、文殊を勸請し給へば、天の七代地の二代を、是れ九世の戸と名づけしなり。ツレ謠「されば菩薩の像體も、是れ帝釋の御作とかや。シテ詞「その後龍宮に入り給ひ、法を弘めて程もなく、又この島に上り給ふ。ツレ謠「卽ち獅子の渡とて、今に絶えせぬ跡留めて、シテ詞「龍神御燈を捧ぐれば、ツレ謠「天より天人天降り。シテ、ツレ謠「天の燈火龍神の御燈、この松が枝に光を竝べ、渇仰の時節今宵なり、有難かりける時節なり。ワキ謠「さては神代の昔より、今に絶えせぬこの松に、捧ぐる御燈を目のあたり、拜まん事ぞ有難き。シテ謠「なか〳〵の事御覽ぜよ、出でくる月も曇なき。上歌地謠「天の橋立光添ふ。天の橋立光添ふ、都の人も浦人も、語れば思ふ事なくて、四方の眺も面白や。松風も音しげく、立ちくる波も白妙の、月澄み昇る氣色かな。クリ月澄み昇る氣色かな。

クリ地謠「それ地神二代の御神はじめて、こゝに天降り、末世の衆生濟度のために、靈像を勸請し給へり。シテ、サシ謠「されば此地開闢の昔、地謠「早神國と荒金の、きよぅの祭品々の、衆生濟度の方便、生死の相を助けんとて、シテ謠「三世覺母の大聖文殊を、地謠「この島

對淳尊泥土煮沙土煮尊大戸道大戸間邊尊面足惶根尊伊弉諾伊弉冊尊

地神二代—天照大神忍穗耳尊

獅子の渡り—獅子は文殊の乘物なれば云ふ

きよう—地久の訛かといふ

三世覺母—過去現在未來の三世

天神七代—國常立尊國狹槌尊豐

候よりも、天の橋立はる〲と、誠に妙なる眺めにて候。猶々心靜に詠めばやと存じ候。シテ、ツレ一聲謠「浦風も、涼しさ添へて追風とや、波路遙に出づるなり。ツレ謠「海士の見る目も勇みある、シテ、ツレ謠「眺め妙なる氣色かな。シテ、サシ謠「所から曇らぬ空も與謝の海の、天の橋立遙々と、シテ、ツレ謠「陰踏む道に行きかふ人も、今日の祭の時をへて、夏水無月の半行く、舟の渡りの隙もなき、貴賤群集ぞ有難き。下歌「世渡る業は惜しめども、いざや歩みを運ばん。

上歌「神の代の昔語を思出の、昔語を思出の、月日曇らぬ天つ神、地神二代を數へ來て、こゝ九世の戸の名も高き、大聖文殊を勸請の、御影あらたに捧ぐなる、法の燈曇なく、照す誓は頼もしや。照す誓は頼もしや。

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。シテ謠「此方の事にて候か何事を御尋ね候ぞ。

ワキ詞「是は都より始めて參詣の者なり。まづこの所を九世の戸と名づけ初めにし其謂れを、委しく語り給ふべし。シテ詞「我等賤しき漁人なれば、いかでか語り申すべき。さりながら、まづ九世の戸と名づけし事、かたじけなくも天神七代地神二代の御神、此國に天降

當今―今帝

林鐘―六月

まだふみも見ぬ―小式部內侍の歌を引く

九世戶

梗概

九世の戶の文殊菩薩、靈驗あらたなりとて、會式の砌、朝臣參向あり、龍神天女の奇特に逢ふ由を作る。蓋し文殊の緣起に出りて脚色せるなり。(脇能)

シテ　龍神(前は漁夫)　ツレ　男(後ツレ天女)

ワキ　臣下

ワキ三人次第謠「風も涼しき旅衣、風も涼しき旅衣、朝立つ道ぞ遙けき。ワキ詞「そも〳〵是は當今に仕へ奉る臣下なり。さても丹後の國九世の戶は神代の古跡にて、かたじけなくも天竺五臺山の文殊を勸請の地なり。殊に林鐘半彼の會式にて御座候程に、只今參詣仕り候。ワキ三人道行謠「丹波路の、末遙々と思ひ立つ、末遙々と思ひ立つ、旅の衣の日も幾日、幾野の道の程遠き、まだふみも見ぬ橋立や、早九世の戶に著きにけり。早九世の戶に著きにけり。ワキ詞「日を重ねて急ぎ候程に、是は早九世の戶に著きて候。都にて承り及びて

ある御代ぞめでたき。

標結ふ云々—古今集の歌

間山の、嶺の雲に翔りて、天の戸に入らせ給ひけり、天の戸に入らせ給ひけり。（中入）
ワキ三人上歌謠「心も共に澄む月の、心も共に澄む月の、光さやけき夜神樂の、御聲も同じ松の風、更け行く空ぞ靜なる。更け行く空ぞ靜なる。
後シテ謠「あら有難の折からやな。我劫初よりこの山に住んで、王城を守り御代を崇め、天下泰平の寶の山、葛城の神と現れて、只今こゝに來りたり。あら面白の夜遊やな。
地謠「標結ふ、葛城山に降る雪は、シテ謠「間なく時なく思ほゆるかな。地謠「それは三冬の深雪の空、シテ謠「是は卯月の卯の花の、地謠「雪を廻らす舞の袖、古き大和舞、拍子を揃へて面白や。（神舞）ロンギ地謠「あら有難や有難や。天下泰平樂とは、如何なる舞の事やらん。シテ謠「怨敵の難を遁れて、上下萬民舞ひ遊ぶ。地謠「扨萬秋樂と申すは、シテ謠「兜率天の樂にて、見佛菩薩舞ひ給ふ。地謠「春立つ空の舞には、シテ謠「春鶯囀を舞ふべし。地謠「秋來る空の舞には、シテ謠「秋風樂を舞ふとかや。地謠「舞に颯々といふ聲は、樂々と響くなり。いつも其聲盡きせぬは、此砌なるべしやな。萬歲の四方の國、道ある御代ぞめでたき。道

胎金兩部—胎藏界と金剛界と

長階の出御—十月下の酉の日に賀茂臨時祭あり勅使舞人の還立を主上出御ましまして叡覧あり公卿は長階に伺候す

とり〳〵—酉を言掛く

しもとゆふ—葛城の枕詞

翁さび云々—伊勢物語の歌詞を引く

して、胎金兩部の、その一法を現し、神も影向なるとかや。西天佛在世よりは、東北の靈峯、是れ大和の金剛山、三國不二の峯として、御代の寶の、山とも是を名づけたり。そもそも葛城の、賀茂の神垣隔てなく、王城の鎭守と現れ、百王守護の神山や、賀茂の祭とて、忝くも大君の、清涼殿や長階の、出御も絶えぬ年々に、卯月のその日の、とりどりの御遊なるとかや。シテ謠「千早振る、賀茂のみあれや夏引の、地謠「糸毛の花車めぐる日の、今日に葵の二葉より、我しめゆひし姫小松の、千代をかけて水鳥の、鴨の羽色やしもと結ふ、葛城も同じ神山の、一體分身の、御代を守り給ふなり。この御代を守り給ふなり。

ロンギ地謠「實に葛城の神の代の、實に葛城の神の代の、その道すぐに夕霜の、翁はさても誰やらん。シテ謠「誰ともいはん翁さび、人なとがめそ我こそは、事代主の翁とて、御代を守り申すなり。地謠「そもや事代主と聞く、その名は如何に。シテ謠「音高し、地謠「事代主と申すこそ、葛城の神の名なれ。いざや神體を現し、旅宿をあがめ申さんとて、葛城や高

社賀茂の社頭にありながら、當社の事を尋ぬるは、今更なるべき事ならずや。シテ詞「恐れながら此御尋ねこそ、少し不審に候へとよ。賀茂の本社と申さん事、忝くも開闢以來の影向の始め、まづ葛城の賀茂なれば、この宮居こそ取り分きて、賀茂の本社と申すべけれ。ワキ謠「實に〳〵是は理なり。まづ〳〵最初の影向は、この葛城の賀茂の神。シテ謠「其後天下平安城に、現れ給ふ賀茂の神山。ワキ謠「その神の名を糺の竹の、シテ謠「御代も治まり七つの道も、ワキ謠「猶末すぐに、シテ謠「曇なき、上歌地謠「よそまでも、名は葛城の賀茂の神、名は葛城の賀茂の神、御代を守の御威光、普ねしや、普ねしや、四海の波も治まりて、國富み民も豐なる、御影ぞ貴かりける。御影ぞ貴かりける。

クリ地謠「それ君は舟臣は水、水よく船を浮めつゝ、臣よく君を仰ぐとかや。シテ、サシ謠「然れば王城の鎭守として、誠に以て御名高き、地謠「其水上は山陰の、賀茂の御手洗いさぎよき、流れの末は久方の、雨つちくれを動かさず、安く樂しむ時とかや。シテ謠「有難しとも中々に、地謠「言葉を以ても述べ難し。クセ然るに葛城や高間の山と申すは、金剛の峯と

糺―下賀茂

七つの道―東海東山北陸山陰山陽南海西海

君は舟云々―荀子王制篇の語

雨つちくれを動かさず―鹽鐵論に太平之時雨不破塊

賀茂の御生―葵祭の日

塵に交はる云々―和光同塵のこと

シテツレ一聲謠「葛城の、賀茂の神垣時を得て、咲く卯の花の白和幣、ツレ謠「鳴らさぬ枝も夏木立、シテ、ツレ謠「茂り收めて風もなし。シテ、サシ謠「是は當國葛城や、賀茂の社中を淸め申す者なり。シテ、ツレ謠「有難や頃は卯月の始とて、賀茂の御生の時旣に、夏も來にけり小忌衣の、袖白妙の木綿疊、幣とり〴〵の神祭、御代を守りの道すぐに、萬歲の末を祈るなり。下歌いざいざ庭を淸めん、いざ〳〵庭を淸めん。上歌もとよりも、塵に交はる神心、塵に交はる神心、和光の影はいやましに、榮え行くなり國々も、豐に照らす日の本や、千里萬里も治まれる、誓の海は有難や。誓の海は有難や。

ワキ詞「如何に是なる老人、是は當社始めて參詣の者なり。このあたりは皆故有る名所なるべし。詠めの名所を敎へ候へ。シテ詞「さん候、此葛城の賀茂の宮居、都の賀茂と御一體の御事なれば、都の人こそ知ろし召さるべけれ。其上龍田初瀨の紅葉をば、見ねども歌人の知し召すなれば、我等が申すに及ばず。謠 只君萬歲の御守と、當社に祈り申すならでは、また他事も候はず、あらめでたの御神拜やな。ワキ詞「實に〳〵翁の申す如く、我等本

關の戸さゝで―世の治まれること

代主

梗概

葛城の明神は事代主神を祭るといふ。大巳貴命の御子なり。賀茂明神と御一體なればとて、賀茂の神職葛城へ參詣し、明神の示現にあづかる事を作る。（脇能）

シテ　事代主神（前は老翁）　ツレ　男

ワキ　賀茂神職

ワキ三人 次第謠「關の戸さゝで秋津洲や、關の戸さゝで秋津洲や、道ある御代ぞめでたき。

ワキ詞「そも〳〵是は都賀茂の明神に仕へ申す神職の者なり。又和州葛城の明神は、當社御一體の御事なれども、いまだ參詣申さず候程に、只今和州葛城の明神に參詣仕り候。

ワキ三人 道行謠「四方の國、治まる雲の果までも、治まる雲の果までも、君の御影は明らけき、天つ日影の山の端に、斯かる時代は曇なき、峯も其方か葛城の、賀茂の宮居に著きにけり。賀茂の宮居に著きにけり。

其時天部は童子を伴ひ、紫雲の上に顯れ給へば、明神立ち來る黑雲に乘じ、光を放つて島根を廻り、めぐりめぐるや暫しが程は、とりぐ姿を雲中に現し、とりぐ姿を雲中に現すも、實に有難き影向かな。

因位の形—原のまゝの姿

劫—極めて長き時をいふ

やく御殿の扉、左右に開けて十五童子、天部の御姿現れたり。地謡「衆生濟度のその御方便衆生濟度のその御方便も、まづ福壽圓滿の願を叶へ、現壽無比樂後生淸淨土、曇らぬ寶珠を君に捧げんと、勅使は是を授け給ひ、舞樂を奏し拍子を揃へ、羽袖を返して舞ひ給ふ。（樂）地謡「天人聖衆菩薩の舞も、天人聖衆菩薩の舞も、かくやと思ひ白波の、立ち來る沖の雲暗がつて、疾風吹き立て逆巻く潮は、五頭龍王の出現かや。

後シテ謡「我昔は深澤の池に住んで、五頭龍王と顯れ、今は國土の守護神となる、龍の口の明神なり。地謡「聞きしにかはらぬ因位の形、聞きしにかはらぬ因位の形、シテ謡「頭は五頭龍、地謡「胡髯の腮、眼に白日をつなぬき、その身に黒雲をまつへり。苔むす松も野べ伏す巖の、峨々たる上にぞ現れたる。（舞）シテ謡「神佛水波の隔なり。地謡「神佛水波の隔なれば、同一體の、利益もさま〴〵の辨財天部は威光を現し、明神もろともに百千劫の、齢を守らんと約諾堅き、岩間を傳ひ、涼み取るてふ緑の海に、飛行し給へば、磯うつ波も龍の口の、明神忽ち威を振ひ雲を吹き、嵐にかゞやく眼の光は、天地に滿ち滿てり。

ひを我なすべしと、堅く誓約し給へば、龍王も是に應じつゝ、今より殺害をとゞめて、善心を思ひ龍の口の、明神となり給ひ、國土を守護し給ふなり。

ロンギ地謠「はや時移る夕雲の、はや時移る夕雲の、斯かる神祕も大方の、浦人いかで木綿四手の、神の告かや有難や。シテ謠「中々なれや大君の、御言畏み勅に今ぞ、應ずるしるしを顯さん。夜すがらこゝに待ち給へ。地謠「勅に應ぜんしるしとは、そも老人は誰やらん。

シテ謠「誰とはさても愚なり。我は五頭龍、地謠「今は又、天部の夫婦の神となりし、龍の口の明神とは、老人を見るべし。今宵の月に天部の御姿、我が姿をも現すべしと、夕波に立ち紛れつゝ、失せ給ふこそあらたなれ、失せ給ふこそあらたなれ。(中入)

ワキ謠「岐伯が絶技を先に揚げ、張儀が英聲を後に馳す。是れ聰明勇進辨財天の、地謠「無量無邊不可思議の功德を、さまぐ\顯しおはします。天女謠「月も照り添ふ如意の寶珠の、光を誰か仰がざる。地謠「仰げなほ、仰げなほ、意の如しと聞く時は、天女謠「今この君の、それと御影に逢ひに逢ふ、地謠「卞和が玉も何ならず、彼の如意寶珠を君に捧げんと、光もかゝ

岐伯―黄帝の代の名醫
張儀―秦の辯士
卞和―楚の人玉を鑑定する名人初め疑はれて罪せらる

ワキ詞「猶々江の島に於てめでたき子細さま〴〵有るべし、殘さず申し候へ。クリ地謠「そもそも江の島と云つぱ、そのめぐれる事三十餘町、その高き事數十餘丈なり。シテ、サシ謠「水は山の影を含み、山は水の心に任せたり。地謠「堺中の砂淸淺たり、白雲の破るゝ所に、洞門開けて翠屛現れたり。岩窟の奧遙かに入つて、峨々たる巖の間より、落ち來る水は西天の、無熱池の池水なるとかや。シテ謠「禪定無漏の仙人は、地謠「この地を占めて栖とし、彌陀有緣の敎主は、この島に來つて生を導く。シテ謠「二世安樂の此島に、地謠「誰か賴みをかけざるべき。クセこゝに又、いにしへ武藏相摸の境に、鎌倉海月の間に、深澤といふ湖あり、彼の湖に大蛇住めり。其身一つにして其頭五つあり、隆準の鼻胡髯の腮、眼に白日をつなぬき、身に黑雲をまつへり。然れば神武天皇より、垂仁天皇の御宇までは、十一代の帝祚を經、七百餘歲の年祀を經て、國中に滿ちて人を取る。シテ謠「景行天皇の御宇に至り、地謠「龍惡いよ〳〵盛なれば、人皆石窟に隱れ住み、涕哭の聲限なし。時に天部は龍に向ひ、汝が惡心を飜し、殺生をとゞめ、この國の守護神とならば、夫婦の語ら

堺中―堺は堺なり廟外垣内の地

翠屛―靑山のこと

無熱池―香山の南大雪山の北にありといふ大池

隆準―鼻の高きこと

つなぬき―つらぬき

四大天王—多聞持國增長廣目の四天王。

天部—辨財天女のこと

梵天帝釋四大天王、上界の天人下界の龍神、ツレ謠「殘らずこゝに現れ給ひ、シテ、ツレ謠「おのおの是を衛護し給ふ。其後靄雲收りて、海上に一つの島を成せり。即ち江野になぞらへて、江野島と是を申すなり。ワキ謠「謂れを聞けば有難や。即ち是は明君の、直なる御代のしるしを見せて、かゝる奇特を拜む事よと、いよ〳〵御影を仰ぐなり。詞「さてこの島は天部の影向、又は如何なる御神の、謠「鎭守と現れ給ふらん。シテ詞「なか〳〵の事此島に、各諸神まします中にも、龍の口の明神は、天部と夫婦の御神にて、衆生濟度の御方便、あがめても猶餘りあり。ワキ謠「實に有難やかくばかり、深き惠みの海山も、猶萬歳を呼ばふなる、シテ謠「聲か松吹く風の音の、ワキ謠「涼しき巖に寄る波も、シテ謠「治まる國のしるしを見せて、ワキ謠「豊に住める、シテ謠「この時を、上歌地謠「萬代の、始と今日を祈りおき、始と今日を祈り置きて、今行末もこの島の、誓は盡きぬ無量億の、樂みの數々を、受け繼ぐ國ぞ久しき。善神は一切の福を授け、惡神は萬里の禍を拂ふ浦風も、天部の誓なるとかや。頼め猶隔なき、眞如の玉も曇らじ。

天水紛紜—空と水との相連なりて分き難きこと
磈々—雷聲
せいく—未詳
宕巖—大岩

如何に翁、御事は此浦の者か。シテ詞「さん候此浦の者にて候が、毎日此島に上り、山上山下岩窟社々を清め申す者にて候。さて御身は何處よりの御參詣にて候ぞ。ワキ詞「是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なるが、この島涌出の由聞召され、事の子細を悉く尋ね見て參れとの宣旨に任せ、是まで勅使を下さるゝなり。委しく子細を申し候へ。シテ詞「さてはかたじけなくも帝よりの勅使にてましますぞや。そも〳〵この島は欽明天皇十三年卯月十二日戌の刻より、同じく二十三日辰の刻に至るまで、江野南海湖水港の口に雲霞暗く蔽ひて、天水紛紜たり、大地震動する事十日にあまれり。とばかり有りて天女雲上に現れ、童子左右に侍り、もろ〳〵の天衆龍神水火雷電、山神鬼魅夜叉羅刹雲上より磐石を下し、海底より塊砂を噴き出す。ツレ謡「磈々たる雷の光せいくを萬天の間に飛ばし、シテ謡「霹靂帛を裂くが如し、波浪金を湧かすに似たり。ツレ謡「宕巖多く浮め出だし、夜叉鬼神島を作る。シテ詞「或は銅杵を持つて打碎き、ツレ謡「或は鐵杖を持つて裂き破る。シテ詞「又は二つの岩を押合はせ、ツレ謡「又は一つの石を峙てたり。シテ詞「とり〴〵に島を作り給へば、

島つ島―鵜の枕詞なれば浮と續く
崑崙―唐土にて神仙の棲む山
蓬萊界―仙郷
徐市―方士なり徐福ともいふ
驪山―始皇の墓あり
せいしやう―齊少にて方士少翁かといふ
覇陵原―漢文帝の墓あり

富士の高嶺の月影も、いく山々に移り來し、相摸國に著きにけり。相摸國に著きにけり。

ワキ詞「日を重ねて急ぎ候程に、是は早相摸國江の島に著きて候。此浦の者を相待ち、事の由をも窺はばやと存じ候。

シテ、ツレ 一聲謠「島つ島、浮海松涼し波の上、有明殘る朝ぼらけ、ツレ謠「波もて立つや夏衣、シテ、ツレ 詞「うらぶれ渡る沖つ風。シテ、サシ謠「それ江の島は崑崙の氣をうつし、五城の垣重なほけれども、シテ、ツレ 謠「蓬萊界の勢を傳へたる、三壺の形あらたなり。秦皇徐市を疑はば、驪山頂の春の風、なほさりがてらに渡らめや、漢帝せいしやうを用ひずは、覇陵原の秋の月、心凄くは澄まざらまし、眞に人間の妙奇仙境の祕跡なり。下歌 一度も、歩みを運ぶともがらは、上歌 三千世界の内にまづ、三千世界の内にまづ、無量福の寶を得、一期生の後に早く、不退轉の位に至る。かゝる誓の海山も、猶萬代の末かけて、靡き從ふこの國の、盡きせぬ御代は有難や。盡きせぬ御代は有難や。

ワキ詞「我江の島に上り、山海の致景を眺め、事の由をうかゞふ所に、海人あまた來れり。

江島

梗概

欽明天皇の御代、江島涌出す。依て勅使參向せらる。辨財天女並に龍神の示現あり。寶珠を捧げ、舞樂を奏す。江島縁起を本として作れる神事能なり。(脇能)

シテ　五頭龍王(前は漁翁)　ツレ　漁夫(後ツレ辨財天)

ワキ　勅使

ワキ三人　次第謡「治まる折を江の島や、治まる折を江の島や、動かぬ國ぞ久しき。ワキ詞「そもそも是は欽明天皇に仕へ奉る臣下なり。扨も相摸國江野と云ふ浦に、去んぬる卯月十日あまりに、不思議の奇瑞さまざまあつて、海上に一つの島涌出す。即ち江野になぞらへて是を江の島と號す。島の雲上に天女現れ給ふ。これ辨財天影向の地にて、福壽圓滿の靈地なれば、急ぎ見て參れとの勅に任せ、只今東海道に下向仕り候。ワキ三人道行謡「東路も、其方の空に行く雲の、そなたの空に行く雲の、影も涼しき鳰の海、遥けき旅を駿河なる、

治まる折を—得を江の島に掛く

影向—神が姿を現すこと

鳰の海—琵琶湖

不思議や川波はげしく荒れて、二龍の姿は現れたり。地謠「兩龍王は川波に浮み、兩龍王は川波に浮み、彼の御藥を捧ぐる氣色、汀に坐してぞ見えたりける。シテ謠「老翁悦びの思をなして、彼客人の御慰みに、神通自在の祕術を現して、夜遊の戲れなし給ふ。シテ謠「かくて時移り頃去れば、地謠「かくて時移り頃去れば、彼の御藥を君に捧げ、勅使に與へて是までなりと、木曾の棧ゆらりと打ち渡り、歸り給へば龍神も、東西に飛行の翔り、波に戲れ巖に上れば、夜もしら〳〵と明方の空に、夜もしら〳〵と明方の空に、夢の寢覺は覺めにけり。

羿養―有窮后羿は夏の代の人養由基は周の代の人共に射を能くす

愛染明王―三目六臂の像人をして佛法を愛せしむる力を有す禪定智慧を弓矢に譬ふ

天つ風云々―僧正遍照の歌を引く

海青樂―樂の名

醫王佛―藥師如來

クセ 或る時翁申すやう、羿養射術を傳へて、其名を雲の上にあげ、されば愛染明王は、定の弓恵の矢にて、惡魔を從へ給ふなり。我は又御藥の、威德を以て大君の、代を治めんと思ふぞと、勅使に申し上げければ、勅使喜悅の色をなし、汝如何にと宣へば、シテ謠「今は何をか包むべき、地謠「我此所に年經たる、三返の翁なるが、目前に來りたり、勅使暫く待ち給へ、夕月の夜もすがら、舞樂を奏し見せ申し、又御藥を與へんと、いふかと見れば老翁は、岩陰に寄ると見えて、行方知らずなりにけり。行方も知らず失せにけり。（中入）

地謠「天つ風、天つ風、雲の通路吹きとぢよ、少女の衣色々に、糸竹も音を添へて、波の鼓聲澄むや、海青樂を奏しけり。（天女舞）後シテ「そも〳〵是は醫王佛の化現、無病息災の方便のため、三返の翁假に現れ出でたるなり。地謠「其時老翁樞を開き、其時老翁樞を開き、青天遙に見渡しければ、シテ謠「東南に雲晴れ、西北の風も吹きをさまつて、地謠「花降り異香音樂の響き、舞樂の數々少女の袂、返す〳〵も面白や。

地謠「夜遊の舞樂も時過ぎて、夜遊の舞樂も時過ぎて、有明方の、月も落ちくる折からに、

役行者――小角どいふ

く見て有る物かな。是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なるが、此所に三返の翁と申す者、壽命めでたき藥を與ふる由君聞召し及ばせ給ひ、急ぎ見て參れとの宣旨なり。彼の老翁が私宅を教へ候へ。シテ詞「さては勅使にて御座候ぞや、あら有難や候。總じて此三返の翁と申すは、生所もあらず出所もなく、ツレ謠「只おのづから其儘にて、寢覺の枕松が根を、シテ詞「宿と定むる翁なれば、定めてこゝに來るべし。ワキ謠「實に〳〵是はいはれたりと、岩根の枕寢覺の床に、シテ謠「暫く御待ち候へとよ。ワキ謠「暫し休らふ、シテ謠「其内に、地謠「日も夕暮に程もなく、日も夕暮に程もなく、なるや彌生の空なれば、月も朧にさし出でて、山の端白き松の風、枝を鳴らさぬ木の下に、暫し休らふ旅居かな。暫し休らふ旅居かな。

ワキ詞「なほ〳〵寢覺の床の謂委しく御物語候へ。クリ地謠「そも〳〵この寢覺の床と申すは、役の行者暫く御座をなし給ひて、觀念の眠を覺し給ふ。シテ、サシ謠「然るに彼三返の老翁は、生所も知らず出所もなく、地謠「只おのづから忽然と、現れ出でて寢覺の床に、千年を送る其内に、壽命めでたき藥を服し、三度若やぐ故により、三返の翁と名づけたり。

三返の翁―三百歳の老人
宣旨―勅命
木曾の麻衣―名
懸路―棧道

所に三返の翁と申す者、壽命めでたき藥を與ふる由君聞召し及ばせ給ひ、急ぎ見て參れとの宣旨を蒙り、只今信濃國寢覺の里へと急ぎ候。ワキ三人道行謠「思ひ立つ、空も重なる雲の袖、空も重なる雲の袖、靡きて歸る雁がねも、山又山を越え過ぎて、行けば程なき旅衣、木曾の御坂も近づくや、嵐に更くる夜半の空、寢覺の床は是かとよ、寢覺の床は是かとよ。ワキ詞「急ぎ候間、是は早寢覺の床に著きて候。此所にて彼の翁を尋ねうずるにて候。

シテ、ツレ一聲謠「信濃路や、木曾の御坂の春風に、行方も知らぬ花ぞ散る。ツレ謠「霞こめたる谷の戸に、シテ、ツレ謠「世を鶯の聲しげし。シテ、サシ謠「所から春立つ山路分け過ぎて、シテ、ツレ謠「採るや薪の尾上の鐘、朧々と聞き馴れて、たどるや老の坂ならん。上歌「立ち上る、木曾の麻衣袖しをり、木曾の麻衣袖しをり、賤が家居の業なれば、懸路の橋も馴れ〳〵て、いくへ重なる白雪の、解けて落ち來る谷川の、水も岩根や傳ふらん。水も岩根や傳ふらん。

ワキ詞「如何に是なる老翁に尋ぬべき事の候。シテ詞「此方の事にて候か何事にて候ぞ。見奉ればこのあたりにては見馴れ申さぬ御姿なり、若し都よりの御下向にて候か。ワキ詞「實によ

謠曲集

外一

寢覺

梗概

延喜の御代、信州木曾の寢覺の床に、勅使參向あり、三返の翁あらはれて、壽命長久の靈藥を奉り、天女の舞、龍神の化現ある事を作る。めでたき曲なり。三返の翁は浦島太郎なりといふ。蓋し浦島が寢覺の床に釣を垂れきといふ俗傳に據れるなり。（能脇）

シテ　老翁（後は三返翁）　前ツレ　男
後ツレ　天女（謠無し）　ワキ　臣下

延喜の聖主—醍醐天皇

ワキ三人 次第謠「畏き君の勅を受け、畏き君の勅を受け、東の旅に急がん。ワキ詞「そも〳〵是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なり。さても信濃國木曾の郡に、寢覺の床とて在所あり、彼

別五

別六

謠曲集下 目録

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジヨンソン

謡曲集

下巻